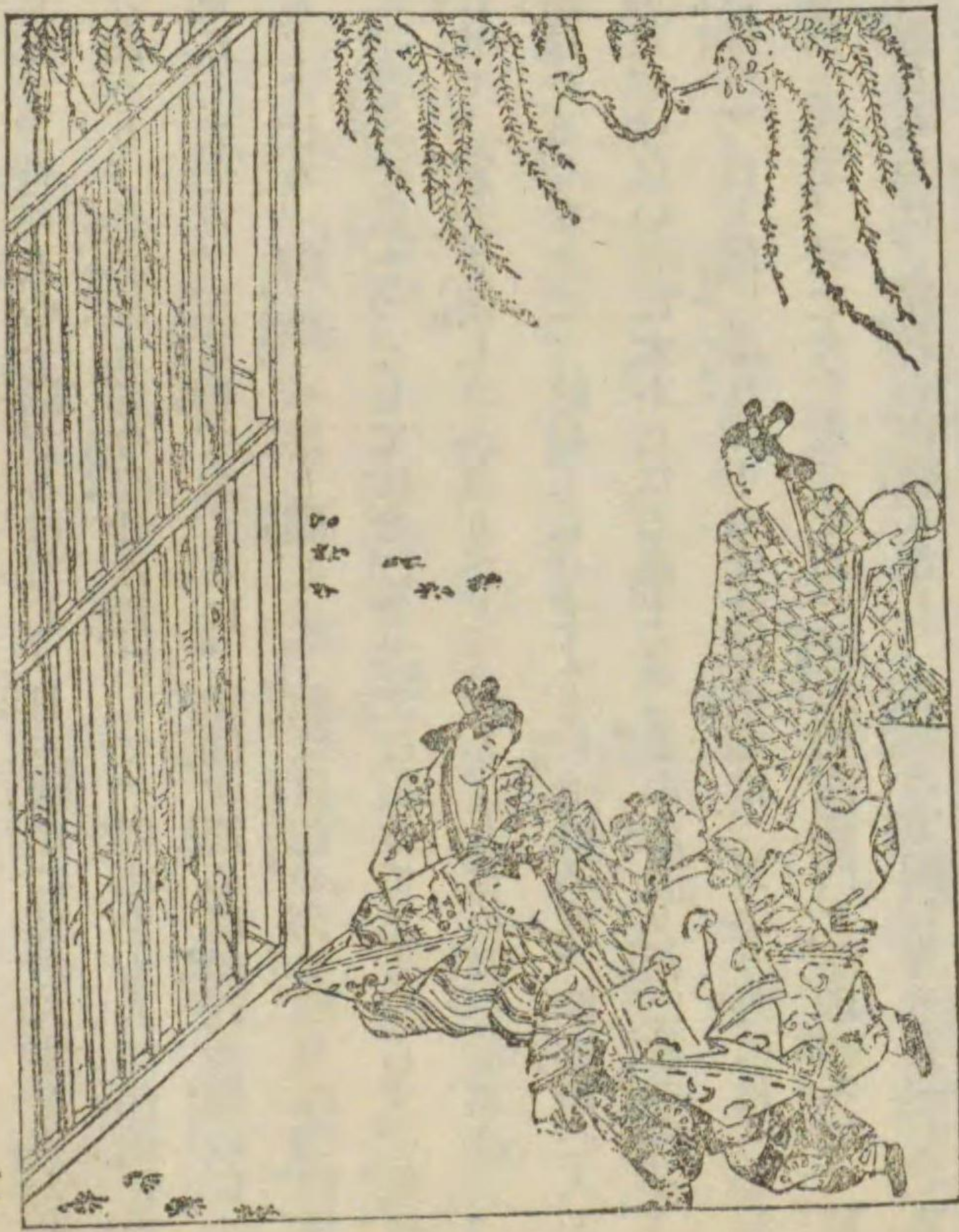


の静に室津よりあがりて。須廣の關といふも戀せばつらかるべし。相坂の關と聞も忍ぶ身ならはと思ひやられ。勸修寺のあたりより北を見渡し。母の古里もあの山陰ぞかし。今は所縁の人もなくして問はずうち過、梅の木の茶屋とて。和中散の賣藥あり。汗をしのぐ冷水うれしく。江戸より御迎の男爰に出合。御奉公のあらましを申せば。心よくて水無月はじめつかたにつきて。間もなく御目見濟て。會津に御供申てくだりぬ。心さし人に越おのづと御前よろしく。國中にありし少人の花は。皆入日の朝良となりぬ。或暮風絶て。鞠垣の柳楓もうごかず。岩倉主人。山田勝七。横井準人。玉之助いづれも色ある蹴出し。御前の御機嫌此時とまるべき所。玉之助手前にて落る事度くなり。目比は家中一番の上手。飛鳥井の家にも生るべき人と。沙汰いたせしにと見るうちに。俄に眼ざし替り。身にふるひ手足青ざめて。髪束ぬぎもあへず。香音絶て。はや息の通ひもなかり。をのくおどろき水いそぎ薬をあたへ。正氣の時屋敷に送りて。色く醫術をつくし給へども更に甲斐なく。次第に浮世の事極りぬ。此一人のなげきに世間の鳴をやめける。爰に笹村千左衛門と申て。御領境の御番所あづかりて。御城下の人は見しらぬ程の。すゑの役人なりしが。玉之助をあこがれ明暮おもふに便なく。いつぞは書通に心を御しらせ申べしと。おもひ込しうちにかゝる仕合。御命にさはる事あらば。中く世には住まじく思ひ定め。玉之助玄關迄。諸人の見舞と同じう帳に付て歸り。又壹機嫌をうかやひ。夜に入て御氣色を尋ね日に三度づ半年あまり勤めけるに。あやうき露命まぬかれ。塵汚を濯ぎ。服をあため。御前の御礼をはじめ仕舞。年寄中残らずまはりて。私宅にかへり。角兵衛に見舞帳を取よせ内見するに。笹村千左衛門と申書付。病氣そもくより此かた。毎日三度づの見舞。是はいかなる御人ぞとたつね給へ共。誰が存知たる者もなし。御家に筋目もあつて御入いやうに。いづれも存いは。御氣分の御事しみくと様子をつたね。よきと申せばよろこび。あしきと語れば。忽に顔色かはり。常の人とは各別のなげき。相見へ申のよし御物語申せば。いと近付にさへならぬ程に。眞母子き御かたと半云やみて。千左衛門屋敷ははるかなる所尋ね。此程の御礼に御門

前迄と申入れば。かけ出是は有難き仕合。かゝる野暮の御初足。またもや袖風の。尾花もさしはかし。此外。只御門宅と申せば。世は稻妻の暮またず。消る身のかさねては待れじ。すこし御咄申事心にやるせもなし。先それへと書院に通。二人より外には松ちかき端居して。我等が胸の中あくる所は爰なり。此程の御心づかひ思ひ合に。近比率爾ながら。數ならねども我に。若も御執心あらばけふより身をまかせんために。忍びて是にと語る。千左衛門赤面の泪折ふしの紅葉に時雨あらそひ。後は下心のあらはれ。菟角言葉では申がたし。正八幡の内殿に。所存を込置の由申せば。すぐに參詣して神主右京に子細をきけば。御病のためとて日參。願狀の箱納め置れけると申。それをと開き見るに。貞宗の守脇指に一通筆を盡し。玉之助身の上をいのる。さては不定の命。此願力にてのがれける。いよく見捨がたくと。念友するにはやもれ聞えて。御仕置の役人改めて。兩方一度に閉門。はじめより死身に定めければ。更になげかず。かゝる時の便とて。狀文の通ひも。片陰に忍び道を付て。年月あまりかくありしが。今は世にあき果申せば。三月九日に切腹仰せ付られは。有難かるべしとの訴狀さしあげ。其日を待けるに。横目まつて。御意申渡して。何の事もなく。元腹を仰せ付られ。千左衛門も別の事なく御ゆるされける。此上はと互に申合せて。二十五歳になる迄は。向後音信不通とかため。貞見合せても詞も懸ず。此御恩をわすれず御奉公を勤めけると也



玉章は鱸に通はず

年々花は替らず。歳々人同じ姿にあらずといへり。殊更若道の盛り。脇塞げば雨ふり。角入れば風立。元服すれば落花よりは強顔是を思ふ時は情といふ事夢にたとへて見る間もなし。爰に入雲立國の守に仕へし。増田氏の二男甚之介とて。美少自然の形。文武の諸藝十一歳の春はすぐれて。世の人心を懸ざるはなし。日本國中に又あらずと。大社に神の集つて是沙汰なり。此念縁を同じ家中にむすび給へり。森脇權九郎今年廿八歳にして。何事をも人に越頼母敷侍なり。甚之介十三の秋より憧れ。草履取の傳五郎にしたしみ。玉章書ておくるに。世間を忍めば松江の鱸の口に入て。供部屋迄つかはしけるに。其明る朝御髪をからずき仕る。御懐へ落し懸しに。鏡に常住の御白移れは御機嫌今申さてはと。權九郎思ひ死のありさま憐にふびんに。言葉に數をつくして申せば。其文はあけて見もやらず。硯せはしく筆を取兼ての御風情。いま傳五郎か申と思ひ合せて。寂愛さ嬉しさかぎりなし。けふより世の訕をかまはず。御因を申べしと右の状も其儘封じ込。纒のうちも戀路はやるせなきに。此事しらせてよと仰せけるは。婀娜御心入と水櫛捨て立出。權九郎許に行てあらましを語れば。かたじけないと大かたなる事ぞと。逢ぬ先より泪に袂を浸し。十四歳の夏の夜。人待るゝ鳥も情懸初て。余所に洩聞へてはと潛に戯れ。十五十六の秋迄は。月より外には人もしらざりしに。戀は一河の流すゑの奉公人に。半沢伊兵衛と申者。甚之介を思ひそめ。若黨新左衛門を無理頼みに。數通の文取あげざれば。伊兵衛今はやめがたく。我物の數ならねば。菟角の御報もなし。先契の方御しらせ有べし。さもなくば。見合次第に御恨申べしと。一命捨て申せば今迄は包めども。心得のためにもと思ひ權九郎に語れば。下々なればとてあなどる事なかれ。世には命といふ物ありてこそ。互ひに樂しみもあれ。其心のやすまるかへり事分別して見給へと申せば。甚之介。怒に血眼となつて。染く契紙の上はたとへば。殿様の御意にもしたがひ申べきや。思

ひ徳め此男を討て狩んと思ひしが。先伊兵衛を武藏にまかせ。首尾敵しまひかへる太刀にて。安齋に置まじき物をと。常の機嫌に宿にかへり。内々の御恨今宵うき世の闇を晴させ申べし。天神の松原に出合たまへと果し状をしたゝめ。新左衛門に申付早速伊兵衛方へつかはし。三月廿六日の晝にさがり。けふをかぎりの入逢の鐘。無常は兼ての事なれば今更夢におどろかず。いつよりは心よく二親にも姿を見せ。諸親類は残らず。したしみの方迄も筆を殘し。是が恨の書おさめと。權九郎かたへの一通。胸にある事ひとつ。ことはりせめてぞ聞えける

まことに初めより。身は我身ならずと申せし事は。御方とかくある中を入らば見ゆるまじと。不斷ぞんずる折ふしかゝる仕合難義とはおもはず。今晚山寺にて討果すなり。年月の御よしもおぼしめさば。一所に御身を捨給ひても惜かるまじき御事ぞかし。相馴て以來の恨。今申さては末の世のさはりとおもへば。有増書殘す

一貴様御屋敷迄は。遙なる所を通ひ申は。三年のうちに三百二十七度。一夜も難にあはざる事なし。横目夜廻りを忍び。姿を替て。小者の風情に丸袖をかざし。杖挑燈を提て行時も有。又は法師の様に成り。人こそしらぬかく迄心をつくし過し年の霜月廿日の夜思ひ煩ひしに。宵は母人枕に離れざりしに。命は朝を待たず逢て果なばとかなしく更行月を恨み乱姿にて。笹戸の陰に忍びしに。我足音とせしらせられ。燈そのまゝ影なく。御物語もやみぬ。去

迎は心づよし。此時のお客うけたまはりたし
 一此春草軍を。狩野の采女が書し扇の裏に。恨み侘ほさぬ袖たにの哥を。しどけなく筆染しに。戀は此風に夏をしのがんとおほせて。よろこばしたまふ間もなく。此筆者代待と落書をあそばし。下人吉介に取させらるゝのみ。又あさし十兵衛方より。御求あそばされし雲雀。御秘藏ながら所望せしに給はらず。北村庄八殿へおくられし事。御家中一番の御若衆様なれば今に浦山し

一當四月十一日に奥小性のこらず。馬上仰せ付られしに。節原太郎左衛門拙者の袴をひかへ。後に土付申はと拂ひた

まはりしに。御かたは跡に立給ひながら。御おしへもなきのみ。小澤九郎次郎殿と目ませして御笑ひ。年比の情にはさは有まじ

一五月十八日の夜半過迄。小笠原半弥殿にて咄し申を御腹立。其晩も御斷申通り。諸稽古に小垣孫三郎殿松原友弥殿同道にて参り。此外に相容はなし。半弥殿ははまだ御若年の事。孫三郎殿は私と同年。友弥御存知の通のもの毎夜の参會も。是はくるしかる間敷を。今に御嫌疑あそばし、折ふしの御當言心懸りにて。日本の諸神口惜さ。此時にいたりても忘れ難し。

一念契の此かた。あかぬ曙の別れに。我屋敷ちかく迄。御送りあそばしてもの事を。村瀬惣太夫殿門前より御歸り。采女殿前の橋まで年かさねしうちに。二度ならでは御見送りもあらず。おぼしめし入の御方さまならば。虎狼の野邊迄もおぼしめさるべし。彼是御恨みあれども。是程悪からぬ事は。大かたならぬ因果かと思ひ。泪より外はなし。只今迄のよしみに。一へんの御廻向にあづかるべし。夢と思へば現。世のはかなき事を身にたくへてのおかしさ

○花盛おもはぬ風に朝良の夕影またぬ露の落かたと斗書付。申残したき事のみなれども。けふをかぎりの暮も近付ば。名残も是まで。寛文七年三月廿六日と留て。森脇權九郎方へ。今宵四つの鐘の鳴時分持て参れと。傳五郎に申付て入相の太鼓うち出すとかけ出る。甚之助襲束は。浮世の着おさめとはなやかに。肌には白き袷に。上は淺黄紫の腰替りに。五色の糸櫻を縫せ銀杏の丸の定紋しほらし。大振袖のうらに。こき入し紅葉ほのかに。鼠色の入重帯。肥前の忠吉貳尺三寸。同作壹尺八寸の指添。小刀ぬき捨目釘をあらため。城下より壹里離し。天神の松原に行て。大木の楠を後に。薫かづらに形をかくせし。岩に腰を懸相待くれに。はや人員も見えぬ時。大息つきて權九郎かけ付。甚之介かと言葉をかくる。腰ぬけに近付はもたぬといふ。森脇泪を流し此節申分にはおよばず。後の世の渡り川にて。

心底を語らんと申せば。無用の恥太刀斬まじと論ずるうちに。半沢伊兵衛家中荒者を。十六人かたりひ来る。四人一度にぬき合せ。命の捨所を爰に極めて。入亂れ切立。甚之介が手に懸て二人。權九郎が太刀下に四人きりしき。十六人の内即座に六人手負七人。残る者行方しらず。身方にも小者吉助當座に相果。權九郎も目の上に淺手。又甚之介も右の肩先に。二寸ばかりのかすり。首尾残る所もなく此近在に永運寺と申あり。忍びて門に入住僧を頼み。兩人切腹の跡を。御出家の御役にと申せば押留め。是程迄にあそばし逆の事に。喧嘩の次第を老中大横目衆まで申あげて。諸人の中で腹きり給ひ。世に名を残し申されよと。詞をつくしそれより番所にいそぎ。右の段へ申せば御僉儀の後。目付衆をつかはされ。切腹相待べしとの仰せわたされ。其夜に城本へ引取。諸親類に御預けあそばし。疵養生仕れのよし。相手は逃申者。見合に打捨と仰せ付られ。手負も國中を船とめして。せんさくあつてうたれける。その後甚之介事。御掟相背き申。千萬不届におぼしめしつれども。親甚兵衛忠孝の者。甚之介義も兼て御奉公よく勤め。殊更此度の様子。若年には神妙なるはたらき。權九郎儀も。甚之介を御免あそばすに付。子細なく御ゆるしありがたき仰せ渡され。右のごとく番組に入て。當月十五日より罷出様にとかさねての御意なり。彼永運寺に行て。其時のはたらきを見るに。刀に切込七十三所。鞘にも切付十八所。着類は只くれなるに染なし。左の袖下も切落され。かゝるはげしき場にして。その身は深手もおはず。又ためしもなき若武。いづれも袂を泪になさぬは。なし。此寺にて伊兵衛一身の死人を。念比に吊ひしは。猶しほらしきこゝろざしとそ沙汰せり。かやうの美少すゑの世語りにも。せめては此御書置なりとも黒焼にして。こゝろの定まらぬ當代の若衆ともに吞せし。若道の名香としるして。なにものか中門に張おく

○森脇に十双倍の御心中伽羅にも増田甚之介殿と書付て諸人の言の葉にかゝりぬ。よき事を見習ひ。國中の武士たる人の子はさもあるべし。秤なやむ町人の忤子。龍骨車にたよる里童子。塩焼濱の黒太郎迄も。形こそ其所作にいや

しけれ。此道に一命おしませ。念友のながき前髪は。縁夫もたぬ女のごとく思はれて。時のすがたとて戀は闇。若道は晝になりぬ。

墨繪につらき劔菱の紋

挾箱にたゞみ船を仕込取組ば三人乗て。大河を越にためしあり。自然の時は用にも立ぬべし。其外浮沓松火矢を申立に。御合刀分貳百石くだしおかる。長の浪人なれば先相勤め。兼ての望は時節と待年もはや。二十七歳になりぬ。さしつぎの妹は丹波の笹山にありしが。夫に離れて後世を捨て。河内の國道明寺に。十九の夏衣を墨に染し以來。身の取置の便もなかりしに。過つる五月比音信の文書て名物の花粉などを送る。心ざしは万里に届きて。今兒嶋の水に浮て。折ふしの暑さをしのぎ。汗は泪に替り。むかしをおもふ振袖の面影。地紅の帷子を好て着た物となげきぬ。其次の妹は十四歳になりて。いまだ定まる縁もなく老母と一所に引越して。しらぬ國里の住るも。武士の身ほど定めがたきはなし。若年にて父におくれしに。嶋村大右衛門といはるゝも。是皆母人のはたらきあたにも存せず。朝の嵐をいたはり。夕の御寢間もすゑの女の手には懸ず。妹とも是を見習ひ。眞綿引さして御枕などまいらせ。丸絆の帯珠數袋をも。置所あらため孝をつくせり。人の親はかく有べき事なり。有時大右衛門深沢といふ所に暮をいそぎて。螢見に行に町はづれなる野邊に。一村の薄花菖蒲の茂り。道ばたよりは見渡し近く。小細水の涌出る埋れ井有。其胸に大師の作といひ傳へたる。石地藏ましまして。人心ざしの日は此所に參詣て水を手向ぬ。爰通り合す折ふし。侍の小者らしき男。新らしき文篋ひとつ。懷より取出し。彼石仏の前に置。跡先を見合。覺へて忘れゆく風情。いかさま様子もあるべしと。其男を追懸。あの箱は何とて態は捨置ぞと尋ねければ。恐れて返事もせずにて行。是くせ者にとらへて。里遠き野寺に引込。色く賣ても子細をいはず。重てのあやまりはかへり見ず。早繩を懸て。迷惑が

る住寺に預けて。右の文箱を取に歸るに。はや里人不思議の僉儀をして。其まゝ奉行所にあがりぬ。其夜諸役人集りて。上書はなくとも開けと是を見るに。御内談申せし毒藥進上申。早々彼者どもに御あたへ有べし。此狀御内見あそばして。後火中と書留て。奥に丸の中に劔菱の紋所ばかりあり。外に一袋念を入て見えける。連座驚き吟味をするに。春田丹之助といふ人の定紋也。竊に呼よせ様子を聞ども。聊身に覺のなき大事を引請。先門を閉ける。大右衛門聞付彼男を。夜更て丹之介門外の駒よせに捕付。此度の文箱の子細は。此者存いと張紙してかへる。既に夜明て見るに。此男舌喰切むなしうなれども。其形は隠なく。岸岡龍右衛門下人也。さてはと御僉儀ある時。はや龍右衛門屋敷を立のき行方しらず。其後丹之介をめして。思ひ當りたる事も有かと。御尋ねあそばしけるに。何の事も存じ寄ざるよしを申あぐる。此分にしては不埒におほしめせども。龍右衛門國遠身に謬りのあればなり。重ねて見合次第に申付べし。丹之介は別義なく。御奉公を相勤めける。其時過てうらなく語る友の尋ねけるに。隠さず申は兼て龍右衛門。我に執心の書通千度なれども。かゝるあさましき心底見極め。取あげざる恨みに。よしなき事をたくみぬ。されども戀よりの悪事なれば。此上ながら御前世間をつむと咄せば。婀娜心入感じて自然と沙汰して。若道の隨一と申も愚なり。此人七歳の時より。形さだまつて嬋娟に。一笑百媚の風情。見し人男子とは思はず。今十五歳迄念人のなき事は。すぐれたる美少是をゆるせり。離家の美花は人も折すと。李太白もつくれり。丹之介此度の難義をのがれし事。龍右衛門下人あらはれしゆへなり。我をかなしみ。此者門前につれて書付おかれし御かた。色く思案めくらすれども。しれざる事をなげき。諸神をいのる事大かたならず。其秋冬心懸りに暮て。明の春山く雪も松を見せて。日影に水かさまさりて。常なき瀧を谷合に見て。細川のすゑに扇網手毎に。小鮎汲も慰みとて行に。片里近き野邊に。色よき娘を母の親の先に立て。はしたましりに茅華土筆鶏腹摘など都めきたる様子者。しばしは見るに。其人もこなたに目は隙なくありしが。何か囁やきて。小硯に筆をそゞぎ懷紙に書よし。草の葉末にむすび捨て。岩の陰道の奥ふ

かく入ぬ。其筆の跡ゆかしく立寄て讀に。此野も人のしげく是より。藤見寺の南の山原に御入り。大志もんさまと書しは。跡より来る人にしらすべきためぞかしと。心を付て見る程女筆ながら。日外の手にいき移しなれば。不思議と詠むる處へ。大右衛門來つて。此書付をとつて行に言葉懸。大右衛門殿と申は御自分にてましますか。拙者は春田丹之介と申者。同じ家中に有ながら。いまだ御近付にもならず。御尋ね申度義は。すぎし年の五月に。龍右衛門小者を御擲くたされしは。御かた様かと申せば。いかにもそれがし。よき折ふし出合申てと委細に語れば。御心底の程さりととはかたじけなし。存せぬ事とて年月うち過。確石朽木とおぼしめされんも口惜と涙を流す。御しらせ申さぬ我殊には新参者の義なれば。遠慮を申さては大事の御心をつくさせけると。ともに涙深互ひに思ひ初。何のかためもなくおのづと。念通のしたしみ忍びく。丹之介屋形のうらなる大河を越てかよひぬ。いつとても不首尾はなかりしに。幾重なりである夜。隣屋敷の欠作の茶屋に宵より中將基をさして有しが。酒も數過て跡は謠になりて。露さへ霜がれて。神無月中の四日の空照ば曇りて。定なきは人の身ぞかし。大右衛門忍び姿岸のむら芦の陰に着物ぬぎ捨脇差一腰となつて。思ひ川をこす浅心にあらわば。瀬のはやき時には情の浪肩をこし。魂しづむ事幾度か。漸石垣に取つき。約束の細引をたよりに。是ぞ戀の道しるべにして。切戸に立寄ば。手懸り程あけかけ。燈もほのかに物靜なるは。いつに替りてと。すこし開合す時。内より丹之介障子けはしく引あけ。夢にしても今は悲しやと。獨言申て涙をうるなるに。大右衛門と申せばうれしやと。ぬれ身そのま肌着の下に巻込られ。是にうき事をわすれ。竄前の御悔は何とたづねければ。今宵は待も一入に久しく。九つの時計を聞寝入にして間もなく。御身わたらせらるゝ川中に。流れ木御足本に横たへ。此難義にて惜き御命の捨ると。はかなき夢はいつの世に。誰見初てうたてし。海渡る妻鹿のむかしの事迄も思ひ出さるゝと。又涙にしづむ。然れば久しうあはぬ時。せめては夢に見る事。是程たのしみはなしと機嫌なをして。かぎりにあらわば。起別れ。又丸裸も戀なればこそ。川浪に面影の見ゆる程は。跡をしたひ

しがはるかになりぬ。隣の者共是を見付。大志なるを。弓稽古の若侍。おとらしと。遠矢をはなつ。大右衛門横腹を通されながら。我宿にかへり。態乱氣の書置して。自害残る所もなし。明の日國中に沙汰せり。丹之介かけ付様子に聞に。母妹のなげき目もあてられず。命有ゆへにうき事も見しと。死人に取つき刀に手を懸し事。二三度もせしが心をしづめ。其矢はと取あげ見れば。藤井武左衛門としるせり。さては此敵うたではと。愁にしづみ立歸る。何の事もなくなきからを頼みし松林寺におくりて。土中にして。憐やきのふはむかしと過行。それより丹之介毎日墓に参詣て。迫付御跡より参べしと。四十九日に當る日を考へ。武左衛門を是非にさそへど。隙入よし力なく。五十二日目に同道して松林寺に入て。山川を見めぐりて。大右衛門塚のまへにもなれば。兩脇に新しき卒都婆二本立ける。一方は藤井武左衛門としるし。一枚は春田丹之介と書置。是は合点の参らぬ所と申。御不思議尤とはじめを語り。近比おぼしめしの外の御仕合ながら。うちはたしてたまはれと。言葉懸てぬき合。兩人ともに夢まぼろしとなりぬ。住寺驚き御斷申て。兪儀の後。三つ塚につき込ける。丹之介が思ひ入。又あるべき事にも非ず



男色大鑑 本朝若風俗 第二卷

目録

一 形見は貳尺三寸 二丁目

中井勝彌母親書置初て見る事

片岡源介非人の時執心かなへる事

筑後國柳川敵うち的事

二 傘持てぬるゝ身 十丁目

長坂小倫孝行の世わたりの事

櫻茶屋化物うちとむる事

忍ひ男命にかへる事

三 夢路の月代 十六丁目

薪の能は晝のにしきの事

若衆忍ぶは菊の紋挑燈の事

是非念者のかはりに立る事

四 東の伽羅様 廿二丁目

春の野は目違ひの事

申子の種梢より降事

魂は袖に入しるしの事

五 雪中の郭公 廿六丁目

腥坊主も女は嫌ふ事

命を無分別にくるゝ事

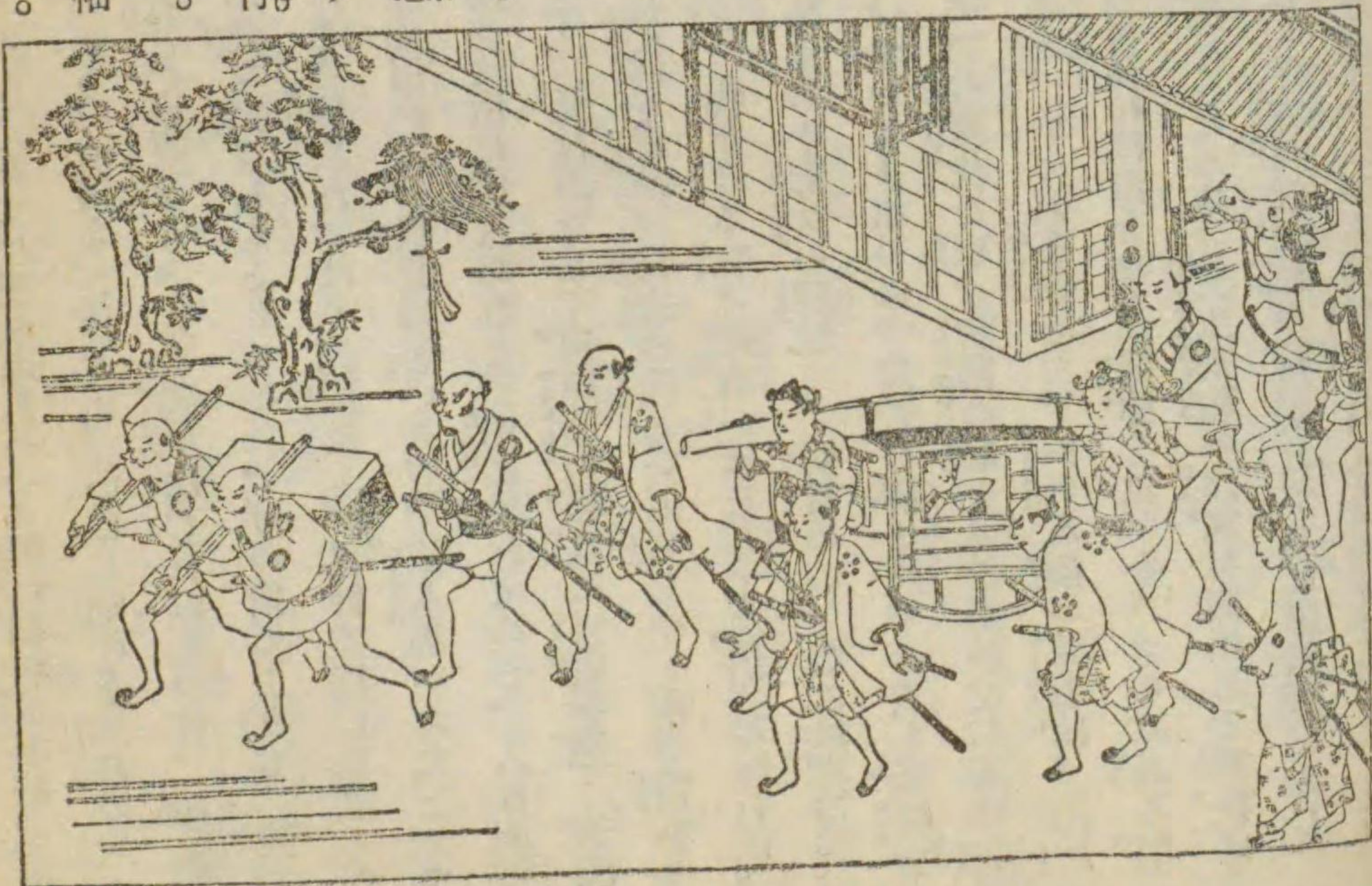
身はひとつ若衆は二人の事

目録終

形見は貳尺三寸

世に遠州行燈程の事も。又出来まじき物ぞかし。又次郎といへる男。觀世ごよりをはじめて。今重寶となれり。捨り行反古さらへる中に。母の手して。勝弥十三歳になる時。此封じ目を切て。是を見るべしと上書あり。泪に包み紙をしたし。内見するに。父支番をうちし。竹下新五右衛門。吉村安齋と名を替。筑後の國柳川の邊に身をかくし。表向は兒薬師と見せ懸。一家中軍の指南して。渡世すと。委細に開出し女の身ながら。本望をとげぬべしと。思ひ極めし甲斐もなく。相果る時の無念さ。哀成人の後。此所存はやくやめさせ。草葉の陰の父母によるこぼされよと書つけて。それよりすゑ／＼は。軍後の筆と見えて。さだかに讀かたし。我今年十八才になれり。母遺言とは。年月むなしう。六年過て今見る事。しらねば力およばず。某御家に住事。十四の四月十七日。武劬上野黒門前に。母方の姨をたのみてありしに。殿様御駕籠の窓より。あれはと仰せらるゝ御聲して。御をばちかき侍を。ひそかにつかはされ。筋目も有増に御尋あそばされ。其日よりめし替の御馬にて。御上屋敷に入て。御前をさらず。朝の雲に飛鳥落て。たとへば鳥を驚といふにも。我にあらそふ人なく。夕べには月をそねみ。氣にいらぬ人には物をもいわず。是皆お影あだにもぞんぜず。有時は寢姿のしどけなきに。はづれし枕をあてがはせられ。胸のあきたる所を。御下着の白小袖にてふさがせられ。自然の嵐もがなと。おぼしめさるゝ御心入。現のやうに覺えて。冥加おそろしく夢さめては。只二人より外には。聞人もなしとて。御家の大事。若殿様にも仰せわたされぬ御事共迄。仰せきけられ。互にかはらじ松の葉の針にて。我脇良にありとは。人の見付ぬ程の。瘕子も御氣にかゝるとて。手づからにぬかせられ。かれ是有がたき御事斗にて。晝夜をすごしぬ。せめて此御恩に。大殿今にも事あらば。天下の御制禁は存知ながら。いさぎよく殉死の心懸。無紋の上下小脇指。書置箱にいきながら。魂を入置しに。世はしれぬ物ぞかし。我すがたの花は今を盛

と。すこしは自憐心の口惜。去月はじめつかたより。千川森之丞に。御心うつり替りて。何事も偽の時雨ふる。初の三日には極めて。自害さはる事ありて。是非七日にはと相延しうちに。此一通を見出し。親のかたきをしる事。武運はつきず。よしなき殿様に野心を含み。生害におよば。後悔後の世迄の。さはりともならん。今思へば身の仕合多し。我森之丞がごとく。御寵愛の時敵うちたき御訴訟申上るとも。輒く御暇は給はるまじ。首尾此時と。所存書付をもつて。ある日御機嫌を見合せしあぐれば。心底至極におぼしめされ。御暇乞の御盃。たまはりて上に。目出度安齋うつて歸參すべし。五百石の御黒印頂戴し。御納戸より路金迄たまはりて。寛永九年十月十二日に。龍の口より。兼て心ざしふかき。下人五人めしつれ。三田八幡に參詣して。おもひ立日を重ね。同十九日に京都につきて。三条鯉山の町にしるべ者あり。馬よりおりもあへず。編笠ふかく忍び。大仏の邊に小嶋山城とて。着込の細工人の上手ありける。望みの鎖帷子ありて行に。耳塚の草枕。今朝置霜の跡をもいとはず。竹の小笠に風よけて。見た所が。かくはなるまじき大男の口をたれて。は一錢おくりやれ申せといふ。貞見合せば首をぢめ。三輪組で袖をかざす。是うたがはれて。なを見かへれば古傍輩の片岡源介なり。



此有様には何としてかは。世にあさましき風情と。様子をきけば。先泪くみて。我望みあつて。俄に御殿を申請し事。越後村上に立越。進退大かた濟よる所に。頼にせし片岡外記頓死任り。是さへなげくに。いにし年の水無月の末より眼を煩ひ。義峯に來て。養生すれどもはかどらず。下人は渡り者として見かぎり。人の因果はしれぬもの也。しなれぬ命ひとつながらへて何にかはなるべし。下和が玉に泣。寢威が角を扣きしもおもはれ。身の捨るよりも。残る名の惜まれ。一度生國南部にくだり。おもふ子細も有。まだ廿六にこそ罷なれ。はや御面影も。見付る程にあきらかなり。さて御自分此度の。御上京心もとなしと申内に。餅屋煙管屋立出れば。伏見に暮いそぐ。旅人馬かた立とままり。程なく見る入山のごとし。とかくは夜に入て語るべし。それ迄は此所に御入あれと。泪に別れてのち。入日をまぢかね。勝弥人をもつれず。たづね行に。所をかへてありかをしらず。是はかなしく川原面の非人に言葉懸。若源介殿かと尋ねければ。いや左様の人はしらず。是は相輪の三吉。目振間の虎藏。貫穴の權といふ者じやと申。笛かり膏の片びさしの内に。松火あかして。聲をひそめ。引四九高目の祝と。物なげる音。何事かはしらず。岸づたへ行ば。枯葉の柳陰にかしらは霜をいたゞき。もまた極樂へ參りても。惜かるまじき老女の聲して。明日のいとなみ絶れば。誓願寺の門前に見つけし。捨子の肌着をはぎに。夜半過てゆかんと。世のうき事のみ。川音の静まつて。人も寢時を過て。焼火に流れ木を拾ひ集め。石居て土籠をかけ。茶酒盛をはしめ。二度代を取。會稽の耻をとうたひながら。天目をすゞぎ。口拍子のきゞて。笙の舌には鶺鴒野の芦に。かぎりてよし。いづれ名物とて。浅沢八橋の杜若は。花房むらさきすぐれて。むかしおとこの唐衣。今の紙衣と。大笑ひする人を見れば源介なり。勝弥を見ても。さらに耻る氣色はなく。奇特のお尋にあづかると申。勝弥泪をかくし。我此節西國にくだる事。父支番敵の住家を聞出し。筑後路までおもひ立。身は定がたし。若歸り討にあひなば。又あふ事も絶なん。互に江戸詰の時。それがしに御執心のよし。かたじけなき數通にあづかりゆへども。大殿御座をもけがす身なればおもひながら其時過て。今又あひましてのうれ

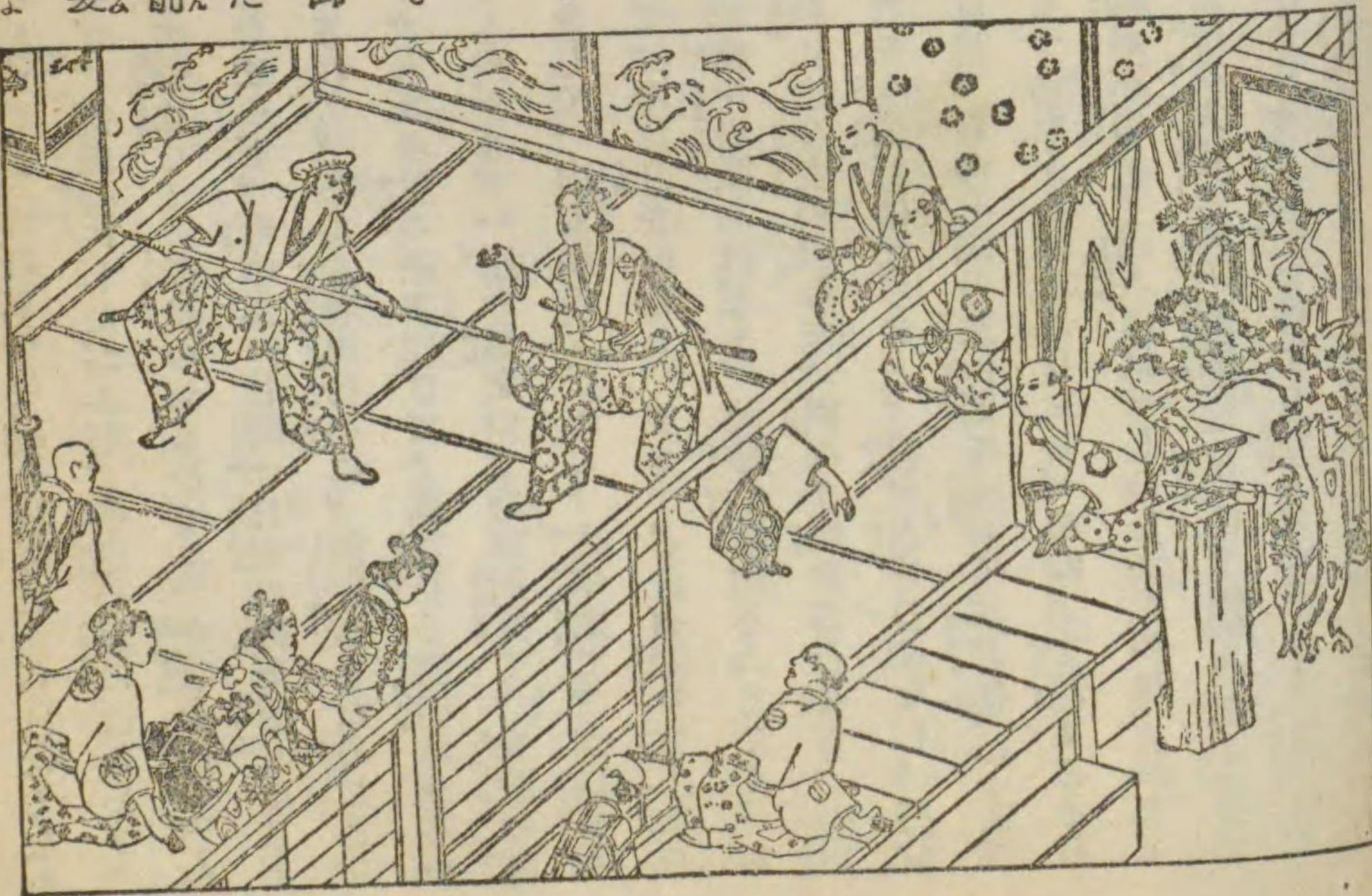
しざ。兼ては是も。心懸りのひとつ也。今宵一夜は寝らずかたりましてと。ひざ枕をすれば。此時のうれしさ。衆道の事は外になりて。長屋住みの東の事をおもひ出し。心の塵を拂ひ。十府のすがごも七婦には。君の御寢姿を見て。夢もむすばず都の富士に。横雲の立しらみ。黒谷の鐘もつけて。高瀬さす人良も見えて。あかぬ別れとなる時。ちぎれたるかますより。仕込杖の刀取出し。是大原の實盛貳尺三寸。此身に成ても一腰ははなさぬ。心入たのもし。そもも此刀は。先祖信玄公にめしつかはれ。信州川中嶋の一戦に。高名いたせし事申傳へて有。是にて本意をとげたまへと。勝弥にわたせば。辞退におよばずたまはりて。追付安齋うつて對面仕るべし。それ迄の形見にとて。我が指替を殘し置。立さまに左の袂から一包。金子百兩ありしを。枕近きいざり盲目にさゞやきて。各々頼むなり。是を道のつかひにして。源介殿を國元へかへして。たまはれと申置て。十月廿日の晝舟。難波のくれかたにつきて。同廿一日に早舟をかり切。同廿八日に柳川にあがりて。ひそかに里のかり宿。おもひくの商人に身を替。近國をさがし。其年も暮て。春の野は。杉菜堇の咲し比。やうく在宅たしかに見届け。三月廿八日の夜討に定め。主従六人心をあはせ。かぎりの酒宴過て。暮がたよりのき道をかながへ。南に谷川をかまへ。土橋ひとつの通ひ。浪岩をくだきて。白龍のごとし。後は高山北は沼。人倫の道絶て難所也。入町こなたの辻堂に忍びぬ。かゝる時源介爰にきたつて。彼土橋の中程を。貳間あまり切落し。東の岸につなぎ捨たる。小船に櫓櫂を仕懸。勝弥がはたらきを待合すうちに。夜に入りに歸る人。思ひよらず踏はづして。高浪にしづみぬ。又は牛引ながら落て。聲をもたてず。哀を見る事四五度なれども。身をぢめて隠れぬ。既に寅の上刻とおもふ時。忍びがへしを切入。東西より笹簀の軒に火を懸。中井支番か敵うち。同名勝弥なるぞ。新五右衛門出合と。寢間えまで仕込。敵にも覺悟させて。うち取殘所なし。首入の器兼て拵へ。手に入たる事也。表門をひらき。貳町斗も過る時。一村たいまつ天をひからせ。のがさじと聲く追かくる。是までと心中を極むる時。くらがりより。勝弥のき道此方へといふ。聲き違へて誰人といふ。源介忘れたるか。先

是へと船に取のせ。川筋にさし出す。追手の者切おとしの難義。數百人是非なく跡にかへりて。評義とりく世。舟磯傳へに。其夜三里半のがれて。脇の濱といふ所に。曙の前につきぬ。姿を見合。今ぞ嬉しき涙をおさへ。まことに先夜は。一大事の時節。此所に御下向。あやうき命を御たすけ。勝弥が仕合と申。源介うち笑つて愚なる事を申人かな。三条川原にて。別れし朝より。夕日をしたひ。影身に添て。今日迄旅宿の軒下にかぐみ。晝は世間を見つころひ。夜は外の用心をかため。有時その方。久留米の城下迄たづねまはらせ。濡せぬ山の麓ふる雪。袖を拂ひかねたまひて。小者も同じ枕に前後をぼうじ。引入息のたのみすくなき時。人參口に入て。岩もる雪を手してはこび。肌をあため正氣付て。いかなる御かた様ぞ。御かん病ありがたきと申されし折は。名乗ふかとおもひしかども。しれぬを幸に。道行人と申捨て。村竹の陰にかくれて。しばし様子を見るに。下人に力を付。今のは正しく。氏神の化身なるべしと。其所を立さり。然も十二月九日の夜の道。我先に立て。里ばなれなるすしをはづして。所く火を燒て。道しるべせし事。おもひあたりたまふかと。過にし十月より。今月今日までの事どもをかたり。京都の別れに環し置たまひし物をも。其ま封じ目をきらず。此度かへしぬ。此ことはりにせめられ。舟中かふるいきもにめいじ。又の世のためしにもと。自然と聲を揃へぬ。とても御事に見おくりてたまはれと。今ぞいさみて歸國の袖。卯の花の雪見る時。富士足柄の關越て。十一日に東武につきて。右段く申あぐれば。兩殿御よろこびのあまりに。源介をめし出され。三百石御加増。役なしに仰せ付られ。其上勝弥をたまはり。名を源七とあらため。まことの兄弟分となりぬ。是前代未聞。少人の鑑。かうなふては

傘持てもぬる身

浦の初嶋浪あらく。武庫の山風はげしく。夕立雲の立かさなり。又朝盛も出へきけしき。程なくふつて來て。道行

人おもはぬ難儀となりぬ。爰に明石より尼崎への使者。船越左近といふ人。生田の小野の榎の木陰に。雨やどりしてありしに。かゝる時十二三なる美少人、まだ夏ながら紅葉傘を持って、さゝて來にけり。左近を見懸。唐笠の御用に立べしと。下人にわたしぬ。御志近比かたじけなし。されどもさしあつて不思議あり。それ持ながら。其身雨にぬれたまふとはいふ。少人泪を流す。なを子細有べし語りたまへと聞に。某は長坂主膳が悴子。小輪と申者なり。父浪入して甲州を引越。豊前に立のきしに。船中にて病死。是非なく北浦里に煙となし。所の人の情。有に甲斐なき。濱びさしをしつらい。窓の吳竹世をわたるわざとて。傘の細工見なれて。母人の手して。男のすなる事を思へば。我身ぬるればとて。天のがめもおそろしくぞんして。さゝずといふ。されば賣扇の祖母子は手に日をかざし。箕賣笠でひるのたぐひなるべしと。此心入をかじ。母の住る里迄。人付て見届。明石に歸り。すぐに登城して。御返状をさしあげ。御機嫌の次手に。小輪あらましを。御物語申あぐれば。それつれきたれとの仰せ。左近喜悅の向ひに。小輪母子共に轎車して來り。御前に偕ひけるに。わざとならぬ良ばせ。遠山に見初る月のごとし。髪は薛なき宿鳥にひとしく芙蓉の臉じり。鶯舌のこはね。梅すなほな



る心ざし。次第にあらはれ。出頭日にまし。夜の友となりぬ。御次に寢ずの番。聞耳立るは。御たはふれあらけなくなり。我に命を捨てと仰せらるれども。さらにかたじけなきとは申さず。御威勢にしたがふ事。衆道の誠にはあらず。やつがれもおそくは心を琢き。誰人にも執心を懸なば。身に替て念比して。浮世のおもひでに。念者を持て。かはゆがりて見たしと申せば。すこし御せきあそはし。座興に取なしたまへど。今申あげし詞。日本の神ぞ偽りなしといふ。殿もあきれさせたまひ。此つよき心根。にくからずおぼしめされて。ある夕暮風待亭に。前髪あまためしよせられ。名所酒數かさなり。御遊興の折から。俄に星の林も影くらく。人丸の社の松さはぎて。風懸さく雲引はゆる中に。一眼の入道。軒端まぢかく飛來たり。左の手を二丈あまりもさしのべて。一座の鼻をつまむ事興覺て。先殿の前後をしゆごし。常の御居間に。取いそぎて入らせたまふ。跡地ひゞきして。山も崩るゝごとし。夜半過て。御築山の西なる。櫻茶屋の相戸を破りて。幾年かふりし。狸の首切はなされて。今に牙をならし。すさまじき有様を言上申せば。扱は今宵のしんどう。其わざなるべし。誰かしとめけるぞと。御家中僉議あれども。此手柄申出る人もなく。あたら名を埋みぬ。それより七日すぎての夜。牛の刻に。大書院の箱棟に。少女の聲して。科なき親をころせし。小倫が身の上。追付あやうかるべしと。三たびのゝしつてうせぬ。さてこそ小倫がはたらきと。感じ入るはなし。其後御普請がたの奉行。狸のあらしたる板戸を。修理仕るべしと申あぐれば。むかし魏の文侯興に乗じて。我言葉のする。何にても違へる事なかれと。うたはりにしに。師經といへる者。琴にてつきたふし。おごりをしづめぬ。文侯まことある臣と。琴にくずれたる南壁を。たゞさずおかれけると也。今又小輪が武勇を。諸人に見せしめんがため也。其まゝ置べしと。かたじけなき御褒美あつて。御ふびん弥増になりぬ。時に母衣大將。神尾刑部が二男に。惣八郎と申せし者。つね々小輪心底を見すまし。文にてなげき。たがひに心をかよはせ。時節を待年も暮て。十三日は煤拂ひ。御吉例の衣くばりの夜。着おろし母の許へ。つかはしける葛籠に。小者が才覺にて。惣八郎を入れて。御次の間までし

のばせ。宵の程より。腹いたむのよしにして。自由に戸のあけたて。車の音もしめの程は。とがめたまひしが。後には御軒のみ。戀は今ぞと。惣八にま見へ。先何かなしに。かるたむすびの帯をもとかず。此上に外の事なき。情かけたまひて。なをすゑの詞をかため。二世までといふ聲。御夢をおどろかせける。御枕にちかき。素纏の鞆はつし。正しく人音のがさじと。かけ出させたまふ時。小りん御袂にすがり。是はもつたいなし。さらに人影は見えもわたらず。我身のくるしさに。心の鬼來て。かみころせと申もよしなや。よし何事も御ゆるしあれと。さはがず申上るうち。惣八柏の梢矢切を飛越。面影を見付たまひて。色々御穿鑿あそばしけるに。いさゝか身に覺えのなきよし。さてはすぎにし。狸のなすわざかと。御心やすまりしに。折ふし御前に。金井新平とて。かくし横目さし出。只今のあし音。殊にはさばき髪に鉢巻まで見届け。忍び男にはうたがひなしと申。又吟味の品かはつて。是非に申せとあれは。小輪に命をくれしもの。たとへば身をくだかるればとて。是を申べきや。此義兼て。御耳に立置しにと。さらになげく氣しきもなし。それより三日過て。極月十五日の朝。兵法稽古座敷にめし出され。諸家中の見せしめに。御長刀にて。御自身小輪竊期と。御言葉をかけさせたまへば。につこと笑ひて。年比の御よしとて。御手にかゝる事。此上何か。世に思ひ残さじと。立なをるところを。左の手をうちおとしたまひて。今の思ひはと仰せける。右の手をさし。のべ是にて念者を。さすりければ。御にくしみふかゝるべしといふ。飛かゝりて切落したまへば。くるりと立まはりて。此うしろつき。また世にも出来まじき若衆。人々見おさめといふ。聲も次第によはるを。細首おとしたまへて。そのまゝ御なみだに。袖は目前の海となつて。座中浪の聲。しばし立やむ事なし。死骸は妙禪寺におくりたまへり。哀れ露には消つ。あしたの霜にはかなき。朝良の池といふも此所なり。むかし都のいたづら人。須に洗され。それにこりず。入道の娘を戀て。爰にかよひたまひしとき讀たまへり

秋風に浪や越らん夜もすがら明石の岡の月の朝良

此哥家道にてよみたまはゞ。人もしるべきに。なんぞや女房事なれば。沙汰なしになりぬ。されば小輪をころして。この念者いまに出ぬは。よもや侍にてはあるまじ。野等犬のうまれ替りしぞかしと。人のそしり草となりぬ。明の春十五日の夜。左義長の場にて。惣八新平が諸手をうちおとし。とどめまでさして。首尾能立のき。小輪が母の行方も。ふかくかくし。其身は朝貞寺にかけこみ。塚のまへに心底つまひらかに。高札に書しるし。今年二十一期として。夢また夢。眠れるごとく。腹かき切てうせぬ。あくれば十六日の朝。此ありさまを見るに。ありくと一重びしの内に。三引を切ぬ。是こそ小りんが定紋なり。とても戀にそまる身ならば。かくこそあるべけれど。七日がうちは。國中の山をわけて。手向しきみかの池を。埋みけるとなり。

夢路の月代

南都南大門の暮いそぎて鞍懸より詠めけるに。今春太夫が舞に。清五良が戦。又右衛門がかた撥。いづれか天下藝。是は見ずして。興福寺西大寺の棧敷に。見若衆の面影に氣をうつし。入日に名残を惜み。あたら夜のにしきと。独言誰聞ともしらず。なげく男を見れば。まだ三十にはなるまじ。あたまつき後さかりに。髪先みぢかく。上下黒き龍門に葉菊の五所紋。糸打の平帯。吉屋つくりの大小。いかさま衆道のわけらしき風俗なり。其名隠もなき。丸尾勘右衛門といふ。兵法つかひ。古今類なき少人好。さま／＼文書で。たますに手なし。夕暮をこがれ。あけの日は御社の能。はじめつて。大藏求馬。花月になつての姿。其うつくしさ。戀といふくせもの。諸人心を懸ざるはなし。次の日は。空曇りて。傘をさそなら。春日山さひしく。晝の過より鯛かしの釣針もたせて。岩井川の汀に。柳鮎など手本際なくかく時。郡山の家中に。多村三之丞といへる情少人折ふし此水上に来て。唾をはけば。川下の水手にむすび。雫ももらさず。咽筋をならすを見て。ちかふ立寄。それにてお手水。御つかひ事おもひもよらず。無禮なる物をはきい。

全く御ゆるしゆへと申せば。只今の御つばき。行水につれて。池の間の間もなく。消る命と惜み。すくひあげて。看つる物をと申。三之丞うち笑ひて人によるこぼしたまふを。あだにはきかずと云捨て。岸根つたひに歸り姿。素面自然の美男にして。又ゆふべからず。秦の始皇帝に。巫山の神女。つばきをほきかけしに。其跡瘤となつて残り。今又此つばき。我口中に消ずあつて。甘露不斷の樂みもがなとつぶやき。御跡したひ行に。西は秋志野や。外山に入日。はや人の良も見えずなりにき。比は二月十二日の夜道。宵は月見る心當も違ひて。春も時雨めきたる雲の。生駒葛城に立重なり。今にも袖やぬれんと。郡山に道いそぎしに。里の水橋あやうき渡りて。萩の燒原に。去年の刈蕪。足をちぢめ行に。角落して。きやうとき鹿の通ひ路。火ともし狐狼の臥所。是にはおぢず。浮世の人の驚く煙立て。隠坊の住める。ひとつ庵を詠め過。大安寺といふ。里近くなりて。脇道より挑燈持て。取まはしのかしこそうなる小者。頭巾引かぶりて。先に立行を。幸の光もとめて。友とせし針立の道仁も。思ひよらざる機嫌。余所の小者。この花見の看となる。さ／＼やく程もなく。郡山につきて。なを屋形町の末。わがすむ門前迄来て。内に入を見届け。彼男あとかへりぬ。それまでは何の心もつかざりしが。三之丞不思議なる事かなと。先二親に見えして。薪見物いたし。只今罷歸ると申捨て。追かけ行に。やう／＼挑燈に近付見るに。葉菊の紋所なり。扱は晝見し侍をおもひ合せ。忍びてをくりけるに。奈良もちかくなりて。をのづから蠟燭たち消。心は闇となりぬ。かく形を替て見送るとは。よもやお若衆は。しらせたまふまじといふを聞て。其御心入ぞんじたればこそ。はる／＼をくりかへすと。手をとらへてしめたまへば。勘右衛門夢のこゝちして。しばしは物をも多しはず。立すくみて。それは本で御座りますか。ありがたき御心さし。かはるな替らじ。忘れな。わすれまいといふうちに。西の京の八つの鐘。かぞへてまだ夜ぶかなれば。しめやかに語りて。明方にかへらんと。はや名残をおしむ。是にかぎらず。先御首尾もいかゞなり。我おぼしめさば。重ねての御情と。なんの事もなふ。それより又郡山へおくる。道すがらのちかひに。人の命はしれぬ物ぞかし。

入重櫻まではまたし。初櫻の咲比。いつも見にまかる事あり。弥生ひとへ二日には。かならず約束ふかく。別れての朝風。着なれざる綿裕の袖をもちて。かりそめの鼻聲。次第に重りて。間なく二月廿七日の夜。春日野の土となりぬ。三之丞はしらず。尋ね来て。是をなげくにかぎりしられず。せめてはゆかりを聞ども。遠國の人とてたれ跡とふらふかたもなしとや。其住たまへる所はと聞に。むかし連哥師。紹巴の庵の跡とて。南市といふ片陰に。檜木の生垣物ふりて。下地窓より供部屋をのぞけば。まだ七日もたぬに。小者集りて。貳文四文に讀うつなど。扇拍子に聲を惜まず。むかし用明天皇は。玉代の姫を戀わびてと。かたるも。有。又は宇和の郡の魚焼かほり。いかに下くなればとて。主のわかれをしらざるやと。斷りなしに枝折戸をあけて入に。床のかた脇に。土器にもりて煙絶す。しほれぬ櫛を立て。春雪道泉と改名。ま見えし人は是かと。袖貞にをしかて。しばし枕のあがらざりし所に。色よき男。うみかむりして。間のなき風俗。白むくに淺黄の上下。袂しほれて。佛棚に拜して。はるか引さがつて。座して。愁にしづむありさまを見て。そつじながら私はと申果ぬに。三之丞どのにてましますか。勘右衛門息引とるまで。御事のみわすれず。郡山へをくりて。をくられと斗。つゝに其身は。野送りのかなしさ。夢ではないか。夢で有かな。夢とおぼしめさずやと。なげきかけてなげかせ。諸聲をあげて互に半時あまりの泪。軒もる玉水のごとし。やう／＼春の日も影絶て。雨戸をさす。火宅の車の音におどろき。かねて浮世とおもひながら。此ほゐなさ。何ながらへて物うし。四十九日行死出の麓にては。追付べしと。心の刃をぬきて。見えわたりたる人に。跡たのむといふ。飛かゝつて自害をとどめ。我こそとくに死ぬべき身なり。子細は前髪立の時。五とせあまりの念比。なを年たけても。後立には三笠山とも思ひしに。此情なき事。左内が心と。引くらべて見たまへ。殊に寂期の時。世に誰あつて香花手向るかたもなし。我おもはゞ命ながらへの一言背かず。すゑ／＼は出家にもなりぬべき心ざしなり。申ても御かたには。かりそめの御言葉。かはしたるべき分なれば。あはぬむかしと。何事も捨たまへといふ。そなた様こそ。年比心も

變らぬ。枕物語の。ありつくしての今なり。我は一夜もかたらぬ物うさ。是までの露命と。おもひ切を。左内様／＼義理をつめてとどめければ。三之丞も至極して。自害をおもひとどまり。このうへはこなたに。勘右衛門殿となりかはつて。それがしと戀道のちなみなしてたまはれといふ。左内申は。それまでもなし。向後あだにはぞんぜずといふ。其分にてはうれしからず。是非ねん比といはれて。いやがならず申かはして。扱夜もすがら。左内勘右衛門に。なれそめし以前をきくに。堺昌雲寺の庭を。爰にうつして。蘇鐵うへ替らるゝ日。是なる岩に腰かけながら。まかせ水を手に請て。あまりをうしろに人の有ともしらずまけば。ぬれたい折ふしに。かたじけないと。聲ひくうしていはれし。勘右衛門殿いとをしく。其後いつともなく。たはふれて。世のそしりは大事か。親仁神前の御番をかんがへ遠き高島より。しのびて通ひしに。うれしき事はわすれもやらず。風ふきて雪の夜。かならずまいるのよし。晝より多つかはしければ。我家居近く。むかひに來たりたまひ。肩車にのせて。懐より具足着たる。金平をたまはりける。道すがら切合事して。その夜は勘右衛門殿寝すがたを馬にしてのれば。よき御大將と申されしがと語り寐入に。聞人もともに。同じ野をあらそふ。かゝる時勘右衛門。現のかたちをあらはし。此たびふたりがなげきの中に。兄弟分のかたらひ。うれしき事にぞ有ける。三之丞面影。十九万石の下に。似たものもなし。されども郡山風にて。鬢つきさがりすぎて見るし。左内何と思ふぞ。すこし後をたてんと。鏡にむかはせ。此くらゐがよいかといひ捨て。其まゝ夢はさめける。あたりに手だらひもなく。剃刀もなくて。月代はまことにそりて残せり。夢はゆめながら。是は不思議ぞかし

東の伽羅様

萩咲し宮城野も。むかしに。かはり。今は一もとも見えすなりて。世に古哥ばかりのこれり。野懸振舞の長持は。

都への取のこし十二さほの内かとおもはる。折ふし青み立たる草ばへに。たんほ。土筆のおかしげなるを。摘人は。加賀笠ふかく。袖下ながく。後帯のやうすは。いづれも念者のありそふに。面影に立とまりて見れば。幕のうちより老女出て。これおふぢま。およしさまと。呼聲きゝて。扱は人の小娘目と。つばきばきして行ば。仙臺の城下に入て。芭蕉が辻といふ所の町はつれに。小西の十助といへる。薬屋のありける。内へのかよひ口の。のふれんもれて。一炷のさほり通りがけに聞に。おそらくは。此國の守の御物。白菊にもおとるまじきすがりなり。留める袖ゆかしく。棚さきに立より。留木などを調へたしと。いふてたよりて。奥ふかく聞ゆる木をも所望といへば。悴子がたしなみ伽羅なれば。おもひもよらずと。親仁つれなき返事に。たかぬさきよりこがれて。柴船のしばし休らふて行。此男は伴の市九郎とて。津輕町人一念に若色あさからぬすき人。此度の江戸心ざしも。堺町に近年の出来嶋。見ぬこざらしをこがれて。奴作兵衛がもとへ。しるべの方より。状を付られて。若道ぐるひばかりにのぼる。かたへにはまれなる風俗なり。此ありさまを。十助が子の十太郎見初て。我かく前髪のみさかりといふも。五とせまての花にもあらず。ひたいに毛貫のかねに。散べきもやがてなり。今まで數百人のかよはせぬ。つるにあけす。諸人に情しらずと名に立も。氣に入たる兄分見えわたらぬゆへぞかし。今の男此心入をふびんとおもはゞ。身にかへての念比したしと。俄に口ばしつて。乱氣の眼ざし。小脇に。手飼のちんをいだし。双物の鞆はづして。持つれば。人あたりへ近づかず。やう／＼乳まいらせたる姥。命を捨てすがりつき。今の旅人をよびもどして。御願のまゝになる事と申せば。しばし心のしつまる時。旦那山伏。善見院の覺傳坊を頼み。檀をかざりれいのひゞき。錫杖の音。あらけなく加持する。そも／＼此少人の出生は。十介爰に入舞して三十五年。今年六十余まで。屋繼のなき事をなげき。躑躅が岡の天神に。夫婦籠りての申子。ある夜の夢に神前の紅梅の梢より。ひぢりめんのふんどし一筋落かゝつて。胎内にやどると見しが。あけの日。若衆をくひたがりて。月日をかさね。此若衆を産出す。其後名譽は。五歳の時。習はぬ大文字を書いて。寺社の

夢に懸奉る。是を思ふに。いつみやさよ。筆と聞じ。又十三歳の時。夏の夜の短物。話といふ草紙に。遊て那れを惜む戀無常のさかひを作らるゝ程のころから。身の上を覺えず取乱されしは。よく／＼の機縁といとしさもまたりて。いろ／＼いたはれども。次第よはりの朝脉。夕のかしらせんじもさらにかかず。大形はかぎりの浮世と極め。經帷子をぬはせ。早桶はをあつらへ。今宵の知死期を待時。はかなき枕を我とあけて。うれしや彼おもひ人。明日の西日の時分。かならず爰を通りたまふ。それは非に留めてあはせよといふ是もたはこと。はおもひながら。町の出口琵琶首と申所に人を付て置に。案のごとく其人に逢て。小西の家にいざなひ。十介ひそかに初め終りを語れば。市九郎も涙を流し。此上に十太郎自然の事あらば。我各諸共に。出家となつて。其跡をとふべし。先病人にあひて。今生の暇乞と。枕近くよれば。十太郎忽ち姿もとにかへり。市九郎に心底残さずかたる。からだは宿に。魂は先／＼につき添ひて。人こそしらね。幻のたはふれ。殊更平和泉高館の旧跡一見したまひて。光堂の宿坊に一夜を明したまふ。旅夜着の下にこがれて。物いはぬ契りをこめ。左の袂に伽羅の割欠を入置しが。それはととへば。いかにも是に在と取出し。不審も今晴て猶不思議なりといへば。うたがはせ給はぬ印を見せ申べしと。彼木の欠を取出し。つき合すればひとつ也。妊ば同しかほり。扱はと二世の契約ふかく。十太郎をもらひて。乘懸貳定の足音。いさみて。



雪中の時鳥

五つ橋を踏ならし。津輕にくだりけるとなり

越前の國湯尾峠の茶屋の軒端に。大きなるしやくしをしるして。孫じやくしとて。疱瘡かろき守札を出す。又河内の國岸の堂といふ。觀音の場にいりまめを埋みていのる事あり。げにや人の親のみつちやづらをなげかぬはなし。されども女の子にはありてもさのみ苦しからず。欲の世の中なれば。それくの敷銀にて一人もあまらず。只かなしきは男の子なり。たま／＼人間の形はかはらす。良ばかりのおもひどにて。一生のうち執心の懸手もなく。物參の道つれにさへ嫌はれ。十五にもたらず脇をふさぎ。世に惜む人もなく。常山の花の散かごとしあらし風をもよけて。今時の子をそだつるには。心をつくし大かたなる姿も。見よけになれる。櫻田あたりの去大名の若殿。六歳にしてもがさの山は富士の氣色かはつて。酒湯の跡一面に。薄むらさきの雲かゝつて。雪見し肌を埋むがごとくなりて。一家中なげきの雨待ばかりの夜。ほと／＼ぎすの羽にて是をなづれば。御身やすかるべきと申せば。其鳥の飛のを見よと仰せられける程に。所／＼に手分してたつねけるに。折ふしの深山木も落葉。池は氷に。水鳥のすむより外はなし。ある人細工を得たるものに。ひよ鳥のおもしろきに。指羽なとさせて。御目にかげんとするとき。出頭家老のもとへ。朝夕出入小田原町の九藏とて。肴屋の有けるが。まいりあはせて。又取沙汰を聞て。わたくし存知たるかたに。幸郭公の候へは。もらひ請てさしあぐへしと申せば。それよと九藏にふかく頼み。其身は御前に出。只今まことのほと／＼ぎすがまいると申上れば。御機嫌かぎりなし。近所におありあふ人も。是珍鳥と申。看賣はすくに。小鳥をすかる／＼宰人の宿へ。すりゑの焼籠などはこびて。こと次に。近比御無心ながら。時鳥を一羽申請たき願ひあり。私の世倅ほうそらのまじなひに。入事をかたれば。我も人の子のふびんをしらさらんやと。心よくたまはる。かたしけなしと立出し

か立歸り。今申せし事は偽りなり。去御大名様へさしあぐるなり。定て大分の御拜領有べし。半分は池上申べきといふ。聞もあへずとりかへして。顔色かはり。朱鞆の反かへすを見て。やう／＼にげのげの様子を申せば。老中いづれもおどろく。中にも申上し人。さしあつてのめいわく。口上よき使番の。人橋をかくれども。門を閉てさらに渡りあはず。せんかたもなく時をうつすうちに。ほと／＼ぎす／＼と。若殿御待なざる／＼程に。大殿の御耳にも立て。さま／＼兪議ある時。物になれたるおつぼねの。明石といふ人。色よき京女房をかざり立て。四五人早乗物にて。所をたづね行に。下谷通りはるかに。皂角刺原のほとりに。すこしの藪疊門に入れば。左のかたに草薺の庵あつて。軒に女人堂としやれば。窓より見こめは。高坊主墨の衣はきずして。鶏の毛焼する風情おかし。なを奥ぶかに又門あつて。新高野山と額をうつて。松の嵐しん／＼と。心もすみたる折から。十四五なる前髪の。鬘付伽羅の油賣ものと見へしが。上氣してひたひに汗なとをかき。後帯をそこ／＼にむすびながら。物にこりたる有さまして。足ばやににけて行。是の旦那はととへどこたへず門番の入道よびて。あらましをかたり。おくへ案内とたのめど。女はたとへば繪に書ても入べからず。まして見くるしき抱へ帯。口紅染齒かつて嫌ひなり。ひとりあるおふくろ様の。御見舞に御越しませすをも内には入れず。これまであひに出らるゝなり。女の取次申上る迄もなしと。斷りをもき／＼入れねば。明石も力およはす。あふたらば天晴。言葉でぬらしてとおもへとも。かゝる女嫌ひも世に又あるものかなと。是非なく屋敷へ歸りつかれぬうちに。御小性組に。金沢内記。下川團介十六十七のきりやうものなるが。時鳥につき。家老の無首尾を見かね。心を合せ。早馬にてかけ付。其庵二町ばかりこなたに。下人を残し。只ふたり中門にはしり込。あらけなくた／＼きあけて。竹櫓にせはしくあがりて。嶋村藤内殿とは。御自分の御事にていか。卒爾ながら御命を。兩人の者申請ると申せば藤内何とも合点はゆかねとも。兩を見るに。花なり紅葉なり。あゝ一度はちらぬ身か。子細を聞迄もなし。心やすかれと着籠を。三人前取出し。大身籠の鞆をはづし。今にも追手來るべし油斷と申せど。兩人立もなを

らずにつこと目ませすれば。藤内いさむ心をしづめ。是は様子を聞へしといふ。兩人口を揃へ。いさゝか左様の義にはあらず。貴様の御命は。我く申請ければ此家内みなほしきまゝなりと申。扱は此鳥の所望と見えたり。冨前より一命を申し置たる上に。何が惜かるべしと。二羽のほととぎす兩人にわたせは。さつそくかたしけなしと。五色の房つきの丸籠をさげ。門外に出。下人をまねき。大挾箱ひとつ。藤内にあづけて櫻田に歸り。其首尾残る所なし。其夜また團介内記。窄人屋敷へしのび来て晝の禮義たゞしくのべて。かりそめなから是も。ちなむべきえんなり。向後此兩人お氣には入まされども色道の念比あそはしたまはれと申せば、世にはこなたから心をつくす事のみ。かへつておのゝ様より。ふがひもなき窄人ものを。人とおほしめされ。近比有かたくい。然れどもおふたりのうち。いづれとさしづもならず。殊には御心ざしのほどもしれがたし。とかく此義は御ゆるしあれと申。内記團介赤面して。ふかくおもひ入申るしにはと。兩人一度に肩をぬげば。左のかいなに。團介は嶋村と入癩子。おなしく内記。藤内と名名字をあはぬうちより。是はと見する。それは女のしわざなり。まことは命をも惜まぬ人をこそ。見定めての契約といふ。さては我く一命捨てまじきものとや。その狭箱と申もはず。蓋をあくれば。此内に三方ふたつ。紙巻の小脇指二腰切腹の用意。是はと藤内おどろき。中に飛入様子をきく。是は冨前ほととぎすをもらひうけずは。只かへらじいさぎよく。死出の田長の鳥の事にさへ。相果る身にさためしに。ましてや此わけに。捨兼ぬべきやと涙を流す。藤内あやまつて。かすくすの言葉をさげ。此うへは何か二心あるべしと。左右の小指を喰切。ふたりに渡し。情となさけをひとつに合せ。まためづらしき家道の取むすびぞかし

男 色 大 鑑 第二卷 終

男 色 大 鑑 本朝若風俗 第三卷

目 録

一 編笠は重ての恨み 二丁目

おもきがうへの入子鍋の事

中堂さはぎの事

一流床髪結の事

二 翫ころする袖の雪 七丁目

富士は夢の掛繪の事

姿の花は冬咲の事

俄幽霊になる事

三 中脇指は思ひの焼残り 十一丁目

つき白はむかしの面影の事

死んでも女嫌ひの事

古里の難義濟す事

- 四 藥はさかぬ房枕やくはさかぬふしくら
- 念比の中立の事ねんひのなかたち
- 春の夜は闇打の事はるのよはやみうち
- 十六八の花一度に散事はなひとばらにちる

十四丁目

五 色に見籠は山吹の盛いろにみこもはやまぶきのさか

- 四年の道中やつれの事よねのみちのなご
- 情の命乞の事なさけいのちご
- 訴訟は思ひを種の事そせうはおもひをたね

廿丁目

目録終

編笠は重ての恨み

ひのえ午の女は。かならず男を喰へると世に傳へしが。それには限らず。近江の國筑麻の祭をみしに。此里の風流め縁なくてさられ。或は死別れ。又は隠し妻の顯はれ重夫の數程鍋を覆せ。所習ひにて御神事を渡す。年長たる女房の姿婀娜。しかも面子の恫怪なるが。鍋ひとつをかざして是をさへ恥るも有に。いまだ脇明の娘齒も染ず眉も有ながら。大鍋七つ重ね頭勝にして雲踏かりしに。後より母の親手を掛て。孫を肩て抱て獨は手を引て。早子共も三人迄持とみへて。諸人の笑ふもかまはずして。二柱の陰柳の奥に彼面影見殘し。心くくに歸る野の道筋。紫は色薄く。菫浦の沢水清く。岸の晝良もにし日に花の艶をうしなひ。人なを顔に汗をかなしみ。都の富士といふ。時花出の大編笠をかづきつれたるは。叡山の兒若衆是こそ戀の根本中堂の阿闍梨の夜の友。蘭丸其年もまだ十四とは見る人もなし。美形すぐれて一山思ひを懸ざるはなし。同じ院内に掛人。井關貞助是も兒法師にまじりて。立歸る時我笠をぬぎて。蘭丸の笠のうへにかづけしに。透進なる風情のおかしげになれる。それも興になして行に跡より指をさして。女のすなる事を。男も念者の數に笠を覆すと慟つて笑ふ。蘭丸立とゞまり我に念友の數ありとや。爰は是非の聞所と申せば。人の口迄もなし。下卑敷御心に尋ね見給へといふ。蘭丸忍笑てそれがし師坊の弄びとなる事。是は情の道にはあらず。明暮京より通ふ人こそ。我に獨の念者。今も忘れぬ物をと。泪に沈むは少しおくれたる様にも見えしが。猶おとなしくも沙汰して。いづれも外なる事に取なし。楫の音帆の手せはしく。堅田の磯をはしらかし。諸山の晚鐘告わたる時。やうく御寺に歸て。過にし口論何の子細もなく濟ぬ。此蘭丸生國は加賀の小松の人。長川谷隼人と申せし方の末子なり。男子ばかり十二人持て。世に榮へ家めてたく。國橋の渡り初にも擇はれしに。無常も續く物かな。春より散初て。秋は梢淋しく。その年の霜見月迄に。九人愁の煙となりぬ。三男金兵衛に世を譲りしに。間もなく同

役に頼れ。首尾黙止がたく。同じ極月の廿三日の夜助太刀打て。是も見おさめの夢とはなりぬ。片親女心のやるせもなく思ひに出入息も絶て。七日も立ざる中に又歎きぬ。今は身の樂を捨て。弓刀の家を遁んと。一子金太夫に名を遺し。弟蘭丸は出家になしてと思ひ定ぬ。一人髪を断ば。九族愛欲の罪をまぬかると。十二歳の秋當山にのぼし。父は白山の麓に分入給ひしが。其時の御詞に墨染の姿にへて我に一目と。くれ／＼仰られける程に。過し年も出家を望みしに十五の春迄はと情にとめられて情なし。今宵貞助と打果しなば。不孝の第一なれ共。けふの野心の止がたく人も斯に靜てのち。年月の通はせぬ共を取集め。今なつかしくかさねみしに同じ筆には非ず。ひとつ／＼笏章もかはりぬ。是を思ふに。自書事をえずして。心を人に頼み度毎の氣づくし。一しほにあはれふかくぞおもふ。我むなしうなりなば。跡にて歎きも恨みもかぎり有まじ。思ひ定めし身の一に日過たればとて。一念はとぐべし。夜も明なば都に行て。可愛男に今一たび此姿をも見せ。かりなる横陳して細に次第はかたらず。浮世の名残にもと人しれぬ泪のやむ事なし。此山の若衆かづらを。柴の男のあらけなき手してことかきに撫梳をさすも心に叶はずとて。おの／＼雲母越はるかに。四里の山道を行て。三条の橋なる床迄髪を



結せに出ける。中にも上手とて鬢水のかはく間もなく。白鷺の清入とて。かゝる下職には。人皆惜む程の若き者也。一生美道に身をなせば。手づまもすぐれて。折柳とて一流結出し。髪先二の曲のきよなれば。あまねく此床にたよりて。曙より前後を争ふ。蘭丸を見ては人のおもはくもかまはず手透を待兼し人をさし置櫛も外なるを取出し。心靜に靚粧をつくりまいらせける有時床を立はなれ。山下一里も歩行に。折ふし神送の空おそろしげに。五色の雲さはぎに袖をかざし。手して押へ峯の晴間を待詫しに。三条より清入御跡をしたひ來て。懷中より櫛道ぐなと取出し。御ぐしにそゝけ侍るを思はれ。是迄と岩の小細水をむすび揚て。元のごとくに兒達を撫付まいらせけるは。心根ふかくやさしく。蘭丸を戀忍ぶやと。いづれも其色は見すかしにける。是よりふびんと思ひ初。清入に身をまかせ。行末もひさしく頼もしく思ひしに。けふは最後の暇乞とは。夢にも清入はしらねばこそいつにかはりて機嫌も悪敷。四五日絶し音信を疑ひ。當言のさま／＼。無情は思ひながら。中宿にさそひ行て。心よくのみかはして。酔の内は枕にまくら近く。無理の有程聞暮て。別れはいつとも泪ぞかし。律氣なる寺男めしつれて。かへりさまに竹屋といへる細工人の許に立寄。しばらく有て出て行を。見へ隠れに心に掛れば。彼砥屋に入て様子を尋ねければ。何かはしらず一腰の目釘をうちかへ。切刃を付參らせけると申。是不思議と間なく身拵へして。其跡をしたひ行に。西谷の近道。茨葛に足をいたませ。息も絶々になる時。梢も峯も見えずなりにき。やう／＼に元三大師の燈の影に休らひ。こしかたを思ひ。また蘭丸が心根をうたがはれ。昔日慈鎮和尚の此山の神姿に讀給へり。我ならぬ人にもかくや契るらんと思ふに付て。濡る袖かなとは。うつくしき前髪に現しまみへ給ふさへ。又もや人にと思はれし。ましてや我戀人は。もろこしの鄧通。本朝の義治にもおとるまじければ。男色の輩は惱べしと。心づかひのやるせなき所へ。寺中手炬を輝せ。蘭丸貞助をうつつて立のきしと。早鐘螺の貝を吹立。年月うらみの悪僧手わけをしてぞさがしける。清入さてはと

跡につゞきて。東にさがれば。あらけなき法師の。六七人して蘭丸をとらへて。心任せに自害もさせず。とてもものがれず打首あへる身なれば。何か思ひ残すべし。日比は盃なりともとおの／＼ねがへとつれなく。其事もなく過ぬ。折からなれば。此若衆目を看にして呑と。坂なる請酒屋をたゞき起し。口のかけたる徳利をならし。めけ器を持って人の手より口にうつし。時節も有物かな。自由なる御情にあづかると袖下より手を入るゝも有。今迄は人の云事もきかずやと。耳引もあり。後帯をほどき。又はかしらに割紙を付。いろ／＼に翳けれ共。左右の腕をひしがれ。是非なきうめきめを見るに。又法師のおのが舌先口ちかくよする時。齒を喰しめ黄なる涙をながしける。清八懸つけ入道切ちらし。蘭丸をいさめて行かたしらずなりぬ。其通りに名ばかり残り。三年も過て。ある人の語りしは執行の身にかへつれぶきの尺八篋りのなつかしや。鎌倉の鶴か岡にしてあひけるとや

翳ころする袖の雪

炭竈踏皮屋の秋。鹿の身の毛も立て。冬山のけしき白妙の曙伊賀の國の守はつ雪を夢に見しが。誠とは降けるよと仰られし。御前に小扨従組あひつめし中に。山脇笹之介とて有しが。御納戸に行て。探幽筆の富士取出し。大床に掛奉れば。即座の才覺是ぞ日本一の御機嫌ぞかし。一条院雪の朝に香爐峯の詠めはとのたまはせければ。清少納言きたの軒端の御簾をまきける。遺愛寺の鐘は枕をそばたてゝ聞。かうろほうの雪は簾をかゝけて見ると。白樂天が詩の心感せさせ給ふとや。今又雪の夢に。不二の繪をあはせ侍る事たぐひなし。それよりちかふめしつかはれける。いまだ江戸詰は御ゆるされて御參勤の跡は。心まかせに暮しぬ。ある日追鳥狩に前髪中間四人。岡野邊に出て目しるしの松も埋み。枯草の道も定りなく。岩根切燕鳥に見懸て。かけりまはり興をさましぬ。小宮の森の雀さへなく。おの／＼立歸るとき。玉笹の陰深く里人の懸屋つくりて。瓜の番せし跡より。雉子の飛出れば。鐘木割竹におどろかさ

せ。いづれも嬉しけにとらへ侍るに。續て又雄の何羽も見えて。佳興此時。歸しき小者。彼草薙に便りて見るに。籠に雉子を入れて。えしれぬ男二人身を隠してありしが。御領内は鳥とる事かたき掟をしらずやと。吟味にかゝる時壹人は笠に面を背てにげ行。今獨を手籠に命もあやうきに。笹之助懸付身に替て世をわたる種なれば。ゆるし給へと詫て。くれちかくなりて只とる鳥の仕合と。春待梅を折て雉子を付て戀も哀もしらぬわたり。侍供して歸る。笹之助は足いたむのよしして跡にさかり。彼鳥取に尋ねけるはいかにしてもけふの忍へる有様。おのれ誠を語らずは。宿に歸さじとの眼ざしに機をうしなひ。私 は伴葉右衛門下人なるが。旦那先に逃侍ると申葉右衛門は我も人も存ちたるかたなり。何とて人には隠れ給ふぞ。是ふしぎとあれば。山脇笹之助とやらんが殺生に出けるが。毎日家中のさはぎにけふは鳥のなき事をしらて。若衆の足もともいたまし。心よく慰のためとて。庭籠鳥を目通りへはなちけると。ありのまゝに申せば。扱ゝ其若衆の身にしては。悦び限有まじ。我も其かたにあやかる祝義ぞと。脇あけの羽織をぬぎて給はりければ。是よりは貳升樽もがなと思ふぞおかし。其後は此中間の便となつて。美道のかたらひ浅からぬ中人も見ゆるし侍る。有時長田山の西念寺の庭に。復花咲て家中春の心になりて見にまかりぬ。美景樹を維三胡蝶。見る人詩魔に便を付られ。腐復化するを忘れ。樽の出し口を仕掛少人まじりに呑かはし。半なる折ふし葉右衛門花に來りしに。幸に留て。五十嵐市三郎と申人杯にあましてさせば。世間とばにてかたじけないと。洒るゝばかりうけて酔のうちにも君が事のみ。刀脇指は忘れず。立歸るにはや笹之介に誰かは告し。胸に火燧を仕出し。はげしき風をいとはず。門外に立て葉右衛門待兼。手を取て屋敷に入。露路の猿戸を錠おろして。雨戸も内よりかため。掃庭に葉右衛門獨り立わづらはせ置。さては首尾心もとなくてしばしは聲をも立ず。様子見合すうちに。降出しより積氣色の雪。はじめの程は袖を拂ひしに。梢老たる桐梧の陰も。舎りのたよりならねば。次第に絶がたく。肺の臟より常の聲も出ず。やれ今死ぬるはと働めば。内には小坊主あひ手にして笑ひ聲して。いまだ御付指の温りも醒さらましと。二階座

敷より申。去迎は何の心もなき事なり。是に懲ぬといふ事なし。此後は若衆の趾をも通るまじきと説ても。なを詞を嫌き。然らば其二腰をこなたへわたし給へと請取。又指さして嘲罵り。着物袴ぬぎ給へと丸裸になして。逆の事に解髪にと申。是もいやがならねば頓て形を替れば。梵字書し紙を擲て。額に當給へと申。今は息絶々に。悲しさ身にふるひ出て。まことの幽霊聲になりて。其後は手をあげて和南より外はなし。笹之助小鼓をうつて。あゝら有かたの御吊やなど諷出して。下を睨ば。葉右衛門瞬せはしく躑躅。うき世のかぎりを驚き。印籠あくる間も。脉にたのみもなければ。同じ枕に腹かきさきて。只今の夢とはなりぬ。是非もなき歎きの中に。不斷の寢間を見れば。床とらせて枕ふたつ。焼しめたる白小袖。あたりに酒事の器も見えわたり。此心根の程おもはれて。諸人横手うたざるけなし。

中脇指は思ひの焼残り

骨桶ふたつ風呂敷包に取添。今やなど無常は弁がたき男の泪ぐみて。高野道を尋ねける。爰に攝泉河州の境に。三國の茶屋と云所に休みしに。幸の同行二人語り合て行に。時しも里は夏至に入て。田植哥のおかしげなる。女の菅笠きたる様もこのもしくながめやるに。一人の男脇見して通り。何事にもあり。女の業を見る事なし。世に若道より外はなきにと云。我もそれよと男泣にして。骨の曲物を手に居、ざりとてはうき世ながらへてかひなき身と。哀にかなしく見えける。いかなる事ぞとあらましを聞に。此人駿河なる府中の町に。京物棚を出せし人の一子。萬屋の久四郎とて。またならべて形の似たる者もなき若衆なりしに。情といふ事十三より深く。我に身をまかし。明暮水魚のたらしひなすに。定なや泡と消て。百ヶ日も過れば。此骨を奥の院に埋み。御山の土になしてと語る。今ひとつの骨桶はと尋ねけるに。是も思ひは同じ。友とせし人内義向へしに。其後盃事はじめて松竹の嶋臺出し時。彼娘うつむきて

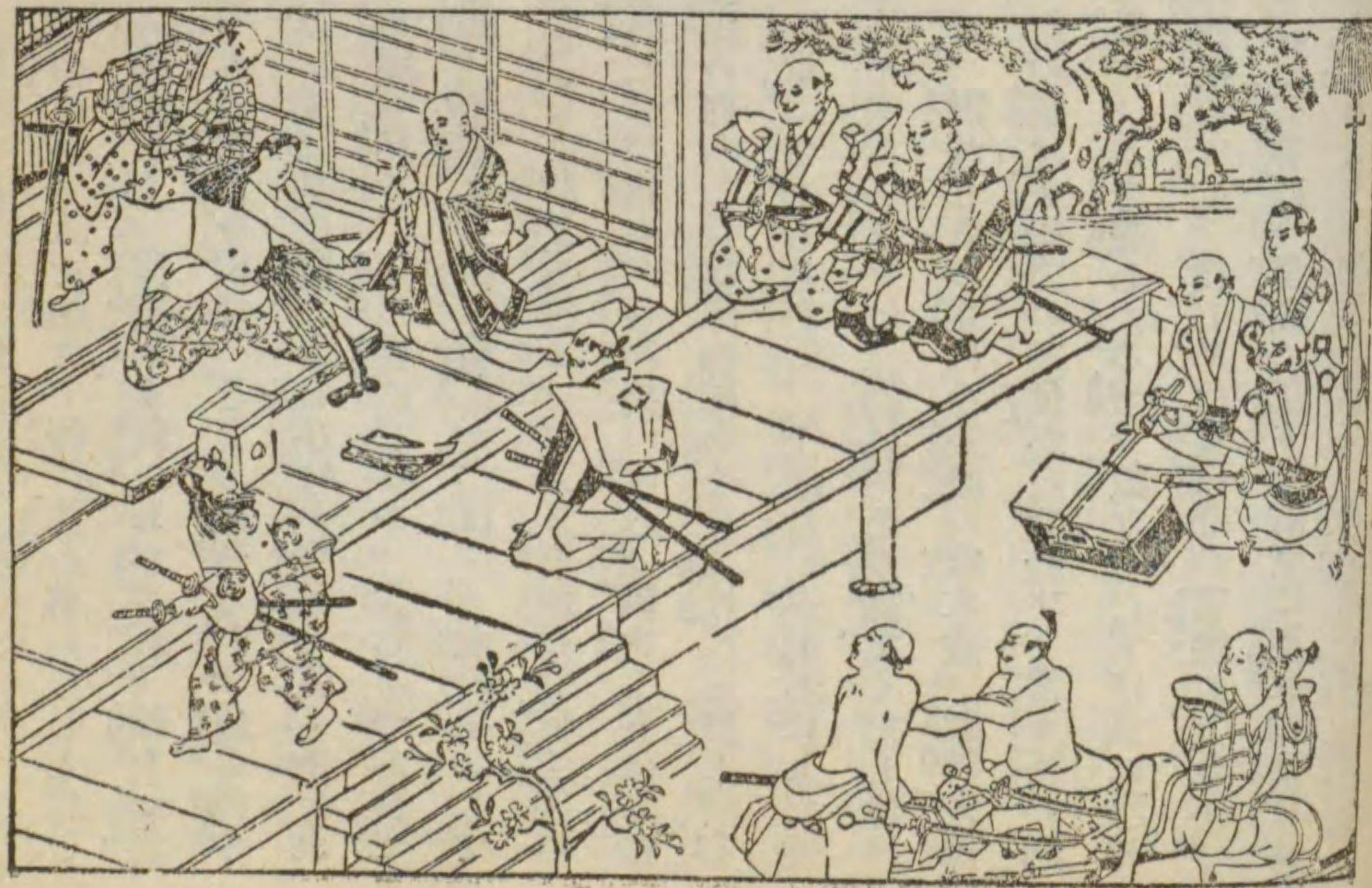
眠れるごとく息切て空しく成ぬ。其人の骨をも此度ごとつかり行といふ。男笑て悪なる人や。女の艶艶なればとて。衆道を好ける人の手に持事はと申せば。誤りて彼女の骨は。濁江になげ捨しに。澤瀉水菰の葉がくれに沈ぬ。かかる女色嫌ひも有ものかと。なを語り三日市といふ所につきぬ。折から彼山の隠元らしき御法師の。知行里の牛飼童子を。無理に拵へ。いまだ呷には昔の垢の名残も見え。殿髪の赤き巻立に結せ。無紋の浅黄帷子の丸袖を脇あけて着すると見えて。振みぢかくあがり物の大小。鏝はおほきに柄細く。腰付おかしげなるを愛し給ふは。殊勝に見おくる。先に健なる男。門に白を立て。米も大かたに白む時。春杵をなげ捨。せはしく身を隠す。其尻付の黒きこを見ぐるしけれ。御坊はるかに行過て。立とどまり。めしつれの男に。何か細語給へば。梓箱に付し石花干瓢もおろして。立戻り。二百つなぎの錢を。米突に渡して。あなたには過にし事共忘れ給はぬに。其後は何とて御寺に見えぬぞ。ちかきうちにと申残して別れぬ。跡にて様子きけば。あの御法師さまに年月情の身なりしが。かくもなる物かと。小槽を拂ふて袖をしたすすける道とて是をも笑はずゆくに。禿といふ宿の名もいやに。女人堂迄は折々目をふさぎこして。花摘よりおのづから有難く。千本の槓の奥暮て佛法僧の聲幽に白衣のすがたあらはれ心を留れば。別れたる少人。愁の片手に。中脇指を持って。聲の届く程へだより。我名をよぶにあきれて。夢共現共しばしは認めけるに。二たびまみへむかしをなげくにつきず。我家後の時早桶の内へ。此一腰を何かおしからじと入れしが。是は重代を取違へ去侍方より。内證にて預り置しなり。我むなしくなりて後。彼方よりかへせとのさいそく。世の難義にあひ給へば。古里へ是をと云聲の跡なくて。戀しさむかし捺への中脇指残りて。是ぞ現に誠あり。唐土の湘妃。玉琴弾かと。見し面影の嫌疑れ。夢心になつて國本にて心ざしたる。熊野にも参らず古里に歸れば。百ヶ日も過行ど。二親のなきはやまざる中へ。人橋を掛て質に預けたる脇指もどせとさいそく金銀つみて詫言を聞入ず。ありしまゝにかへせとはかなしさのあまりに。無常野に行て埋みし炭迄さがしても。其跡かたもなく。せんかたなくて夫婦住なれし家をす

て立のく折ふし。念友の半助高野より下向して。かの一腰を渡し。久四郎がありさまを語れば。おのゝ驚き。定めなき世に。是ぞためしなき人のかた見を三たび見る事ぞとかたりぬ

薬はきかぬ房枕

萬花色あるを持て自えたをうしなふ。爰に何がしの侍従の御もとに仕へて。伊丹右京といへるあり。よろづ花車の道にかしこく。形は見るにまばゆき程の美童也。同じ流れに住ける。母川采女といひて。是も十八になり。人がらもすくよかに當流の若き者もある時右京風情世にあやしく心地まどひて。吾魂もいたづらに。踏足もたどく。敷迄面影見とれて。例ならぬ床に。晝夜のわかちもなく。戸をさしこめて其事となく歎きぬ。よはり行をかなしみ。親しき人々薬の事など沙汰し侍るに。折ふし若ひ輩いざなひまかりて。病家をあはれみし人の中に。戀るゝ御かたも見えければ。いとど乱れて此奸人。色のあらはれ言葉のすゑも人皆それとは聞ぬ。其中に是も采女と彼道を淺からず申かはせし。志賀左馬助めとがめて。人は歸りし跡に留り。なやめる枕にちかく小語しは。御身のさまいかに共分がたく。心に懸る事もあらば。我には隔給ふまじ。今見えわたり給ふ人の御中に。思し召入れし御方有べし。さのみしうねき罪ふかしなど尋ねけるに。それには非ずと云まぎらして過ぬ。問共後は物をもいはずして打ふし現の人となりぬ時に唇の博士をまねき問せ侍りしに。此惱にて玉のをの絶なん事は努々有まじ。是は物のけ窮鬼のたぐひ成べし。尊き聖に仰て祈り加持し給へと申せば。上野の天海大僧正淺草中尊權僧正を頼み。二夜三日の護摩を修し。母はまた其國の。大社々々へ願を懸しに。此しるしにや少し枕もかるう見えし時。左馬助しのび來て。我との事を取らせ給ふにや。是非それがし便りして。思ひ入の御かへしを取。首尾は心やすかれなど申せば。今迄のよしみとてうれ敷人の諫と。筆につくして包込。左馬助に渡しぬ。重ねし袖の間に入帝。何となく時斗の間に出しに。右京なる人。花に嘯き

おはせしが。左馬助に近より。過しひとへは。御前に貞觀政要の興行にいとまなく。けふも只今迄は新古今を讀と仰せられて相話しが。少しの氣晴しに。物をもいはぬ櫻を。友とせしと仰せけるを。幸に爰にも物いはぬ哀なる事の御入いと。袂に深く包し物を參らせければ。我方へては有まじきかと笑はせ給ひ。庭木陰のこくらき中へ入給ひしは。ぬみんための心當なるべし。しばし有て我故に惱ましますは。見捨がたしと其日かへしを給りて。采女に渡せばうれしさ寢間をはなれ。夜にましむかしの氣力になりぬ。世にはまたうたてしき事こそあれ。近きころほひに召出されし。細野主膳とて。勇を先として。朝夕太刀の柄をならせば。人皆うとみ果ける。是も右京を戀て。えびす心のやるかたなさに。入して云べきにもあらず。花なる木のもとに立寄。蟬の耳かしましき迄。なき見笑ひ見。さまざま歎きしに。せめては言葉も懸給はねば。なをやるせなく思ひ込しに。去ば似を友とする世の習ひ。節木松齋とて。茶流の調度を預おかせ給ふ坊主。此戀を請取。命を懸て情の御返事と申せば。右京うち笑ひて。法師の役は羽箆にて塵摺の心懸あるべし。無用の媒なり。此ぬも壺のつめにもなりぬべきと。なげやり給へば。松齋是非なく主膳にすゝめて。右京を討て他の國へ。今宵中に立のくに極



めければ。けふの夕部を待て身拵へするを聞て。はやのがれぬ所と思ひ定め。此荒まし采女にもしらせずしては。後の恨みも深かるべし。いはんも石流武勇の甲斐はなし。我としづまる心の海。人を抱きて淵に沈む事あらじと思ひ定め。寛永十七年卯月十七日の夜なりけり。折ふし其夜は雨もしきりに物淋しく。直宿人も眠におかされ。袖を敷寝して前後を弁へず。此時とうちむかふ。其さまえいはれず。雪ねたましき薄衣を引違へきよげに着なし。錦の袴すそ高に。常より薫物をかほらせ。太刀引そばめ。しのびやかに立むかふにも。是は隠なき匂ひにね覺驚く人も有けれ共。とがめずして通し侍る。主膳は廣間をつとめて。鷹づくし屏風に寄懸り侍る。扇の要はしるを。さしうつつふひて見る所を。はしり懸て聲を掛て打程に。右の肩先より乳の下迄。切付ぬ。主膳も日來の勇にたがはず。左の手にして腰の刀をぬき打にしばし切結びけれ共。深手の痛み。口惜やといふ聲共にたふれしを。押ふせ二刀さし通し。彼法師めも一太刀と。燈をしめしすゞろに時をうつしけるに。此太刀風に目を覺して。宿りの番組奥へ乱れ。御次よりは口にかけ出。是ぞ建久のむかし。富士の狩場の周章も。かくこそ敷臺に織田の何がし。建部四郎いそぎ燈あらはし。右京を取かこめ。御前に出ける。大殿あらゝかなる御聲にて。いかなる宿意にてもあれかし。上をないがしろにしたる事いはれなし。子細は徳松主殿にあらためさせ給ふに。段々至極の始終を申あぐるに。御預との御意くだし給へば。右京を屋形の一間なる所をしつらひ。其夜はさまざまいたはりける。討れし人の親は小笠原の家久敷。細野民部なりしが。我子の討れし所へかけ込。腹切んにはしかじといかれる。母の親は去御方の不便からせ給ひ。常々哥の御會にも召くはへられしに。夜すがらはだしにて懸廻り。此事をふかく歎き。人を殺したる者。故なくたすけ世に時めかせん事はと。泪袖にあまれば。みし人哀をもよほし侍るに。御局宮内卿の子に。はじめは東福寺の首座たりしが。いつの比還俗して。後藤の何がし馬に鞭をすゝめ。しかんゝの事申されけるに。道理に極り。右京に切腹仰せ付られければ。中立せし松齋も。吾と氣後に及びける。采女は事のあらん前日より。御殿申請て。神奈川の母の許にま

かりけるに。左馬助方より。ぬいそぎて始終を書付。此曙に淺草の慶養寺にて切腹と申遣しける。返事にいちはやく御しらせうれしさのよし申て。其身は母に暇もこはず。早舟をかりて。御寺に着しかば。夜も白々と明ぬ。山門廊下の陰にたゞすみ。事の様子を聞に。兒法師の集りて。とりんゝに沙汰しけるは。今こゝへ容顔なまめかしき若衆の腹をこそ切。けに斜にかたほなるだに人の親の習いかと思ふめるに。増て理に過ていみじければ。さこそ二人の歎き給ふらん。哀さなど云を聞にぞいと涙ふかき。見物聞つたへて集りければ。身をひそめて待けるに。新しき乗物大勢つきゝありて。外門にかきすへて。ゆたかに出しけはひまたなくはなやかなり。白うきよらかなる唐綾の織物に。あだなる露草の縫づくし淺黄上下。織目たゞ敷うらゝかにそこらを見渡し給ふに。卒塔婆の敷の立けるは家々の涙ぞかし。寺中の左の方に。咲おくれたるにや有らん山櫻の残すなきを詠めて。縦旧年花残稍待後春是人心と吟じたるは。采女なる人をかこちていふなるべし。錦の縁取し疊に座して。介惜の吉川勘解由を招き。鬢の美しげなる押切。疊紙に包て。是なん都堀川の。母の許へ。今はの形見と使りに云送り給はれと。さし置所へ。和尚紫衣をまくり手して。生者必滅の理をしめし給へば。此世に長生をたもつ美人。鬢糸をまぬかれず。容色新なる本意達して。自劔の上にあふす事。是成佛と。袂より青地の短尺取出し。心静に巻かへし。硯を乞て。春は花秋は月にとたはふれて。詠めし事も夢のまたゆめと書置て。いなや腹かき切れば。介惜して立のけに。采女走かゝり頼と斗聲して腹掻破れば。是も首かけて打ぬ。今年十六十八を一期として。寛永の春の末に闇とはなりぬ。年比召つかはれし家の子共。此哀に思ひあひて。指違へるもありまたもとどり切て世を捨て。主人の菩提を吊ひけると也。今に至る迄淺草の慶養寺に。二人の墓を筑籠辞世の哥を位牌に押して。東の空に名を高く残しぬ。志賀左馬助も世にありてせんなしと。思ふ程を書残して。七日に當り空敷成ぬ。色々哀此時見る事ぞかし

色に見籠は山吹の盛

長屋住みの氣晴しに。虎の御門を出て行に。果しもなき。野すゑに澁谷といふ里に金玉櫻も。今血氣盛なる若侍田川義左衛門とて。少年のむかしは四國にならびなき美形なり。名は松山に高し。子細有て浪人の首尾よく。間もなく先知六百石にて濟ぬ。思ひのまゝ成春をうれしく。目黒の不動に心ざしけるに。身を清むる瀧のもとにして風流なる美少。玉縁笠に淺黄紐の仕出し裏髪の色ふかく。薺の大振袖。ぬき鮫の大小。此取まはしの小細支。ひたり手に山吹の婀娜花をかざして。靜に豊なるを。人間とは思はれず。姑射の神人牡丹に化かとうたがはれ。うか／＼と御跡をしたひ行に。いづれか大名の御慈愛と見えて。横目らしき坊主二人めしつれられし若等あまた。馬も跡に引つれば。大かたならぬ御身ぞと。萬の事を忘れて行に。兩人の法師も酒機嫌の次第に覺えず小哥出帝。程なく小六の宮の邊にて桐紋ある御門に入給ふ。辻番の者に尋ねければ。奥川主馬殿と申て御小姓の由語りける。歸りて其夜も夢に兩分の前髪見通し。明の日も御門先に立暮し。御奉公も外になれば。俄に惱つくりて。御暇申請。龜町貳町めの。南横町に棚をかりて。身を隙になし。三月廿四日より。同じ年の十月初つかた迄。毎日通へど。二たび御面影を見る事もなく。多して歎く便もなく。明暮戀に責らるゝ中に。此國の守御暇を下され。神無月廿五日に江戸御發駕に極りぬ。何國迄もと思ひ立。俄にかり宿仕舞。見えわたりたる諸道具を賣拂ひ。酒屋肴屋に濟し。小者にも暇をとらせ。獨身となつて。彼御大名の跡しのび行に。其日は金川泊り。あけの日大磯に暮て。鳴立沢の邊に戀るゝ美少の駕籠を立させ。濱のかたの戸を半明て。心なき身にも哀れはの古哥を吟じておはしけるに。眼を居て見込ば見合給ひ。爰を別れて又見る事もなく。ねぬに夢路をたどり宇津の山の切通し。袖摺岩の陰に隠れ乗物窓を脱て。思はずも漣然しに。戀君も心にかゝり初しや。千嬌ある御良ばせにて。婀娜も見かへし給へり。なを弥増に憧れ。日を重ね行に。それより拜

觀もせずして。やう／＼假州の津山にて見おさめ出雲の國に入て世を渡る業として棚に肩をいたませ。其年も春過。あくる卯月の初に御參勤。また武州迄の道中に御良見合事。桑名の渡し場沙見坂。鈴の森にて三たび見送り。又江戸詰壹年。毎日屋形の外より歎き。姿もおかしくなりていかに戀なれば。武士たる者の身の程をしらず。次第に憔悴とおとろへるは。又もなき因果なり。あけの年又國本にしたひ行に。見初て三年其身を捨てれば。袖口も裂。襟から綿をあらはし。脇指ばかりになつて。金谷の宿はづれにて。乗懸はるかに見入ける。主馬も此男を見定め。扱は我に執心を懸つる事も。氣に移て自然と哀に思はれ。横目の透もがな。尋ねてせめては言葉をかはして思ひ晴しにと。中山の松陰に待せ給ふに。男に追付がたく。其後は行方もしれず。何心もなき折ふしに。此者の事思し出さるゝこそ情ふかし。御入國の十日も過て。義左衛門出雲に着しに。足をいたませ。むかしの形はなくて。浮世もかぎり近し。露の命。戀の種かくなりても此身を惜み。おのづから袖乞となつて。朝の霜を笠笠によげ。夕の嵐に足をちぢめ。晝の内は野すゑに忍び。御夜詰すぎ。御歸り姿見る迄。是を樂に。毎夜御門前に通ひぬ。有時主馬。若等の九左衛門を潜に時雨ふる夜の淋しさを語り。侍の家に生れ。我いまだ人を手に懸て切たる事なし。其時に指當りては心元なし。是非今宵の中に。心ためしさせよと仰せける。御器量の程常々見立申に。おくれさせ給ふ事には非ず。無道に人を切。天のとがめも有べし。時節を御待と申せば。筋なき人を切には非ず。寂前むかひ屋敷の大溝を見るに。世にありて甲斐なき非人めに。何にても願ひを叶へ。其跡に命をくるゝか問へと仰せける。あの身にも惜むは命と申。それより乞食が枕ちかく立寄。卒爾ながら無心あり。世間の墓なき事を思ふに。人間の一生は今降雨の晴間も定めがたし。殊に其方醜ひ身となり。ながらへて益の有まじ。我らが頼し若旦那の望。何にても三十日願ひのまゝに暮させ。其以後刀ためしになりなば。跡吊ひての御事と。有増語り聞せば。此男少も歎かず。逆も春をまたぬ身の。寒夜の難義しのぐに息も絶々なり。奴れは親類の末もなければ。かさねてとがむる人もなし此方願ひの最後と起あがる

を。屋敷につれてはじめを申あぐれば。先行水をさせ。借着物に替させ中間部屋に入て。望み十日が間献立をとり。數々のもてなし。約束の日切なれば。廣庭に夜更で引出し。己命をくれるに偽りはなきか。非人首さしのべ御手打と申。袴かいと白洲に飛下切付られて。胴骨も動かず。此脇指刃引也いづれも是をふしぎの時下々残らず中門の外に追出し。書院に座して。彼男に貞をあげさせ。其方は見覺えたり。以前は侍そと尋ね給へば。町人の筋目を申。いや／＼隠し給ふな。我に執心淺からぬ思し召入見請たり。今となつて包給ひ。いつの世に誰にか語り給ふぞ。扱は我見違へかと仰せける時。肌より竹の皮に包込し物を取り出しあぐれば。柿地の錦の守袋をさ／＼けて恐れながら。心底是にと申も果す。涙は玉をならべける。紫の緒を解て見給ふに。薄紙七十枚纏て。目黒の原にて初戀より。けふ迄の思ひを筆につくしける。四五枚讀兼卷かへし。彼男は九左衛門に預置其身は。曙早く登城して。御前に出。それがし或人に思ひ込られ。念者にもたずしては。若道の一分立す。自由仕れば。御扱を背き年來の御厚恩を忘れ侍る。菟角は御手打にと申上る。子細申せとの御意の時。右の一糸を大殿半時あまり。奥迄人しれず御讀あそばし先罷歸れ。是より僉儀の後申渡すべしと仰られけるに。私宅に御歸しあそばしては。其まゝ不義仕るなれば。是にて切腹とかさねて御訴詔。しばらく御思案あつて。大横目に仰付られ閉門と申渡され。主馬宿に歸りて。其日より浪人を衣類を改め大小を渡し。命切の讎れ。前代になき衆道ぞかし。身の取置もして。死をまつ事何か思ひ出なるべし。それより廿日目に閉門御ゆるされ。其上丸袖の時服五重。金子三十兩頂戴して。思ひの外なる首尾なり。浪人の義。明日見立て江戸へ送り申せとの御事。有難さ。いつの世にかは此御恩はおくるべしと。朝をまたず旅の名残十二月廿七日に馬をむけて見送る者共兵庫より國にかへし。東武には下らず。和州葛城の山近く。覆のは井の水有りに隠れ住居して髮散切に。夢元坊と名を替物いはず外に出ず。笹垣の奥深く岩間づたひの笥の流れ。少時も住まらぬを慰て。聖言の跡を樂み。此心の清涼敷。今世に美を盡す時花扇さへ持す。終

男 色 大 鑑 本朝若風俗 第四卷

目 録

一 情に沈む鸚鵡鵲 二丁目

女腕の古筆集めし事

りんきの言葉づくしの事

無常は取あけ祖母もまゝならぬ事

二 身がはりに立名も丸袖 六丁目

加賀笠は月も耻姿の事

寺の芭蕉葉戀風の吹事

死ねばすまぬ世の中の事

三 待兼しは三年目の命 十二丁目

戀詩のうたがひ晴る事

武士は情と義理とやめぬ事

位牌取かはして身をしる事

四 詠め續し老木の花の比

十七丁目

年は寄物ながら心は昔の事
生れつきの丸額も物ずきの事
竹箒に女はちり行櫻見の事

五 色噪ぎは遊び寺の迷惑

廿丁目

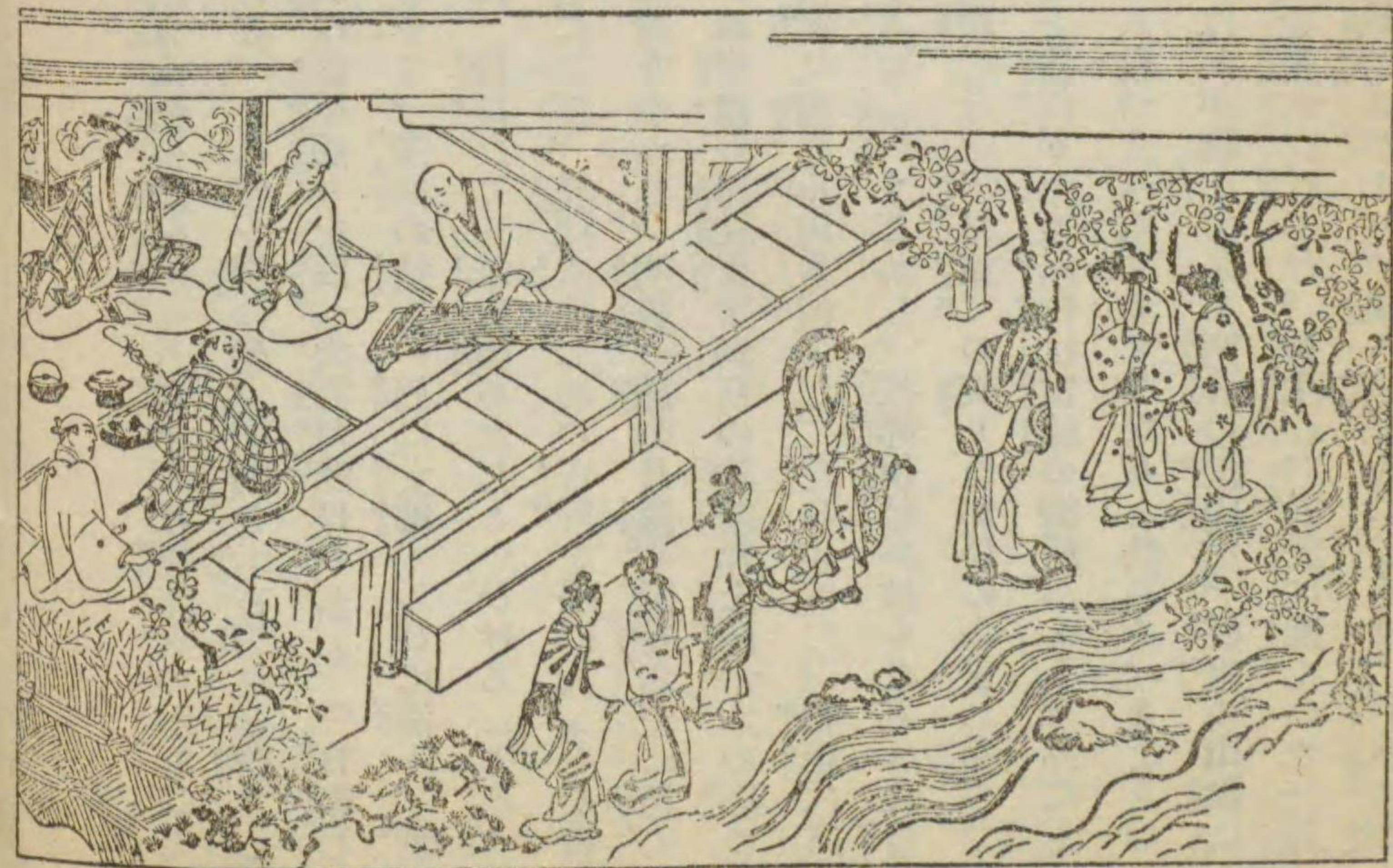
現の太刀さきいかなる因果といふ事
外記が命乞ふたつ物かけの事
覚えなき美女身捨る心中の事

目 録 終

情に沈む鸚鵡盆

今の都室町通りに。表口もさのみ廣からぬ屋づくりを。柱は眞檜相丸太松の皮付檜の八角。又は唐木をつかひひとつひとつ品を替。色々の椽鼻壁も五色に格子も世にある程の竹を揃ける。よろずを嶋の勘左衛門と云古筆見と指さしておしへける。同じ京には住ながらかくれもなき此者をしらす。子細は松原通りを西へ大宮丹波口のかたへ日参して。あり難き専爰より外はと黒谷は浄土宗やら。祇園殿の社は南むきやら。玉鉾の道を一筋に女郎ぐるひに惱み。世の遊女の筆跡かたのごとくに集め置しが。我見ぬよの艶効もあれば。疑ひなく正筆を極めたしといひけるにぞ。をのゝ興を覺しぬ。此男其比は西嶋第一の大匠新在家の長吉様と名によび。花は咲はじめの吉野を手に入させ給ひ。後は櫻の峯つゞき葛城といへる太夫も申絶てさる御所方の本戀に身をやつし。明暮の詠め月薄く螢をあたに梢の絶をわすれ。軒ばの雪もいつとなくしらけて。こたつぶとんの下こがれ晝寝の房枕夜すがらの調護此上藤十六の春の色藤姫とかや名高き御方のおとし子といへり。妖嬌さ花の色は移りに繪に書し小町も何としてならぶべし。哥道は其家の流れに心ふかく玉琴常住のもてあそび時勢粧をうたはれしは地下人の唇うごかし。投節伊勢かはりなどは各別にして音曲さへかく豊におもしろければ。まして情の道偽りなくて深しなを年月重ての契りたがひの心ざし通じて尋常のかたらひにはあらず。あまたの侍婢御梳。又は表使の女腰もと色作りたる風俗は當流の御所かゝり。外にあるべき女とは思はれず。さながら階前の玉芙蓉たよはき枝に葉隠れの八重つぼみ雨まちて今なりとひらくべきよそほひ。濡の直中うまさ事を見ながら人は人の花とて手折がたし。あるじはわが物とて是を明暮の遊山所。嵯峨の山陰に座敷をしつらひ。都を目の下に詠めおろし。嵐の山を庭に取。大井川を泉水に仕かけ。弥生の三日爰に噪ていまだ其年は桃花もまだしく。けふの風情の興なきとて北野なる紙細工幾人か俄によびよせ。桃の唐花をつくらせ。行水に鸚

鷓鴣の盃を流し。美女左右の岸根に立ならび詩哥もふるき事なりと戀の言葉たくみにして。二人づゝ立むかひ身のうへの恥をかへり見ず。随分小きみのよき事をあらけなくいひあらそはせ詞しなすくなく云まけたる方を色道執行のたらざる女と奥様の御目通りにて丸裸になされ二幅まではづされ廣庭を追まはるは同じ女中間もうたてかりき。書院には御心やすき出入の者不斷醫者樂出家まじりに横手を打働をつくつて笑ふ。いかな人も生て見ては取乱し何のわけもなかりき。暮ては小風呂に入まじり奥様より外は思ひ入目好に。じだらく御ゆるされて是ぞ浮世思ひ出やはらか御手に灸の蓋しかへてもろふなど誠に華清宮のたのしみ。是には有がたき夢をみる事ぞかし。されば世間にほしきは金銀也。此旦那殿も人にかはらね共。此自由は皆小判がさす事と。よく思ひまはして銀の利を取て一生暮す程よき事はなし。我家の榮花たとへば御所車に乗ても人はとがめず。烏帽子を着て牛若丸のまね具足肩にかけて道盛のいそがしわざを移し。有時は碁盤の上に座したるもおかし。けふは首引の繪を見合せてのやりくり。銘々の奥あなれど晝髪がほどけましても。高聲あげてなかしやりましても。おぼしめすまゝの御首尾いつの比か和合して。青梅好み給ひ其身なやませられ。はや帯の御祝ひなを



日を折月をかされ。産の間を立させられ。式法のみつり事ありて。是ぞ家繼のはじめと喜悅の極て。はるかなる服帯の地藏に代参りせし女もあり。筋目をたゞし抱擁かゝへ。御乳を定め。御廣袖のゆたかなるに箔置の千年鳥。縫の松竹生れぬさきの襦袢さだめ。待に時をえてしきりに御腹いたみ出。取揚祖母玉介かけて御腰を抱。役人。右の御手に子安貝左の御手に海馬をにぎらせ参らせ。御次には産後産前の名人。銀鍋に蚤薬を仕かけ置ぬ表には觀山祈禱坊稻荷の神主諸願成就今や々と待けるに。夢なれや眠れるごとくに息絶脈あがりて。女中泣出し勝手に驚きさまぐ心をつくせ共其甲斐なくて。つゝに世のかぎりとはなりぬ。生死さかいなげきの今。此まゝ置べきにあらねば。其夜鳥部山におくりて。宵は煙て今朝は炭塵も残らぬは人の身。他人のかなしむは義理一遍の念仏。泪は當座の形みの袖程なふ忘るゝを世のならはし夫婦よし殊更に御悔も淺からず。萬事をすてゝ出家の願ひ身の取置を見出し。親類目前の歎きに。此道も思ひとゞまり給ひぬ。百日の立事間なく精進事おはりてから。人々の内證にてはじめに見増る美君をまねき長吉の御かたへつかはされけるに。各々の心ざしをもそむかず此上臈を其まゝに置ながら。免角のさゝめこともなく。不便や此人生ながらの若後家なり。然れ共色はやめがたく。女はふつくと飽て其後は小姓を置れける是ても埒のあく事にぞ。

身替りに立名も丸袖

加賀笠きたる姿や誰。金沢に若道さかりの人あるが中に。野崎専十郎かくも生れ付美兒世には有物かと。女のおそむ風俗よはく敷心根つよし。此沙汰物になれたる好色のいへり。惣じての女は。女のそなはる形氣よりしやんとしたるをよし。若衆の男らしく利なるは勿論なり。うち見は豊に進まぬを上作物と此道の本阿弥の極めし。扱は此専十郎折紙道具不破の万作に入割まし。御物にもなるべき人を錦の袋にも入ずして。目の利ぬ念者に見する事の口惜。さ

れ共此子に第一の疵あり。常々命をちらぬ花に風をいとはぬ氣色。戀の山さながら見えすきて。皆人おそれて。其なりけりに十七の春を過しぬ。山吹のあだに藤のしほめるを此君にたとへて歎きしに。人こそしらね谷の戸ふかく鶯のとまりなりし。竹嶋左善といふ男と年月の念比。世間に見とがめぬは尤なり。城下より四五里も遠山陰にありて里々村々を勤むる役人なり。此取結びはじめは。其里の屋形ならびに専十郎嬢たる人のましまし。梢の秋一しほ物さびしくあはれなるを。月みるために漂行に。東の方によしなや峯の松くろみ。宵の程はもりくる影を待兼。南はさはりなく浮雲も心ありげに晴天の思ふまゝなる詠め里。遠の礎のみつ拍子賤も打やとやさしく。所からの加賀絹も蝶斬鈴虫のほそ聲。はや露霜にいたむかと草の葉すゑの風をだに我袖によけて見るは人はなき野菊も夜明なば道行人の目やとまらんと。世のあり様迄心にふくみ情は此美童にありぬべし。其夜竹嶋左善は里はづれなる觀音堂を守りし法師と常にも俳諧の友なれば。今宵の月いかに見給ふ發句も種つきて當座も脇聞ためと爰に來にけるに。庵主は戸を引たていかなるかたへかゆかれける。灯のひかり幽かに北の紙窓に移るに内を覗けば哥林名所考など取ひろけて今迄見られし跡なれや。膳棚のはしに舂落しをしかけ置れしは。出家の身にも荒る鼠はうるさくや。國に盗人とはいへど錠もおろさぬ入口。いづれ治まる時津風消かゝる灯挑のしんとらせて。懷硯に筆をそゞぎ軒ちかき芭蕉のひろ葉に書殘せし。松に聲あつてあるじの行方をこたへず。むなしく見すてし寺前の月。罷り歸つて弥酒のたのしみ。夢覺ての明の日は私宅にて一菜の齋まいるべし。茂右衛門後家の跡の義いよ。勝手に相濟貴坊も御満足たるべし。種申請休朝貞今朝よりして見事に咲初ゆ。近日越前へのたよりに。墨流し幅廣の鳥子三十牧御申遣し頼入ゆ。一昨日は煮梅かたじけなくゆ。扱内々御物語り申ゆ矢田二三郎事。若衆の心底にあらず。子細は念友を迷惑がり。いまだ十七花なるにあたら前髪おろし。我ら方へさまゝの託言おかし。其通りにしてゆるし夜前はいづれもうちより大笑ひして明しけると心に有事のみ取ませ。筆のとまりを定めずあらまじに書置ぬ。折ふし爰に専十郎來て芭蕉に何事をか書れ

し今宵の事なればゆか敷思はれ。立添て見しに詩歌にはあらずして心當とは違ひぬ。され共書おさめに家道の事おかしくて。先立左膳が耳に入程の聲して。召つれし小ものに何と世の中の思ふまゝならぬとはかゝる事なるべし。執心を掛られ若衆の身としてそれをあだになす戀をしらぬといふ物ぞかし。誠ある念者ならば命をおしむはむねなり。姿こそかくはいやしけれ情しる我を問人なし。神ぞく。此道に夜露はいとはじと。菅笠ぬぎ給ふを。左膳見しより魂飛かゝつて覺えず御手を應て。只今の御言葉に偽りなくば。是拜みます。人間壹人御たすけの如來様と前後弁へず歎くにぞ。つみ哀れに痛しく男振に好る所もありて。てんがうにとはいひがたく。立ながら二世ぞと詞をかため歸りければ。南請の里の屋に名月をしるもしほらし。鹽煎の芋に口欠の徳利かほりは石流菊といへる山路酒。是を見かけちか付ならぬ無理所望して。盃中も宿迄を待かね戀にせはしき兄弟けいやく。其後は身を左善に任せ夢にも面影を見し程になりぬ。おのづから若衆しとやかに形の花も見よければ。城下にかくれなきこの道をもてあそびぬる。今村六之進といへる男。専十郎を思ひ初て。數通を投入しに心づよく取あへず。然れ共武士の申懸しを此まゝにはやめがたく。程なく至極になつて左膳と念比を尋ね出し。念者に押してもらふべしと心中定めし時。専十郎分別して六之進と打果すは思ひまふけし事なれど。左膳跡にて勘忍なるまじ。とかくいとしき人の命永かれと思ひ極めひそかに六之進屋形にたづね行此程の御心遣ひ外に聞にはあらず。しかじ申かはせし事慥ならぬ共。竹嶋左膳のがれぬ難義申かけ。口惜きひとつ。又は心ざし誠なき男かれこれいくつの折から願ふ所の御後達。左膳を人しれず打給はゞ我身は御方へ預け參らすといへば六之進淺からずよろこび。今夜の内にと進ける。然らば榎木原の在郷道いつとも四つの時分通ふなれば辻堂の前にして夜の編笠を左膳がしるべにうちて給はれといへば。六之進請合其用意して野道に出しは是非もなき浮世そかし。専十郎私宅に歸り行水の後色を作りて丸袖の羽織編笠ふかく此事を隠し。左膳姿になり替り申かはせし野路に出。人を忍べる風情にさし足して並木隠れに行を。六之進待合せ後より立かゝつて打つけし

に。聲もせずまして柄に手も懸ず。さりとは最後附骸なかりき。止目もさしつれど心のせくまゝに所を定め兼て先立退。玉笹の茂みに入しに。たよりなき聲して我はかくなり行ても左膳殿堅固なればと云に驚き小者に忍び火をうたせ二たび立添てみるに。是はしたり専十郎なり。しばらく此心底の程を感じて又の世にも有ましき美道のかたまり是ぞ戀塚のむかしを思ひ出袖に玉をつらぬき男泣して甲斐なく。世上にしらねばとてながらへて嬉しからずと命の限りを極め。小者におもはくを念比に申ふくめ。専十郎が振袖に着替かしらは編笠にしのび。竹嶋左膳が里に行て小者にあけなく門をたゝかせ。注進の者と聲せはしく申にぞ。左膳枕をあげて四五度も聞すまして其身をかため。すゑ／＼の者を起し。素鎧の鞆はし。物見より様子を探して。扱門をひらけば小者一腰をあらためぬさきに渡して。私は今村六之進奴僕万七と申す。主人六之進野崎専十郎昨今衆道念比申かはし。さま／＼の誓紙の上に心懸りは竹嶋左膳なり。是を謀にてうつべきと内談の定り。役にも立べき下人をすくりてあらましを申わたさるゝ時拙者は胸にあたはさる貞つき。年月の恩をしらぬやつがれとて。諸人中にて蹴立られ手打にせんといさまれしうちに。やう／＼かけぬけ是に參るのうへは。命を御すくひ給はれ。いかに下人なればとて主命をむくべきにはあらずいへ共。武道になはざるたくみ。こなたにも御侍なるに晝中名乗あひぞんねん晴されんを見かぎり。却て此屋かたへかけ込すゑを頼み奉ると申せば。左膳思案におとしかね。何事も夜明てのせんぎそれ迄はその者汝等に預け置と立入を呼かけ。ちかい證據には専十郎殿しのびて先に立追付是へ御入あるはずと申せば。今は分別かはりて我をくれじと下人あまたつれて。木陰より道筋に出れば。小者が申ごとく専十郎が面影にうたがひなく。大振袖のしのび姿。悪やとばかり思ひ込。物しらずめと一討に。枯木が陰に切伏一たび兄ふんのけいやく。天命のがるべきかとさしとどめ。其後響に出してみれば。今村六之進なり。是はと驚き軍前の小者を引出しことの子細を尋しに。段々始を語るにぞ涙を肌迄したし。専十郎が我身に替りし心の程。六之進が身を捨る心ざし。それがしながらへて益なしと死骸に腰懸て。今年廿八

歳の秋の末夜の紅葉を双に散し。鬱なや朝は露となりぬ。前代ためしなき三人が思ひ入世の取さた七十五日にもやまず。語るに涙聞に哀れ。戀する人は云に及ばず心なき野夫馬かた迄も今に専十郎が軍後の上はよけて通り此道はしるぞかし。かねのわらんぢはきて諸國さがしても又は有ましきといへり

待兼しは三年目の命

和哥の浦の久しきためし。いつの世の種二葉に榮へて布引の松古今の色に。なを行すゑの静なる時津海七月十日の夜に定りて毎年此所より龍灯のあがる事うたがひなし。此夜は諸人あそび舟を仕立て新堀より乗浮れて都まさりの女中御座幕の物見に面影移り。浪に聲あつて小哥松に音して琴三味線大盃も出水が酒吞掛て川下に行に。山の姿も妹背の中芦邊の思ひ葉わけて。爰の百景詠めにあまりてけふも入日の鳴戸。浪風もなき人の心萬につけて。疎りせんさく双物鞆におさまりししるしぞかし。時しも磯邊をみれば棚なし小舟に素人棹さしのべて。美童深編笠の内のゆかしきに川風吹上に立り。菊井松三郎とてかくれなき情人。兄ふんのかためもふかき瀬川卯兵衛としばしもはなるゝ事のなかりしに。けふにかぎり其身ばかり殊更人を忍ぶ氣色。不斷の子細をしる人は見るにふしぎの晴がたし。それより玉津嶋の入江にうかれよるに。若衆七八人の花舟外とは替り謠鼓の音もなくて。それ／＼に念比らしき男ふたりづつかた密で。耳ちかく小語風情あるひは添寝又は一晝付の筆慰み。扱は扇引するも有思ひあふての戀舟是より浦山敷はなし。其中に美兒ひとりはなれ物にて臙櫃にあがり。柿地の團を手ふれてそれに書付し詩を幾度か吟し後には語する程になりぬ。松三郎小舟さし寄しのびて聞しに。花賀紅顔無筆口一夙縁蕪處契二同床。只看夜々多情夢二六時中曾不忘れ我も此詩はわすれず。兄弟けいやくふかき卯兵衛殿に先月の十七日の夜。いつよりは首尾よくあふての別れに。即座にあそばし手水手拭に書残されし。其人と我より外に此詩の洩べきにあらず殊に若衆の手にわたりふかく感

心の有さま。是只事にあらずと俄に赤面して臺所舟なる小者に其若衆の御名をたづねけるに。岩橋虎吉殿と其屋形迄こまかにかたるを聞届紀三井寺の入相つく比屋敷に歸りすくに卯兵衛かたへ尋ねけるに。機嫌よろしからぬは同船いたさぬゆへかとは是非もなき隙入の段々断り申を更に聞入ず御自分侍にてはあらず。其子細は申かはせし情のあまりに此身の事を御一作。又もなくうれりしかりしに。御心おほくて外なる方へも其詩をつかはされしや。しかじ我らよりとくに其君に奉られしもいらすと。皆まで語りもあへず口おしきと泪に沈み其後は命もあやうかりしを。いかにも一通り聞届しと松三郎に魂をおとし付させ。さりとは若年のいたりなり惣して詩歌はかならず等類も有物ぞかし。李太白が古郷の妻を思ひやりての詩に。吳州如看月千里互相思と作れば。杜子美も又今宵武州月。關中唯獨看と心は同じ唐土人もかくは通へる事もあり。和朝の人も月見ばとちぎりて出し古郷の。人もや今宵袖ぬらすらんとはよめり。其詩はいか成若衆の吟じ給ふぞと心静にたづねける。松三郎聞もあへず。其さきの御かた様は我ら申までもなし御合点なるべし。思し召あはされよといへば。卯兵衛分別にあたはず免角は其人をしらせ給へといふ。よ所々敷御風情彌心外にぞんずるなり。岩橋虎吉といへるうつくしき御若衆様につかはされけるといひけるに卯兵衛大笑ひして。いまだしらずやその虎吉は我らが姉の子なるはと。ざつと機嫌をなをしてよしなき事をうたがひ。今更耻かしやなどいへば。深く思ふからなりと猶意氣智をみがきあひてしたしみけるを。人もやさしく見ゆるしけるに世には又戀しらずあり。横山清藏といひし男松三郎を執心かけ。卯兵衛とも近付なるに無理所望の状を付けるこそうたてけれ。卯兵衛身にしては迷惑是に極れり。此戀ちとせと思ふ松三郎事思ひも寄すとの返事。いひ懸て引れぬ所清藏身拵へして。卯兵衛屋形に行てうち果すべき願ひ申せば。思ひまふけし心底をあらはし。時節のべてはせんなし。今宵和哥の松原に出合。死出の同道貳人と。時とりをいひ合せて。門外に出しが。清藏立かへりて申けるは。我しはらく此事を思ふに。松三郎今年は十六歳。衆道の花とは今からするなり。いかにしても其方が詠めすて行事は

いなるべし。今三年待たば前髪もおろし。其時は世に心懸りもあるまじ。三年が間は是を得べし。武士のたがひに申合せし言葉かならず反古にはなざじ。三年過ての今月今日此胸晴すべしと申せば。卯兵衛満足し。其時は何か浮世の思ひ出かく申せし心根。いさぎよく太刀先にて埒明んといへば。かた々約束して清藏は私宅に歸りぬ。此事外にはしる人もなかりき。松三郎にもふかくかくして常の念比かはる事なし。其後は卯兵衛清藏ふしぎの縁となりて。朝暮かたりて日敷をふりたゞいとなく三年も立事やすし。卯兵衛松三郎が元服申せば今年春にもあふ事といふを。是非にすゝめて男になし。首尾此時とよるこび。十月廿七日にあたりて過にし年申かはせし月日なりと。早天より兩人共に野寺に行て。つらく寂後の物語り庵主をはじめ下人共かゝる事ぞとは夢にもしらす現といへば幻しの世や。今ぞと思ふ時卯兵衛挟箱を明させ。位牌を二つ取出し兼て。二人が俗名月日までほり付。たがひにとりかはし香花を手向ししが程は物をもちはず。心底をかんじあひ袖は折ふしの時雨して。偽りのなき佛の利劍をぬき持。卯兵衛は廿三。清藏は廿四。惜や花散月くもり。跡に残りし松三郎は心の闇にまよひ。其夜半に聞付御寺にかけ入。今年十九出家になりて貳人を吊ひ給へと皆々すゝめても聞入ず。同じ枯野の霜とは消ぬ。扱も弓馬の家にそなはりし人は。後代にほまれを残しかゝる命のすて所。こまかに書留めて世かたりと思ふに情。あまり義理ふかく哀さきたちこそ路しづみ。爰にて筆すての松は残りし

詠めつゞけし老木の花の比

御拜の薬あり萬によし。板きれに書付壹間みせに明障子簾をかけて。大橋流の賣手本老筆なれば好人稀に世わたるたよりに成がたし。幽かに住なせる所は谷中の門前筋に。軒端は松ねちけて凌霄かづら花のやさしげに咲みだれ。庭に夏菊作りなして井の水清げに七釣瓶の立木に。とまり鳥のおかしく尾羽をからせし浪人者。若い時より奉公

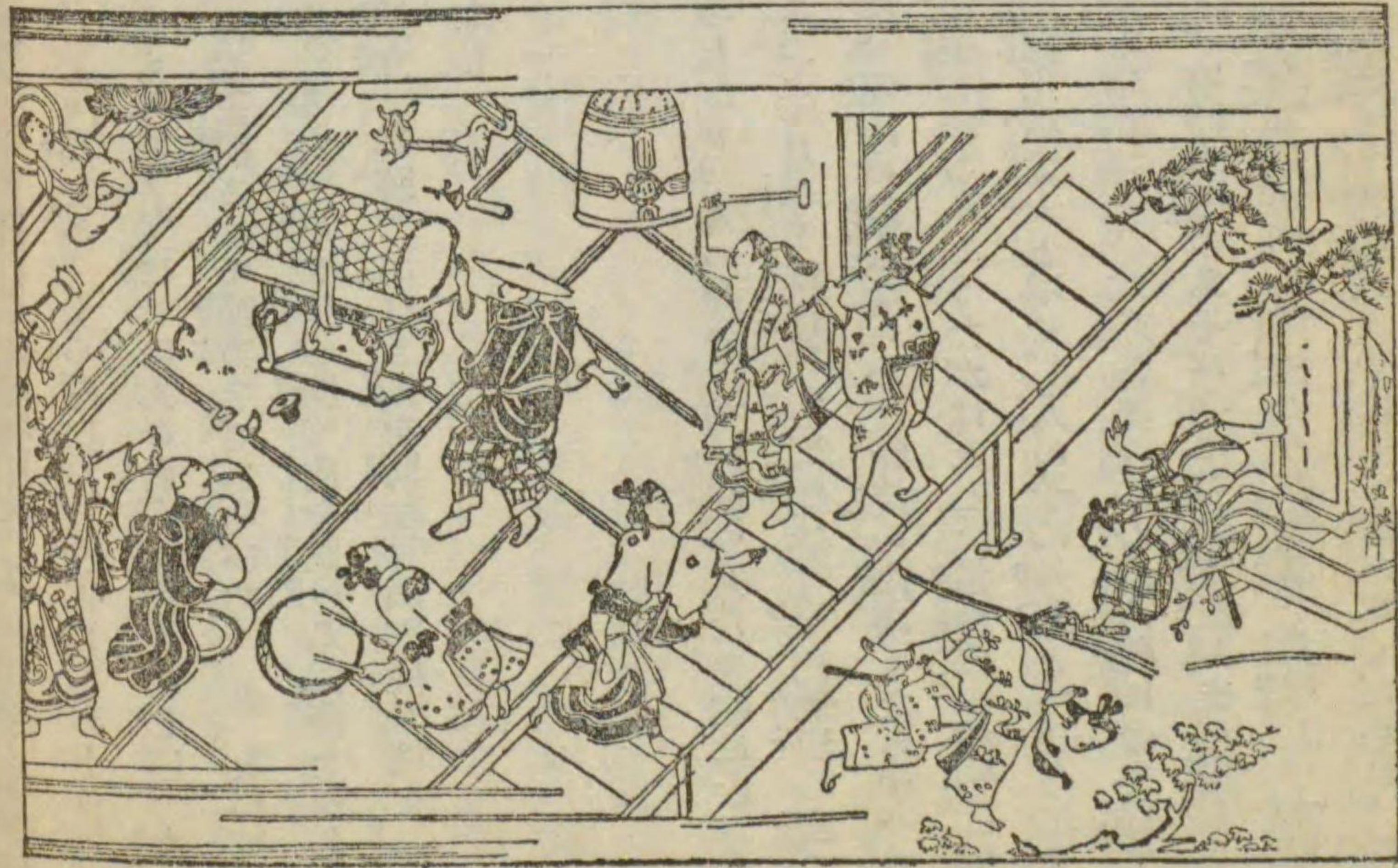
の望み絶て時し諸道具を賣喰に。一日を暮しける。朝夕の友とは同年の比なる老人。暮の相手となり其外にはま
 だらの陳一疋もてあそび。かりにも問くる人もなし。ある日しきりに帷子の袖をしたし。風の扇も手のたゆく。暮を
 いそぎて行水しけるに。獨りの親仁身の汗を流しけるを友とせし年寄。後姿を見てかくもなる物かと背骨のふしく
 れ立しを撫おろし。腰よりしたの皺を悲しみ涙にしづみ高歌一曲掩明鏡。昨日少年今日白頭と作りしも。此身のか
 はるに思ひくらべて悲し。過にしやさんざぶしをうたはせて。調護し事も手に手を取かはし湯の水になるまでなげ
 くを。よき後生友達と思はれしに。子細を聞ば此人々の生國は筑前の城下にありしむかしは。玉嶋主水とて美形に飛
 鳥おちて博多小女臈かと見し人うたがふ程なり。又の獨りは豊田半右衛門とて武藝おろかならぬ人なりしが。主水に
 ふかく惱めば又半右衛門心ざしに思ひ付。十六十九の年より若道のかたらひふかく。互に海の中道ふかく思ひを重ね
 し中に。外より主人を執心此事やむにあらす。籠山の火櫻焼つくる人あまたありて兩方共に申かはし。鬪を幸の橋
 に出。首尾よく相手を助太刀残らず打すまし。其夜忍びて木の丸の鬪を越て。身のうき濱より舟に取乗世間をはぐか
 る身となり。今爰に隠れぬ。今年主水は六十三。判右衛門は六十六まで昔に替らぬ心づかひ。貳人共に一生女の顔を
 も見す。此年迄世を過しは。是戀道見人を好る鑑ならん。今もまだ主水を若年のごとく思ひつゞけて黒き筋なき薄鬢
 に。花の露をそゞぎ。巻立に結なすもおかし。氣をとめて見しに此人は角を入たるよしもなく生付の丸額是ぞかし。
 不斷も。以前を忘れずして。壺打の楊枝手ふれて齒を見がくなど。鬢をぬき捨しらぬ人のみては。かゝる分とはよも
 や思ふまじ。されば大名の御情のふかき御物あがり。妻子のある後迄も。何となく若道の時を忘れさせ給はぬこそい
 と殊勝なれ。是を思ふに女道とは各別なる色あり。女はかりなるもの。若衆の美艶は此道にいたらずしてわきまへが
 たし。さりとはうたてき女の風俗と。世に住ながら東隣とは火の取かはしもせず。人心とて自然の夫婦いさかひ
 に。鍋釜わるにも。おのれらが損よと爰に出合事思ひもよらず。壁越に力を添。亭主たゞきころして小草履おけと齒切

をするもおかし。折ふしは弥生山に野の櫻人をまねき。池田伊形澤の池よりの諸口も此時賣切べし。天も酔り地にね
 だりくさき足音。内より男女を聞わけ。男の時ほもしもや若衆かとはしり出詠め。女の時ほ戸口をさしこめ十日比の
 心になりてしづまりぬ。春も時雨の定めなや。俄にふりくられて姿の花もちり／＼に。けふの名残を惜まれしに。女中
 一むれ立さはぎ。彼衆人の軒陰を便に。かゝる所に近付もがな。せんじ茶涌させて晩方まであそびて。傘を借て様
 子によつて夕食も振舞ば喰て歸るべきに。爰らに心當なきといきすきたる女。戸を少し明て内を映ける面影をみしり
 より。手元なる竹箒を提出。むさしきたなし立のけとあらけなく追立。其跡にかはき砂を蒔て。四五度も地を改
 め塩水をうち清めし。是程女嫌ひ。江戸廣しと申せ共又見たる事もなし

色 噪 ぎ は 遊 ひ 寺 の 迷 惑

化競とや月のよの雨花盛の風。是は又見るべき春秋もある世のためしなり。人の身の義理死程つれなき物はなかり
 き。しれぬ後の世の事は覺束なし。長生のたのしみ蓬か嶋の甘い物を喰て年月暮すは何か心の罪なし。尾州歎田の宮の
 宿はづれに。三途川の姥木像にして立給ふが。此所往來の人しげきに。死出の旅人ならねば此姥の削事もならず。一
 日も浮世に住徳ぞかし。爰に墓なき人の身の程朝良の種若衆の花盛に生しけるかとうたがはれし。當社西の御門に神
 役の家高き。大中井兵部太夫一子に大藏といへるあり。同じ神職に高岡川林太夫と申せし人の子に外記とて。今年十
 八の角前髪いまだ美童たゝなかなるに。其身ははや念者にかはり大藏と申かはし。二年あまりの心底八劍に命を懸て
 誓紙たがひに偽りなく。明暮身に影の添ことくしばしも獨りは見えず。有時木隠のあそび寺に若衆友達あまた集り。
 住持の留守をうれ敷けふこそしたい事してさばげとて。俄に飄出して小鷹和泉かかる業籠ぬけ鉦鏡鉢を打鳴し。本堂
 客殿轟かし。佛も動き出させ給ひ。後光臺座を踏われ。蠟燭立の鶴龜も千世萬代といはさず細かくだかれ。作

り庭をあらし。早鐘に近所を驚かし。其後は狂言替て非人物語三番つゞきをはじめ。石塔の陰より手頂のまね興に乗じて身を忘れ。外記木刀を捨てまことの脇指ぬきもち目をふさぎこけかゝるを大藏はしり寄て。是は何とあそばしたと取つく所を覺すうちける程に。大藏が首ころりと落てなげくにかひはなかりき。いづれも涙にくれて前後ばうじ。しばらく言葉をかくる人もなし。され共外記は胸をすゑすこしもながらへてせんなし。大藏只今まいるぞと死骸に密添切腹するを。大勢取つき時節を延しけるこそうたてけれ。折ふし長老かへり給ひ子細を聞届て其方命にあらねば。此段大藏親達にもろん果かたり思ひを晴させ自分の親にも浮世の暇を乞てすみやかに相果。名をすゑの世に残し給へと其理をつくしていさめければ。いかにも我身ながら命はあづかり物。此うへは御僧次第に最後をまつ間も口惜と諸袖をしたしける。此心ざし哀れに物かなしく其座に有し美見いづれか命を惜むはなし。親類のすゑ／＼まで此寺にきたり大藏がなりゆく有様に涙をつらぬき。寺前の松柏も枯ぬべし。兵部は我子の事は外になして外記が命の程をかなしみ。住寺を頼み大藏がかはりにわたくしが子になして名跡つがせたき願ひいろ／＼申あげしに御命儀の後御ゆるさるゝ事かたくて切腹いたさせよとの仰に任



せ其段申渡しけるに。かく有へしと思ひ極めし身なれば。今更心にかゝる事もなく。其用意をしておの／＼に申けるは。大藏相果し所なれば。此寺にして最後とぞんずるなれ共。それがし願ひに任せ年比頼めし淨蓮寺にてと申けるにぞ。心まかせにもなひ行大乗物の戸さし兩方共にうち明て白裝束に無紋の淺黄袴をゆたかに大前髪を結せたる風情のけふ殊にうるはしく。見をくる人魂はななくさらば／＼といふ聲も遠ざかり。道すがら硯紙に筆を常よりうごかせて。大藏親たちへ面目もなき言の葉かへす／＼も書残し。程なく御寺になれば心静にりんじうの一大事をさづかり。敷疊の上に座して皆々に禮義を相のへ。小脇指を取なをし。今ぞと見えし所へ十四五なる美女のしろき練被せしが。外記に取つき自も跡には残らじと思ひ極めし有様外記はかつて覺えなくて。此首尾さしあつての迷惑。いかなる事ぞととかめ捨次第を聞しに。外記親林太夫涙をおさへ其方夢々しる事にはあらず。此息女は塚原清左衛門といひし浪人衆の娘我等共すこしのがれぬ中なれ共。つれ添汝が母とふあひなるによつて年久しく忍びて往來をもせしなり。いかにしてもおとなしき所を幾度か見届しによつて。是非に我娘に約束し。來年の春の比は女房が手前をも申なだめ。目出度よび入て其方が妻にせんと思ひし事もあだになり。さだめなき世のかなしやと此斷りを聞人又あらためて涙となり。ためしなき女心。是を命はとられじと聲／＼に惜むにぞ大藏が親兵部太夫一命に掛てかさねて御訴訟申あげ。願ひのまゝ命を乞請外記を我子になし。則かの娘をもらひて祝言の事共とりいそぎ其家をゆづり親子かたらひをなし計る

男色大鑑 本朝若風俗 第五卷

目録

一 涙の種は紙見世 二丁目

芝居子銀壹枚になる事
都人も櫻にらうぜきの事
花崎初太夫出家する事

二 命乞は三津寺の八幡 七丁目

平井しづま衆道の外の情の事
銀ためし親仁はじめて芝居見る事
堺の娘逢ての戀を捨る事

三 思ひの焼付は火打石賣 十二丁目

玉川千之丞内證帳の事
嵐をしのぐ手づから間鍋の事
都に新戀城をつくる事

四 江戸から尋て俄坊主 十七丁目

道なしの笹の庵に住事
玉川主膳心をくむ内井戸の事
里の女はすがたにまよふ事

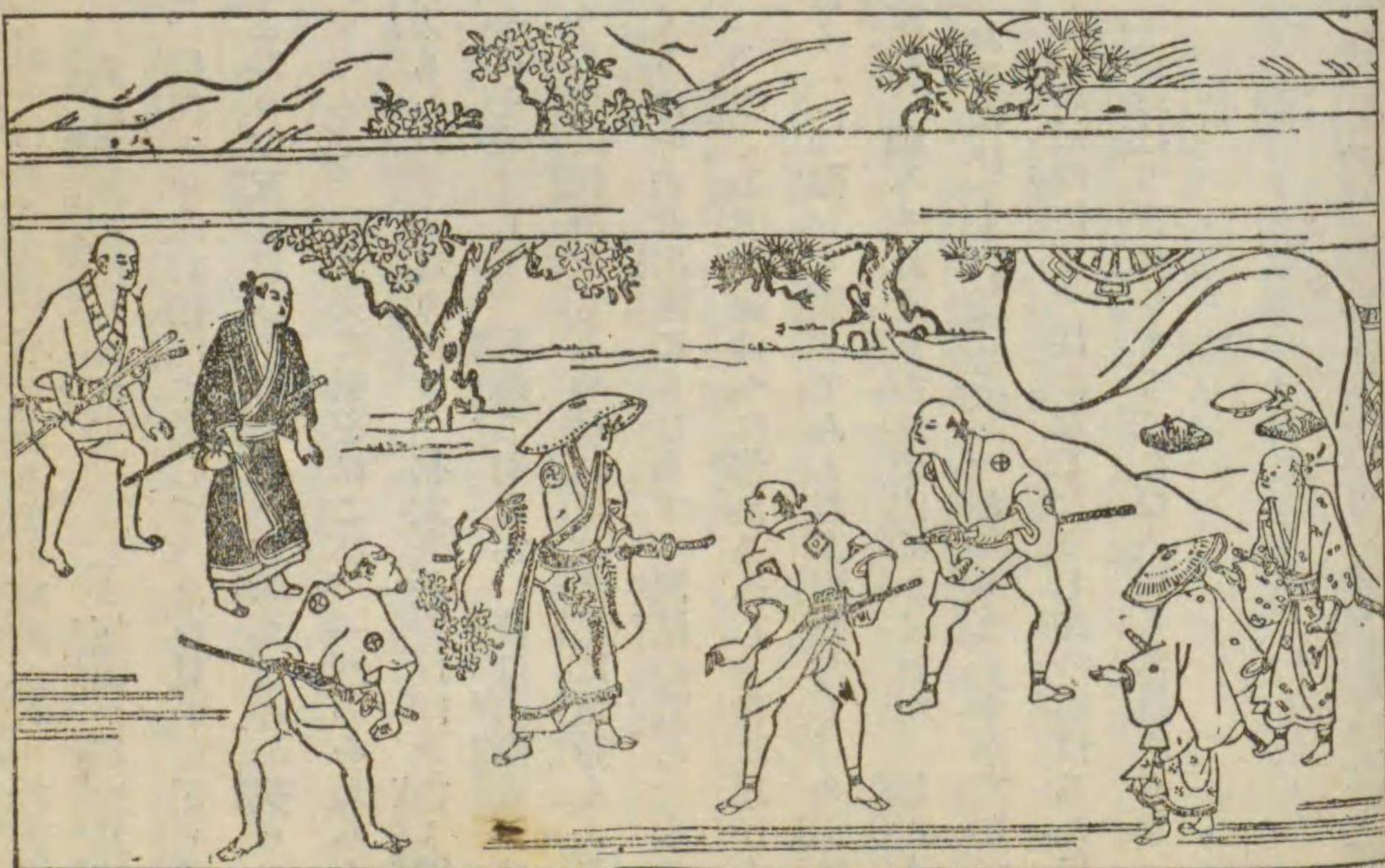
五 面影は乗掛の繪馬 廿二丁目

霜先の狼戀に命とらるゝ事
玉村吉弥かくれもなき情しりの事
前髪のなきも世の仕合になる事

泪のたねは紙見せ

今の京には。何が時花といへば。始末して銀を溜る事ぞと語る。それは常なり。大哥舞妓御法度の後村山又兵衛が物まね。狂言づくしに仕掛。太夫子あまた集めしに。其比迄は都にも。舞臺子のあそびは稀に。花代も一步づゝになべて極め。今の世の飛子同前に客を勤ぬ。誰かははじめし大夫成とて。惣役者を東山にして座振舞の後。銀五兩になしぬ。萬心やすき世也。草履取にもこまがね貳匁とらし。茶屋へは銀貳兩程の集札なれば。芝居の果より夜の明る迄。我物にしてさばきぬ。其時の子共はまことの子ともにて。戀をかさねてあへ共。御無心云事もなく。もてあそひとて飛人形又は染分の手拭琢砂。やう／＼四五分が物をとらずに嬉がりしに。一年妙心寺關山國師三百五十忌の時。諸國諸山の福僧京着して。御法事の後色河原を見物しけるに。田舎には見馴ぬ兒人に思ひこがれ。萬事をやめて買出す程に。前髪の有て目鼻さへつけば一日も隙なく。是より晝夜に賣分花代も舞臺踏は銀壹枚に定めぬ。此法師等かぎりある都あそび。萬の物入をかまはず。今の世の噪人のきのどくとぞなれる。其比村山座の花ざかり。藤村初太夫すぐれて何怪く。時勢粧を舞事をえたり。見し人是に惱ざるはなかりき。ある日東山の櫻に行て。さかりにちかき塩籠の一枝を初太夫持て歸り。見ぬ人のためにもとやさしき心ざしふかし。神樂岡の邊りに色作りたる男。集りて。晝からの酒事と見えて。幕をたゞませ。夕日にうつりて紅したる白をあらはに人の見るをもかまはず。提重のふかきにて酒吞かはし。喧嘩を肴にして有しか。初太夫かざせし櫻を見かけ。情しらずの男達ちかくよりて。其花を給はれけふのつまり肴に。酔味噲てたべるといふ。それ花に嵐をだに人間の手に折かへるをさへ心なきに。ましてやむごき言葉のすゑ。さら／＼花は惜からねと。所望の仕掛氣にいらねばしんじ申まじきといひ捨て通りしに。此ふんにては男たゞずと。是非にもぎとらんといふ。やれば初太夫も若衆すたり一代の身の大事爰なり。京にもかゝる横に車と。牛引と

どめ駕籠をたて。往來の人更にまた山をなして此濟口を見るはあやうかりし。こんかうの火神鳴の久藏も一命はすてけれ共。太夫を思へはむねながら胸をおさへ。しるべの人あらば預け置て大勢相手思ふ折ふし。物やはらかにうつくしげなる男の。したには紫ちりめん引かへし。上に黒羽二重の両面けし入ぎやうの加賀紋。宗傳から茶の疊帯。ふたつさご珠の色よくぬきさめの大わきさし。素足に藁ぞうりはきて。跡より髷なし奴に。かへ雪踏櫓の木の角杖もたせて。靜に來りしが。此様子をきよて爰はそれがしがあつかふべし。お若衆へもらひかけられし花。跡は何にならふともつかはされたがよいと。さま／＼申せば。初太夫すこしせき心なれ共。此詞をそむかすあたは櫻をわたしける。あばれ男酔味噲の櫻と持て行を。風流男袖を引とめ。其櫻すぐに此方へもらかし給へといふ。只今の事いまだぬくもりも覺ぬに無理なる申事と。少し氣色をなる程さばかず。今の都にかやうの無理がはやる。おのれ其櫻を首にかゆるかといへば。おそれてわたしぬ。はじめと違ひ見ぐるしかりき。さくらは初太夫へかへして。彼男とらへ申分あれ共醉たる風情も見えつれば。かさねての日酒機嫌になき時。我を尋て。此意趣を晴せよと。懐より石筆取出し。所書たしかに。いろはの十郎右衛門と名迄し



るしてわたしぬ。去とては落つきたる仕かたなりと。見とめし諸人これをほめざるはなし。かり初の事那がら。初太夫身にしてはうれしきわすれず。其夜より客の勤めもすて、十郎右衛門宿は東洞院迄しのびて。もしも最前の男達共切込ば。我さきに立て身を捨て。人に難義は掛じと思ひ定めし心ざし。自然と十郎右衛門に通して。なを見すてざり。彼馬鹿者も其後はとがむる事那し。今は心もゆりて是より衆道の縁となりて互に思ひをつくし。二年あまりの契りのうちに人のなるまじきたはむれ。かず／＼のかため外なる色ぐるひをやめて。初太夫に氣をはこび。一門のそねみふかく身の置所も定めかね。繼母なれば一通りの恨みを書残して。行方もしれずになりなき。初太夫是をなげき色ふ神をいのり。尋ねけれ共御行衛のしれざれば。思ひわづらひ中々舞臺身にそまらずして。引籠て有しが。後は美形もかはりぬ。此理りを親かたに申わけて。首尾よく隙をもらひて。難波のうら町に住所をもとめければ。次第に氣分もよろしくなりて。世間むきの見せつきとて。紙を商賣させて。其年はおくりぬその身出家にもならず。河原の勤めをよめけるは。いかなる思ひ入ぞと。むかしよしみの有役者たづねけるに。我くろ髪何ゆへに惜かるへし。世に思ひ人まし／＼てもしもこの姿を見たくもおぼしめさば。見せましてからのうへに。髪をも剃すてんと思ふ甲斐なく。今迄は待ぬれ共。人に問れて口惜やと。其座にして鬢をはらひ惜や十九出家の。望みそれよりかうや山にかくれて。都の人の問にもあはず。朝は谷より水をむすびあげ。ゆふべは落葉を集めて。おこなひすましけるが。一とせあまりすぎてこれし人は。丹後國天のはし立といふ所に行暮て。哀れは松より外にしらぬ鳴崎にて。はかなくなりし身の事はるかにすぎて聞しより。其所にたづねくだりて一七日の吊ひなして。其後その身はうき世をすて二たひ人にもあはさりき

命乞は三津寺の八幡

是はいかになりぬる世の姿、難波のむかし。太夫藏人お國が女舞妓も絶て。若衆をあまたかへ。是ぞて世界の花

踊鹽屋九郎右衛門座に見し。岩井哥之介平井しづまなど申せしは。宋代にも有まじき美兒なり。此外四十五人舞子ありしが。いづれかいや形氣なるはひとりもなかりき。其比までは晝の藝して夜の勤めといふ事もなく。まねけばたよりて酒事にて暮し。執心かくれば世間むきの若道のごとく。其人に念比にすれ共。誰とがむる事もなし。太夫もにも欲をしらず。物にもならぬ容をうかくもてなし。其年の暮に。丹後舞臺本にぬりたるに入し酒三升盆前になれば三輪素麴十把もらひて。是にも礼状を遣はしける。また子共にはじめてちかづきになるも。芝居かへりを濱の水茶屋のかゝに呼込せ。かりそめの盃して。聲の有子には小所望して思ふまゝの遊興。其後あそび中間より集て。銀壹兩おくれば。釣髭のある男が太夫殿より礼にきて只今は千方かたじけなき仕合と。三指突て長口上申たりけりと大笑ひして暮せしに。今時のこんがうに貳角づゝとらしても。さのみうれしがる良つきをもせず。すこし露うつ間がおそければ。ながき秋の夜を四つまへから呼立。明日の舞臺かくるなどいふ。戀の窟中に氣の毒きく事ぞかし。菟角は今の世間に野等犬の子と金銀のたくさんなる故に。万事奢りて物をつかひ侍る。それ迄は舞臺衣裳も。唐木綿にさらさの置形。地衣襖は加賀絹に中紅の裏をつけ。淺草嶋にむらさき作れば。見る人おどろきこの上又も有まじきと。沙汰する程の事なりしに。近年の唐織金入毛類を着る事。いかに役者なればとて。身の上しらぬぞかし。大分の金銀取りながらつまる所は借錢の淵とは此堀のならひなり。給分のやすきむかしは。藝者も世を暮しかぬると云事なし。其時は面白からず。物毎おかしきは今なり。され共欲なしに子共の本情は平井しづまなど末の世がたりにもすべし。ある時境の大道筋に。長崎、商して家榮へたる人の有しが。此あるじ時代男にて。七十餘歳迄風をもひかず。薬ものまず。屋賃銀の利の算用ばかりして。生れて此かた色ある町をも見ず。庭はたらきの下女も姿にかまはず。布さへ織は壹匁てもやすきを好み。戀などする事思ひもよらず。門より外に出ず。世間むきのかけたる男。はじめ芝居を見られしに。人も不思議を立にける。然も其日雨降て見物は立さはげ共。此親仁ひとりすこしもおどろかず。三番めの櫻川の

狂言に。しづまが出るとや。是をみずには歸らじと。聲のつゞく程は東西くいふて。袖は濡ながら櫻川果る迄見とめて。樂屋口にまはりて歸りを待に。軒の玉だれも袂によけず。さしかけ傘下行御風情は今の世の人ころし。墓の寺の前迄跡より付添ていはて物思ふ有様を見しよりしづま心に掛。親仁殿はどこの在所衆ととへどこたへず。戀といふ事いつの時に誰か仕初て。かゝる物うき事ぞと獨言いふ。しづま鼻紙の間より。定札六七枚もつゞきしを取出し。又ちかき程に見物し給へといへば。此親仁うれしさあまりて兼て思ひし。御執心の一言いひも出さずたゞに過ぬ。暮やすき冬の日の虹うつろひて太左衛門橋を渡れば。川風心もなく吹てしばしは爰に立すくみしが。君も太夫本入せ給へば。せんかたなくて其邊りの茶屋にたよりて。それとはしらせず。雨の晴間待とばかりに。塩屋の内を見入て物あんなじの白ばせ。亭主見とがめて尋ねけるに。語らねばならぬ首尾になりて。しづまに思ひ入て命せまる身の程を申せば。あるじ聞に哀ふかく此事しづまに。耳語しに。はや情かけて我を思ふ其人。いかに老たる身なればとて。それ見捨てがたしと俄に。衣裳好みして。肌にも暮といへる名香を焼しめ。彼茶屋に行てみるに。髪は黒き筋なき男の。瀧嶋の着物に。梅かへしの袷羽織に。胸高に紐付て。割胡桃のはなち目竹の小脇指に。むかし印籠になめし革の巾着に。駒引の根付をさげ。此いやなる風俗。そもや若衆に心をよする事おもはく外なり。二間ある座敷の奥に通て。此親仁ちかふよびて。亭主のあひさつ迄もなし。こなた様には私に御しう心のよし。寂前芝居を歸る折からより見請心懸り有しに。縁はおかしやと。盃事して酔を戀の種として身に添臥を仕かけ。うれしがる事共に氣をつくしけるに。此親仁かたじけなともいはずして。口のうちに念佛をとへて居る。しづまが上手にとはれて。此男語りけるは。扱もくやさしき御心入忘れがたし。そなた様に思ひ入しは私のひとりある性子なりはや此程は御身の事はかり申暮し。命もせまるをふびんに子おもふ親の身にて。かく申をとてもの御情にしばしが程。まみへて給はれと申せはしづまなを哀まさりて。今となつていなとは申さじ。我身はあづけ置と申せば。親仁よろこび然らば今宵更てから。是へ

ともなひ申べし。かまへてく沙汰なしに頼むなり。長町のかり座敷迄つれきて。あるよしを申捨て歸る。しづまは待詫しく袖を枕に。夢見かゝる時病人のり物しづまにかき入ける。此足音にしづま目覺てみし。十四五なる美女の肌小袖白く。中に薄花の櫻色成に。淺黄鹿子の両面に。付切の色紙哥もやうの紋所。帯は二重菱の柿地をつい引まはし。むすびもせず。髪はさばきながら申程よりしたを。引さき紙にてむすび。此うつくしさ皆いふ迄もなし。人を耻らはずひたくと密て。おもはずうれしやと聲をあげて。すこし笑て白見あはせしは。ぞつとしてうき世の人共おもはれず。しばらく物をもいはずありしが。しづまおどろき我は衆道のやくそくせしに。是はおもひよらず人のいふべき事もかなしく。物思ふこそ誠なれ。今時の若衆ならば。後家にも只は通さじ。しづまとやかく分別して。身を立る理りつれなく申さば。あのうへにまたもや病氣もと思ひ。心にそまぬ亂れ姿となり。我事今よりまかせたる身なれば。御心よくならせ給ひてから。いつにても又の世かけて。たがひに忘れじとかりそめながら淺からぬ。詞かはして別れしに。露よりもろき命。其夜明て。惜きは十大眼れるごとく世をさりける。生死はのかれぬ事なれど。一しほあはれさもまさりぬ。七日たちて後此娘の母親。せめてはこがれ果たる其若衆を見てうきををはらすべしと。大坂にたづねて形見の品しづまに渡せば。更にまた涙にしづみ。それよりうかくとなりて。おもはざる事に人の取けるよと。我も佛神に祈りて命乞しけるに。世のためし世のふしぎ。ある日三津寺に参りて下かうに。しづまはつねの着物なりしに。白衣の袖薄く面影たよりのなしと。見し人取沙汰していかなる事。もしも乱氣なるかといふ其暮がたに。難波の夢とはなりぬ。いまだ春まつゆきの梅。あたらつぼみをちらして。月やむかしの物がたりとはなりぬ

思ひの焼付は火打石賣

七玉川のほかに小哥の名所に千之丞がむかし。風ふけば興津しら聲にてうたひ出して。家跡の御簾を明ての面影ま

この女井筒も。何として是には立ならぶべし。十四の春よりも都の舞臺を踏そめ。四十二の大厄までふり袖をきて。一日も見物にあかれぬ事。末の世の若女形是にあやかるべし。河内かよひの狂言はかり三年があひだ。江戸の人をなびかせなをほめ草野郎虫にもこの身の事あたには書す。承應元年秋のよの曇影をうしなひ。物の淋しき折ふしある御所方の南おもてに。宵の程は筈をふかせられけるか。更て御なくさみかはりぬ。其比長崎より。一平次といへる男來て四竹と云事を初て手拍子犬うつ童子迄世に是を時花かし貴人の御手にふれらるゝ物にはあらず。鳴音しづめてひとりの仰せられけるは。川原の野郎若衆きしばかりにて見ぬ事ぞかし。せめては其姿ありのまゝ移せよと浮世繪の名人花田内匠といへる者。美筆をつくしける。かりの事ながら太夫子共我をあらそひ。繪師に伽羅をとらし又は差ふるびし小柄。着なれしはおりをとらせは是に目の見えぬ世の中。花に風。月に村雲のさはりをのけて。思ふ人の鑑鼻をなをし思はぬ人の出額をも見よげに。書ば。いづれかあしからず。千之丞はしれて形自慢なれば。身の上頼むべき事にもあらねば。中にも此人。其さまいやく腰などをかめて書り。是を思ふに唐國の王照君か。畫師にまひないせざりしに同じ。其後品定めの時玉川すゑにえり出されて。是には狂哥をあそばす。かたもなく。あたらし名を埋むこそおしけれ。其秋のはじめより京都に筋骨をいためる時花病。千之丞殊更になやみて。自然と腰付ふつゝかに思ひもよらぬ出尻となる事。取前の姿繪を思ひあはせておかし。されども此人萬能に極まれればこそ。夜の勤めをかゝず。容は前後をあらそひ。十日も前より御來駕を待事也。俄には盃も及びがたし。すこし酔ての座配紅葉のあさき脇白みしに戀をもとめて。高尾南禪寺東福寺にかぎらず。諸山のうき坊主代々の筆のものを賣はらひ。又は山林竹木迄を切絶し。皆此君の御爲となし。後はひらきて傘に身をかくしぬ。或は商人の手代其親かたをだしぬき。かぎりもなく金銀をつみやし。かりなる御情に家をうしなふ人其數をしらず。有時千之丞内證の文庫をあけし事有てみるに。かりどちにして手日記此上書に初枕としるせり。いかさまにもおかしく思はれてみるに。あのごとく元日より其年の暮迄

參會せし人の首尾をあらまし讀に。たけき武士のつきあひ鬼のやうなる男だてをやはらげ。取性にあへは土氣をおとさせ神主には厚鬢をおろさせ長老に袴を着せ一座切に興をあらせ客を自由に手に入我なくさみになせり。奥程ゆかしきを其まゝに讀捨ぬ。是迄こゝろのつく事何かあしかるべし。執心掛しすゑの者には人しれぬ情ふかく。數かさなりて世にあらはるゝをいとはず。瀬々のしき浪名の立やむ事なし風のはげしき夕ぐれ然も雪日和にしてはや北山は松の葉しろく見わたし。物のさはがしき道橋の下五条の川原を夜の臥所として。渡世夢のやうに極てまことに石火の光り。朝に鞍馬川の火打石をひろひ。洛中を賣廻りて残れば夕べに捨て其日暮しの思ひ出。是を都の今賢人といへり。此身も美道はやめがたく。玉川心測集とて全部四巻に。千之丞四季の身持をつくれり。衆道の心掛ある人を見るべき書物なり。身に灸の數蚤の喰所迄する事のおかし。此人のむかしを聞ば。尾州にかくれもなき風流男なり。千之丞太夫なりの時分より深く申かはして逢ぬ。身をかくし給ひて久しく御行方のしれざる事を歎きしに。有人傳へて五条の河原に淺ましき形にたましますと語れば。太夫泪ぐみて人の行す程さだめがたき物はなし。とくにもしらせ給はらば。都の中にて人に指はさすまじ。しらねば何事もせひなき世なり。つゝ此あたりにおはせし事は思ひもよらず御國かたへはたよりの文して幾度かとひまいらせしに。かへり事のなきは。我を見かぎり給ふかと。まゝならぬ身をうらみて過にし事ぞ。惣じて勤けるうちには是にかぎらず。かゝる事あまたあり。それからそれ迄とつれなく申て。其夜のお客を大事に機嫌とりて床もしめやかに思ひを殘さぬほどに起別れて。明ぼの霜夜身にこたへて。嵐もはげしき河原を思ひやりて袂に盃を入。間鍋を提て人をもつれず岸根の小石を踏こへて水鳥の浪の瀬枕をさはがし。はるかなる橋の下に行て。尾張の三木様とむかしの名をよべ共しれず。ころは霜月廿四日の曙前。いまだ人良も見えわかず。淺ま敷寢姿のあまたあれば。いづれか其人様とたづねけるに。過にし事を思ひ出しに。左の鬢先に切疵ありしと。ひとりくの野臥の顔をさくりてみしに。あのごとくさがして。取前より聲を掛しに名乗せ給はぬは。ざりと

はふかく恨み参らすと。泪又俄川かと思はれ。しばし過にし事を語りて手づからもりし酒に明かたの風をしのぎ。東の空もしらみて。御あり様をみるに。風俗の残りし所はひとつもなし。かくも又替る物ぞと御足をさすれば。あかぎれよりくれなる乱してなをいたましきを。ひとつひとついたはりて添臥して有しが。旅立人も橋踏ならし芝居の太鼓うつ程ちかければ。しのぶ身のかなしさは。別れけふの夕暮をまたせ給へ。御むかひにといふ聲も跡なくなりぬ。此世捨人は是を更にうれしくは思はず。よしなき人の尋ねきて。我樂みのさまたげなりとうたてく。爰をもまたざりて何國へか行給へり。其後千之丞此事をなげきて。都の中をたづねしに其甲斐もなく。残れる火打石を取集て。東山新熊野のかた陰にはこぼせて枯葉の小篋が奥に塚をつき其御方の定紋なれば。しるしに桐の一本を植おき。世になきひとを吊ふごとく。邊りに草庵をむすび。日蓮の口まねをせられし法師をすへて。爰を守らせける。ある人名づけて是を新戀塚といへり

江戸から尋て俄坊主

佛法僧の鳥は。高野松の尾河内の國高貴寺にかぎりて。夏中然も眞の闇に鳴なり。此聲たまさかに聞人心をすまし。殊勝さも爰弘法大師の開起の靈地なり。此山つゞき。御法のはやし年ふりて。玉手と云里に念佛の老和尚ましまし。あまたの御弟子のある中に。可見といへる美僧あり。人のむかしを尋ねけるに。江戸の芝居太夫玉村主膳と一牧看板に名を廣め。人の命をとる程の女がた。よろづの拍子事またの世にも出来まじき名人。ことに若道のたしなみふかく。心を掛ざるはなし。日を重て姿の花もおしまれ。月は廿日あまりの空と詠めし年の比。おもひ入し山に隠れ髪を拂ひ形をかへて。諸國執行して今此所に来て。草庵をむすび菘垣のまばらなるに。蒿の枯葉のまとひ。窓は南に月を友とし。朝夕の勤め隙なく。かくて三年が程は身のありかもしらせず。古里の事をも忘れけるに世に有し時かへ

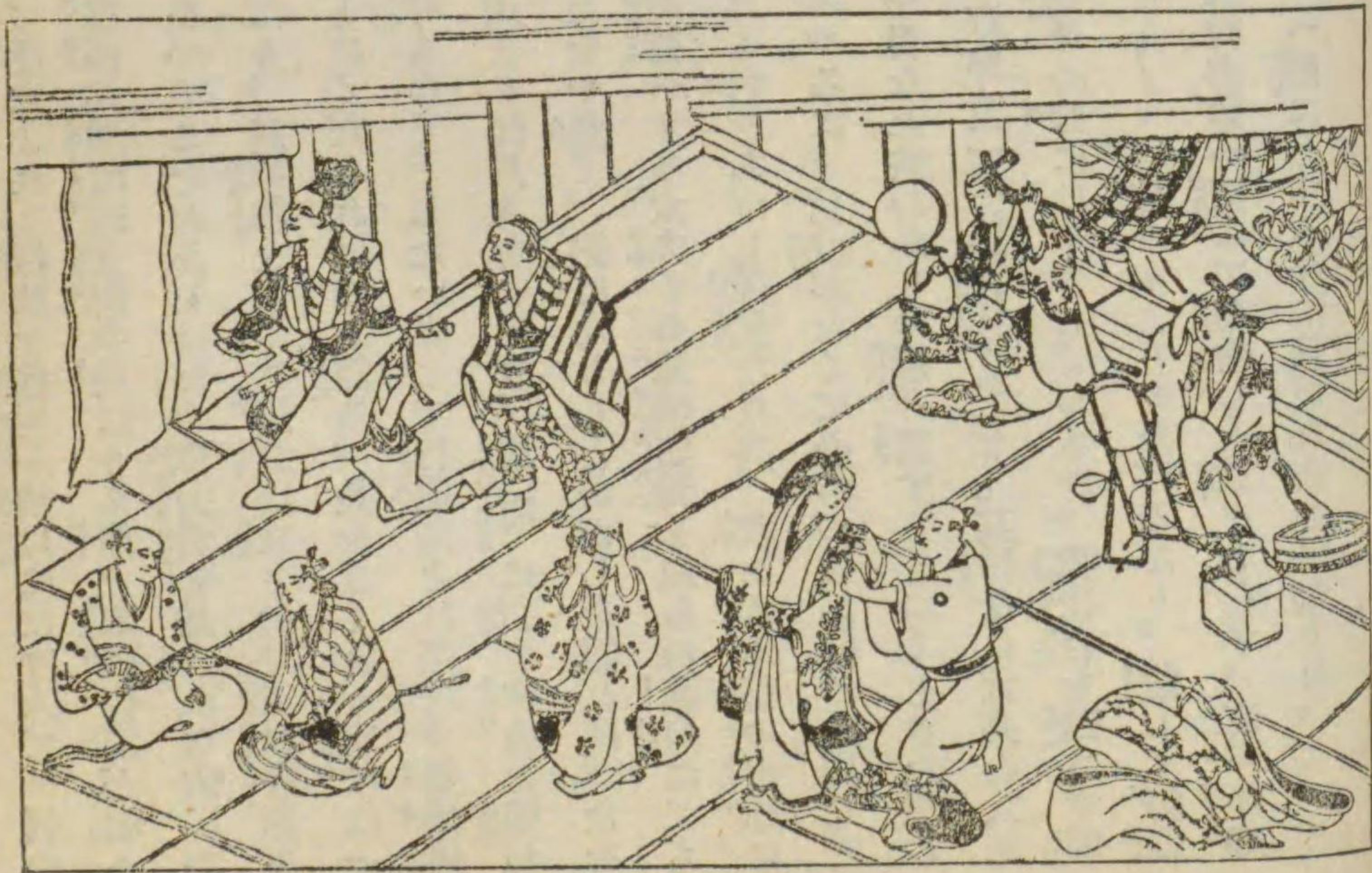
置たる手に。淺之丞と申せしはすぐれてうるはしく。情もふかく誰人の戀種となりぬ。主膳の時是をなびけて外の勤めはおのづからやめて。互にかはるまじきとのやくそくせしに。墨染にかへ姿を知らせ給はぬをうらみ歎き。はる／＼のむさし野の道をつけて。今爰に尋ねよりに。むかしの面影は水の泡に消て。埋れ井を手づからはね釣瓶のいなみ。泪は桶にあまりて。此御有様はと衣にすがりて人目も耻ず袖をしたしけるこそ至極の心ざしなれ。され共我出家して世にある共定めぬ身なれば。かさねて逢事稀なるべし。年月のよしみとて。此度尋ね給ひし心底なを忘るまじ。そのかたはいまだ盛といへば。江戸櫻の人も詠めに惜む程なり。殊更熊谷にまします二親の歎き。かれ是思ふに。まなく東に歸り給へ。名残も今宵ばかりのもてなしに。木の葉の煙を立て。茶釜のぬくもるとけしなく。天目ふたつの外器とともなく。しのべ竹ならべたる佛棚に表具なしの六字を掛。欠徳利に夏菊をいけて。風をたのしみの種とし。夜をしのぐ蚊屋もなければ。團扇なく枕おどろかして。過し事語るに涙に音ありて口に聲絶て。夢に現を見るこちして。曉の鐘一番鶏の鳴は關の東へおもむき給へ。是より後は無事をしらする効もむつかし。たよりあり共其事なけれ。せめては是を形見と持馴し淨土珠數をわたせば。又泪玉をつなぎとめたる風情ぞかし。やう／＼明方の雲晴て。夏山もあらはに見ゆる時。とかくは御心にまかしかへると立行姿しばし見送りて。山はしげり木のかげにはや見えすなりなき。今は思ひを晴し簾戸さし籠。うきを忘るゝばかり。念佛に氣をうつしける折ふし。又戸をたゞくはあやしく。立出てみれば淺之丞うるはしき鬘を拂ひ。御言葉にしたがひあづまにかへりて。又参りたると申。あたらし形を悔め共甲斐なく。此事和尚に申せば。夢をみる世のおもひ出。何か残らじと。同じ衣の墨にそめて。後の世の事のみまことある道心是なるべし。朝に山の井をむすび。ゆふべに柴木をはこび執行の身のたのしみ。有がたくぞ見えける。この里つゞき古市といふ所に。野人の娘には其様やさしかりけるが。淺之丞旅姿を見しより。魂とび出大かたは狂乱になつて。跡より御寺に行を。めしつかひの女共取つき。いさめて宿に歸りしに。此戀やるせなく其夜忍びて

通ひ。松火幽かなる庵室を窓より睨けば。思ひし人は法師となつて有ける。かなしき聲をあげて。あの若衆を何とて出家にはなす事よと絶入ばかりなけきぬ。かつて思ひよらざれば。取あへざりしが女のあらけなきのよしりに。一山の坊主おどろき立集りて。是を見し人もあまた有ける。はしたなき仕業と色々いへるも聞入ず。只此人を誰髪をおろしけるぞ。其人うらみなると。狂人うたがひなし。親里に云やりて。したしき人のきたつて。さりとほ世のそしりも有。出家の身なれば思ふにまゝならずかされて逢みる事の時節も有なんと。心を静にせさ勢けるに。今迄は浅ましき心ざし我こそまよへ。人は何共思ひ給ふまじ。よし／＼かゝる戀路もさだまる種なり。みづから十四歳迄。わづかにちるをも惜みし黒髪。けふより道の捨草と手づから切拂へば。せんかたなく是も出家になして。西のかたの山陰にひとつ庵を結び。明暮鉦の音ばかりにして。其後は形を見たる人もなし。戀より思ひそめて。戀をふつと忘れけるとなり。又二人の法師も浮世者にて浮世の事をすて。今にこの山をはなれず勤めすまして住ける。さかんの時江戸にて相馴し人の。むかしゆかしくてたづぬるかたもあまたなりしに。つるに戸ぼそをあけず。門はすいかつらのとちて根柢はおのれと埋れ。道すじもなかりき。其後山本勘太郎といへる美兒人。龍田の紅葉見にまかりて。色ばかり好めるかへさに。爰にたよりて哀に殊勝に思ひそめて。まことに夢の夢ととも發心の身となりぬ。よく／＼の思ひ入惜や前髪さかりに

面影は乗掛の繪馬

いづれの工か削なして。野郎紋やうじといへるを初めて。世にもて時花かしぬるうき世の世の字は。ならべてなきひとつ紋。ゑびすやのかゝへ玉村吉弥とて。其比都の男はいふにたらず。人の女または娘にかなはぬ思ひをさせ。かぎりもなく舟岡鳥部山の煙とはなしぬ。殊更楊貴妃の狂言に弄の良つき。それは／＼もろこしを見ればこそなれ。繪

姿などのおよぶ事にもあらず。いつ迄も此まゝの兒人ならば目出たかるべし。若衆と庭木と大きにならぬものならばと。物ずきのよき遠州も申されしとなり。何事もなげくまじきは世の有様ぞかし。一とせ難波の芝居にて。戀の奴のあばれしより。哥舞妓といふ事法度になり。太夫子残らず前髪おろして。野郎になりし時は。ひらかぬ花の散こゝちして。太夫本をはじめ。子どもの親かたふかく歎きしに。今思へば是程仕合成事はなし。いかに情なればとて。廿すぐるまで前髪おきて勤めはなるまじきに。野郎なればこそ。三十四五迄も若衆良をして人の懐の中へもはいる事ぞと。おかしき色の道の思はれける。外へは年をかくし節分の大豆も鯖讀にして。くらがりにて内證は濟せ共。物覺えのつよき見物目が。同じ時の若衆かたは敵役になり。若女かたは祖母方になりしを思ひあはせておどろきぬ。見るばかりはたとへ七十になる若衆が振袖をきるとも。すこしもかまひにならぬ事ぞかし。とかく合点する夜の客さへあれば。質はおかずに年はとるなり。春の初狂言の仕組に。玉村吉弥行とて四糸のくづれ橋わたる時。看板うたぬはかり北國者にかくれもなき男。其様おかしげに割織着て。ほくそ頭巾に山刀さして。肩にきんじやく掛て。都の霜先をかながへ。狼のくる焼賣にのぼりしが。此面影



のまたなきうるはしき目に目をとめてたゞすみしに。吉弥を心をつけて手にふれし楊枝を彼男が袖口になげ入て。何心もなく。よろこばせて通りけるに此男狂乱の心になりて。商物を喜内が淨瑠璃芝居の前にうち捨。本國佐渡が嶋へ歸り。明暮あんつうをためける。金銀さへあれば此戀はかなふと思ひつくこそおかしけれ。念力岩を見立かな山にかかりて。おもひの外なる俄大臣となりて。五年あまりも過て都にのぼり。馬乗物をすぐに川原に立させ。玉村吉弥を尋ねけるに。其人は役者のならひにて。江戸へかゝへられ。四年あとにくだられけると語る。是をきくより京には一夜もとまらず。又東路の心ざし。逢坂山にも我をとめぬる戀の關守もなく。したい事して行道にそれ迄は。御油赤坂金川などに色しかけたる女の。人を留けるが耳にも聞かれず。品川より江戸入をいそぎ。境町に行て吉弥を尋ねけるに。此所の芝居にて都の花を咲せて後。人よりはやく若衆すがたをや免て。男になりしとむかしを語れば。なをまたなつかしく手引を頼み。坂東又九郎樂屋に入てみるに。いまだ身拵へする太夫子の風情白粉をぬらぬ素貞にてもうつくしからぬはなし。すぐれて吉田伊織野川吉十郎加川右近いづれも名をあげし美兒なれ共。我おもふ都の吉弥にくらべては。つゞくは一人もなかりき。すぎにし面影の思はれながめやるに。見分がたくて心わづらふ時。大男なるを是ぞ玉村がかはれるすがたといへばおどろきつらく見る程に。一目なれ共むかしの形。首すじうつくしきを思ひ出し。今でも戀はやめがたくて。其後人しれず京の事共をかたれば。吉弥も二たび都なつかしく。其時ならば其心入あだにはなさじと。まことある心中申せば。此男うれしさかぎりなく勤めの身にはやさしくおもひ。我仕合を殘さず咄してよき物一代の世をくらす程とらせて。又生國佐渡に歸りける。そもく楊枝一本よりのなづみなり。惣して舞臺子は人に言葉をかけ。あとのへらぬ手などは誰にもにぎらすべし。玉村吉弥が情にて命捨し人数をしらず。江戸中寺社の繪馬に。吉弥面影を乗掛に。坊主小兵衛が馬子の所。是を見てさへ戀にしつみ今に世がたりとはなりぬ

男 色 大 鑑 本朝若風俗 第六卷

目 録

一 情の大盃潰膽丸 二丁口

伊藤小太夫さながらの女
衆道中立賣の内義
きのふの小袖けふは形見

二 姿は連理の小櫻 七丁目

願状にしるゝ千之助が心ざし
文章はいもせの階がゝり
人のしらぬ情一夜の笹籠屋

三 言葉とがめは耳にかゝる人様 十二丁目

胸を煙らす仕出したばこ入
口ゆへにきられ損切たり穿人
山三郎思ひみだるゝ瀧の糸

四 忍びは男女床違ひ

十五丁目

人の貞見せおもしろの出見世
近代の風俗お山吉弥が眞似
おもひもよらぬ兄様の仕合

五 京へ見せて残り多いもの 十八丁目

今古出来まじき物平八が若衆方
酒ゆへ夢太郎と我名を呼事
女の執心三十日めに惜や命

目 録 終

情の大盃 潰膽丸

滑稽といへど法師程世に氣ざんじなる物はなし。したい事してあそび寺それくの宗旨に學びおきたる經を讀て。諸旦那に衣を着て逢より外勤る事もなく。包み銀のたまるを化につかふもよしなしとて。戀のはじまり芝居子狂ひ是ぞ出家に備はりし遊興。色座敷にも身の一大事を忘れず。精進かたく燒狀柳茸のにしめ物。水栗酢味噌に天木蓼あまのりに梅干の吸物。是にて夜もすがらの長酒。よくも呑るゝ事ぞと。此眞言ある心ざし殊勝千万にぞ見えける。いかに佛の觀面にしるしみせ給はぬとて。長老様の相焼も出来はせぬ事ぞかし。肴を心まかせに女濡世間はどからずは出家にならぬが損なるべし。さる上人の物すきにて伊藤小太夫に舞臺衣裝を着せて。かづらも其まゝ女にかはらず風流なる面影。一座の興ともなし給ふは誠に女めづらしき心に偽りなくて。諸人は是をよきと沙汰し侍る。折ふしこの乱れ座敷まじはりし猩々の源兵衛といへる男のかたりぬ。伊藤は古今の色酒振同じ手組の客にして所もかはらざるに。此太夫ひとりの仕掛にて萬各別世界の詠め。東山の月の貞も紫の帽子かけたるやうに思はれ。祇園林の鳥の羽色も。宗傳唐茶に見なし。時めく美君にうかされ我にかぎらずいづれも明かたをおしみ。秋のよの夢ばかりなる手枕になど。古哥を取違へて前後を覺すなりにき。されば一人の心は千万人の心なりと杜牧之が阿房宮の賦にも書殘せしが。伊藤が心の淵に沈められずと云事なし。歴々の師中間もおよがされて戀に無遺瀨て惱果ける。いづれはあれど此少人氣分は寛濶にぞ生れ付て。物靜に自からの若女がた采体今風の仕出し。爪端ゆたかに物ごししとやかに。舞事すぐれてよろずの拍子きいて。染川林之助が乗初し二つ繩を一筋にしてわたり。都人の目をも覺しける。是人間業とは思はれず。殊更吉野身請の狂言に此太夫が道中移せしに。誠の吉野は藤に色を奪はれ。あだなる櫻と見くらべていへり。今また評判するもくどし。よきに極りたる證據をしらずや。若道狂ひの焼とまらぬ者の申出して。此若衆を墓原といへ

るは。一夜の情代銀三枚あげし替言葉なり。秤目こまか成京の人が枕の夢に。百貳拾九匁かけしや。情なればとて。思ひ切ては出せし事ぞ。惣じて高い物の悪き事なし此太夫は洛中の女貴賤にかぎりもなく思ひをふくみていひもやらず命をとられる人数をしらず分の文共便を求めて通はせしを。かりにも取あげざるは難面心にはあらず。其身美道の意氣をおろそかに思はぬ故ぞかし。今時の野郎勤めの内は是非もなく脇明の大袖を着て。隙の夜は丸袖になりて祇園町石垣上八軒穴奥八坂清水の茶屋をさがし行き。土手町の素人女にしび通ひ。宿にては物縫女を晝居睡らせ。それのみ悪所のさかりは面地にあはれ。衆道の形は外になりて心から花のさかりを見かぎらるゝこそ浅ましけれ。惣じての勤子つゝしむべきは此ひとつ。五三年其程過れば晝夜をかぎらず。釣ものしても人はとがめず。およそ唐人の若衆にしてから鑿のしれた事。是は笑へどいづれも浮氣の大座敷やうゝ腕をやめて。汗は又元の水になして手前風呂立さはぎて入ける。春の日も暮になりて板屋もしらぬばかりの雨ふり。明日見る梢のためにはよしや岸根蛙の聲せはしきもゆたかに聞なして。笹垣の外を睨は女はさかり三十一二の美形。額際より自然とうるはしき黒髪なるを。いつすき櫛のわかちもなく。油のかほり絶て。はしたなく折曲て。古曆の引裂紙にてつゝ結び捨。薄襦袢の小袖に山盡しの書紋。其けしきも幽に成迄着ふるし。肩先の吉野山をむかしになして淺黄の木綿ぎれを當。裾に末の松山の所に横嶋の繼をして。小倉の男帯に細目布のはしつぎ左の脇腹にむすびとめ。ひぢりめんの下紅色はかはれど石流残りて。いかなる人の果ぞと心をうつさせける。髪置比の子に紙子の廣袖を着せて川原におのれ咲の榮種の花を二も三もと手折てむす子が泣をすかして我が阿爺様の惱み給ひて。迎も及ばざる若衆様に命をとられ給ふ。それはあの藤の丸の内伊の字の紋所を花紫の大振袖に付ておはしける。朝むらさきといへど夕べになをうつくしき見よとて。肩車に乗て青葉の立木隠れよりさしあぐれば。彼侘子いたいけしたる手をあはして。あれはのゝあかと目もふらず拜みける社おかしけれ。各々垣ごしに聞に堪かね杉の組戸をあけ過れば。此女胸臍かし漂行を引とめて子細を尋ねけるに。おそろしやとはかり云消てさしうつむきし風情氣を仰てみるに。隣まき程の儼人なり。いかにして恥かはし是まで忍びよられしぞと。いやといはせず問つめられ玉つなぎたる涙を諸袖に傳はせ。戀の始を語り出るより随分大膽なる者共惣泣是ぞ至極なりける。今は恥ぬべき事にも非ず問せ給ふこそ嬉しけれ。我つれあひは都にしろての衆の道に溺れ。世に有時は難波津や梅に松本才三郎に相馴。むさしのゝ月をもそねむ花井才三郎に戯れ。此河原にて村山久米之介に氣を失ひ。牛房庄左衛門方に夢に暮て現に明し。過にし紙漉町の躍の場の喧嘩にても。此君にあやうき命を惜まらず男を達られしに。さりとは世程さだめがたきはなし。今は室町の本宅に住兼あるに甲斐なき北野の末。廿五日ならでは人の面影を見ざりし片陰に引込うき事ばかり聞明す卯木の耳搔を細工して。一日を暮す片手にも若戀を忘れもやらず。いつの比よりうか／＼と其事をいはずして打惱み。けふを限りと枕の哀なる聲にて。見ずに果ぬべし。伊藤小太夫様をと男泣。女の身にしてかなしく世もまづしければ一入いたましく。せめては太夫殿に通じて。書捨の物なり共申請て。寂後を心よくいたさせ參らせたと。あらましに語り絶て涙より外はなし。情をしる人ゝしばらく女の心ざしを感じて太夫にはしらせずして肌になれたる定紋の緋無垢を遣はし是を見せ給ひて後其人臉氣をえし時思ひを暗させ申へしといへば。此女猶涙に沈み。扱も有難しはやく此事を聞せと立歸し跡にて。伊藤に語りければ。それは何方へか其女はと取あへず道の程二三町もしたひしが。行方の知ざる事を歎き。我故命のせまると也。其人に逢まして其思ひをと狂乱の如く成ぬ漸く其日も明の日の人良の薄くこく見えし時。きのふの小袖を歸して墓なや其人は曙に烟となしける。此きる物を見つる嬉しや相見る心ち是迄と。身をふるはし詞も終り我斗悲しきと泣に其座に心玉の有人はなかりき。細に尋て跡をも吊てなどと思ふ所へ男女餘多懸付とかくの事をもいはず。彼女房を乗物に取のせ。是は由なし親御様の御外聞月夜に灯挑晝共弁ずとつさくさして歸ける

るに。おそろしやとはかり云消てさしうつむきし風情氣を仰てみるに。隣まき程の儼人なり。いかにして恥かはし是まで忍びよられしぞと。いやといはせず問つめられ玉つなぎたる涙を諸袖に傳はせ。戀の始を語り出るより随分大膽なる者共惣泣是ぞ至極なりける。今は恥ぬべき事にも非ず問せ給ふこそ嬉しけれ。我つれあひは都にしろての衆の道に溺れ。世に有時は難波津や梅に松本才三郎に相馴。むさしのゝ月をもそねむ花井才三郎に戯れ。此河原にて村山久米之介に氣を失ひ。牛房庄左衛門方に夢に暮て現に明し。過にし紙漉町の躍の場の喧嘩にても。此君にあやうき命を惜まらず男を達られしに。さりとは世程さだめがたきはなし。今は室町の本宅に住兼あるに甲斐なき北野の末。廿五日ならでは人の面影を見ざりし片陰に引込うき事ばかり聞明す卯木の耳搔を細工して。一日を暮す片手にも若戀を忘れもやらず。いつの比よりうか／＼と其事をいはずして打惱み。けふを限りと枕の哀なる聲にて。見ずに果ぬべし。伊藤小太夫様をと男泣。女の身にしてかなしく世もまづしければ一入いたましく。せめては太夫殿に通じて。書捨の物なり共申請て。寂後を心よくいたさせ參らせたと。あらましに語り絶て涙より外はなし。情をしる人ゝしばらく女の心ざしを感じて太夫にはしらせずして肌になれたる定紋の緋無垢を遣はし是を見せ給ひて後其人臉氣をえし時思ひを暗させ申へしといへば。此女猶涙に沈み。扱も有難しはやく此事を聞せと立歸し跡にて。伊藤に語りければ。それは何方へか其女はと取あへず道の程二三町もしたひしが。行方の知ざる事を歎き。我故命のせまると也。其人に逢まして其思ひをと狂乱の如く成ぬ漸く其日も明の日の人良の薄くこく見えし時。きのふの小袖を歸して墓なや其人は曙に烟となしける。此きる物を見つる嬉しや相見る心ち是迄と。身をふるはし詞も終り我斗悲しきと泣に其座に心玉の有人はなかりき。細に尋て跡をも吊てなどと思ふ所へ男女餘多懸付とかくの事をもいはず。彼女房を乗物に取のせ。是は由なし親御様の御外聞月夜に灯挑晝共弁ずとつさくさして歸ける

姿は連理の小櫻

天竺の荷葉大唐の牡丹和朝の小櫻是を花の隨一と定め詩哥遊興の基なり。されば諸木物いはずして然も手なく歩まず。吉野の嵐初瀬の雨。春の名残に人を驚し。かへつて無常のはじめとなるのみ。あかず詠めは姿の花若道のさかり千本の中にあらはれ。千之助が藝振さながら女に女のまばゆくしら／＼と貞見とむる人もあらぬ程にして。近代の稀者口も動さずして言葉のあやきれて聞に情合いやといはれぬ笑ひ諸見物たばこの吸がらに袖の煙をしらざるは放火の笑ひ后をなぞらへて猶思はれける。不斷の身持殊更にかためて。勤めの外。夜の道筋を踏す朝に寢貞を同じ内なる末々にかりにも見せたる事なく逢ねばしれぬやさしき事おほかりき。いづれの人にも愛敬そなはりて有ける。是そよしや難波の太寺にたゞせ給ふ愛染明王役者おろかならず祈りて。紋灯挑に和光の陰間子はしらず。桐の頭松本小太夫二つ木瓜袖岡今政之助重ね柏に巴鈴木平七是に心を掛奉る御寶前はらひ清める法師の内陣をあらためけるに一つの願狀籠置ぬ。しかじ世に鼠程うるさき物はなし。封じこめしをおのが心まゝ喰裂しに。其筆跡をみれば。願主小櫻千之助として。自存する子細有によつて。五年我ながらならぬ事のみ大願成就の内かたく此身を清め畢ぬ。所々きれ／＼よみて各かいやり捨ける折ふし參詣して是を聞しに。まことある心からにやと。いと殊勝に思はれける。然も其日は二月朔日夫より此若衆にうつり氣になりて。すぐに荒木與次兵衛が芝居見物せしに。けふより初狂言のかはり三番つゞきの口上に松本ぬ左衛門罷出書付をもつて外題を讀て後。役人付ためらはず。扱も申たりと讀ける詞の下より色香のふかき櫻は貞にあらはるゝ若女方幕切て見えをむるより。いよ／＼千さま千之助様。萬人の中にもまたと御さるまい今の世の人殺しめ生ながら墓へやらるゝはと舞臺うらまでひゞきわたり。諸人の聲漸々囁方片扇をあけて静ければ仕出し舞臺なかはちかく鳥足の高木履其身は紙子にさま／＼の切接にくからぬ模様此子なればこそ着もすれ末の女方の着て似合まじきとはや西二軒目の櫻敷より物職共沙汰し侍る。首に懸たる抵鐵の音滋もしほらしく正面に少し笑て一しづめ色ふくませてうるはしき口もとよりして講談爰が聞所じやだまれ

○只今爰元をすゝめて通る。自は。好色中興の世捨者夫婦妹背の修行者也。されば足柄宮根玉津嶋貴布弥や三輪の明神は夫婦男女のかたらひを守らせ給ふ御神なるゆへ我心中に大願あつて。隔夜に通夜をいたす。其心ざしは我身にふかいおもはくが御ざりましたれ共。月には雲のさはりとかや。かなはねばこそうき世の中。あきもあかれぬ中なれ共。引わかれせし悲しさは命も絶るばかりで御ざりました。しかじ我身こそ前世の宿業によつてかやうのうき目にあひまする共。せめては世に戀ある人のまもり共ならんと。身命をなげうつて世々の戀ある人の爲に。此五社大明神を祈りにしに。神も納受まし／＼てあらたなる告を蒙りて。此連理の枝を授かり餘多の戀をすゝめ。千人に及ばば供養をとげよ其縁をむすびとめたる者は男おな子によらず。見めよく品よく形よくしかも心中は猶よく。一生口舌事なく此世も後の世も。又其後の後の世も御まもりなされうとの御託宣で御さる。皆様心中によいおかさまや殿子をもちたいと思はしやれまするならば。此連理の枝にむすび付さしやりませい。いかやうな戀でもかなはぬといふ事は御ざりませぬ

扱も／＼長事をさはりなく申しまへは浮氣男とも思ひ／＼にむすび付し中に年の比廿四五と打見えたる人富士おろしと云大あみ笠をぬけば紫の手細にて頬かふりして貞は見せざりき。何とはしらず思ひ此内にありと書たる立敷一通しとやかにむすび付姿を見こみし有様つねの人とは思ひ入もふかかり。千之助がく座に入ばおの／＼立かゝりむすびしぬを見るに大方はれました命／＼など書て別の事なし。件の文をあけそむるより。さりととはわらはれず行成流に筆をうごかせ先はそのぬがら

色は 則是空空は 則是色いざ○○○○の御事なん猶いふにたらず都て和國の姿心なき草木も色なる貞ばせ時

しもあれ今の月今の目めぐみ又しかり此心をふくむ人わくらはなり。心にあらねばもろわざうつる事かたし。諸人の目をよるこぼしめんたはれのみと見ん人もあらんなれど賤はさとみず。おのづから色を心に染て連理の小櫻外にさかりを顯はし給ふぞやされは高きいやしきに隔なき其修行の道なればなど願ひて叶はぬ事のあらん。只一筋にねがひけるをいき如來の捨おかんせぬめりと人の山崩れて笑ふべらなればと君ゆへの耻はなんのいの。つたなき口していふがくだ。實の色を顯はしてはねなきを連理にやどらせ比翼の思ひをなさせて下されはゞ七世迄の厚情さなくは七生の恨みつき申まじく。此月の十日にこの所に此すがたして此御返事をうけとり申べくい儘かならずくくや

人よりて讀けるをあはれに心ふかく思はれしおりふし北方角の九郎助といふ人我もまたありて此袂に入しに千之助立ちり我を戀てのふみ化にはと眞良になりて取かへしけるはほいなくせめてはと視はやめてかきうつし歸りぬ。其後千之助は此男の有かを尋ねければ上町の笹籠屋を宿として備前より分ありて身を隠せし人むかしはいやしからず子細聞までもなくひそかに我方に乞請て春の夜の闇はうれしからじ畫見る櫻よりは寢道具の散さくら數數わけのよき事



させて明がたの時め惜しと云時千之助おくり出で是にかざらず又もと心をのこしける物を手にかたしぬ。彼男うれしさのまゝに此道にふるけれ共。せめてはと脇指ぬきもあへず腕二つ三つ引捨時ならぬもみぢを見せて立歸りける。夫より尋ねしにさだめがたくなりぬ。此事人にかたらずふかき情しりなり。ある時田中屋治右方にて九郎助まじりに宵より酒事つりしに小櫻が金剛鶴籠の作といへる男くを幸に酔せての上にていつぞやの女の終りはとたづねしにはじめを殘さずかたりぬ。聞人ははとおどろき扱も若衆の根ざしふかく是ぞ戀の山櫻今はさかりちるをおしまぬ人は

言葉とがめ耳にかゝる人様

紫野の法師は扇に繪かけるを。妄語の誠ひとつといへと紙をはなれてからす飛。足を十付れば水邊に鞆る蟹あり。宅磨が牛東坡が竹。雪中の芭蕉は嘘をまことにす。いつはりのなき野郎のはなの姿を櫻木に彫て一冊とせしを居ながら美形を翫ぶ事重寶にながめくらす。牡丹芙蓉の色を諍ふいづれ愚ならず是程うつくしう筆を盡せし中に慥ただならぬと。はや戀風は筑波根の嶺より落る滝井山三郎吾斗の色を。誂へはせまじ。照君も黄金不買漢宮貞とこそ。嗟不言不笑。それよ扇をかざせし女を見て戀しづみ。糺のもどりに撥音をあやしみ誰すむやどはしらざりし築地の内をみれば。よ所にはふらぬ時雨とながめし主の風骸。柳の柔の夕の気色。ねんもない繪などは見おとりてむかしにあらぬ思ひとなれり。色こそかはれなをなりやすさうな戀に思はれぬれど。牽人の身の悲しさは朝の風夕の雨さへし。のぎがたく纒の借棚窓より睨けばけふも思ひの山。胸は富士の煙をこがし涙は深川の浪に滴る。干がたき袖をしぼりのたばこ入仕出し。是を渡世として命をつなぐ舟つきを賣めぐりて毎日木戸錢出し。此狂言に瀧井山三郎が出来ますると云時に入て。正面のシテ柱の方に身をよせ。これ一番と詠めし時。童戯坂東又次郎が輕口万能丸五郎兵衛が答話其日は思ひの外任組違ひて。調調入みたれければ。山三郎纒の所に言葉のあやきれざりき。南の方の棧敷の下より置を

れと云。彼人聞もあへずだまれと云。いやだまるまい山三郎引込せと云。大事の時邪魔なして座中是を悪みける。其男は色黒く鬚自慢目を世間にひけらかし。仁王團助とや關東にかくれなきもてあまし者なり。人おそるゝにかつに乗て猶いふ事をやまず。藝の中山三郎もすこし赤面して其男をまなざしにかけぬ。此子一代におけといはれし是がはじめなり。程なく果て見物出しに。浪人彼男を跡より忍びて濱町のすこし透を見合せむかふに廻り。山三郎におけといふたる頼術は爰かと壹尺九寸ぬき打に。柄に手もかけさせず。はやわざ。刃物おそるゝ町人百姓も荷付馬を引のけ。さてもゝと力をそへ。退道をあけける。是ぞ縁なるべしおもはずも山三郎が金剛の住けるうら棚にかけ込し。爰はとかくして命にかけて置しも至極也。夜に入て山三郎忍びて來り心ざしの程うれしさ盡されずとあらためもやらず衆道の念比して。其後は末末の頼みに色をふくみ。人しれず申かはせしに。さりとは其人はいとほしく後には勝手動もおもしろからず。是に外を忘れける。人の身程さだめがたきはなし。此年人生國石見の濱田の人なりしが。獨りの母親こがれて世のかぎりとしらせて代筆のふみ見しより此事山三郎に語れば。斷に責られ外の事にあらねば涙に別れて後。又も音信の絶にし事を歎き。いつとなく思ひ沈みて朝にこがれ夕にたへ面瘦形ちはかりて程なふ床につきけるが。うらめしの浮世のならひさかされる花の村雨桂光の雲霧十九の名残平生の顔色は病中に衰へ芳躰眠るがごとし新死の姿美麗暗變落花の風。見るもの袖をしぼり聞もの袂をうるほさすと云事なし。木挽草滋鶴林の患弥宜町臥猪の床とならんと歎くのみなりしが。

忍び盤男女の床違ひ

上上吉弥白粉かけねなし。四条通り高瀬川の橋詰に新見世出しに。京女一子細あるは爰に立かさなりもとめて歸りし。いかなる事や聲なふして美女を呼けると尋ねしに是はおやまの元祖大吉弥が下宿成が相應なる商賣せしといへ

り。一切の女紅粉の翠黛は只白皮練てこそ見よげになりぬ。女がたもむかし右近左近が時は。面影はまぎらはしくかしらは置手拭にして大かたに色作りしに諸見物もそのなりけりに請取。仕組も今に見くらべて過にし事おかしかりき。當代諸國の風俗都の女をまねてやさしくゆたかに采躰に。うまれ付の恥をかくすを。明暮遣ひなれたる鏡より外にしつた人なし。吉弥はすぐれて美形を藝子にして金玉を金子にて琢ける程に。おのづから太夫にそなはり肌より。銀壹枚の光りさして四条河原の獵もきかず。磯なる色遊びは目緩て。皆此美少にあひぬ。猶姿に氣をつくし。櫻咲十八日に祇園町さる方に籠を掛させ。まことの都女の風俗をみて。よき事もあらばそれと思ひしに。心にくきは女駕籠の窓より鹿子下髪もちらりとすきうつりて魂飛入ばかりぞかし。皆よきにはかぎるまじけれど。悪女とは思はず。貴賤の損徳爰にあり。銘の楊貴妃おしろい有がたし。遠目に色をかづかせ。氣を留て見るに世間の袍顔を獨りしてあづかり。いやといふてからすこしもとりへのなき貞なりしに。其後つき帯結びたる品物。又あるまじき風義いかなる女と尋ねしに。洛外まで足をのべ小家をさがす塩賣の男。是を見おぼえて。それは東の洞院の浮世紺屋の娘。姿のお春といへる名とりとかたりぬ。吉弥是をうつして壹丈貳尺の大幅帯。くけめの角に鉛のしづをかけ。世に吉弥むすびとはじめて今にはやらしぬ。有時貴なる御かたより舞臺姿其まにまれのよし。夜に入ての忍び乗物勤の身とて行に。御門ちかくなりて定紋の灯挑闇になして。嚴しき番所見へしに。戀はむかしになりし女。むかひにいで吉弥手をとりに案内して行。心もとなき事ながら此道は首尾さまゝなりと。其御かたに身をまかせ入に番の者寢聲にて。女壹人とこたへて帳に付おくよし。そこ過て並木の眞砂地百間はかり行て。又中門左の方の蔭石いろゝ。木の間に釣灯籠に影移りて玉なす濱かとり水のがれに添。庭籠の諸鳥夜鳴もありて氣をつけしに。白鷺枯木の陰に宿し梟梢に身を動かし鸚鵡口まねもせず。靜に階をあがれば。宮城野を爰に眞木の二牧戸をあけて長廊下さし足して行に。女の笑ひ双六の音。琴はしめやかに横笛はるかに。うきゝと心をさだめがたく。灯もなき大書らん歩

て又板敷の椽に出。たれむしの敷くぐりて絹ばりの障子引あけて。紅井の房つきし綱うごかせば。玉の鈴音なして大勢の足おとしどけなく屏風をこかし伽羅宮蹴立て。とれお山は吉歌はと男めづらしく詠め。俄に乱人のごとし。上氣は青さめて扱もく見ぐるし。つぼねらしき人せいして奥に其御ひとり宮女の御有様。位とられて皆まで言葉につくしがたし。金銀のかはらけ出御うれしげに酒事はじめ給ふに。女のかけ出それ御かへりと蠟燭吹消てくるめける。吉弥かくせる方もなく女あまたにおくり出しを見付給ひて。それはと仰けるに哥舞の女と申。地下には稀成物とおぬしものにあそばしける。遠慮なく御たはふれいやはならず。此時の迷惑させひに叶はず。女かづらをとりて御目に掛ぬれば。是なをよしかはゆがらせ給ひける。おもはぬ方の床のあげほの冨前の妹君のさぞほいなるべし

京へ見せいで残りおほいもの

花の咲山はあらふが戀の海見せばや衆道の藝振生てはたらく鈴木平八。本朝は見めぐりに又つゞきていふべからず。此風俗唐にも有べきか。されば蘇子瞻赤壁の下に遊て薄暮に置網をあげて魚をとりての樂。松江の鱸を思ひ合てうまふもない酒に明せしとや。此鈴木を見せて酒相手にせば。又東方の既に明なんとするは扱おいて。晝を月夜と哥はせたとし思へば。唐にも見せいで残りひもの。この人形形の諸色に勝れ。賢愚貴賤共に一度睥れば手の舞足の踏事を忘れなやませ。猶枕かはせしは馴し子持が中をもたがはす程のしれものなり。くどふは人の見聞てしる通りのごとし。惣じて藝は方にうつる事奇妙なり。武道は名におふ藤代の庄司がゆかりなればしかなり。さる程にことし貞享の春。他力本願記の仕組ことに面しろく。人の山崩て戀の淵を埋み責ては御手の糸にすがりて來迎の姿を拜み奉り。諷を梵音金口に聞なしける。此比日本橋の駕籠かき共八つさがりよりは一人もなかりし。いかにと問ば大和河内和泉の片里よりの見物歸りにぞ有ける。あるは衰體筋の少き袖をつらね。箱の帯のひかるを自慢にむすびさげし山賤女の

も堀通ひに身をやつし。手業を忘れ少し品やるとて風ふりうはさして往還る。あかき里はいふにをよばず群をなす事何年已來なしと沙汰しけるは鈴木獨りのいろにまどへるなり。都て戀詫憐て夕の露をあやまる者。男女の數指を折に暇あらず。殊に三月三日は鏡の槌打二藏までも天王寺清水沙干などいひて遊日なり。まして其上つかた一てうらを取出して思ひくりに立出。住よしかこつけて皆此芝るに入涎は堀の水かさをまし。鼻毛はいかのほりをあげ狂言の繼篋を湯になして。首の骨の折るゝもしらず。いよふ平八様など口々やかましく讚立ぬる。男は男共思ふに所せく中に女も女。きのふ髪切よい年比なる一年たらぬつくもがみさへ。根から剃おとしたる墨染まで心の中外にあらはしけるも興さめておかし。あるが中にひがし三軒めの棧敷いみじく圍せ身持たる者の娘と思しきあげ巻程過美目すがたうるはしき。我と心にしり初て戀をば人にならひたき冨中。たゞし下地あるもしらぬが續き狂言のはじめより目がれもせず平八を詠めうれしさうにかた頬にゑみふくみたるあり様。思ひ入のふかさうな事。人めなくははしり出てといはぬばかりに見えける。おかしくも哀に思ひ居るに。時うつりそろく果口になれば。此女うれたきおもざしになるは平八が樂屋入を名残おしくあらん氣色。藝もおほり平八入んとするに階かゝり迄ねん比に見送りけるが。あまりて思ひしづみ其まゝ絶入ける。芝居は追出しの太鼓を敲立とやくとするに。つきんくの奴僕は水よ薬よ



も堀通ひに身をやつし。手業を忘れ少し品やるとて風ふりうはさして往還る。あかき里はいふにをよばず群をなす事何年已來なしと沙汰しけるは鈴木獨りのいろにまどへるなり。都て戀詫憐て夕の露をあやまる者。男女の數指を折に暇あらず。殊に三月三日は鏡の槌打二藏までも天王寺清水沙干などいひて遊日なり。まして其上つかた一てうらを取出して思ひくりに立出。住よしかこつけて皆此芝るに入涎は堀の水かさをまし。鼻毛はいかのほりをあげ狂言の繼篋を湯になして。首の骨の折るゝもしらず。いよふ平八様など口々やかましく讚立ぬる。男は男共思ふに所せく中に女も女。きのふ髪切よい年比なる一年たらぬつくもがみさへ。根から剃おとしたる墨染まで心の中外にあらはしけるも興さめておかし。あるが中にひがし三軒めの棧敷いみじく圍せ身持たる者の娘と思しきあげ巻程過美目すがたうるはしき。我と心にしり初て戀をば人にならひたき冨中。たゞし下地あるもしらぬが續き狂言のはじめより目がれもせず平八を詠めうれしさうにかた頬にゑみふくみたるあり様。思ひ入のふかさうな事。人めなくははしり出てといはぬばかりに見えける。おかしくも哀に思ひ居るに。時うつりそろく果口になれば。此女うれたきおもざしになるは平八が樂屋入を名残おしくあらん氣色。藝もおほり平八入んとするに階かゝり迄ねん比に見送りけるが。あまりて思ひしづみ其まゝ絶入ける。芝居は追出しの太鼓を敲立とやくとするに。つきんくの奴僕は水よ薬よ

と嘆く。此道すきもの、我なれば。寂前よりとくとき、はして置心根ふびんさに其ま、醫者分になつて。巾着さくりながら、棧敷に飛あがり。年玉にもらひし延齡丹をのませければ。漸くとして息出乗物に入て歸りける。所き、たれど爰に遠慮す。扱も其女はひとり娘にて、日比月花と寵愛せしに。えしれぬ病に起臥くるしく。醫術盡せ共芝居のあたりたるに療治なく。次第によはり形も思ひ崩れ目もあてられずなまなかかう、といひたらば。世間にはかへぬ命なすべき事になま心にて獨ぐちくと胸にかためてとかず。つるに三月八日に開かぬ花散て二親の歎きかなしむ事かぎりなし。平八其日は坂田銀右衛門方に遊びて竹本義太夫伊織などに一二段かたらせて聞所とて靜に暮がたより我宿に歸りぬ春ながら秋ふく風かと身にこたへてうちなやみける。明ればよはり。暮に身をもだへ次第に世のかぎりとおもひさだめし枕にちかく問よる人の中にも。すぐれて年月の念比忘れず諸共に命ちらばと櫻山林之助が心ざし深かりき。上村吉弥も京より折ふし下りて浮世の暇乞、衰たる身。通ひ兼たる息づかひ。それも正敷言葉をかさね。盃をかはして別れの涙の外なし人社しらね執心かけし方には身をまかせし事其數をしらず。腕突股切もかぎりなし。いつの比か里人指切て舞臺に抛しも。色の首尾殘所なく不斷の心持天晴役者には惜き者ぞかし。其身一代に情の咄多かりき。若年の時五人の名書して此中の御方には。いつによらず一度づゝは御心に隨ひ申べきとの誓紙ありける。悪口中間に何事を見付られけるはおかし。万氣に障なき若衆又の世にも有まじ。古今武道美道の詰開き日本若道の鑑移して其身作りて違ひなし。惜や日かずふりて自便なく。身冷魂去荒原棄との古詩今此身に思ひ合せ哀さも一しほに増れり。生薬も叶はずして。今はと見えし時。現世後生とて百万遍の數ある玉を線千卷陀羅尼をよませても定業亦能轉の經力も此總力には叶はず。たゞ幻しに寂寥なる女の見え侍るとかたりて。閏三月八日に息絶ぬ。一念五百生と聞き思ひ入の魂の取付たるよとしられぬ。廿三才いまだ東の山の端の月西へ入事惜まれける。

男 色 大 鑑 本朝若風俗 第七卷

目 録

一 螢も夜は勤めの風 二丁目

吉田伊織藤村半太夫都の月花

雨夜の竹の小笠問とこたへす

佛前の花誰かはさし替て

二 女方もすなる土佐日記 七丁目

その年の噂指切てこれ

茶白山松茸狩の十盃機嫌

半弥が仕出し扇は風の外

三 袖も通さぬ形見の衣 十三丁目

子安の地藏は偽りなし

おもはくの紋楊枝は口に入物

正月二日の曙の灰よせと

四 恨みの數をうつたり年竹 十八丁目

文腰張はたゞならぬ隠れ家
想じて年ぜんさく殊更若衆
ねだり男蠱はむかしになりぬ

五 素人繪に悪や釘付 廿二丁目

京は山難波地引の沖繪
筑前の浮名境の浦に流
岡田左馬之助人も悪まず

目 録 終

螢も夜は勤めの風

身過程世にかなしき物盤なし。萬につけておろかなる事もなく。見えわたりたる中も。殊更色道の太鼓もち心永う
物毎堪忍つよきかもと手なるべし。有時石垣町の大鶴屋の座敷に村山又兵衛座の太夫子吉田伊織藤村半太夫此ふたり
をならべて見しに。先今の世界にまたあるべき野郎共思はれず。さながら風情は繪に残せしむかし名をしる美女めき
て。時勢粧の舞ぶり見し人是に惱ぬはなし。殊更一座客のこなし調謔しめやかに情ふかく。たよ／＼としてよはか
らずうちまかせ身にも心を置ぞかし。伊織は○に入てから其敵の好事のみ申つくして。はや○○○にて命も算用もか
まはず。客噪ぎ出て興をもよほせり。又半太夫は床入してより言葉數なく近寄す。其容に氣を惱ませ。身をもたへさ
せ。少しはせく心の時一生忘れぬ程の嬉しがる事を。只一つ小語て首尾のしかけざりとは。外の子共にまたをしへて
もならぬ事。此二人が師ごかし皆謔にして。偽とは思はれず。今の都に太夫子三十壺人同じ直うちなるに。是に逢ぬ
は無分別なるべし。金銀のたくはへあらば此色あそびにつかふたがよいは。何か世に残して子にゆつり。自然其子目
始末を思ふたはけにて。一代哥舞妓若衆を買事もしらずして暮し。内藏の片隅につみかさねられ。幾年か此かね世
間のおもしろき事をもしらず。其まゝに朽果るを銀も口惜かるべし。諸事分のよき人にはなくて扱もまゝならぬ世の
中と祇園町の末社ども是をなげきぬ。さる程に夜神樂の庄左衛門口笛にもろ／＼の太鼓おもひ／＼の藝渡して役者ま
さりの身振。後には笑はれもせず。腹抱ておかしさも今なり。此座に村岡丹入とてむかしは何がしの二男萬にかしこ
く其身持いやしからず。大氣にして人のにくまぬ生れ付なりしが。世につれて先祖の名を埋み。下立賣堀川の邊りに
大橋流の賣手本もはかとらず針立の張紙しても呼人那く世わたりの悲しさに。大臣の慰者と成てけふも此席に連なり
膳おそく居るさへむねんかさなりしに。脱捨の小袖を疊と足て押出さるゝ。是もいやとはいはず疊おきしに灰吹を捨

尾にとり籠て出家となりける。殊勝さかぎりもなく朝暮念仏おこたらず。心をすまし。床も定めず。おのづから眠のうちに彼法師。夜毎にあらはれしみるゝと語るこそうれしけれ。目覺れば影消て寢入ば夢ながらたゞしく見えぬ。其印には山路に咲る四季折々の草花を手折持きて。佛前にさし捨て。心も慰めける。此事人にかたれど。うたかひて同じ枕に庵室にかりねせしに。其法師こそ見えね生花は毎日かはりたる事ぞと申き

女方も爲なる土佐日記

道頓堀屋町の西北角に。井筒屋といへる新見せの扇屋あり。冷しさは生の松嶋半弥が面影七左衛門と名をかへ惜や花は盛。月は廿日あまりを若衆の軍中と見しに。無分別なる元服これを金剛中間になげきぬ。此兒人は美道二葉の時より松嶋や小嶋の蟹のぬれにやさしく。情ふかく一座。氣たかく酒すぐれて呑こなしぬなと是につゞきてまねする子もなし。水仙の早咲に壺入の客には雪むかしの口を切。春は櫻の名残をうつし繪に。自筆を染て古歌のすがたなるを詠じける。五月雨のしめやかなる夜は初音焼かけほとぎす今にもと待人様の氣に入。秋は月をも宵から見捨ずして。書物に心をうつし。ひとつ／＼能事を見習ひ。萬につけていやしからず。殊には其身生れ付てならべ〇〇〇〇てより。人の命をとる程の事ありて。稀に逢ぬる客も忘れがたくて跡引て明暮戀にせめられ。借錢の堀へはまりし人かぎりしられず。若紫の帽子は世上の野郎定まつての飾りを替。淺黄ちりめん仕出し更に又美形なり。不斷衣襲はさのみ色を好まず。肌付は白むくに黒きひつかへしの重ね小袖。外の芝居子のかくはなるましき事ぞかし。第一大氣者にして人のほしかる黄色にておもき物をも手にはもたず。さもしき事のなきに又ある太夫子方へ盆節季に見廻けるにさし鯖の代銀を手づから掛て渡されしに。秤目せよる程こそあれ四匁の内にて。貳分五リンかるいとて看賣との口論見ぐるし。それさへいやなるに人が見ねばとて勝間の里にて織し下帯。それも壹にさがりはよごれて。せめて夜なら

ぼと思ひし。是らに引あはせては勤め子にも扱／＼違ひあるものぞ。せはしさゆたかさ。大晦日と元日程に替れり。世に住ばいやな年越と格兵四郎と語りて是を笑ひける。有時道古といへるをもてなしに。半弥物好みにして難波の茶臼山へまかりけるに。櫻かりせし春にかはりて。秋も又物の哀なるこそ萬の虫鳴ねにしられけれ。南の池ちかく暮うたせて。那古の海の夕日上戸の貞をあらそひ。酒論さま／＼の肴つくして是でも呑ぬといふ時。ちかき里童子四五人毎に目籠を提て見えたりしに何事が仕業尋ねけるに。松茸を狩といへり。山淺くして有物かと見にし。露草わけて色なる朽葉さがせば。笠をかたふけ爰かしこにある程とりて松煙せて當座焼に。袖酔のかほり是は／＼と求喰けるに。それよ一年小松半太夫つれて。天野の茸狩の御酒宴に。髭の半右衛門おたけさんさの一ふし。今もはやり哥山春之丞も立さはぎ。いつにかはりておもしろし是皆亭主半弥が心さしふかし。松茸かぎりもなく宵より人遣はして植置けるとなり。万事おとなしき仕かたぞかし。諸藝も思ひ入ふかふして。いや申しと云言葉つきまでもにくからず。古今の女かたと申てもくるしかるまじ。荒木座へ抱へし卯月の初つかた。半弥大振袖の橘かほりて。見物思ひを掛たかの鳥の聲。めづらしき狂言の中程に諸人の座せる片隅より。田舎めきたる男の舞臺にあがり。是半弥様我數ならずして。戀たてまつりしは。恐れなれども。心中は是ぞと。脇指ぬきてひだりの小指板敷におしあて。なる程心。靜に五引六引に切落し。紙に包てなげ出しける。半弥さはがず我おぼしめしての御心ざし。あだにはぞんぜじ。狂言なかばなれば。鰯角は樂屋へ御入と申うちに。彼男は見えずなりにき。我宿へ是非に御尋ね給はれといひすて。彼指人手にかけず。血の出る程は洗ひ流して。念比に包て懐中せしは。さなから情らしくみへて。人皆あしからぬ取沙汰にあへり。前代芝居にてはためしもなき事なり。半弥宿に歸りて寢間あらためて。袖に焼しめ。其夜詠て鐵眼の鐘のなる時。すこし夢むすびける。程なく明わたり人良のほのかに見ゆる時。きのふの男友とせし人と二人つれてたつね來りしにかず／＼詞をかさね。たんと嬉しがる事のみ申せど。其身をふるはしかたじけなしとばかり一言。其後はさしう

つふきていとゞ物哀に見へける。心程はあらまし外の人申せし。半弥泪しのびて身〇〇〇〇。〇〇〇〇の種をしかけ
 手をとれ共。用意の小座敷にもゆかず。盃事過てから留てもとまらず立歸るにぞ。戀は残り。又あふ迄の形見なりと
 浅黄しゆすの袷に。兼光の中脇指の御物拵へなるをおくりける。ひそかに國里を問けるに語る。土佐の者なるが御
 名残も只今出舟と。聲帆にあげて川口一の州より涙は浪の白玉に數まさりてん。其日は芦の浦風かはりて三軒屋とい
 ふ所にかゝりぬ。けふの夕への淋しさに。硯の海ふかく。思ひつゝけて書事こそあれ。四月五日の宵月さながらたと
 へて男もすなる。半弥様のさし櫛かとうたがひも晴ぬに。村雨俄に思はぬ袖をぬれのはじめ。水鶏のたゞくは矢藏太鼓
 かとぞ。爰は難波嶋心は道頓堀をはなれず。螢も飛子かと思はれおかしや尻なし川に影うつしぬ。明れば六日の朝嵐
 いかりをあげてとり棋の音。礮つたひを行に尼が崎なるをの沖より又風かはして。廣田のやしろを見かけ夢の浮橋わ
 たるかと。やうく和田の御崎に寄てしばし難義忘れし。され共武庫山の氣色雲にかくして半様も見えず。次第にう
 たてくおのづから胸を燃して。火宅の車舟もさはがしく。執心の角の松原須佐の入江ちかく。暮つた兵庫の湊にあ
 がりて。風呂燒せてあらひ髪に半弥様より是も形見のうつり香。初瀬といへる名の木とめけるに猶また其人。花ぞむ
 かしのかほど迄はゆかしき。七日夜ばしりけはしくかり宿に旅させるなど忘れてはいなし。煙絶て塩屋さびしく須ま
 の上野もすいりやうに詠めて。ほのくのあけに丸の社を拜みつけて。明石にかゝれば俄にむら雨のして管絃難義。
 され共ほとゞぎす聞べき便りの雨とてうれしくもし又若衆様の初音もやと。心は空になりて同じく八日も所を替す思
 ひつゞけて九日十日の朝備前の國唐琴の泊り。虫明の瀬戸越る折ふし。彼飛鳥姫の都戀しきと。書残されし扇も半弥
 が仕出しの古哥もやうかと思はれ。浪もたゞめば風なくて。十一日の晝ばしり。備後の鞆の浦に入て同船をのくあ
 がれば。我も獨りは暮し兼て跡をしたひ行に。爰の分里とて女の風俗も素人女よりは見よげに。上方ははやうとふて
 仕舞ぬる。春の山道はさんさなど。今になりてから引て踊りおかしく是は座にたまられず。さても淫婦の姿にさへ。

ふつくとあきはてぬれば。常なるものはことかけにも身の毛立て又舟に乗り移り。くだり日和をうれしく風早の浦。
 十二日の暮つかたより。此男の心ちうか／＼とうちなやみて。前後を忘れ。只松嶋が面子のみ思ひ出して。身をもた
 へ乱人となれば。舟子共あやしく沙汰して磯邊にあげ。濱びさしのあるじを頼み友とせし人ひとりふたりつき添て。
 さま／＼にいたはりし甲斐なく。次第に盛衰なつて我と身燃して。かなしや今思へは形みもよしなや。難波を首途の
 時。半弥が送りし脇指にして自命をすて。血は草芥を染なし戸は路徑に横たはり。戀よりかくはなり行人の心ざし。
 日記にしるして。残る物とて其名ばかり土佐は硯の海あさき事にはあらす

袖も通さぬ形見の衣

猿に袴を着て看板出し。ゑびす橋筋に根本浮世楊枝とて。芝居若衆の定紋をうちつけ置しに。それ／＼のおもはく
 其子に〇〇かたらひ及びかたき人。せめては心晴しに此紋やうじを手にふれて。口中琢ける時は。戀の君が美舌をく
 はゆる心ちのして。哀や氣をなやましぬ。是程の思ひなれば。身に替てなるものならば。命は夜の霜朝を待て消べき
 が。勤め子の習ひとて。いづれにても花といふ一字にて自由に詠めらるゝ事なればこそ人死のなけれ。かゝる面影を
 江戸京大坂三个津に生れあはして。明暮見るさへあかざりし。遠國の人稀に見て生て歸るは不思議なり。狂言の番組
 役付を求めて。其名をあらましに覚えて。我國かたの夜ばなしの種となるも。かみかたにのぼりし徳ぞかし。世に又
 世をわたる業程かなしきはなし。道頓堀の眞齋橋に人形屋の新六といへる人。手細工に獅子笛あるひは張貫の虎また
 はふんどしなしの赤鬼太鼓もたぬ安神鳴。これみな童子だらしの様々拵へて年中丹波かよひして。そのもどりに竹
 の皮荒布に肩替してしづかなる心なく。元日より大晦日まで夫婦の口過ばかりに。さりとせはせはしく。橋ひとつ南へわ
 たれば常芝居のあるに。つゝに見た事もなし。灯臺本油の耗をなげき。始末心より是なり。此人ある時道に行春て。

里とをく村雲山も時雨もよほして。風は松をさはがせて次第に淋しくなれば。やう／＼子安の地藏堂に立寄て寒き一夜を明しぬ。既に夜半と思ふ時。駒の鈴音けはしく耳驚かし旅人かと立聞せしに。形も見えずして御聲あらたにお地藏／＼と呼給ひて。今夜の産所へ見舞給はずや。丹後の切戸の文珠じやとの給へば。戸帳のうちより今宵は思ひよらざるとまり客あり。役／＼の諸神諸佛によきに心え給へといひわかれ給ひ。其夜の曉方に又文珠の聲し給ひて。今宵五畿内ばかりの平産壹万貳千百拾六人。此内八千七拾三人娘なり。中にも攝津國三津寺八幡の氏子。道頓堀の楊枝屋に願ひのまゝなる男子平産せし。母よろこぶ事淺からず大きな良して味噌汁の餅喰など。人間ゆくすゑの身の程しらは浅まし。此子美形にそだちて後は藝子になりて。諸見物に思ひつかれ。是さかんの時至りて。十八歳の正月二日の曙の夢と。かぎりの命世間の義理ゆへに捨る若衆ぞと。先を見ひらきての御物語り。あり／＼と聞しに。程なく常の夜も明しらみ。新六。地藏堂を起わかれ丹波より難波に。歸りて見しに。南隣楊枝屋に日も時もたがはず男子産出して。けふ六日とて親類集りはじめて髪たる、祝言より。此子はそなはりて野郎下地なり。子細は今からさへ髪付のいろこく首筋はへぎはまで。此何怪みならひなき太夫になるべしと。なを嬰兒あげまきの比より。朝暮大事に掛てそだてける程に。はや十三より其分しりになつて。かりにも人に憐せ調諷の上手。是を戀しのび寄。戸川早之丞と名によびて。大和屋甚兵衛座に出て若衆方の靚粧。外にかはりて小取まはしに。諸藝を藤田小平次にもまれて武道殊更にしこなして。尾上源太郎が替りにもなるべき者といへり。そののみ衆道一分たしなみ情ふかく。人の言葉をあだにはなさずして。名の出ぬ程よろこばしけるは。其かぎりしれざりき。いつのころより役者中間に念比分をもとめて。年月の心つかひそれは／＼是におもひつゞけて書にはたらず。此念者と申かはせしも口惜き事ながら。身の勤めなれば。世にして途程の大臣は是非もなし。それより外なる浮氣の沙汰なる人には。狂言の仕組は各別。是より脇にて人に手を握るゝ事神ぞいたさじといひかはせり。何か此心ざし違はず其後は銀動め客もおのづからいや氣になりて。彼者

次第にかはゆく。酔もせぬ酒に取亂し。おかしからぬ座敷後には人もたづねやらす。内證きのどく大節季も近しと異見してもなをやめず。極月廿二三日比までうかく／＼と月夜に夜の明て其すゑ／＼は闇になりける。はや初芝居も程なく。舞臺衣裳の物ずき色々の美をつくし。天晴此小袖をかさね。手に入し狂言をして見せ。念者めになかしてと。心も浮立春を待ける宵に。こんがうが萬の心當にせし。あなたこなたの付届なくて。胸算用はらりと違ひ。三五の十八十九二十度つゝも酒吞荒して。其氣のつかぬ大臣目。大晦日の闇の鬼にかませたし。され共藥代花取にやられぬ物なるに。さりとは悪しと。今になつての迷惑。大かたの人には留主／＼と二番どりの鳴までのがれ。兎角ない袖は振れぬといへ共。吳服屋心つよく堪忍せず。つれなや松の内には急度濟する斷りも聞分ず。地衣裳も残らず取て歸れば。いふて甲斐なき恨みむごひ仕形と此上ながら分別するうちに。南のかたより今宮の若衆びす賣など。新し雪踏の音人の姿も心も春になりて。東は高津の宮の松の葉越に初日常とはかはりたる氣色。何心もなく早之丞打ながめて堀江の若水に口そゝぎなどして。身上をいわひて歳旦の和哥を吟じける所へ。坂田小傳次山本左源太夫振袖の色香をふくませ。梅か櫻か是ぞ花揃へ。いざ太夫もとへの初礼同じ道にとさそへば。よろこび多より着つゞけたる小袖ぬぎ捨。けふの肌着は淺黄よといはれし時。こんがうまだ隠して御袖ゆき違ひて皆々仕立なをしにと申せば。物靜に聲して。我はお跡よりといひやるもうたてし。其日もむなしく暮て。明れば二日のけじまり。太鼓ひゞきわたりいまだ人良も見えぬうちより。諸職人の弟子たま／＼隙を得て鼠色に五所紋の袖をつらね。無理ばきの革足袋。ふくろふるるを用捨なく。足ばやに言葉せはしく。早之丞か藝ぶりを見るべしとつぶやき行。其後式三番すぎて狂言はしまるとて樂屋より使は來り。衣裝はなし。今はせんかたなくこの事を語れば早之丞うち笑ひて。浮世程思ふまゝならぬはなしと。二階にあるを見しが筆はやに其事にはなく書置して。惜きは命是は／＼となげきて歸らぬ若衆。さても死れぬ所をすこしの義理につまりて。武士もなるまじき寂後する／＼の世のかたり句ぞかし。物はあらそはれぬ事子安の地藏の御ことば

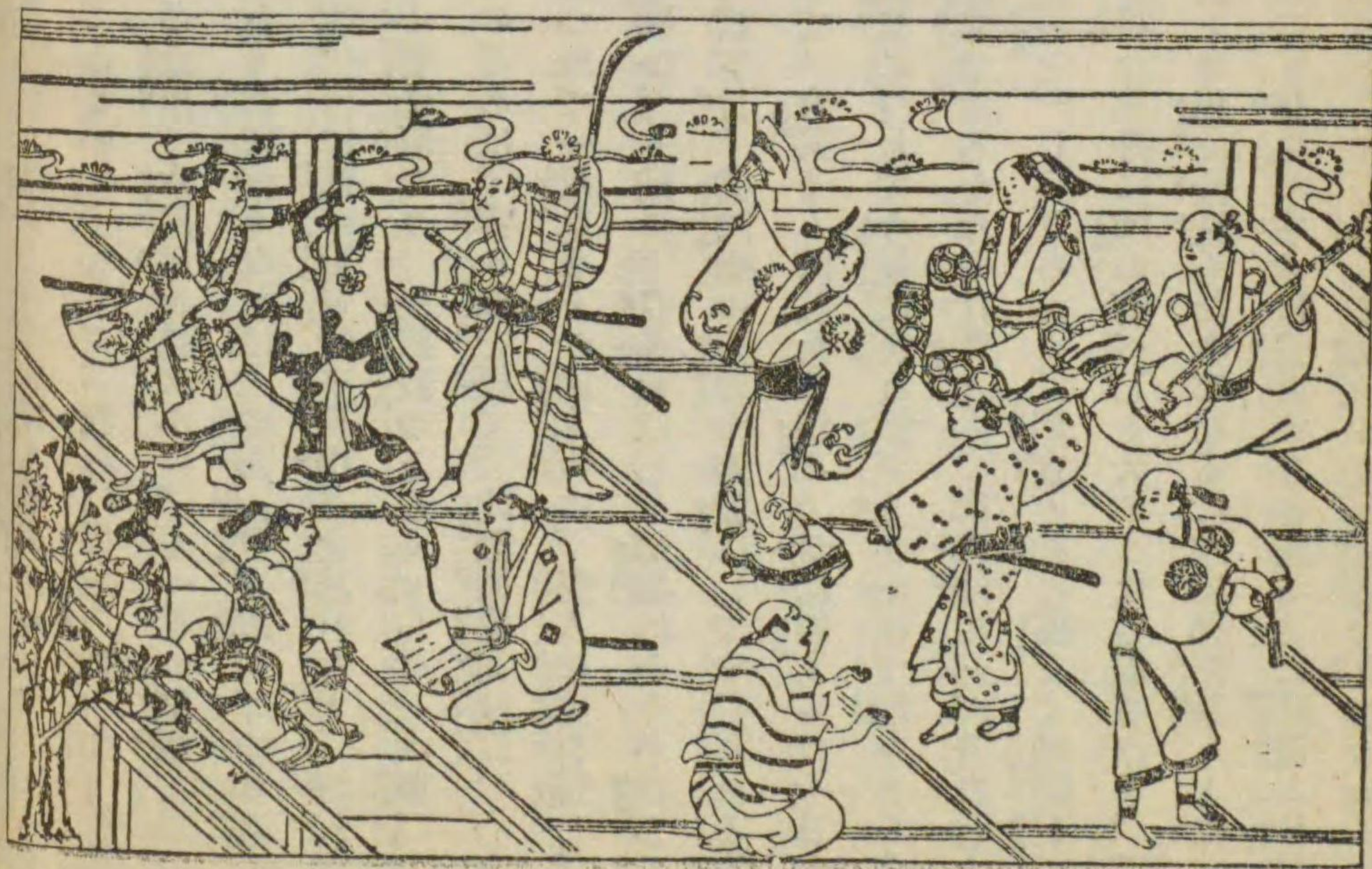
恨見の敷をうつたり年竹

思ひあはすればまことに正月二日の骨佛とはなりぬ

芝居子の一座に用捨すべきは年せんさくなり。秋もすゑの氣色露に時雨の淋しき程もふらず。晝から西日移りて東山の雲に虹の大筋なる嶋しゆすを着つれて行は誰が子ぞ。村山座の御大夫琢ずして光ある。玉村吉弥といへり。今が花の都に思ひ懸ざるはなし。其日は衣の棚四六と名に立見人好のさそひて。伏見の城山へ初茸狩にまかるとて。若衆あまたうかれ男四条河原を出て。はやくも爰櫃川といふ。むかし讀殘せし椋櫻も紅葉してけり。春にまさりて詠めにつづくうら枯の藤の森の宮所を過。山を南にのぼれば麓は京舊籠をおろして。花紫の帽子姿。松よりほかに見る人もなければ。編笠とり捨。うるはしき面子にして。乱れし薄を心ありげに分ゆくを。思へば戀の山入そむるより袖はぬれのさかりと。外より見ての浦山敷こそ惣し傾城は床の内。野郎を道中を慰と色に馴たる人のいへり。其日も暮ちかくなりての茸狩。稀に見付しを手毎にかざして里ばなれし草庵に入て内をみれば。若衆の文腰張名書はむしり捨てなをゆかしく。目を留て見しに。文章みなわけのよき事ばかり。此文ひとりの筆にはあらず。舞臺子の名殘ぞかし。此法師むかしは只人共思はれず。持仏堂あけてみれば。眞言宗と見えて弘法大師に菊萩を手向て。其脇にうつくしげなる若衆の繪姿を掛て。いと殊勝におがまれ給ふ。是はと庵住にたづねければ。すぎにし事を語るにあんのごとく此道に身を捨。つらき親仁にふそく二とせあまり爰に山居の夢にも其事をわすれずと。涙に墨染もはぐるばかりなげきぬ。聞にあはれさまさりておいくつと年をとへば。我わきまへのなき時ぶんにもあらず。二十二になりけると也。それは花はさかりにもなり給はぬ御身ぞと。一座の子共までも人なみななれば義理に袖をしぼる。其良つき大かたは分別らしく見えける。いづれ二十二よりうちなるはひとりもなし。その中に飛子の時を思へばざりとほふるき若衆あり。

ついでながら年をとへば覺えませぬといふこそおかしけれ。あるじの法師のいはく。爰に幸年竹としてしれぬ年の正面にしるゝ物こそあれと。彼若衆に年竹をもたせて立せおき。子細らしく印をむすびければ。しばし有て此竹をうちけるほとに。皆々同音にて敷とりける。十七八九までは何心もなくそれよりうへは耻かしくなりて。左右の手に力身を出し隨ぶんうたぬやうにしけれ共。不思議やうちやむ事なく三十八にしてかの竹兩はうへわかりぬ。若衆赤面してまことしからぬ年竹とかいやり捨られしを。法師眼色かはつて。諸佛も證據是に偽りなし。うたがはしくは幾度なり共うつて見給へといふ。此座の若衆風のはげる事をおそろしく。誰がうつ人もなく座興さめてありける。是から酒なせと初竹しほ焼にして。をのゝ前後を○○○○○○○○ける。折を見合せ羽織の無心をいふ若衆もあり。六間口の家の約束するもあり。當座に小柄をもらふもあり。さてもゝ手ばしかく取あげるこそおかしけれ。此おもしろき中へ都にはめづらしき男達雲の今とぎれと我悪名を申。枝折戸に入て小者に長刀をもたせ。竹椽にさしかより。玉村吉弥がうけし盃を是へといふ。吉弥きかぬ良して有しが此盃は此うちにまいらすかたがおひとりあるといへば。此男堪忍ならず是非いたたくべし。お看は是にと件の長刀をとりまはせは。いづれもおそれ詫てもきかず。吉弥打わらひにくさも悪し。只はおかじ我にまかして皆々先へとかへし。吉弥はかの馬鹿男にしなだれよりてけふのおもしろからぬ事町人のまだるきつき會酒ならばかうした殿こそ呑れた物ぞと乱流もりかはし。其男の氣をとりて。よい程にもつてまいれば。此たはけ寝もせぬ夢のごとく成ていつとなく戀を仕かくる時。いかにしてもむさくさとしたお髭さけりとなりて。口ちかせる事も心にかかるなどいへば。君の御こゝろにいらぬ物つらに置もよしなし。小者まねきて御氣に入程にそれと云。とても御事に我手にかけて殿ぶりをよきにと。吉弥剃刀取持て。此男の上髭は殘して。物の見事に左の方の鬚剃て。右ばかりありしまゝにすて置ける。萬事覺えず鬚あらけなき中に爰をあしばやに立のき。京へのみやげに此男のつり髭を持てかへれば。いづれも大笑ひして。さても手に入し事なり。是を看に酒よといへ

男女の心玉にのりて何がなと思ふ故ぞかし勤めとて指切もあり。かためとてふともゝに煙管焼するもあり。是皆客のためいたい目にあひながら。此事人はしらずなりぬ。左馬は身に入癩子ひとつもなくて。其情ふかし風俗は上京の町人の男子めきて。萬江戸手代に任せ。東山の花に暮し廣沢の月に明し。大晦日をしらぬ貞つき一度もせはしき事をいはず。人の氣を汲て人の友にもなりぬべき者也。よき事見出して語るにたらず。濱の晩景を見捨南宗の唐門に入て殊勝に物さびたる寺内。南の森の陰こそ藻塩草に見え渡る玉横野西の方に。芦の長池にかけわたしたる橋の上。どうもいはれぬ所ぞと木間六兵衛に弥覺ひらかせみしに。自然と蒔繪に琉溪のむかしを書ぬ。法師まじりに是はと横手を打ていつとなく乱酒になつて前後をしらずなりにき。ひとりの風流男 懐より女のさし櫛をとり落すを見るにやさしく。駿河なる鳶の細道かかせて。影櫻の定紋是は正しく佐渡嶋やの吉田ではないか。いかにもといたゞくを用捨なくもぎ取て泥中になくれば。沈みて跡形もなし。これは國士の費と云。若衆の持給へる楊枝ならは多くの人を掛て青砥左衛門もさがし出べし。何ぞ遊女の手馴し物を見るもいやらし。兎角は彼色里をやめぶんと。眞只になつて異見して。



瀬々の浅みを横ばしる。蟹の細かなるを生ながら肴にして酔ては時を忘れ。一開坊の案内古跡物語も取にいらす。白藏主の住給へる松林寺の三足狐咄しもおかしからず。まつ毛もぬらさず行に。爰乳森の遊女町折ふし門立時なれば。もし見付られてはと小女郎手の編がさを先さがりにかづき。天王寺屋利兵衛といふ揚屋のかとなる冷水をもひ出して。井筒に寄て面影をみれば。此所の四天王と名高きよね共はや見付て。禿つかはし大坂のわるひ人あ達とまねく。女には物いふ事も嫌ひになりしと笑ひ。夕日かぎりある遊びそこくにしてわかれ濱を見渡せば辰弥は棚無舟に乗うかれ。京之助は磯つたひ左馬は戎嶋の望み。心くの夜の道遠里小野油火幽に今宮道頓堀の野墓の煙に。無常の心玉しばしはしづまりしが。疊屋町に歸ると又忘れて其夜は太夫本與次兵衛座敷仕組。浪江小勘がうつくしさ。吉川多門か小哥。上田才三郎がとりなり。小櫻千之助がばつとしたる藝振。吉川源八が若殿三枝哥仙が禿立。中川金之丞がやつし事。南北三ぶが早口。それくの役付みる人に笑せ泣せ上手をするぞかし。若衆方の常成素貞をみるに偽りなしに見事なる物を。よい國に生れ合せて自由に成事に付て遠國の金持一しほ哀と師中間にて申悔ぬ

終

男色大鑑 本朝若風俗 第八卷

目録

一 聲に色ある化物の一ふし 二丁目

神子の口もあはぬむかしの事

藤田皆之丞勝手屏風の事

女の心たまやねをとびこす事

二 別れにつらき沙室の鶏 七丁目

八人ならびの長枕今は夢になる事

一盛はよし野増りの貞見せの花の事

峯の小瀑豊なる身持の事

三 執念は箱入の男 十丁目

菱屋が二階座敷戀にのぼり客の事

文も數かさなり千體佛に張るゝ事

竹中吉三藤田吉三思ひを一荷の事

四 小山の關守 十六丁目

下戸も上戸も付ざし嫌はぬ事

山本左源太身請の首尾の事

上村辰弥よい子に極まる事

五 心を染し香の圖は誰 二十丁目

大和屋甚兵衛が定紋の事

藝子は今が盛大臣はすがりの事

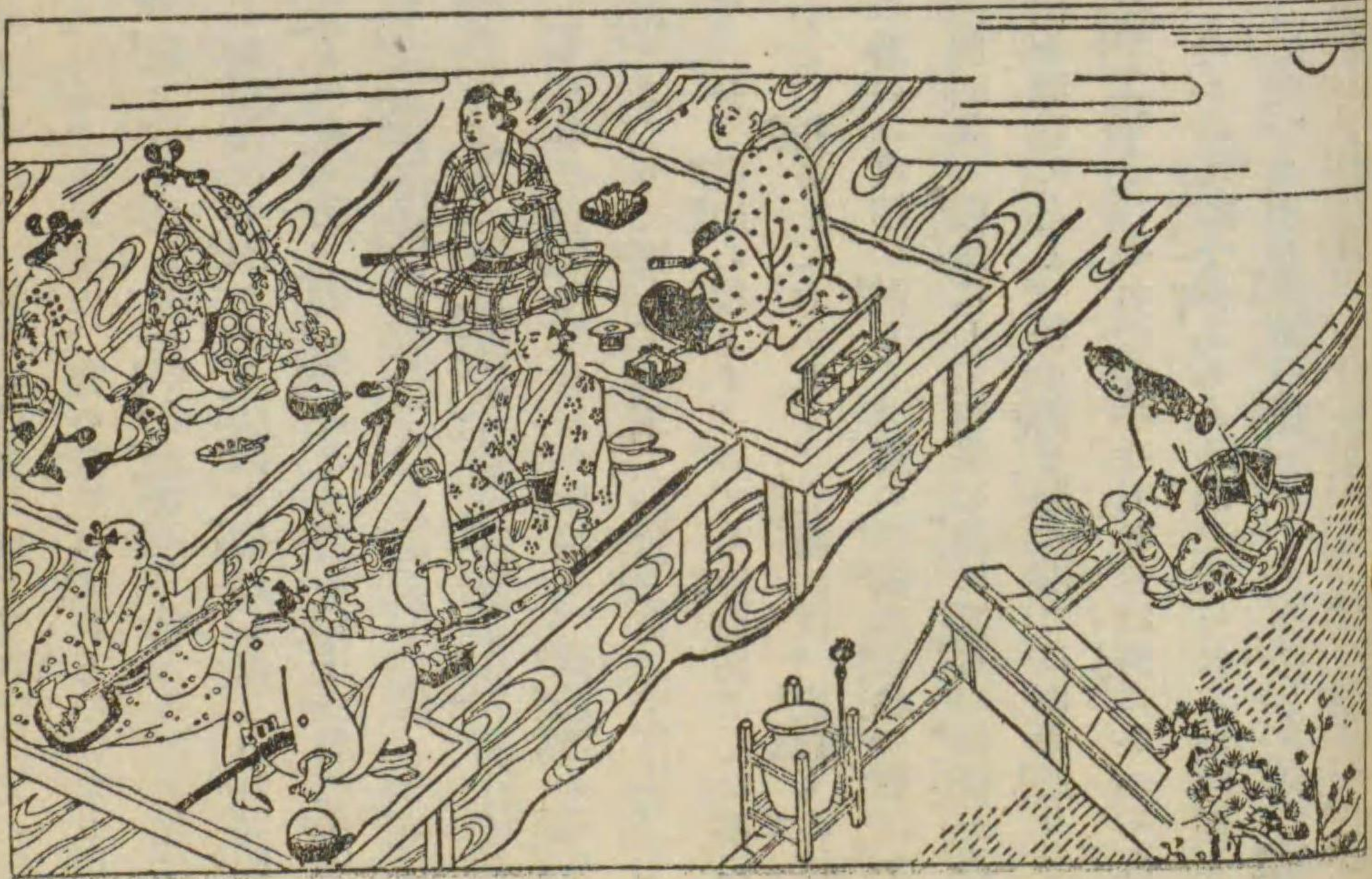
若衆好の目からは美女も隠元豆と見し事

目録終

聲に色ある化物の一ふし

やあら目出たや鶴は千年龜は万年。東方朔は九千歳と。年越の夜の厄拂ひが高聲。老の浪立敷寝の舟の春にちかづくをおどろき。曙はかはらぬに若水といはふて貞洗へはとて。寄年のよらずにあるべきや。殊更縁遠き娘の親鸞子の親かた。數折いりまめに又ことしの暮けるよとつねの人よりは一しほおしみぬ。いづれ若衆の盛四五年の花代おもへば詠めるうちのせはしかりき。女程久しきはなし願はくは女がたの藤田皆之丞を。生ながら女にせまほしといふ人あまたなり。此廣ひ都に女はいかなるも有人の沙汰しけるは。是をわる物ずきといふ。同じくは稀なる若衆に女のみねびさへうたてかりといふ。此道をすけるからはそれ程になくはなり。皆之丞が何怪なる風情。先はかづら貞雲まの月わづかに出るに異ならず。まなざしは玉芙蓉を欺き。言葉は巧にして然もやさしげに。萬の事ひとつとして下に見られず。皆上京の御車の前後に有し宮女の男めづらしき。やうに思ひめぐらしたる舞臺つき。偽りをまことに見なし情しらすもいたづらにはなりぬ。男よりは上臈衆に思ひこまれめいわくせし事幾度か。され共かりにもあらざらん事一生かたくなかりき。風俗地衣裝の外に替りて。黒羽二重に白小袖かかされて見る事もあかず。一度に肌着も十の數を拵ゆる事今の世の勤子のせぬ事なり。是みな小平次か實ことなる物ずき。川原の水ぎは立てしほらし。此美兒難波の大舞臺。松本名左衛門が草も木もなびけし時。はじめの出姿梅はつぼみにして匂ひふかく。春やむかしを忘れず小指に結びし二また竹の縁にひかれて此君をつれて天王寺の彼岸に參詣ける。其友とせしは淺香主馬など都の殿とつれぶしの小舎に吞掛。此醉の浮氣に神子町に行て沢井作之助かなき跡を梅の木のかんに口よせさすもおかしくかなしくとふてたもつて嬉しやといふ時ひそかに爰を立のくさりとは義理にも涙はこぼれず仕組狂言に泣事思ふに身過程かなしきはなしと上村門之丞西川市弥などか舞臺子の時申せし事は計は至極と大笑ひして。其春の過るも夢な

れや。芦の青葉の風も住なれし浦のめづらしからず。京の風ゆかし涼みにいさと。さそふ水茶屋の後家が見せにて。かり初の談合しまりなしの七十郎。云出すからは跡へも先へもゆかぬ石車の伊右衛門。太鼓はもてと地はなしがならぬくと立行に。江南の淺瀬に水覺船をよせて。大臣は勿論おせさよよい是盃踊。右から左へ移る間に夕ぐれはやく石垣町につきぬ。大鶴屋が二階より見たせは都とは爰の事なるべし。京の人にも目鼻あり。大坂とても手足はかはらず。小判は爰にもおとしはをかず。別に替つたやうにも思はざりしが。所せきなき涼み床にゆたかなる女まじり。いづれかいやなる風義はひとりもなく。目に正月をさせて。飴り繩の染出し明衣。御所ちらし千筋山づくし。曙嶋。幽禪が萩のすそ書。白鷺が若松。色々のもやう好み素人目にはあだに見るらん。此夕祇園殿さぞ嬉しかるべし。先すゞしめの神樂仕合の木工兵衛に小語て。人良の見えぬ時女中のちかき程に床をなをさせ。皆之丞をさそひて紋なしの灯挑に面をそむき。若衆みな丸袖の羽織おかしく。夏頭巾の山はさながら錦を夜かぶりてかふらせ。あらけなき作り聲は狂言作りの平兵衛もそれとはしるまじ。是も乱酒になつて與左衛門がわすれて君の名をよび。あらはれわたる宇治の川嶋救馬。浪に色ちる玉本救馬。



連引の撥音しづかに哥山春之丞も悪からず。調護のかり枕すこし夢見るうちにも。親仁の精進日はわすれず。宵の鮮に驚き口すゝぐなど心ながらおかし。後世もまはり遠し。近道におもしろやと云所へ。夜の編笠はしれものいたり床にしかけ。伽羅の焼辛くだされませいと都なれや花車なる物もらひ。氣を付て見しに花咲左吉なり。色ある床を見に廻る爲にやといへば。大笑ひして今宵は見る程の人みな悪女なり。同じねだんにて醜きかたに床を借はしばしなれ共因果といふ。汝が見残し有べしと俄に末社の商口火桶はくんと涼の比賣もかはり物。御慰になる碁の相手一番三奴づゝてまけにうちます。かみさまかたの白髪を月夜影にてぬきます。お若ひ衆に喧嘩の相手は入ませぬかと。聲くさばぎまはれど流石おさまりし代のためし。誰かまふものもなく相口はおとさぬやうに。扇ばかりの風に身を樂しみける。此靜なる人心銀溜て引込所爰ぞかし猶水上をながめ行しに三条の橋よりかみに世間はなれての床涼み。備前焼の茶瓶天目ひとつ。此外に盃も見えず皆分別らしき貞つき。洗ひ帷子の尻をまくりて座して。二十一間のそろばんはぢき。酒看茶たばこ大かた中つもりにして何程と。涼み中の入用を勘定して。是を遊山の種とす。さても隙有男こんな事にて大事の京をせまくなしぬ。藝子の集礼は大分の事を算用には入ぬかと。指さしておかしく。立歸れば。夜露もふけては袖をいたはり。ちりじりに床歸り。人の山もはしめの川と成水の音のみ次第に淋しく。東の岸根に役者の聲ばかりそこ／＼に残りぬ。坂田藤十郎が一組藤川武左衛門が酒友達。嵐三郎四郎も機嫌にして夜半の鐘に明日の舞臺勤めを思へば。身しる川風に聲をとられなと立行。其跡は十三夜の月東山を我物になし。松の梢を照のぼれば四条通りを蚤の飛も見えわたりぬ。兎角は寝てのたのしみと大臣は銘々に見人を慰み残りぬ。ぬれの相手なしの身は宵にかへらぬ事をいふては悔み。同じ蚊屋に生男計のならば枕別して口惜かりき。今からも陰子隙あらんと思ひやられおかぬ棚をまぶり石垣町のともしびに姿の障子に移るを。それこのもしげに見しに立つゞきし茶屋の棟よりうるはしき女の絹縮の廣袖に黒じゆすの面帯。髪ときすて中程をかいむすび金の房付團をかざし。思ひよらざる風情。晴たる月に不思

儀嗜がたく。独りも魂はなくて心に観音經など讀てしはしあるに此姿消もやらす軒端にちかよりて誰とはしらず人をまねき情しらずと云にぞ。うたがひなく戀とはしられける。をの／＼身に覺えなく胸のさはぐ中にもこんな目にあふ事ならばと思ふ。かの女もだへてせめて言葉のかへしはないかと。泪袖をつたひて白玉を救にくださいし。我ながら我ぬをなげつけしに上書に多古の浦袖さへ匂ふと有しは。皆之丞への思ひ入一しほ哀さまさり。せめては盃事よと太夫に無理のまして。軒口になぐれば。女孃しけにいたゞき。間なくなげかへして爰はから盃ながらお一つと。屋ねよりうたひし小哥の聲。此あたりにかくれもなき。井筒屋のお娘か色移りによくたといへり。とがむるにも非ず其まゝに明行空の名残男女に限すかく思はるゝは。此君美德の一つなり

別れにつらき沙室の鶏

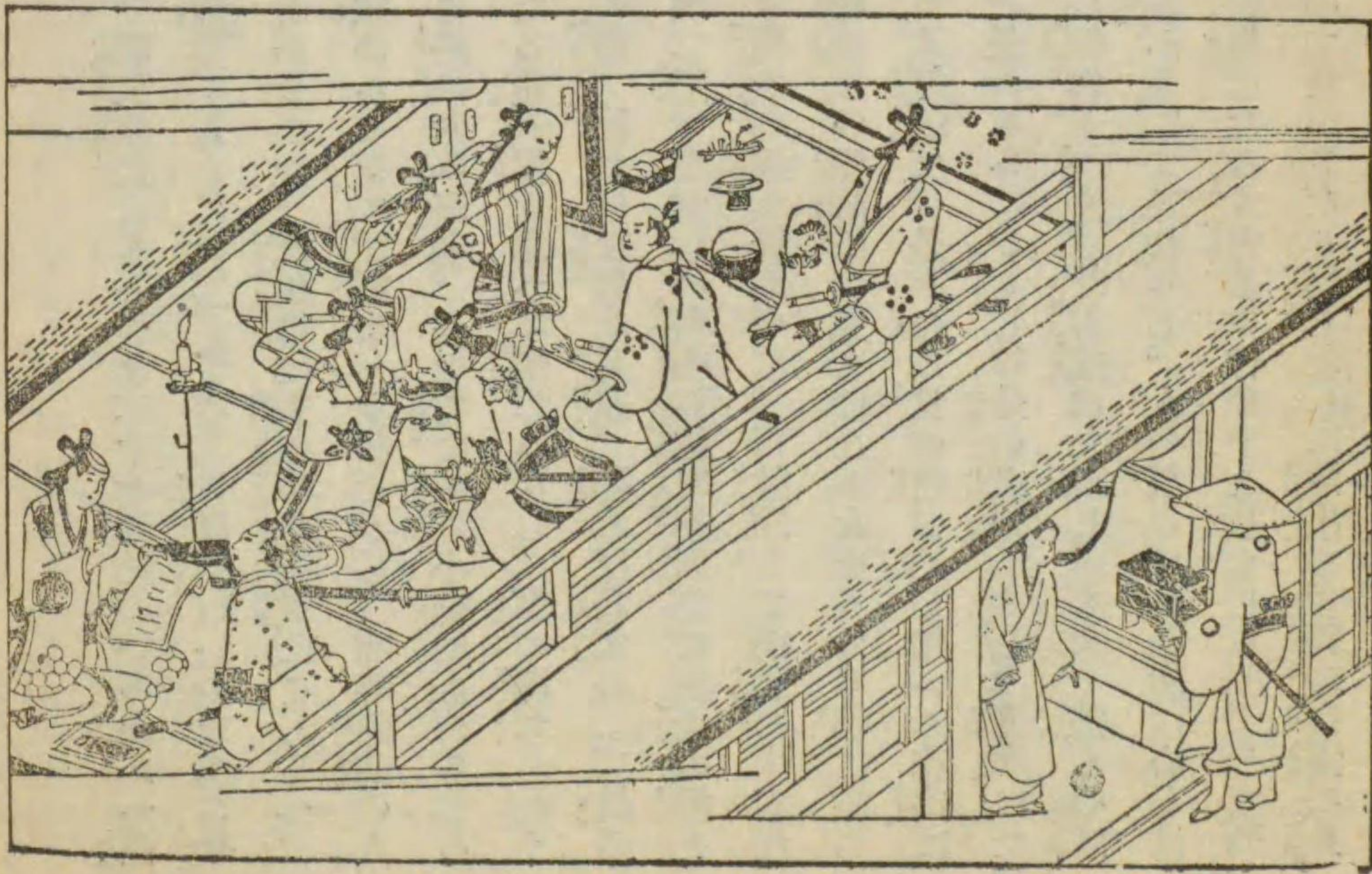
鼻は人の面の山なりと古詞に申傳へし。男女にかぎらず高下あつて。思ふまゝならぬは人の貞つきぞかし。むかし未摘といへるもすぐれて鼻醜かりしに。是も美女となんいへり。それを思へばふたつどりに。ひくきより高いに徳の有べし。鎌倉新藏も童戯なればこそ人も見ゆるせ。昔日松本名左衛門中比に宮崎傳吉今の峯の小曝いづれも美少人役者子どもの手本よき衣裝を着はじめける。此事千里までもかくれなき虎膚天鳶兔の羽織ばつと沙汰し侍る。勤子の唐織を着始めしは是を手本にイロホ形曆小紋袖をあらそひけると。平川吉六もあつて過たるむかしを思ひ出せり。其時は名に橘の小嶋妻之丞彦十郎といひ。小野山主馬は宇治右衛門とはこはい良して今京の見物事になりぬ。それらのみ三原十太夫柴崎林左衛門沢田太郎左衛門櫻井和平などみなこんつよき立役つとめけるが。これらもむかしは若衆ならぬ。岩倉万右衛門松本文左衛門山本八郎次。かづら姿見し事を思へば久しき事にはあらず。松本間三郎も小

膳といひしに。今はかか方の太郎次も置綿時々の所作とて。かくも移り替る物は狂言役者染之丞は惣兵衛となりて世をわたり。常左衛門も以前に見違へ梅之助は六左衛門とよばれ主膳は六郎右衛門と云男になる。庄太夫が三味線も死ぬれば聞す。沖之助が事いひ出すものもなし。是を思ふに一日も浮世ながら住るが徳なり。慰みさまぐ見たり聞たり十炷香すたれば。力をも入ずして楊弓の星の林夜は又はるかなる音羽山の鈴虫相坂の響むし。住吉の松むし筆是も秋のすゑより。螺つくはやらし和朝にある程の事を。色品詠めつくし沙室の雞合いさぎよく有時小瀑沙室の鶏をあつめて會をはじめける。八尺四方にかたやを定め是にも行司ありて。此勝負をたゞしけるに。よき見物ものなり。右左にならびし大鶏の名を聞に鐵石丸火花丸川ばたいだてん。しやまのねぢ助入重のしやつら磯松大風伏見のりこん。中の嶋無類前の鬼丸後の鬼丸天満の力轍けふの命しらす今宮の早鐘脇みずの山櫻夢の黒舟髭のはんくはい。神鳴の孫介さ波金鏡。くれなるの竜田今不二の山。京の地車平野の岸くづし。寺嶋のしだり柳綿屋の喧嘩母衣。座摩の前の首白尾なし公平。此外名鳥かぎりなく其座にしてつよきを求て。あたらし小判を何程か捨ける。小ざらし心にまかせ三十七羽すくりて是を庭籠に入させ天晴此鶏にまさりしはあらじと自慢の夕よりにくからぬ人の尋ね給ひ。いつよりはしめやかに〇〇〇〇〇〇氣遣し給ひ明がたより前に。八つの鐘ならば夢を惜まじしらせよなど。勝手のものに仰けるに。勤めながら眞言を語る夜は明やすく。長蠟燭の立事はやく鐘の突出しきのとく大夫よの事にまぎらかせ共。大臣耳をすまし八つ九つのあらそひかたづかぬうちに三十七羽の大鶏聲くひゞきわたれば申さぬ事かと起わかれて客はふだんの忍び駕籠をいそがせける。名残を惜無の是非もなく泪に明るを待兼。おのれら戀のじやまをなすはよしなしとて。一羽も残さず追はらひぬ。是などは更に分の若衆の思ひ入には非ず。情を懸し甲斐こそあれ。過にし春の海中國の人。吉川多門に深くむつれての別れに。川口まで見送りし泪其夜寒空雨となり風と成。袖の外迄ぬれしを。いとほぬ風情思ひくらべてかはゆさもまされり。いにし律師覺範の多門といへる童子に。恨みずばの哥よまれしもこんな事のおもはくぞかし。

執念は箱入の男

田代如風は千人切して津の國の大寺に石塔を立てくやうをなしぬ。我又衆道にもとづき二十七年そのいろをかへ品を好心覺えに書留しに既に千人にをよべり。是を思ふに義理をつめ意氣つくなるはわづかなり。皆勤子のいやながら身をまかせし独りく所の程もむごし。せめては若道供養のためとおもひ立。延紙にて若衆千餘張貫にこしらへ。嵯峨の遊ひ寺におさめ置ぬ。是男好開山の御作なり。末の世には此道ひろまりて開帳有べき物ぞかし。有時備前の人と住なれし國かた。浦々の春の浪牛窓の白魚虫明の瀬戸の海月。琴の泊のあみ海老。是を肴に明暮小嶋酒もおもしろからず。孔子くさひ白つきは所ならひにしておさめすぎ。先のしれたる命の程を思へば樂しみなし。都の櫻ちらぬうちにと風も船のためにはうれしく。のぼれば安居の藤も今といふ時の鐘。明れば芝居を見果。暮れば品定めして昼の面影わすれぬ野郎まねける。いづれはあれど座敷は菱屋六左衛門か濱二階。ひがしに名山石垣町筋向ひに四条の橋を目の下に。爰又京の中の京と云所なり。今宵の遊興常にあらず有難き美形の集り給ふ中に。百駄頭とて御姿のすぐれておがまれ給ふは。竹中吉三郎藤田吉三郎など神代このかた古今の稀者悪い程靚粧の見よげなりなをうつり香に心をとまる袖岡政之助哥の一ふし盤惱みもとひ。光瀬左近外山千之助此五人打込て。是ぞ今の世の色づくし物いふ花山に入。春の夜のならべ枕身を。それになれて。調誦女にかはる事なし。はおもふにひとしほ分の若衆やさし。若衆はたがひの心ざしよりかため命を其人に捨置。自然の時の後たて共末の頼母子づく。此君達はたのしみもなく然も心底覺束なき初會より。其身を客の物になして勤め給ふは。地若衆の情ふかきにまされりと。人の氣のつかぬ所に心をはたらかせ。師良なる法師の無用の詞に興有過てよろしからず。され共愚になき太夫子の付合すこしもしらせずして酒事殊更につのりぬ。亭主もまはりの悪き盃の時呼出せばあひく申て救かさなり偽りなしに酔出て。料理自慢の長

口上申もあへず。かたづけられ大かたは夢になれ共。眞言はわすれずして。もはや吸物は宵から六色か。今一度桂川の柳魚に松菜をあしらひて。蓋茶碗にてかるう出せ。其跡に水溜て深き鉢に櫻の花を浮て。生貝を角切にして先細の箸を添て出せ。色座敷は仕掛ばかりの物ぞ錢三十が物が。小判貳兩になるをしらずや。我才覺ひとつて。十三人口四十年過るは。世間の人さまにあしからず思はるるゆへぞかし。別して今宵のお客他所の御かた太夫さま達も。今の都の晴なりお手がならば猫までに通事させよといひね入にする事。二階に聞へてそれ／＼の身過と一しほおかしかりき。其後は我吞あらはれ酒になれたる君達さへ。色あそびの色に出紅井の寝道具に移り。ひとり／＼の身振先竹中は淺黄かへし下着に中は紅鹿子うへは鼠しゆすの紋付白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣の裏を付。入所染の胸紐ときて白糸の長柄ぬき出し。ひだりのすこし身をひねりて座して。笑へる口もとのゆがむになをしほらし。藤田は白小袖のうへに我名の色をふくませ。紫ぢりめんふたつかさねなをまた羽織帯迄も。同じ色の帽子しめやかに身をかため。息づかひまで氣を付自然と若衆にそなはれり。筋目あらばよき大名の道具なるべき人がらも今。行するの藝の事迄も岩井半四郎と素面の時沙汰し置ぬ。京にうれし



がり大坂に請取仕出しなり。袖岡は黄なる肌着に青茶椀茶の輪描へ。ばつとしたるかたぎさながら女のごとし其物ごしたま／＼に聞人は作り聲共思ふべし。かしらからぬれものに誰かいやといふはなし。光瀬は白き下着の薄色の中形縫分嶋のうね帯。もへぎの袋うちの柄糸。なて角の金罌髪結さまも一きは目立て。ぬるき所なく人の好る風義有。外山は紅の色こく白地に書繪の東海道いやしき馬かたも此君につなぎ川越も此戀に沈み身の上を白川橋に。まことの旅人の聲もして鶏も客の立時をつくり。頂妙寺の鐘無性につきならし。其教は百八やら八十八夜の名残の霜。三月廿八日の更行袖のひや／＼かに。あそぶにあかぬ男性悪といへ扱。それにはちつ共かまはぬ世なり。なんのかの焼味噺て又酒よと云時門の戸叩明て是を二階のをの／＼さまへと。進上箱ひとつわたして其使は見えずなりにき。座敷へ持て出ての不首尾先から名をいはぬもかしこし。此方にとはぬも利發なり。見えわたりたる所杉の箱なれば。此内菓子には極れり。昼あひし役者に此趣向はかたらず。誰かは氣付ておくりけるぞと。近付思ひ出すに藤本平十郎。榎原平右衛門杉山勘左衛門坂田傳才などもしらぬ事なり。扱は天から降たる一箱と大笑ひして。明もせず其まゝに捨置ぬ。程なく太夫たちの向ひ駕籠とて聲さはがしくいづれも心の残らぬ別れ。又晩も約束してあふ迄の淋しさ君立歸られし跡にてとんと寢が寢後。尾もかしらも覺えず五人ながら枕も定めかね。いろ／＼の夢みる時最前の箱の中より。吉三／＼と諸聲のする事うたがひなく皆々聞耳立て起出れば箱に音あつておそろし。され共きかぬ男ふたひとつてみれば。姿人形の角前髪いかなる人の作りけるぞ。さながら目つき手足の力身生たるものゝごとし。なを氣を付て見しに是に添狀あり。それがし此あたりの人形屋なるが。此形一しほ心を込て作り看板に立置し事年久し。いつの比より此人形魂の有一ごとく身をうごかしける事たび／＼なり。次第に奢付て此程衆道心を移し芝居歸りの太夫達に目を付侍る。是さへ不思議なりしに夜毎に名をさして其子と呼ける。何とやらおそろしく外には此事しのび。川原に流しけるは二三度なれ共いつとなく宿に歸りぬ木のはしの物いふ事前代ためしもなく。聞傳へし事もなし。我物ながらさりとはもてあ

まし迷惑なる折ふし。藤田竹中兩太夫どの其座に御入を見および。是をつかはしまいらす又の世迄の咄の種にためし
て見給へとたゞしく書付ける。其中に大かたなる事にはおどろかぬ男進て。人間にあひさつするごとくおのれ其身を
して。若道の心ねやさし。兩吉三郎に思ひ入ありやといへばたちまちうなづきしをいづれも我折て興を覺して宵の慰
みあだになりぬ。子細らしき人十面つくつて語りし。是ともあなどるまじ。そもく人形は垂仁天皇八年に。野見
大臣是を始て作り人のたらしきをえたり。唐にも后をみて笑たる傳へも有。此二人すぐれて美兒あらはれたり。か
ゝる形の物さへ思ひ入けるとしばらくかんじていまだ枕に有し捨盃を取あげて是皆君のお口の添りし跡ぞといたゞ
かせて。惣じて此人を諸見物おもひ入し其教をしらず。とても叶はぬわけ有とならぬ子細を小語ければ。人形なが
らがつてんしたる貞つき。其後は目もやらす思ひ切ける。これさへ此聞わけの有かしこき世に。親の異見を風し聞し
野郎ぐるひに事つにつて。家うしなひ所をさりあかぬ妻子に暇の状をつかはし。都を立て江戸行ばとて一升入壺に埋
み金もなし。さりながら一代跡のへらぬ金の棒あらば。一荷にして持たき物は竹中吉三郎藤田吉三郎重ひかるひなし
免角千牧分銅

小山の關守

西國三十三所の觀音。五番は河内國藤井寺の開帳天和三年四月に參詣せんと。重といへる人俄にさそふ水夜前の寢
貞洗ひもあへず。法師の徳には髪結までもなく。鴛籠はやめて難波寺の五つの鐘の鳴時。殊勝さもけふは御名日にして
御魂屋のよそほひ寂光淨土爰極樂の東門過て行に。其一日は世上の鳴物とまれば。なをまた芝居の役者子共の隙也。
思ひく袖をつらねし折ふしは衣裝の御法度かたく守りて。随分目立ぬ仕出しなれ共形の山更に櫻は花に顯はれ。
舞臺子は鬢つきにしるゝぞかし。やうく平野の里大念仏の御堂に休みにし宵の約束たがへず森といふ男拔摩取の休

古をつれてきたるにぞ一しほおかしさまされ。それより春野の各殘草くの花分衣。歩行路おもしろく程なく参りて
下向に小山といふ里人のかたにやどり求め。さらば此所に關据てけふ詣てたる子共を。ひとりも殘さず留て酒事よと。
軒の番屋に毛氈しかせ色にとめる酒ばやしと。札を立て立役の源右衛門を目付とし文作の三味線引かけて今やくと
待所に沢村小傳次おかしがらせ。竹中半三郎に無理酒を吸かはし小松才三郎に心を殘させ。尾上源太郎が病氣を浮し。
彼是十六人日も暮々の長座敷。はらりと立行跡はもとの在所となる。牛はくろし。木綿は白し。人の貞はあかくにし
日をあらそひ立出るに爰に兄弟の女がた同じつれを別れて。吉弥は堺に辰弥は大坂にかへるに。道すがらの野夫出茶
屋も今朝よりすぐれてうつくしきは。定めて上村辰弥ならめと名をさしあつるも眞言那り。よきもの人もしる事ぞと
最上人も商口を出して萬に買物心元なし。買てあがりたしかに請る此子より外なしと。胸算用違ひはないか手を
うて打もせいと大笑ひして。心は戀のはじめとなれり。ならぬものならば人死絶まじ。同じ勤め子のうちにも心ざし
各別に透へり。親かたの爲と計うかくと客に身をまかすも有。かくかり初の執心も大かたならぬ氣づくしと。其人
をおろそかにせぬこそやさしけれ。親類にも合力せぬは金銀なり。むかしは情もふかゝりしにいつぞの程より。分里
の女のごとくなりぬ爲以の念比は各別。大臣に小宿にてあふなど。盃のうちはかるなど追付紋目をこしらへ。八日
十二日は三津寺の薬師。十五日は入幡十八日は清水觀音。役日も定め毎月むつかしくなりぬべし。女郎も野郎も時花
にかゝるがよしといへり。おなじ事にて萬に付てよいはづなり。さまくにいふは情しらすりとはよくも勤めの
身なり。一疋の蚊のくい所わづか物の立しも。人は身をなやませけるに義理にもせよ欲にもせよ救の定りてそれく
に役有指をようく切事ぞとあはれさましぬ。唐國にも身の血をしぼりて酒となし。世をわたれる傳へも有酒屋に。
山本左源太わけのよきあまりに心中あらはし指を切しを。よろしく取沙汰して名を今に残しぬ。諸事を聞に右近源左
衛門に有し時より情ふかく世にかくれし人のむかしを尋ね。なるまじき事共見し人泪をこぼし聞にほめぬはなし。勤

めの若衆もかくまたあればたのもし。是さへ世間の噂にやん事なし。上村辰弥はかり染客の合に。座もしめやか過て盃のまはりもおそく。おもしろからぬ折しも誰いふ共なく無用の心底咄し聞に指はきられまじき物と。何心もなくいふ。聞てことによりては命さへ。まして指などはさのみおとろく事にもあらずと。笑ひながら座興なれば皆々聞もとがめずよの小哥になりぬ。辰弥立かと思えしか脇指ぬきて。さし枕に拇指をあてて音もせず押切。心しづかに身仕舞して是を肴となげ出しけるに。をのくはと興を覺し跡の事共かなしみけるに。いつよりは機嫌よくさばぎあそびはしめてあふぎ引なんど心にまかせし。さりとはおちつきたる身のかためいはて人々心をこらしける。是を思ふにまつたくよくに非ず無分別といふ人はのけて置て。なるべき事かとおもひめぐらす程きもにめいじ。古今の藝子のうはもり。萬人共に思ひつく事。此人先生にていかなる種を蒔て今の花の咲けるしらすかし

心を染し香の圖誰

江南の橘を江北に植れば忽ち枳になりかはるといへりさも有べし。和國にも其ためしあり。江北の赤頭の子共を江南のこんがうが手にかくれば。程なく太夫髪となり。あれかそれかと思ふ程の姿。人はまた作るに色をましけるいづれかあしきはなしといへば。美はなをまれといへり。太夫本をはじめ役者中間にも幾人か抱て末を見しに今の舞臺を踏程の子は千人にひとりなり。形見よけれど心うとし。あるひはかしくて藝にならず。三拍子に揃ひかね親かたたふしかずを。かならず物になりぬへきと思へば。わづらひ出し。あぶなきものは是なるべし。是思ふに金銀何惜かるべし。免角は命をのべるの藥代なり。せんじやうつねの各別にかはれる所有。風情は若道にして心さしは其まゝ上藤にひとしく。物かたき所をさつて語るにあらず。昔は衆道といへばあられなくなりきみ言葉に角を入。大若衆を好み身に疵付るを此道となしぬ。それをも傳へて分子迄も双物わが無用の事と云迄もなし。今は山玉の祭さへ血を見ず

に神興もわたらせ給ふ。武士も具足のいらぬ御時なれば。まして色座敷へは威儀も出ぬがよし。西瓜も勝手にて切皿盛にして濟事なり。たゞよはくとしたるを當世の若衆といへり。江戸にて藝子の小紫とよび。京にてかほるとと付。遊女の名も物やはらかにして聞よし。袖嶋市弥川嶋馬櫻山林之助袖岡今政之助三枝哥仙など。うつくしきがうへに女のことく紅井の脚布する事戀をふくみてしほらし。明れば芝居入暮には樂屋歸り銀つかはぬ人も沢山にみればこそあれ紋所を覺へ名をしるぞかし。よき藝者なれ共鈴木平左衛門山下平左衛門。内記彦左衛門幸左衛門など歸るにはさのみ氣を付る人もなし。櫛着物の廣袖に藥鋼さげたる子共下地も二つ折の髪は結振はや目を付ける。殊更人の婬子内義らしき人迄も千日寺のあたりに立さはぎてまゝならねばこをいたづらに心はなしぬ過にし比勝尾寺の開帳に大和屋甚兵衛さそひて參詣けるに中津川の舟わたしを越て北中嶋の宮の森に駕籠立させて煙草よ茶などいふてしばらく休みに。跡よりいまだ十六とみて十五なるべき美女の。黒縞子の大振袖に寶づくしの切付。帯は白縷子につばくらの縫鳥に。紫糸の網をかけ物ずきなるうしろ結び。水色の絹たびにばらをのわら草履ひさやの二幅蹴かへしにほのめき。おとしがけのはね鬘。すかし形のさし櫛。金銀のべわけのかがい。淺黄地の金入にてうらをうちし菅笠に。芻反古の紐を付。着たる所の采体いづれにひとつあしき物ずきなく。ありのまゝなる素面よろづにいふべき所なし。左のかたに衣を着たるびくに。右に姥らしき人身に添腰本中通りの女迄も皆色めきて振懸。乗物つらせて押へに五十あまりの親仁若き男壹人大脇指の出立町人とは見へける。彼娘是迄は何心もなくたどりきしが。それよりもだくとして足もたずして。多びすの宮のある里より其人は駕籠にのせられ美形は見えず別れぬ。又縁あるにや御山にしてめぐりあひ目もと惱みてあとをしたひくるに。さまく御寶口かしき法師の縁起。馬の角を峰がさしたら大事か牛の玉も割たらまゝよ。天から降たる佛さまも有がたからず。あの人をと殊勝そうに娘の見る貞ばせかなはぬ戀なればいたはし。此

女をもつ男の身になる事もいやなものなり。是衆道ならば命かへりみるにはあらねど。をのゝ女嫌ひしやれ中間な
 んとも思はず下向して其夜は紅葉見し櫻塚の落月庵にて物かたき俳諧の興行伊丹鴻の池酒のもてなし此里は折ふし飛
 子もありと是を云しらけに立歸るに道すがら子細を付し女に袖ふれし事うるさく天満川にて垢離をかき女をみし目を
 洗ひ流し皆道頓堀歸りぬ。明れば戀のはしまりより。芝居の果迄衆道の外の噂もいやなり。此道私ならず三國の
 もてあそび。天竺にては非道といふもおかし。震旦にては押輓とたはふれ。我朝にては衆道専はらに榮んなり。女道
 あるによつてうつけし人種つきず。願はくは若道世の契りとなし女絶て男嶋と改めたし。夫婦喧ひ聞ず。悋氣治り静
 成時にあふべし

男色大鑑第八卷終

貞享四丁卯年正月吉日

大坂伏見吳服町淀屋橋筋

書林 深江屋太郎兵衛板

京二条通

山崎屋 市兵衛

江戸日本橋青物町

萬屋 清兵衛

諸國 好色 三代男 入繪

好色三代男卷一

目 録

- 一 情を包む鼻紙袋
付り髪は切りても切られぬは戀
- 二 思ひを燈す送火の夜半
付り水が見てとる戀のおどりや
- 三 松の幻は戀の未來記
付りそれしやふたりの姿幽霊
- 四 夜目には知れぬ菅笠の闇
付り口はさかの喧嘩をかしく
- 五 情のすがた揃へ
付り戀の損徳入札にあり
- 六 戀を堀出す古道具店
- 七 面影美人知れぬは心
付り一度の若氣戀を盛て

戀ながら戀のみ思ふ戀心、語るも戀か、戀の覺なで、花も戀には猶をかしく、月も戀には更ず風も戀には身にしむ心地もせず、雪の朝の歸さ夕の雨の通ひ、こしかたは過し戀、今よりは行末の戀、情あるは戀に迷ひ、佛も戀より出ます、戀も夢無常も夢、情もきのふの夢にくれて、思ひしもかはゆきも美もおもはくも皆夢ぞかしと思ふから、名さへ夢助と呼ばれて、十三の春より戀慕初學の損に入て三十の頃は日本の遊君一代男とおなじく戯盡して、猶浮世の戀の淵瀬をさがす、誠に賢きは裏借屋の吟味火用心を正し、又は薪の買出し時刻の損徳を考へ、或は袴に羽織して、世間男といはるゝも名利ながら子孫の爲ぞかし、是を思へば我ながら我恥しく、時は水無月御手洗の御被、年の内のよからぬ事を流す神業、戀にうかるゝ我心を祈らばやと詣す、峯の木ずゑのこと讀し蟬宮樹に鳴いて、夏なき納涼の地に頬冠りして眞瓜賣あり、笹に團子蒲の穂の耳に入て聾になるといふも嘘らしく、鰻の焼賣鯉の水作、酒飯かくる事なく、都は自由のわざぞかしと、指を折て藥見世伽羅の油はも戀にはなくて叶はぬものと、目を配り心をとらかしける程に、覺えず夕日の端山に傾くに驚き歸さ求めむと、小笹原編笠に分れば、何時しかもとのかたにはあらで、一ツの細き道いたる怪しながら猶迎るに、小河の流清々と水の面湯煙だちて、芬々たる薰忍冬酒に等し、手に掬ひて呑むに其味たくふべきなし、都の花橋は名にこそめれ、阿波もり葡萄酒などいふに足らず、思ふに此川上上戸の神のまして斯く酒の泉川を流し給ふにこそと、酔心地にわたるべく覺えけれど、浅からぬ川の瀬いかとはと詠め居るに、遙の南にむさしのゝ形して大きな盃をうかべり、見れば歌あり。

うかれ人其すくかたにこひ分て道あまたありむさしのゝ酒

是に打乗りて向に越せば、秋の葉白く赤く交へたる麓山に、柴の戸疎にかまへたるあり、瀧津なげぶしを吟し、松風三味を調べて、此けいさいふ計なく、庵に入れば佛壇ありて本尊と思しき女姿、あげ山織の衣服、唐茶の糸を以て紋をぬいせり、高島田いとはてに、襟かいどりて八文字のふみ様、笑める顔類なく作れり、左に弘誓の引船女郎

挨拶の舌をのべ、右に女の禿童子鏡子を半に擽げたり、見るより心浮て覺えず、暮かゝる空歸らしやるといひ顔に、遠時の鐘の音を聞ては、一番門の別れ壬生寺の戀しらずかと驚く、去折しも一人の僧ありて夢介に語る、汝色道にふけること多年、世に一代男二代男と呼ばれしも、皆傾城にのみなづみて方便の情に身體をうち、親のいさめ世のそしりをも顧ず、此外に未だ眞實の戀ある事を知らず、今汝三代男と言はれて此道を知らずばあるべからず、いざ此方へと手を引て一間に入り東西南の障子を開けば諸國の好色目の前に顯然る、此ふしぎさも餘りありて、懐したる延紙を取出し、今は昔の物語、筆に任せて書とゞむ

一 情を包む鼻紙袋

人こそ戀の最中なりけれ、廣い宮古の自由さ、戀を拵へて情うる里、女に化て徒つくす歌舞妓、朝はよばひ星の歸さ頃より、矢倉太鼓に胸も同じくとどろき、心を空になして更にこじりのあたる所を知らず、よせ太鼓三番三、礼壹枚の價で舞ふ木戸番の息子はゆく、今こそはあれ行先は能い若衆方とならん、長命して見たしと脇狂言より二番はりくぎ、三番續きのどうも言はれぬ濡のやりくり、忍び路いきち心中のみがき、男しらずの娘、わけなしの女房杯には誠に能い手本ぞかし、口上いひの男出て、是皆様へ御暇といふより、舞臺躍のふりも可笑しく、茶屋の煙草盆取て歸れば、菓子賣る夫が御めんもにくし、傍より立騒いで木戸口へ出るを見れば、百人の内六十人は女、其外は寺の同宿、役なし親仁の嫁の番衆、襦に粽の草鞋ながらに田舎の長次、紺屋の弟子らしきが鼠小紋の布子に西陣奥島の帯、此結び様をかく詠め居れば、猶跡より四十計の女、髪を中ばらひに惣傳茶の無地、紅裏ほのゆかし、僧からぬ下女つれて足ばやに行く、何やらん懐より落ちけれど知らでや、大勢の中に隔り行く跡より是がといへど行衛も知れず、取りて歸りひそかに見れば、ごろふくれんの鼻紙袋、裏は金なして鈍子、いはれぬ薫、此ゆかしさ、白きふくさの紅裏はわれても末に合んとぞ思ふと、ちらし書きたるに、種々の濡を盡して百二と番付したる男文、たいまいの耳かき、一步二ツ、露二三、いもりの黒焼女悦丸としたるが安神散に包みそえたる、此をかしさも猶底迄と取出し見れば、水晶の珠數過去帳是は殊勝や煩惱即菩提と開けば、浄土の八祖を始め、先祖の佛ならべ書いて奥に現在帳といふあり、こは珍しと見れば、朔日より晦日まで戀の出合帳、繰返せば昔人の名もあらはに書きたるを、それと計り我ひとり合點して讀捨て指を折れば、息子三人、坊主二人、手代髪結ひ其外を數ふれば、十といひて八ツ、凡そ此道をとて、太夫天神と呼ばれて時めくさへ、月に二十日出るはまれの世の中、是は浮世のぬれ後家なるべし

二 思ひを燈す送火の夜半

戀は盛にふり袖をのみ見る物かは、若き女はまだいはけなく、男は恐ろしきものと計思ひて、いとおしきといふ實を知らず、只後家のみをかき物非じと、去文にかきたる、二世を契りし男、いつの間にかすひ上られて仇野の露となり、何左衛門と呼びし名も新華臺と位牌に残れば、やるかたなく悲しさ髪を切て着物も無地に、帯も日野の細きに、手は珠數、口に佛語、朝の思ひ、夕の涙、袂にはく暇なく、二人ならびし床に獨寝の夢もけうとく、長枕うらめし、戸棚の鑰を帯て、暫時はいとかしこき様ながら、去ものは疎くなりゆきて、鴨たつ澤と讀し秋の夕暮にはあらねど、何となく萬物淋しく、心きいたる若い者に折ふしの病を擦らせなど、是より心空に、一向男數寄の身となりゆく事ぞかし、江戸の紅裏難波の紫、都の黄無垢と呼ばれし昔語りの姥となりし、實に折節のうつりかはる思へば、やるせなき心地ぞせらる、榎かち栗齒菜ほはらと賣りしも、程なく刺鯖蓮の葉になり、よい春や若やがしやりてと、老の波よりくる顔に皺の思はん此恥しき、詩いひ廻りしもちよろり暮て、亡靈祭于蘭盆會、門々の提灯、手づまぎりこ、細工燈籠種々の品をつくせば、送り火の跡もかすかに町々の躍見、女男の引もちきらず妾姿のぼどつれたる、下女腰元の類人の顔も夜こそと昔の粹法師のいひけん、又なく跡について去堅なる町を南へ行、中程に大きな躍の戯れ遊べと聞ゆ、是にうかれて立寄れば、名にしあふ音頭物眞似口をつくせば、人頭計にこそぞ。御免といふて押入ば、前に二十とせ頃の女、取上島田の後つきどうもいはれず、尻のよい所をしかとつめる、痛やといふて振歸るを見れば、大みつちやのひがら目、こりやならずの宮の時鳥、今一目も見られず逃へ行けば、大勢の中に髪切姿の女、兵部卿源氏油の薫ゆかし、ものをもいはず顔に袖あて、おしうつぶきたる其後より、唐様を書く去好色男、立ながら〇〇〇〇〇〇、躍に見とれて人はそれとも知らず、居合おどり脇があたつて耐えぬ男、堪忍ならぬと一

尺八寸引抜く蔭に、躍はくづれて、風に随ふ一葉のちりくになりゆき、かく忙しき中でもなればなる物、戀の盜に盆のうたぞかし

三 松に幻や戀の未來記

彼里の一番向目玉の左助、其うつりとて優く、子持に戯姿、夫と泣小坊主前に、娘といふ娘の四つになるを抱へ、寝てさへ樂みは是も同事ぞと、夫よりも直ぐ起るに相方の男と、念佛講の掛銭がよらぬ、奈良茶がこわふて草蕪か薄うとと、辰巳上りの咄聲して猪熊を下りて四條を北に見捨行けば、或家の内へ祖母と小童の走行く、こは小夜更と立聞ば、先おやすうてめてたやと、ほぎやあの聲かすかに、是も戀のかたまりと大笑して通れば、番太が舐もすこく、かたへに犬の譯たつるも可笑し、是さへ濡の浮世と、猶南に行ば、晴渡りたる有明の月雲に隠れ、雪に雨しきりに、跡より酒くさき風吹て一曲輪のかたより、一村の早駕籠辨慶松にたなびく、是はふしぎと見居たれば、二枚肩三枚肩の足音雲中にじた〜と提灯いなびかる蔭に駕籠より下る人を見れば、八丈の着物に黒き羽織着て床脇に座し、句の指合を聞き面影、其儘に女郎草といふ書を懐せり、一人の男自慢、黒縮緬紅裏四ツ目結の買紋、今は此世になき人法師とふて此頃珍しき説はなしやと、さればよしのは早や身請し、後の吉野は及ばず、其中間の女郎朝の勤め夕のなさせ、家の手本を學ぶといへど、今諸大盡衰へ詮方波の襪せりすれば、物日とても出るは稀に、正月買盆ならて其里めけることもなし、今人の心賢くやき手を知り、追ひ日をぬけて節句前より田舎へ下りの返事、猶是より末御茶挽女郎多く借金之淵に入て浮み上る事も非じと、行末の事を語るを聞ば、江戸のお七が戀に身をやき、都のお三が双の上に情を残し、難波の女はうはきに浮名を流し、小間物屋の娘は手代が連れて行衛も知らず、壘屋の妹は從兄の男と心中、乞食のむくが夫なし子孕めば、酒屋の市が歎はる男に情はぬ鹿子ぬふべし、或武家の下女は箱へはいりて壽繪の糊賣と呼ばれ、織物屋の嫁が太夫を産めば、かこひ女郎が戀の女房になる、是計はよういふたと兩人共に腹をかへ兼しが、明行く空に消失せて大笑ひの聲計松に残る、左介是を小使の帳にとゞめ置て、歳月是に合せみるに違ふ事のなかりけるとぞ

四 夜目には知れぬ管笠の闇

皆月頃の朝寝卯月より時鳥は皆聞はづして晝の勤も忘れ、夕の移り計うか〜と目を摺ながら見世へ出れば愛宕山代参り、今日は幾日二十四日、千日参夕より朝迄の道こそをかきわざなれと、入日の影ほそき頃より手松明煙草烟管はやみち忘れなど心付て三條を西へ、はなれ野になりて南を見れば、一構の戀里、焼印の編笠に餘情太鼓つれて、物々しく局買らしき男が、木平に高宮の單羽織編笠も内から着て、千本筋の細道且那強氣に行き、遠目には芥子人形の如く眺め過て、あだし野の煙人間の見るものではないと睡して行けば、昔高の師直鹽治が命と思ひし女房に無理な事言ひかけ、れど、其とをりものさ、我妻ならぬつまなかさねそと云うて笑ひ物にしけるを、大きに腹立ち



て纏をかまへ夫婦共に双に死す、師直も哀にや絶けむ一寺を造り其跡を弔ひし、眞如寺を北に見捨行けば、日もつひ暮て人顔のさだかならねど、十七計の女姿あかしちよみの裾短く抱へ帯して、加賀笠の内どうもいはれず、母親らしきが花色小紋の帷子着たる其跡に巻物屋の手代めきたる、半ざれ縞、龍紋の黒帯、さめぎや長く指て、川原町から木を持て来ましたが、裏のやねが漏いでようござろなど高咄して行くに、覺えずようぬけしうと尻を叩けば、若い者こらえず、男のついたる女に手を指すあばれ者、今一度指でもと鑿元くつろげ睨みつける、是さ色ある花の下には休ふ習ひ、美しければこそ、ほめもしたると、手に唾して娘に舐らす、八幡堪忍ならずと引抜けば、心得たりと飛びしさつてあぶない時に、牛引で歸る農人見つけて、是狼藉させぬと鋤鉄其外たこの棒にて兩方へ押分け、よい首尾になる時娘の聲して、もしや源様ではござんせぬか見しりましたといふを、松明の影に見れば、兄きが拘ひし、らんといふ娘、南無三寶此悲さの夢になれといへど覺めもせず、只何事も酒のなすわざと是より松尾の神に立願下戸になしてと小さき盃を繪馬にかけ、織部より中碗迄、汗碗から上の禁盃を立て、猶戀はやまれぬものかぬれ男

五戀の姿揃へ

「筆とれば物かゝん事を思ふ」とかの文にかきたる、萬鏡は皆うつり易く、物數奇も等しからず、年寄の若女郎を買ひ、若きがとしいきの女郎面白く、そなはりたるは鼻にもつくかと思へば、内儀の爲め隠虚火動し、美しき女房を置て横ひらたに、たけ短く大きな尻の女に現ぬかすあり、是をみれば兎角浮世は何も柳の馬場の魚釣針を仕込で、編笠に腰づけの晝飯、命限りに釣男さし覗けば、六十計の親父むすこに意見して何事も捨て、後の世の事計願もせいで、いはれぬ罪作り、朝から晩迄の仕合ようて五分が魚はとれまいといへば、是も心のむく様が樂介と早や心うつれど、是はまだるしと大綱ひかせ小鮎籠山の如く、ある座敷に上りて鯉屋か鹽大根の昔を思ひ、鞠にかゝりて餘念なきも面白からずと、楊弓片よせ、座敷穴一かくれん坊に、小笑より大笑、どよみ作りて、此醉の紛に、いざ妾といふより早く、章歌天の姥、多賀の姑など走行きて半時計に、濡姿十人、次の間に姿繕ひしてつめかけたり、去程に大臣座敷について、二人の婦を呼寄せ、ぶつて出る濡人を一々次第に尋ねけり、先一番に鼠うすぎぬ紅裏の色を表へうつして、菊の折枝小紋京六の帯しどけなく、どうもいはれぬ顔の其ゆかしさ、あれこそ姿計かは、いこしらしき目の内は、去職賣のゆかりにて、此跡江戸の大臣に、小指の先を參らせ、心中人と呼れ、浅からぬ睦言の久しかるべきためしにと讀し歌の下句に此君の名をしろしめせ、偕其次に是も同じ薄ぎぬに烏と猫の染入縮緬のしごき帯、誰が戀種か、おも草のおもわくらしや、さりとは、此君こそ扇小歌の名を高く、馴染てからの其情、たとへ命は草の露ともわざくれの、其やつこさ谷の鶯のきの花を忘れ、園のと讀み續く其下にて、いはでも御名は知るゝなり、左の臂の入ぼくろ、深い様の有わけを白地には申さぬなり、此上共にいとしがつてやらしやんせ、其跡に玉子縮緬紅裏猩々を縫紋、歳は二十五六にて、昔御所風の帯、つまはづれより物いひもしほらしや、此君は連俳に又なく歳旦の三ツ物に知る人はそれと知ろしめす、殊に手跡のかくれなく、過し年の秋の末播州の大臣へ、一寸四方の行成紙に慕戀といふ題にて五十首讀し細字書、其人様のかたしけあり、どうもいはれぬ色ぞかし、水の面にて五文字の其次に御名を推し給ふべし、四番に黒羽二重紅裏撫子の白紋わざとかまはぬ生れつき、うす化粧かね黒くふとり過たる尻いきど

うもいはれぬ所あり、是は姿は十人なみ、すぐれて藝はなけれども、第一床の諸分世にならびなき事ぞとて、若い御衆の異名して泣六といふ君なり、此かたになじむ人地黄を飲まぬ例なし、其次に加賀の淺黄のうそ汚れたるに中紅裏のうす水茶、偕も見にくい此内のおちなるべし、あれは六條のこさんとて姿はわるくはりもなく、大酒計ずは、桃の金ほしがりて、此年迄かはらぬものは振袖のかゝる大寄なればこそ、かうした座敷へ出る事、三千歳にあるてふ桃の如く、哀とおもへ山櫻、鼻のひくさを御覽んぜよと、腹を捧へて笑ひけり、偕其外は誓文の娘、あざ女、ちよみ姿、

ぬらし媚、以上いる人十人皆名を書いて、振籠一度にばつと取て見れば、否なあり、嬉しきあり、悲しきあり、損な
るあり、徳なるあり、南無天道と目ふさいで各あけて見て、互に顔を見合せ是はというて大笑ひ、七ツの鐘に起別
れ行く、うつゝな酔心や

六 戀を掘出す古道具店

戀の山いくの、道の諸分踏出して見れば、うれしき可笑さ、あほうさ哀れさ、悲しき虚さ、折節は誠さも稀に、皆
何事も此やうな事、見盡し聞盡し尋盡し瀟盡して、或夕され、古道具ある見世を南へ、過し年都の名筆集に入たる男、
伽羅の額掘出したるを思へば、あるまじき物でもなしと、茶入古筆に目を配れば、奥の方に爪音しめやかに第一第二
の絃は、ぞく／＼として立とどまる、第三第四の絃は男思ひげに、簾の内にとふに、やゝ見られたれば振袖の細眉、
其里にかはり、はでも少し華車めきてふとり姿なるが、尻目つかひいはれず、古き硯箱の値段を問へば銀五枚、銅火
鉢は六十匁、こちらの古薬鐘はいへば六十匁といふ、扱もたかしの濱のあだ波、齒のたつ事にも非ず歸らんとすれ
ば、婦が聲して是見知りましてござんすこなたへといふ、覺束なくも入て見れば、曾てそれとも白玉の誰ぞと言はま
ほしきが、能々思へば少覺えたる顔、借もかへしれいぜい以來と戯れて上れば、煎じ茶ふつゝかに汲みて十四五の小
野郎が持て来る、借も住居の奇麗さ能くすみなしてといへば、爰こそ葎なれ、二階には少し物數奇も、是へちと御あ
がりなされませいとふに、いな船の否ともいはず行て見れば、備後の裏返し疊床に、尊圓流の手して天智天皇秋の
田のといふ歌書いたる此古風さ、水なき竹の筒に作り花煤おもげに、傍には古長持、十人前の腕箱、黒檀の三味、糸
も切れ撥はかけて、此をかしさも捻りまはせば、娘出て、跡より婦男模様の古き着て暫くも娘の傍をはなれず、此美
しさ、初からと見しは物かは、大なづみになつて肝煎なしに召抱へ、捨金うれしがるほど渡して、是からはこちらの

のぢや盃といへば、小野郎銚子に巻するめ、からすみなどやうのもの、人ませもなく唯二人、心まゝ飲み、押へ呑
み、付ぎ迄呑盡す頃は、日もはや暮かゝりて、とまり鳥がすみか求めて向方の松に、雌鳥呼ぶ聲常よりはをかしく、
しゆんけい塗の短檠にともしかかければ、寢床小野郎がとりさばきて、浮世御座に木綿布圍、夜の物計は古き輪子
是は吉野の紅葉、醉顔の色に出れば、互に心の下帯解初て、同じ枕の夢をかはす、此首尾の間にいはれぬ事共、折ふ
しは可笑しき聲して、迎もの事に殺してくだされと、寢言にもあらず、是にうつゝぬかれ、千歳もかはらぬ誓言、近
き内に下屋敷の主人となして、腰元禿、出入比丘尼歌舞伎と遊山に酒浸し、夫も婦をも撞木杖で樂さして置てと、よ
い事計いひつゞくる頃、東雲白く、何をつらさに啼はじめけむと讀、しばらく鳥に別れ起て、二日酔さや覺ぬらん

七 姿の美人知れぬは心

色の道に四つの式といふ事ありと、ある粹法師の講せらし、先色好といふは、幾人の女を見てもをかしとせず、十
目のほる、所十手のつめりて、人皆是はとうつつをぬかす、かゝる姿ならでとはと、縦へば扇にかけける野郎の姿繪を見
て徒に心を動かし、五月雨に澤邊のまこも水こえてと讀し、昔のあやめ位でこそせめてはと思ふなるべし、戀する
といふはさして色にもよらず、又娘妾遊女のわかちもなく、男自慢に惚れられて、手かくものは文で殺して、歌よ
む人は歌にぬらしてと思ふたぐひ、わけしりといふ、男つきもかまはず、色も姿にもさのみはうつらず、金銀もむざ
とはまかずに女郎の手管やり繰もくはねば、増して町の女は物とも思はず、只意氣地張合優れて、悪洒落もいはず、
此道の中に至る人なるべし、放埒といふは美しきおもはくの分なく、彼女は尻つきがよい、うすみつちやが可愛らし、
ちゞみがみはをかし、色の黒いは大事な物ぢや、瘦たるは夏よく肥たるは冬よし、年よりは男をおもふ、若い
物事しどけなふてよいのというて、何につけても嫌といふ事一ツもなく、見る所聞くところ、通り町のさる末の邊、

表は格子作り、萬仕立物屋として、五十計の女、十七計の娘と只二人住み、哀えにしあらば宮仕に出してと此美しさ、唐の楊貴妃は見ねば知らず、まのあたり和國金太も是にはと思ひよる人の波枕、哀れかはす便もかなと、千々に心をくだししが、何時となく出入して、折々はたのもしき事をもして、互に心打とけ心易く、あるお霜月の夕暮、母は御堂へ、娘一人、折柄こそと濡れかゝる村時雨、音づるゝ人もなき宿なれば、誰が目をしのぶ事もなく、いつ初めか火燵痴話箱と、讀しにもたれより居て、此月頃の思ひの程虚と實を取交へ、うはずんべりの大ぬらし、娘もさすが哀にや、男の心は頼まれぬ習と計、さりとはをとらぬ心底、色をも香をもしる人ぞしるぞかしといふに、猶とけぬ心のつらくもあるかなと、是非の情をこよひこそと、男の方より下紐もといひ、千夜を一時に君やこし我や行きけん、夢とも現とも情とも嬉しきとも、日本國が散氣元へよる時、三十計の大男黒羽二重に大脇差、髯ありて恐ろしきが、白癩是は人の女にたはふれ姿、堪忍ならずと取ておさへ、憎き此男を、頭や剃る、鼻をや切る、耳計そぐかと此時の悲しさ、おそろしさ命計はといへど、眼いらゞげ、刀のそりもあぶなき所へ、母親の下向、ありし事を語りて手を摺り膝を折て、初夜も鳴り、夜半も過ぎ、曉の鳥のなく頃に、人の心も和ぎて、命からく胸のをどり、手のふるひ、足の痠さ、是にこりぬ物はあらじと獨言して、二月計こそはあれ、跡より戀の責くれれば、詮方なうかれ男、今は昔のものがたり

好色三代男卷二

目録

- 一 付盃は百里も近し
付り東女の男見に来る
- 二 立寄ば娘のかげ
付り監にたまる金銀の淵
- 三 手管はうつる水鏡
付り戀ぬすまれの戀を盗むや
- 四 思へば嵯峨の女天狗
付り讀まねば知れぬ戀の一巻
- 五 戀は愈らでいな酒香
付り湯女が情は汲てこそしれ
- 六 戀は深し涼床
付りぬれの川瀬を娘負ひこす

一 付盃は百里近し

十八番に六角堂、我が思ふ心の内はむつの角と、田舎聲のつぶれし、南紀大和路札うちて、都へのぼる比は、初の秋の半、商人折を待て見世を構へ店を飾り、是やおやかたと呼かけ、馬具はいらぬか葛籠うらふといふ聲喧しく、木綿の金入を出して錦をかやれ、判木に押たる名號をば、法念の御手ぢやの、袋中の筆ぢやのと云ば、それにして唯下直物を専と求む、或は本願寺の庭砂を戴いて瘡をおとし、誓願寺の茶湯を呑みて腹の下りのとまるも、皆正直の心から、後に西國三十三所願禮同行何人と書いたる此殊勝なる中に、十八計なる女の加賀の單なる絹に猿猴が手にて美しき男攫むさま、今様染のはてを盡して、顔容風俗都にさへかゝる姿はと目を驚す、まいて田舎人には如何なる方なればとゆかしく、連の願禮の手を引て、彼の美しき女願禮はと、ゆゑを問ふに、凡そ此願禮は國所によりて、變る習もおはすべけれど、我國には三十三所の數多くしたるものを以て、座の上につく事にして、姿よく情ありても、此勤せぬ者は宜しきものゝ嫁にも取らず、婿にもせねば、若きは戀のためと名利、年寄たる者は後の世の種に、年々かくは詣づ、夫が中に此御方は、陸奥の内にて、去百姓分の人ながら、少し由ある方の娘、わきて情の心深く、僧正遍照が歌のさまにはあらで繪にかける男繪を見て、このやうなる君に情かはしてこそと、思ひ入江の海士小船、こがれて物を思へど、近き國にはかゝる男色もなし、此上は名にしあふ花の都人こそゆかしけれと、願禮にはあらぬ男修行の君、自らも今一人の女も召使はれの者にて、共に此事に心を運ぶ、もしや此邊に優れたる男姿はと問ふ、是は珍しと指を折て爰にある町の半、表に油煙墨としたる人の息子、年は二十に一つ足らぬ、今業平と呼ばれて、是ぞ都女の戀草の種、四十五十の女房さへ是が通ふ比は走出て、子の泣聲をさへ知らず、まして其外の娘、若き女杯はうつゝぬかして夢になりとも此男を見ん事を思ふと語る、此嬉しさも聞届け、彼女に外ながらの御げん、繪に見し昔の姿は物

かはと、又なくおもひ初め、是より戀に中川の橋かけて、文の數四つ五つ、情の返事もなければ女絶かねて、東路のみちのはてなるひたち帯のかごと計も逢はん

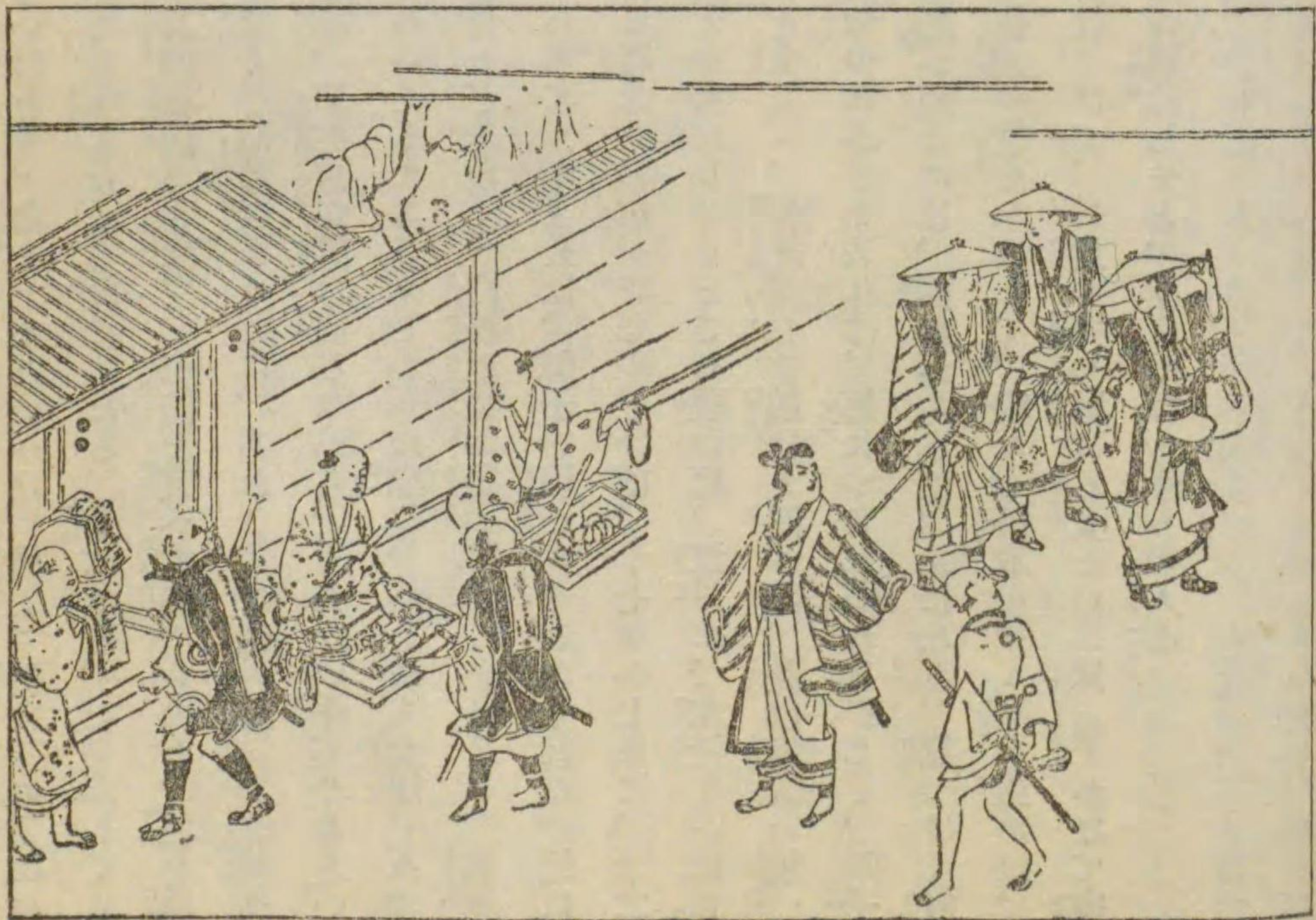
とぞ思ふ

と古歌かきて送る、みちのくの人なれば時にとつて面白く、男も此女の限なき好色又なく哀に思ひければ

東路のみちあまたある戀衣きそめし君が心しられずと讀みて互に深き妹背山、未の松をば津波こすともと戯の月も暮れて、又國元へ別れ路の此心かはらず(以下原書一枚落丁)

二 立寄ば娘のかけ(前文缺)

實に六十の親仁も、氣のとをりたる時なりに、つかひ盛の男しかもよい器量して太夫は女やら天神は紙にかいた繪やら、様つけるがよいやら、殿といふ物やら、揚屋の飯はいたゞくやら、其わけ里をしらぬのみか、當世の言葉さへ聞きわけぬ野暮助もあるぞかし、いでや手蕎麥のあばれ、大のみ、早くひ勝手知らず、各居ながれ、江戸汁



のよき、山薑の目をとをり、唐辛子の紅くゝる氣味どうもいはれず、命をとるといへば、傍より扱はその方にはそ
 ば切はぶすきかといふ、なるほど江戸大敷奇、然らば命のぶると申したしと眞顔になる、是はならずとをかしくもか
 はゆくて、此むねのわるさばらしに、沙鉢のみ五盃つゞけて其機嫌猶うき立て、三條を東へ大橋にいたり、北を遙に
 みれば、紙羽ほす男が、物洗ふ女にかならずと、聲計聞へて囁く、勤儉なきうち、あれこそは後と詠捨て東へ行
 ば、東海道のすがらとて、のりかけに菅笠して、はい、馬の聲、車引夫が煙草吸ひながら、きたない牛ぢやなといふ
 も可笑しく、白河橋を東へ、去町を南へ行けば、京つやおしろいとしたりさもしからぬ家に、いかにも女房じみて利
 發姿、かうがひわけ常よりはあちに、さうげまき繪の櫛、前帯しどけなく、白粉取扱ふ後の障子のかげより、眉細き
 顔の鼻より上計出して覗き居る、是は無疵世界の女、魂とられて立留まれば、障子の脇へ、つひかくれぬ、此にく
 さにゆかしさを添へ、猶下りに北を跡になして行く、ある家に時ならぬ踊、さしのぞけば、十七をかしらに、十二三
 の娘遠山よし中の伊達染、又まく染の帯、後高に若衆とも見えつ女なりけりとさし覗けば、江戸にて左近といひし女
 形よい分別盛になりて、地歌をうたふ、編笠とりて偕も久しと立より、偕此美しき娘はと問へば、是は皆人の娘づく
 し、幼よりし皮のむけたるを小豆の粉、小麦の糟に、其母やみがきを入れれば、何れつまはづれをかしく、舞子風
 とて、目にたつすがた、とりまはし利根に憎からぬも、晴の座敷へ出るには、親ながらうばぶんになり、様つけて呼ぶ
 もをかし、今は過し昔多くぼと異名せし娘、重といふ大盡に假初の情をかはして、程なく跡取のや、様を生めば、つ
 たなかりし親仁もいつしか昔の袖をかへ、朝に御初夜に歩をはこびて、日比の棒の跡は乙女といふ妹娘かなて盡し
 て、誠に餘念なの樂坊主や、悪性息子もたんより、出來のよい娘ほしやと、うらやむも斷りの人心

三 手管はうつる水鏡

わけしらぬとち／＼水につゐてましませ、君が情を得ん事も天津女の舞の袖、かへす／＼もおしろい白や、表は障子
 たてこめて、世間は仕舞たやの裏借屋の入疊敷に、茶釜と銅と味噌桶、米からとの外何もなく、古疊にほこり恨む、
 夫は過し比すひあげられて此世を早うせし、一人二人かは男數以上六人皆戀にもみつけれられて、をかしき咳よりいな
 顔になれば、二度此世の人にもならず、此頃誰かしたりけん

死なさずば人は徒とまるまじ物の哀も後家よりぞしる

とよみし、何時の程よりか、上氣目のしよぼ／＼顔、通りがけにさしのぞけば、名にしあふ月におなじ年位の娘、墨
 繪源氏の着物、紫の打被して、婦がびんろうじの布子袴を揃へながら、それ辻の駕籠六分で雇うてと、はしたなく走
 り廻る中に、大ぬれ判官山櫻、言葉に花を咲せ、婦に袖の下して、二階へ上れば、跡より娘恥しき氣色もなく、
 打被とりてもたれかゝる、是は急ぎの用事と、帯もとかずにつとめ、随分今日のわけ見事にと、尻をたゞけば何さん
 すといふ顔もにくからず、娘は駕籠に乗りて婦なん供して走出る、此娘に年中の入用それ／＼につもれば、凡そ三人
 渡世する程の稀な物出して、しらぬが佛といひながら、人の上荷とらるゝ事、其身にとりての口惜さ、是を思へば我
 が又なく思ひしもかくやは足のあるものに油斷のならぬ世の中と、夫から直に行て聞ば、奥の一間に二人しめやか語
 り、一人は男聲にて慥聞たる所あれば、誰ぞと夫に問へば、誰様もござりませぬと計、弓矢入幡合點ゆかずと座敷へ
 行ば、在し女計顔を赤めて、ようござんしたとき聲の返辭して、そこ／＼見れど人影もなく、唯けがれたるのべ
 紙残る、是に心つきて、そこら心をつければ、ざしきの外面の路次口此周章に引立残したる、能々おもへば是ぞ戀の
 ぬけ道、雪踏かた／＼、田舎よりの注文附とり落しありけり、是にて夫と我ひとりうなづき、其座にて三下半をかき
 て渡して、かうした戀のふちせ陥らぬ先にと、飛鳥川の又かはつたさはぎするこそ、此道の水の猶水にはありけれ

四 思へば嵯峨の女天狗

妙なるかな妙は物毎にはなれず、萬の物皆妙を具へて、春めぐみ、夏茂り、秋收め、冬かへるより、狐が鼻毛をよせ、青鷺の野衾となりて人を惑はす、是猶妙なりと思へば、昔米典子の龍をゑがきて忽ち天上し、ある社には夜毎に獸いて、騒動しけるを、去人弓を以て射ける、夜明て見れば狩野氏の何某が描きし虎の繪馬なりしとかや、此外神泉苑のときの屏風、信玄の花見枕、守部の晴明、薬人形を作りて是を加持し奴となし、一生給分なしに使ひし、去時計からくり師は女の禿あやつり茶をはこぼせ、井戸車をしかけて、人なしに水を汲ます、是を惟ふに、美しき女郎繪をかいて、是が投ぶしを謳ふまじきものでもなしと、繪自慢の男、心をくだき、あたまをわつて、一筆三禮の女姿、小法眼も手をうち、雪信も筆を捨つべしと、自ら又類あるまじく思へど、彼唐人の牛を繪がきて、童に笑はれし事を耳にふれ、ば、女郎花の在所嵯峨野の邊、此道に達して、しかもわけしりの男、是に見せばやと行き、太秦の邊にて怪しく美しき女一人立向ひ、其方様にはうしし繪に自慢して、是より美しき女は世に又非じと思ひ給ふ、草の葉に置く露のぬれて、伏屋の月の情へだてぬ、是を始て此廣い戀の路に、井の内め、ご心、世にすぐれたる美女盡しを見せ參らせん、此方へと手を取て脇にいだけば、えならぬ薫雪の肌いはんかたなきが、風雲の飛がごとく、夢計の内江戸吉原の大門口に至る、見れば熊谷笠大小のつかみざし、いづれ都男にかはり風俗、揚屋さん茶、今の太夫の道中、高尾夕霧昔の女郎よりはすぐれて、一目の難波の新町も詠め盡して、夕暮よみし伏見の戀里、百舌鳥といふもをかしく、撞木町に泊るといふ事誰も知りたる事と合點して、昔團子の吸物したる時にかはりて、女郎の風もいづれ京めくに、此所へかよふ人を見れば、都の里の跡わけたらぬ男、其外は歌舞伎役者、茶屋の亭主大鼓の手もめ所、目の下に詠め、猶此島原に飛行すれば、折節の躍常よりは賑々しく、今の金太夫が世になき美しさ、和國唐土がしな

せ、手管の文、横の切さま、雪隠の口にかぶり付てと先の巻に書きたる、其儘に見捨又元の嵯峨野の去小社に依ひて、彼の女空中を小手招くに、不思議や向の木の下に道中ふつて出るを見れば、其美しさ類なき女郎、雲の如く霞のたなびくに等し、あれはと問へば、彼女指して是は昔の勝山芝垣といふ小歌に唄ひし比、紅の糸を組て鼻緒にせし、其跡小紫昔の初音古左衛門、前の高尾、中古吉野、此外は指もたゆく、皆古き物語に書いて此世を去りし女郎、いかなればかく此君達のみみへけるぞと問ふに、去ば此女郎達皆我ながら我姿に惚れて、高慢の心強く魔境に入る、此外清十郎が思ひしお夏、源五兵衛にぬれしお萬、皆女房自慢して小歌にも唄ひしものぞかし、跡につづいて年たけたる女郎の袖を顔にあてたるあれば、北向のかつ野といひしをろかせ、是はふとざしの足袋さす事に妙を得、此慢心にてかゝる仲間へ入りぬとをかしさも腹をかへて後、彼女のいふ、我は是うしし繪にせし女姿の精なり、汝が自慢せしにより、此境におちぬ、自ら不思議の書を得る、今授けあたふる穴賢、人にもらし給ふなといふかと思れば、忽ちうつくしき顔の鼻高く背に兩の翅生ひておそろしさ、雨をとばせ雲を蹴たて、何方ともなく失せぬ、此ふしぎさも餘り過て、一巻の書を見れば、好色しのぶ山と書けり、人の心は奥もみるべくと、我計うなづき他見をなさず、秘して箱に納め置けるとぞ

五 戀は癒らでいな酒吞

松になりたや有馬の松、藤に巻れてと唄ひしはいかなる君にや、野に麥こく夫、のりかけひく馬子迄口號にする、何處も色より情の世ぞとかたりく、俗も此所の私雨戀をふらすかと袖ぬれて行ば、頭痛疾癆瘵氣の娘、老たる人の腰のいたみ、其外脚氣、血のみち異様にかたづきて、足のながく手のみじかき、わきて濕毒の滯を治するに又なく、是もとぬれより發りて、戀は貧病の長たりと大腎論に書きたる、佛も此病計は強く守り玉ふにやと頼母し、

抑此温湯の初めいつの比といふ事を知らず、攝津國の風土記には、有馬郡に、鹽原山あり、山間に鹽湯ありと、是を思へば鹽原山といふを以て名とす、いつの頃よりか此名を忘れて有馬の湯と計人はいふなりとかたるに、合點二つ三つして行ば、一の湯二の湯二十坊の其一ツの家の六疊敷にやどりて病咄より外なく、隣には田舎の侍衆めきたる、此方の儒者らしき四方髪はるかみの男、障子一重の彼方に、都の去大臣或女郎請出して年久しく根つき柱の男子もなければ、此湯に入りてと夫婦づれの此孝行さ、御見舞の籠餅、二口の求肥、鹽瀬饅頭、引もちきらず、とめ湯とて晝比より夕迄、此間外の人を入れず、幕打過まはしたる此餘情、いづくも銀の光ぞかし、是を見てあるわび湯人の

見るからにいと心もわき出る湯も入あひのかねの浮世や
 此可笑さも斷過てこなたを見れば、年比の若き女打連て歸る、皆豊後絞の浴衣、日野の紫のしごき帯此所にての女姿あれはと問へば、大湯女小湯女とかや、姿より心さもしく、上れ／＼の聲も喧しく憎し、よしそれはそれ情らしき彼姿、いはて只にや止なましといへば、皆定りたる男ありて、その事かたやの角介、あの跡の若き女こそ、元は都にそだちて色事にすぐれ、所の人呼びて丸木ばしと異名す、まだ夫もなく一人居の男好みて、假のものにはあからさまの返しをだにせねば踏かへさるといふ事なるべし、實に所からは優しくもいひ出ける物かなと、尻付のいはれぬを詠め過して、其夜半の寝られぬ旅枕、下女の來て、有明其外煙草の火に心つけて歸るにとりつき、かう／＼の女にうつ／＼心、ありし氣色の根はぬけて、又此戀の病袋、包むとすれどほころびてかくはしらすぞといふに、やすく請合ければ嬉しくて

夢かともみし忘れぬ面影、猶絶べくもなき思ひのほむら、さても命は有馬山、いなの小笹の一夜ばかりと
 書て

我思ひいつかけそめて丸木ばし絶ぬ泪や谷の下木

女是に限なく思ひ亂れ、日比は朝比奈、畠六郎よりも、強きといひしも、ひかるゝ心にや成けん、流れておつる谷の下水といふの句計、此筆の跡のうつくしき、男もわりなく馴て古郷の空を忘れ、始一まはりといひしが、二まはりよりいくまはり、かくあるべきならねば又の年の此頃、向ひ湯をと契れば、女も又たなく悲しく人目を包む習なれば、其宵のほどに名殘盡して別れのぼる、其つとめ殘る所なく、かた身の品より萬何事につきても、さもしく拙きわざ夢計もなし、いかなる人のかくはなれるぞとしひて問へど、あからさまにも言はず、只此所にそだちてと計、今に此奥ゆかしさ、田舎に京ありとは此事ぞかし

六 戀は深し床涼

螢こひ虫／＼とむしくる暑にたえて四條河原の床涼、水無月のなごしの被と讀しに等しく、水面に三河屋が客待顔、くもてに床を下げば一よ切三味線川風に淨瑠璃鼻歌花火線香時ならぬ櫻に紅葉をちらし、鬼がおやまにしやくしが猫のからくり的、寸地のあきたるはなく、ところてん見世、野郎祭文うはがれのいきずみ聲、軽い浴衣にとりあげ島田の水茶屋、にくきは一人もなく、松やが細眉も似合はず、玉やが首筋の白く清げなる、いづゝやがちどみ髪も好ましと詠め行けば、提重辨當のはい／＼聲いそがはしく、床にあらりて月稍人顔の見ゆる頃は、仕舞太鼓のどん／＼、よいはさて夜は明て日は暮るとも、床こそ命と吞じらけて、うつ／＼心に詠め居れば、むかふの家より十七計の娘、肩けだかく、いはれぬ美しき莞爾たる面ざしに、盃こけて流るもしらず、白き單の絹に雷公の雲より落て腰叩く體、うしろに松の枝の二つに割ても離れぬを、友禪風の繪して色彩書きたるを、此達手さ心あるべき模様、八文字踏んで川の岸になる時、ある床の上より四め結の紋着たる男尻からげして、川中鶴よりもはやく、いざ負て床へといへば、女打笑ひながら、君をおもへばかちよりぞ行くといひます、共に手をとりにて渡らんと此心の忝さ、我が心の深さ、おひ

たしてこそ君にしらせめと、一向に肩にかけて行く、あたりの床より、よふ人殺よぬけしうよと、どよみ作れど、外のみる目もいはぬ此厚さ美し顔の千枚ばり、川半にてずぶくと浮きぬ沈みぬ流れて、半町計二人ともに手も離さず、水もらさじといひ顔、あたりの床より引きあげられて是ぞ詢のぬれもの、手たゝいて来いよといへば、遙の方にあいといふ返事聲して、挾箱より女帷子二ツ男帷子羽織脇差印籠扇鼻紙袋迄揃へ来る、何處よりとも知れず、とめ伽羅のかほり、暫しありて娘の着たるを見れば、薄雲の當風染に命なりけり佐よの中わんと染入たる、此歌の中に娘の名はありけるとぞ、男は尺八女は琴の曲をつくすに、人皆魂とられて此ゆかしさ跡をしたはんと身繕ふに、空定めなき夏の夜の月雲に隠れ、夕立の雨車軸をなせば、人ちりぐに娘の行衛も見失ひ、歸るべき軒もなく、たのむべき傘もなく、皆ぬれものとなりにけり

好色三代男卷三

目録

- 一 戀の地獄廻り残る質札
付りやきしむくひのふるや女
- 二 なら坂や此手を取し達手女
付り大りき女片輪まをとこ
- 三 戀知りの祇園ぎつね
付り花づくし戀の評判
- 四 友なし男戀を釣るらん
付りあやしき一步小間銀の精
- 五 濡たる尼の袖のむかし
付り雨に聞たる戀物語
- 六 聞残したる北國をんな
付り戀わけ兼てかゞの山中
- 七 情の浅き錢の數ほご
付小歌びくくの豆腐やの夢

一 戀の地獄廻り残るは質札

武藏の江戸の榮ありがたき御恵に民居をやすく、酔狂の喧嘩陽氣の鑑とがめの言葉のかども大きに和國の風俗、今四の浪靜に農鷄千年の壽をなし、深川の石龜も萬々歳をよばふ時なればなり、爰に棒かたげて妻子を養ひ冷水賣て親をはごくむ男、ある夏の朝ほりぬきの水汲むとて誤りて井戸へ落て沈み行く事其幾何といふことを知らず、石かけの露水の煙を凌ぎて稍暫し、一つの平地に至る、渺々と廣き野に目なれぬ草木生茂れり、此ふしぎさ野草芳菲紅錦の地と詠め行けば、昔都さる風呂にて見し吉といふ女、古にかはらぬ姿、物をもいはず男の袖引くに心得ねど打連れて行けば、一ツの樓門にいたる、見れば好色獄といふ額、二人とも別所の穴より入りて見れば、高山ありて紺の大なし着たる男三人此峯へとぶが如く走りあがりて、又はしり下る事間なく、同時にあつというて消える、此時に女教へて、是しやばにて去おろせ、戀の里へ其わけ知らぬ人を引導き、都より一里の程を夢計の内に駈り行し苦の哀さ、こなたへと其山を越れば、遙の麓に時ならぬ松茸の形して大きな物生出てたり、此は燒印の編笠かして情の道をしたへるもの、地獄、是見給へと上なるものをとれば、此世にて見しひがら目の男一角もらひて嬉しがりし面ざし違ふ事もなく、さしのぞけば、かい消えて失せぬ、其山を過て、一ツの池水に、美しき女の浮きぬ沈む有様、是こそ娑婆にて酒をふき皮むきたる太鼓女郎、世間へは美しき底なしの陶とよばれし、もつかうに桐のとうの紋計は飽、其技ぶしも、うたかたの池水の沫と消えて音もなく、猶迎れば或別所に、盛切の飯多くならべて、年頃の男女是を服せんとすれば火焰となる、こなたには茶漬の飯に女郎の美しき心が燃上りて其身をやく、是はいはずとも推し給へくつはの地獄、こなたなるは、なんどめしの思ひ死と、事精しく聞き盡して、其外の地獄は無量にて覺えず、傍には人多く集りて姿は見えず、燒よ、とめうぞよと、どよめきて物さわがしさ、一ツの小家に煙おそろしくたつに、彼女の

いふ、是自か地獄なり、わが母娑婆にて川原町に洗濯屋して居給ふかたへ、此くるしみを語り、跡甲ひてたべと、念頃申しといふに、しるしなくいかゞは人の誠とすべきと云へば、たいまいのさし櫛きつかうに梅ばちの紋あるを見せ給へと差出す、是も世の常多き物なれば、身にちかき物といふに、はな紙入より質札二枚とり出し、是こそ母へ合力のため置たる物にて、能く知られたる事に侍る、今は時刻になりぬ、さらばへといふ、波の煙の中に紛入りぬと思ひて目をひらけば、伊豆の箱根のふもとなる岩穴に、日數經て出でけるとぞ

二 奈良坂や此手をとりに達手女

貞女兩夫にまみえずと、唐土の巻にかきて、皆人々のそれがよい事とは知りながら、若き女は心しどけなく美しき手して、今よりの涙の程のいかならん、或は思ひの袖に朽なんなど千束していふ文に、よわき心はいと薄のいつとなく亂れ初めてより、初のほどは只一度の情計とこそ思ひし、後には忍ぶ戀の面白し、あふさきさるさの人目の關をふみならず、たび重なれば此事ひろく世の口號、狂言の種となることぞかし、爰に奈良の昔の京の或町筋、夫は仙臺にかよひて、二歳三歳に歸る雁の都の霞白河の關と能因がよみしはるけき道すがらを、此内儀の物思ひ我床はみなとならん、よなくの涙の雨の降りつもれば、かたしく袖は波の浮草といはまほしく、只東の事のみ、明暮指を折り月と敷へてと、心細き事になんやるせなき、さても此おもぎしの美しさ、咲き出たる花よりも猶あてに、風は女郎めき、手跡世の常に優れ、よみ捨てても又つたならず、我にひとしき女二人めしつかひて、僅なる裏座敷に折からの哀れを思ひ、琴引きよせて

詠むればそなたとばかり月かげの雲のいづこか東路の空
 とよみて殊更の時雨物淋しく、當世歌のせて更行く月を惜み、銚子に盃をかたづけ、それづくに醉心皆次の間に夢

見る頃はいとねられぬ床に燈火そむけ、衣裳人形の手づま、目もたゆく、打かたぶきたる障子外より人の音して戀しなむおなじうき名をいかにしてあふにかへつと人にいはれんとよみ入たるに驚き、立休らふ袖に縫りて、此年比の思ひ、神計かは佛も親もと誓に入て、夢計りなる手枕、誰に憚る事も嵐の音高しと放ちもやらぬ氣の毒さ、重きが上といひし昔の人もこそ候へ、人御情は又なき御心ながら、儘ならぬ身は許してといへど、ながくもがなと祈りし甲斐なき命も、かゝるよすがを待てこそなれ、よしや月は明て日出て、耻がましき目見るとも、諸共に此双の上にと思ひ定めたるけしき、此上は免も角もと互に心打とけ顔に、男の兩の手を取て少しも働せず、これよ女共と呼聲に皆々目覺し、是はというて能く見れば、其片ほとりの男自慢立ちずぐみはたらかず、門より外へ追出して後々様子聞けば、兩の肱骨くだけて思はぬ戀のかたは者とぞなりける、世には美しき女と計り、かゝる大力とは是よりぞ知りける、力は昔の巴板額女の類、心中は誰にか較べん

三 戀知りの祇園狐

櫻咲遠山鳥の今様染、あの娘みやつたか、奴風のんだら折柄の幕染、花見に小袖の是てこそと、浮立ちて四五人一重櫻の早きが散れば、きりがやつ半、虎の尾は、火ともすに吞たゝれて、幕より目計を出して見居れど、構はずふつて行く女、目もたゆく指もをられず、能うぬけますといへど咎めもせず、腹をも立てぬ人の心のすなほにおとなしさ、實に治まれる御代なればなりと入相を忘れ、神前の御燈に肝つぶして、幕と辨當は久三に預け、先へ戻して、ひごろ心の猶ある觀音のたうとい隣の座敷に上れば、かはらぬ鹽貝小梅干りきん綺西陣郡内に中紅裏着たる女、慳の三味とつて踊り歌の舌ばやな事唄うて、それへ指ますといへば、三味線撥ておさへますといふもをかしく、色黒きひがら目の女がぬるくうすき茶を運ぶもにくし、是を追出し茶とかや合點すれば、自りに床とつて木綿布團、古屏風に

夢の情の祭わたして出れば、又十八計の女、横太たるがでて、つれの男に逢ふ、昔は一座の男にさしあひもなく、情をかはせし事なるを、何時の頃よりかかく分を立て、其戀も優しく、稍更け過るに、奥なる座敷になげぶし淨瑠璃程拍子、役者ならめとさし覗けば、法師姿の長頭巾魚物珍らしく調へ、大酒瀧を流し、あだ口えもいはれず、百八煩惱の夜半の鐘に驚く法師姿、近き中にさらばへを、うれしく立出る、跡より續いて道すがらの噂を聞ば、此所の尤もそろへいはれぬ可笑さ、指を折れば、

- かはらぬ物 とこ入の木枕
- をかしき物 いろが音がたり
- きみのよき物 屏風とへにきく
- ながきもの いろの袖下
- かはりたる物 なげふしよわわけ
- いやなもの むしやうにほしがら
- きみのわるき物 むしんいひきうな女
- みじかきもの 此所の夜あそび

此外木瓜の吉の腹の痣、池田のかるがしかけ、柏の六がつめるの、はりまのみねが居眠る、三河のやつがふける、山田のらんは底なし、井筒のふたせが尻つき、よろづの娘がをどり、ふしみの市がせいもん、みよしの銀がくされ、ちやのしなが氣のない、此外は數もおぼえず可笑さも腹をかへ、猶跡について四條小橋の邊にて頭巾とりしを見れば、殊勝らしき出家姿、懐より衣を出し、水晶の珠數手に提たり、是は不思議と守り行きしが、御たび町の中程にて姿は消えて大きな尾をふり、くわいくと鳴く聲計、柿の木の残りて跡なくなり行ぬ、是ぞ日頃聞およびし坊主狐とは是なるべし

四 友なし男戀を釣るらん

于蘭盆に亡魂の來るといふ事偽か實かしらねども、親なき者、子に離れたる者、夫なき女、九日より十日迄、夜晝

のさかひなく、六道に詣ず、此所前は六婆羅寺の觀音たうとく、後は禪林建仁寺の仲間にして、人聖靈を迎に此所詣する事は、いつの頃よりといふ事を知らず、昔小野篁頓死して、七日が間に地獄極樂を驅りめぐり、焰魔王に暇申して、又此浮世に歸るとて此所へ出て給ひしより、冥土への通ひとて、一ツ鐘の音もすごく、是よりの清水詣て今日計は千日にむかふとかや、愆らしながら直にこゆれば日も暮れかゝれど、猶人多く、先へ二十歳計の女友もなく只一人跡より、もし送りて進ませうかといへば、何言んすと、神かけて仇言葉に非ず、若き御方の暮行く空心元なし、ひらにといへば御心ざし忝なしと此嬉しきも、右の手を引て宿などを問へば、さだかにも言はず、室町なるさる方に宮仕してと計、ある茶屋にて酒一ツ參らせんといふに、いな舟の嫌ともいはず打連て行く此心地よきに、つきのはり行めぐりしける程に、下向の頃は人影稀に月漸う更けて物すごく、三年坂をくだりに行き、ある野の傍より黄白の光り物四方に照し、おそろしさいはん方なく、身を縮めてさしのぞけば、一の松の下に二人の異相ひびをいれて又餘念なし、一人の形は北州にひとしく、面四角に丈長く、色は黄にして桐のとうの紋付たり、今一人は顔丸く色白くしてみづちや是といふ字を紋所せり、二人の者さしよりて物語るを聞ば、我は都去大福者に家久しく四角なる箱に入て納め置かれ、土藏に深く住馴しに大盡おとろへて鳥のうき巢の如く、内證は虚に倉の内はちんからりとなりて、おもはずもさる手代の元に渡り、鼻指袋に月をかぞへ、けぬき伽羅の油を友とし、此邊かけりめぐりて、假にも能く諸分の里を知らず、終には又我も柏の紋ある茶屋の手に渡り、明日は鳥目に身をかへられ、其行衛は白粉紙の油、薪干菓子番錢と迄なり果るといへば、色白き丸き顔なものが、我は去しはん坊の風といはれし親仁の元にかたい事計聞て死料にのけて置れし身なりし、何時の比か去寺へ念佛に氣をつめ、捻帛に取入れられて、或時は生鯛鰻にかはり、干瓢山の芋ともなりしが、今宵去情人の手に渡り、大坂なる親の元へ文の身となつて下り、此時のくるしさ、此後かどやと名付け露と呼んでつかふ物としり、まく物と計思ひて、つくる事なきたのしみに限ある費を費す、金銀の恨つる時、落魄の身となり行に、千度悔ひ百度悲めど歸る金銀なく、淺瀬く難かしといふかと思へば、忽ち二ツの光滑えて、小社の燈火、犬の聲幽に、只一人つくく思へば、金銀の精なるべしと、是よりまふけがたくつかひやすき事を悟りけるとぞ

五 濡たる尼の袖の昔

山は松茸世間は杉燒比のある日栗田口の片山蔭に座敷結びて、昔かの里にて禿つれたる女と共に、男は十徳長脇差、下女童一人使うて、秤をおり十露盤を捨て、食物も萬茶碗にして、此奇麗さも又なく差覗けば、忘れては夢かとぞ思ふ、思ひ掛もなきに、是は珍らしと一間なる所に過越の浮氣そゝりを語り暮せば、歸るべき道覺束なく、共に枕して狼の氣疎く、鹿の哀なるを聞き明し、なんと夜既に五ツの頃は雨そぼちて物さびしく、誠に草の庵の夜の雨も思へばいと淋しきに、隣の庵より秋月といふ尼の尋來るを見れば、東にて見し蘭といへる女、さても久し命全ふせし龜は、煙草切夫を持したためしもあるに、偕此姿はと在し昔を問へば、浮氣と虚と阿房なるより外なく、皆大笑にして、猶ひがしのわけをとふに、凡そ色の勤めは傾國にかはりて、夜晝のわかちなく肌をふる、男其數を知らず、嫌なあり好きなるあり、大盡あれば小盡、折節は何やら身うちに出來た男、十人並にはづれたる物持たる、鼻のないあれば、口中のくさき、此のかなしさも、たれとなくよせては歸る波枕、しつほらわはならぬくるしさ、纒の給分も皆母親のやしなひになりて、身にそふ物夢計もなし、のべ紙白粉とめ伽羅も人様の情よりつとめ、わきて朔日八日十日二日十七日は此所の物日、やかましきも、忙しき、奥に客あれば、二階にも客、其外は居間中居に至る迄、我まぢ顔、息も絶え命も終るか、此否らしき悲みとは、いざ白雲のたちまはりて醉狂に沈み、粹立をはまらし、惡洒落をぬらして、陀羅尼のかね恨めしく、かくつとめても末のよい者はすくなく、多くは役者の女房、元の所作にかへりてすむ水茶屋の娘となつて、行燈に顔をあかむ、此所の習三十二迄ふり袖を着て細眉、三十三の大役をわきあけの限とすれば、

人様の三十と見ゆるは四十五の齡なから、みな化粧花の露に手いれして、鏡に向へば我ながら眉よむものならで、是も又はぐる類と、此外此里のわけともを聞くに、ある時はをかし、ある時は哀に、此後の物語は居眠に聞さして尼の歸るもしらずなりけり

六 聞遣したる北國女

いとをしき子に旅衣きてみわばしれぬ世間ぞかし、情ある里、戀しらぬ村、貌も姿も心も同じ心から、我に等しきひとしく、定めなきこそ浮世なれと、唄ひて今は昔加州の山中に湯治せし、都をばまだ明けやらぬからび聲の、鳥と共に出て近江路も昨日にこえ、越の巻打過行く、時は彌生の始、まだ消え果ぬ雪をわけ、寒歸る風を痛く、ある宿に到る、日もまだ半の過なるに、はしたなき聲して、泊らしやれは泊らしやれのれと、所言葉の此可笑さかやりてもゆかず、ある茶店の婆々にわけをとへば、此所に名高きしやらには、幾世花月玉川萬作など、指折てかたるを聞けば、都にての色人を所からとてかくは呼ぶとかや、難波のあし伊勢の澤秋の類



と、合點して猶先の道をとへば、まごちやくし湯尾峠とて、難所から尻こそよけれ心微たんほほと、舌つらみうつて行けば、又一つの宿、まだわらんちもとかぬにお慰みをとひかゝるを、上手いうてはづせば、はかしくしなまきさへなく、しやらよばぬ旅人にはいふて、あらけなく破れたるふすま一枚跡先かまはず、明日は夜明に御立かと計ひ捨て行く、其隣の方に調子たかく手拍子忙しく唄ふ聲、都にはよふ變りて可笑し、過るに夜もいねず、朝立にして剪刀毛拔の名所金澤とかや、人の情も同じやうなるを詠め越て、其又の日は加賀路大正寺人の心もいぶり橋といふを過て、脇道にかゝり山中に着きぬ、二まはりの程に、身のいたはりも癒えぬ、是より北國の堺金澤を見ばやと、本道に出て、千代のためしの小松につきぬ、是なん加賀絹の在所にて、家毎の女糸機の業、一人として憎きはなく、越前男加賀女とかや、去人のいひし思ひ合せて、手取川かしの松任野の市を過て金澤にいたる、時しもこそあれ、明日は衣がへ、初の日此所の神わざ上下足を空になして、淺野川觀音堂にまふず、誠や都にて聞し、白蘇黒蘇のぶたい躍も此所ならんと詠め行くに、朔日二日は神の御能とて、老若男女袖を列ぬる事上方にもおさくをとりぬ事と見盡して、子安堂にやすらう比、いはれぬ美しき女姿三四人、袖の香ゆかしく、風俗京はづかし、吹風にひるがへる紅裏さながらにくからず、細ききよらなる脚のちよと見ゆるに、ぎよつとして昔物洗ふわづかの色にさへ通を失ひし、こちは女房なればこそ目もまはず脈もあがらで、跡より女の童の風呂敷包持たるもよしありげに詠め過て、さる道行く若人に此美しき姿はといへば、是は此所に名高き情人、いつの比にか小かぢ、こけら、入はしなどとやらんきしは、又なき姿、色ふかく、都女郎難波女にもすぐれたるところを申せとかたる、耳とつて鼻かむ計、猶委しくと跡について行きし、石壇の邊より見うしなひて、此ゆかしさも本意なく、思へば此所に武の八の道といひし都にて語りし人のあるに尋ねあはせ、此わけも知りぬべけれど、古郷の女の産前心元なくて歸りのぼりぬ

七 情の淺さ錢の數ほど

當世の流行歌、今宵天満のはし／＼きけば、なみだ樽やのなじみのと、小比丘尼の鼻たれ尼袴だをしの帷子に、菅笠の破れて月もれといはまほしきか、ちと勸進といふ、我は男さうな、いや女でござる、それならかの所見せたらやらうといへば、ひよんなさもしい事計、米下さんせと、まだ幼なく其譯もしらぬながら、かくす物とてかはひらしく、鳥目取らせて、姉はと問へば、向ひの六尺衆の部屋にと此心地よき、歸るを見れば、姿は富士のお山といふべき、雪より白く清らなる帷子に、日野の相傳茶の幅廣前帯にしどけなく、黒き帽子にかく笠の内、いはれぬ美しさ、跡よりついてある辻の人通りなき所にて、是やと呼びかけて、かゝる思ひを住の江の岸うつ波の自のみ、立迷ふ心のほどを知らせばやといへば、ふり返りて御志の又なく覺しめさば、かう／＼の所へといふを聞届け、暮るもおそしと夕日かげより寝ぬに明けぬといひし夏の夜さへ、ながふ短ふなつて、東雲頃の烏うれしく、午の前巳の過より誓願寺に詣て、左の手して、通りがけに佛を拜み、右について四條を東へある豆腐焼く所へ行けば、夫のにつこり、婦のうなづきより上へといふにあらば、古壘にわるくさい匂ひして、山科繪の槍持の奴押たる屏風丁つかいもはなれ、丸太の切株を枕にして、暫時は屋根裏の垂木を敷へしが、門を覗けば芝居心の人脇目もふらず、祇園清水の參詣は女の尻つきをおもひ、振袖をしたふも又なく可笑し、稍ありて昨日の比丘の通る時、内より茶釜の蓋をちやんとならせば、何事もござんせぬかといふて入る、をかしきわざと心に計合點して居れば、其儘に二階へ上る、待宵に更行くかねとよみし、待宵ぶる程つらきは世に又なき事ぞかしと恨み、酒一つ二つ過てかゝる事をすれば商人の先行かせぬと、去親仁のいひし耳の底に残りて、心もいな物なれど、此座になりて誰か堪忍すべき、兎角わざくれ、をかしき事して集禮をとへば、花代其外わづかなる諸分、此心やすさ、又の契りをと名残れば、比丘は出て姿も見えず、其跡にて婦が袖引て、去にても此者の異名を竹くぎとは如何なる故にやと問へば、打笑ひ、はて頭がないといふ事と、是に合點して點頭きて歸る、實や道は道に入て問ふに如かじ

好色三代理男卷四

目録

- 一 見せて恥かし戀の手の筋
付り都の町の見通しの宿
- 二 似たものは女郎の果
付り泪は袖のあがり湯を汲む
- 三 又戀かへて難波若衆
付り刀のそりを酒にことほる
- 四 野郎の老の行衛定めぬ
付り戀の重荷の駕かきて世を
- 五 二三度蒔し好色の種
付り戀の古たが夫婦いさかひ
- 六 おもひのかくれ庵
付り戀道心の戀をみちびく

一 見せて恥かし戀の手の筋

村雨の空定めなき戀のぬれ絹ほして見れば、虚と身すきとの情計かと思へば、折ふしは氣のとをりたる心中ものもあるぞかし、美しき姿して情なからんより、我も鹿鳴いてぞ人に戀られしと讀し内儀の昔を思へば、よしやみつちやなりとも心こそなれと思ふに、面影は千兩にかへし女にも劣らず、風流奴女と呼ばれ、源氏の襟裏純子ぬいかへし帯此君に始まり、琴三味茶道立花女能をして小つゞみさへ男恥かし、魂とらるゝ男、能き便を求めて命なき思ひを告げ、或は道行く隙を得て文を抛うち、心の色を筆にそむる大盡蜂の如く起り、金銀を蒔て外の情をとどめ、人の涙川に袖の欄かけて其通路を止め、我手に入れん事を思ひける程に、濡手に四角な物つかみ、とりもちに饅頭形なものをさして何時しか門にかけ、棟にむねをならべて、今日が初日はかはつたといひしも夢さめたる親仁、何事も前世によい種をうゑてと去人の占ひし思へば、逢ふも不思議、あはぬも不思議ぞかし、爰に道満法師相傳手の筋の占日本無双と貼札して、去し悪性行先の善悪是ぞ誠の見通し、そなたは人の息子ぢやが、其氣のちいさゝ局狂ひ計する人ぢや、手の筋の上へのぼらぬ、爰な人は女郎と言分して口舌の最中筋が切かゝつてある程にといふを、能く聞けば少しも違ふ事なく、其次に紙子の破たるに、時代編笠の古きを着たる男を見て、是はふしぎ當地の人でない、雪あるはるばるの國を來て、今捨て遊ぶ大臣、今日女郎請出す相ありといはれて、彼人つゐたちて行く、あの紙子姿調うたふ乞食かといへば、五度も七度も點頭く男、合點ゆかずと跡について行けば、北の横町に四枚肩の駕たてゝ居る、おろせ走寄りて占は何と御座りましたといへば、成程よしのと古き着物とつて四方の乞食にとらせ、挾箱より黄八丈郡内の羽織脇指帯巾着印籠ありし姿を引換、其儘生れの大盡、占者への禮金三三十蒔散して、駕籠は彼里へ飛行く、是はならずと肝つぶれて猶後の占を聞けば、其方は心中死の相がある、爰せん筋が見ゆる程に、必ず陽氣をたしなまし

やれ、こちらは祖母も戀て浮世を渡る人ぢや、否そのやうな覺はないといふを能く聞けば、去町の産婆なり、是より戀の上もりはなしと大笑して、いはれぬ所へさしての磯のうら千鳥、ちどり足して歸れば、其次に二十歳計の前垂女何所やら面白い所あるを、是はふしぎや、かゝる姿する人ではない、先通りのかして手の筋がとほつてある、其方には親もなく兄弟もなく、祖母様にかゝつて居る若い人の悪性さ、向ひ隣の角前がみに、又なき戀をしかけ、此事ひろうなつて、二人共に追出されて、其有様も近き内によい事がある、隠居のばゝの貴い所へまゐりやるその跡を丸取にし、今の男をすひあげ、後の男を追出し、次の男は吐血し、猶其次の男、漸う地黄大補湯にて情の末を透くべしと、恥かしさもをかくし出て行くを、跡よりつきて其後の様子傳へ聞くに、夢計も違はず、占もあへば合ふものぞかし

二 似たものは女郎の果

今朝の風夕の時雨青葉紅葉も皆散落るに、松計はすまして何時も青き枝に、昨日の雪のまた降り顔の淋しき宿を出て一風呂心、小者に浴衣かづかせ行けば、かたへより焼よといへる聲、喧しく、刀研て世渡る人此道に達して曲を吹く品、耳を驚かせばにくからぬ女の男思ひ氣に、かへ湯より櫛手拭まで、心をつけて其まはる事、男になりてか此心いか計と餘所になして、其奥の一間に入れば、宵の姿にかはり京郡内の棲高にあり、京物いひ、偕も世に似たる人こそと、京茶運ぶ女にとへば、我が思ひしに違ふ事なく、其女少しの間借りてといへど、折からのさしあひに其事もまゝならず、聲のうはがれてそれはゑといへる、其うつりの何れ残る所のあればいと哀に絶て、

名にしあふたかをの峯の紅葉ばはいはでも色に出にけるかな
と扇に書て送るに、彼女出て顔を赧め、いかにして其昔は知らせ玉ふ、方様みしり參らせずといふに、かゞの源と

いひし、一夜計の情を笹やか一番門の露と名残し、此度身の癆を此所になくさみて、去し彌生の頃より、今日の今宵の夕迄、古郷の雪を忘れぬ、思へばさうで御座んすか、偕もふしぎの縁、してかゝる勤はといへば、女涙を流しながら、自ら昔其里にて、上なき女郎の品に居ける、申すも恥かしながら、いにし御舟どのと同じやうなる事の戀に名が立ち、狂言にせぬ計一分すたりて、其位より天神鹿戀になりて、猶端つぼねの勤め、悲しさ辛さも此情ゆゑからなれば恨むべき方もなく、ならばぬ鍛冶屋足袋屋の弟子に假の枕をかはせしも、人様故と思ひねの、夢にもしらぬ此所に、又勤めて三歳餘り、宵の男は我いのちと頼む方にも、是も昔は大盡なりしが、いづれ人の盛衰の悲しさ、悪性は日々強く、田舎はかけにすたり、手前は手代がたをして、今は習はぬ宮仕かゝる身となり給ひても、なほいとをしさの止めは戀の因果、此行末頭を剃り髪をおろして夫婦念佛といはるとも、猶情はかはらぬものをと、或時は泣き或時は笑ひて、面白さも可笑しさも忘れて、餘所の話に夜も更ければ、枕のなさけ夢もかはさて其儘に起別れつゝ、其後三十日計過て尋ぬるに早や行方知れず、程過て聞けば、都の西のある邊に居て、微に虚自ら所作、手づから米炊いで、又なき情かはしけるも、思へば心中女なりける

三 又戀かへて難波若衆

思ひ出るときは山の岩井といふ立役の元より、近頃の替り狂言偕も命は、鳥邊野の心中物語こそ世の外の御評判、いをの御客同じ道にてお越待奉る、去方様より御取持にて、明日棧敷を仕り候、一番目の九尺間を君が方へぞうるといふなると、古き歌をほんあんしていひこしたる、あれが口からこんな事は出まい、誰ぞ願てかゝせたまうなと大笑して、神風や伊勢のよしといふ男、すさまじく女郎つかみてそれならてはと思ふを、今日計は是非にと誘ひ、打ならず音は嵐が芝居詠め盡して、さる町の下屋敷へ行けば、舞臺子供三人女かづらして出るときは、美しさのいふ計なく、あの前所を女に取かへたり、人の命のたねはあるまいにと、若衆がたのつめひらき六義ものいひを聞いては、あたら事かな、あの姿をすぐに小性分になしなばと、一座して能く見れば、前髪は剃りおとしてさながらの野郎、三十より内廿二三より若きは一人もなく、是を世にある町人に思へば、二日より合の座を踏んで、子どもの二人も三人もある時分なるに、呼人はわかげうる親仁がおやちと、去粹のいひしも思ひ出して、こちらを見れば、かくの内に世といふ文字つけたる、鼻の下に扇あてゝ暫しもはなさず、傍なる太鼓男の袖引て此譯をとへば、餘り髪がすさまじうてと小聲になる、此可笑さも餘り過て、暮るゝ頃は五月雨間なく降れば、世上しつぱりして、盃も熊谷より武藏野に替り、重箱にのみかゝれば、猶さわぎの聲大きに、舞臺踊のはづんだ歌も初のほどは面白く、後にはかしましくなる頃、物いひ二つ三つ堪忍ならずと引ぬいて、両方へわかるを見れば皆朋輩の中、是はといふて押隔て、さまざまにいひ和げて、今より遺恨あらし吹く、み室の山の紅葉葉の、いふほど跡から色が出て、血で血をあらふをかしさも危さ、是迄と別れ行く、此様都の山本か短氣の俄道心、松島か船頭に指切りたる事、是を思へば猶皆陽氣のなすわざ、戀もなく情もなく、たゞ木男の交り、頼なき中の酒宴より外はなしと、是より宗旨をかへて元の西方の揚屋をねがひけり

四 野郎の老の行衛定めぬ

氣によつて戀を説て見れば、上大夫より品下りて、女房あれば娘、妾あれば奉公人、偕も此類をれゝになつみ、ほどゝに樂むことぞかし、夫若道は意氣地をみがき、分をたて、義理にのぞみては、命を鴻毛より軽くする事と計思ひて、此道のまことの情を知らず、縦ばぬしある男色におもひかけ、千束していふ文に先の心も谷川の岩木ならねば、かよふ心の水のあはれとは思へど、一度かくと契りたる兄分あれば、此諸分たゞず、御志ありがたく侍れど、まゝ

ならぬ身にしあれば御ゆるし、哀れ縁あらば、又の世をも書て返しするに、猶絶ゆべくもなく、其兄分を尋ね、臂をひき股を貫ぬき、或は此事募りて、人なき野の暮に出て、双の上に其身をうしなひ、つぼめる花の若衆も時ならぬあらしに散行く心地、落花狼籍是ぞ誠の戀しらず、此身は父母の遺體あへてそこない破らざる物とこそ聞くに、孝を忘れ仁を背き慈をたち情しらずの名をとるのみか、世のあざけりものとなることぞかし、若洲もなほ深きなさを知らで、人のいきほひに随ひて多くは横の契をなし、此道のわけをうしなふ、是等さへかくあれば、此外の少年當座ばらいの情賣り、香具商ふ童小章履取杯思ひよるべき戀もなしと、昨日も今日もくれ竹の伏見の里の去町人、世間仕舞ふて樂一篇十徳に珠數、此二ばんなる息子顔形心ざま儒のかたはしをも聞き、大和の風俗をもよみならひて、にくからず目を付て置たる、ふしぎの縁今宵夢想百韻の一座をといひこしたる、此嬉しさ一の橋のあなたにて、駕まねき打乗り行く、其先をかく男、色白く灸々の跡もなくて世の常の駕かきに變り、物いひもまだそれじまず、ぶりのきりのといふ錢のかへ名もさだかならぬ、體見しりたる所ありて、跡の男にとへば、あれは名高き昔の女形、惚ぶ心は竹の中の哀れ一よのふしのまもと、人のなげきしがなれるさまとはしたなく語るに、思ひ合はすれば疑ふべくもなき面さし、紺の給木綿下帯柿染の手拭頭巻にしたる此姿の哀にたへて、去茶店に立入り、彼者共呼びて酒すゝむればありがたしと、茶碗のみ酔心地に、とひ落されて懺悔語り、偕も人の世のはかなさ、つぼめる花の昔は、顔見世の芝居に出てしんとく丸をつとめ、人のうつゝをぬかし、哀なるよすがに見物の延紙の底つくさせ、ひらける花の春の初芝居には若女形となり、帯の結びは吉彌風ぼつとりものといひしは、我に始りて朝夕の玉章其敷をしらず、若き娘はかくといひ出ん事を恥かしく、下にこがるゝ思ひ火動となつて勞瘁に身を苦しめ、或は後家の又なく思ふにひかれて假の枕をならべ、學侶法師の入用銀をすいとりし此因果のめぐるなるべし、我ごときあるものも、此座を出てある町につれづれの講談して、世間をうつくしく、盛といひし若衆方も、散果つる櫻木の新屋となつて、昔の親を過し、或は

茶やの入聲となつて彼の立居のよるべさだむるに、かかる姿の恥かしさと、體に杖をあてゝさめくとなく、昔のうれい事の所作もうつりてをかしかなく、そひ連し女房はかうくのものといふ事を聞けば、水邊のさる町の娘、いつの雨の夜よりか行衛もらずといひしが、偕は是に戀してかくはなりけんと、我ひとりうなづき、聞く程哀まさり行けば欠伸心になり、懐より一ヶ月まかなふほどよい物とらせ、是から歩にてわかれくになりし、いかになりけん此後の事をしらず

五 二三度時し好色の種

思ふ事かなはねばこそ浮世、月に村雲若人におやぢ、我金連も我儘にはならず、俳諧にことよせて、とのじを頼み、楊弓にうつして、晝のかよひぢを思へば、それさへ跡から人をつけて、どうもぬけられぬ身、たゞも居られず、さる腰元に思ひかけて、一向に其事計、乗物の供、奥様からの御使に、白粉伽羅の油に假の姿づくろひして行くを見れば、どうもいはれぬよい風俗、去かみゆふ男によきすがあれば、ひらたい言葉に御姿をちらと見染しより、しづ心なくとうすゆき手の文書きて送れば、思ひの外にあたまからびたくと、數ならぬ此身に御心かけさせられしとの御事、誠あらば何方へなりともかゑんこそとかきたる、歌も十二だんの忍びの段で覺え、當字まじりの假名ちがひ、是程迄はやさしと、讀みすて、袖に入れて夕日の軒にうつりて人の足も稍いそぐ頃より、去横町へ行けば人多く立て聲大きなるを立寄りて聞けば、夫婦喧嘩、乞食の悋氣と、是計は世に多き事ぞかしと、立やすらへば、夫は火吹竹、婦は唐わたの弓持て、やい敵き殺しおれ、やどへはいりて三歳の内に道具は須磨の浦さびしく、小袖も帯も皆七つ屋へやりて、何の男じやといふ、口廣い事といふ時、男はひたいとりあげて、駕などまはしさうなるが、此一言にしほくとすれば、隣より年頃の女來て、のふ御婦様、あんまりでござる、ちと男にいはれて居さしやれ、こちの父も、酒の

ふては無理な事計いうて、杖とりばへをしやれど、男なればまねばならぬ、此方達の苦勞など、今二三年小坊主が生長なつたら、旦那様へやつて、さし向ひは過よい事、中のわるいも所帯の妨害、何事もいはしやるなど、兩方をなだめて歸る、借もはしたなの女や、いかに貧しければとて、二世をかねたる男に、かゝる恥をあたへてとさしのぞけば、雁くびのやけるほど口に沫をふいて煙草のみたる、たしか五年斗あとに使ひし下女、茶屋染の帷子に黒の帯ひらたく、木綿足袋の清きをはいて行くを見ては、いかなるものも見歸りしに、髪はおどろのごとく、手も足も筋だち、おはぐるは三月もつけぬ白齒まじり、これでも添へばそはるものかと、京にもあさましく、約束の方へ行けば、先立二階に是はといふて上れば、互に物をもいはず、暫しは恥かし分になり、酒少し過て、寢床に枕を並べ、大濡交りの言葉の下に、郡内縞の表がござんすれど、裏がなうてと餘所ながら語る、耳が痛うてかんにんならず、能い紅一反約束、是に付て年切のほどより過たる着物帯も帷子も目にたつ染やう、加賀の二布の雪とあらそふと僅の給分に合せ見れば、皆此やうな事なるべしと推して、小袖旦那、帷子息子、帯若いもの、雪駄おとことさる人のいひしる事に、始のほどはめづらしく、二三度は面白く、四五度の頃より腹の内が何とやらと、此驚き今更の悔しさ、とかくして十月といふに、玉のやうなるおのこ子二目とも見ず、襦袢の中より西の岡の跡取と定まりしが、いたづらの腹に色慾の種を蒔て生長の後好色世繼男と呼ばれしとかや言傳へし

六情のかくれ庵

福者二代なし、寶さかりて入物は又さかりて出づ、親は一生苦みて面白い目にも逢はず、口に厚味を知らず、肌には布子綿木帯、足袋もつま切の可笑きに、利勘とかねまふけに心をつめて、銀高六百貫目うれしやと思ふ内に、足元より日が暮れ、たふとい所へ參る、其跡獨息子が丸取に五ツ六ツの頃は、はや分限なり過たる衣服、つきくの女に

もてはやされて、算盤ははじくやら、天秤はどうかけるやら、只酒と色とにあたり月日を送るのみか、後には生仲の戀しりとなりて、女郎の腹の内は、びいどろの如くみえすぎ、内證迄をさがし見れば、皆哀なると、金の入る事計、粹ころびにころびて、日頃の藏の内はからりちんの手拍子此時に至てあはず、暫し一門の情、手代の恵みに朝夕を送れど、まだ昔の袖萬切れ過ぎて諸事まだるくよいわ借と、なま賢者ぶりて一錢の貯もせねば、新腕久といふべく、是よりこそ頼む蔭とて立寄る大木もなく、猶袖ぬらす袖をさへ引かへ、黒染の衣あじろ笠に珠數つまぐりても、心は元の剽輕山粹狂庵といふ柴の戸結びて

我計すいとられしと夕暮のゆづりのかねは残るともなし

とよみつゞけ、思へば伊勢へ月參も古し、鹿島の言ふれもをかしからずと、小きたゞき鉦首にかけて、夜念佛申す音聲は殊勝に、ある町を南へ行けば、去家よりかはゆらしき聲して、是やりましよぞといふを月影にさしのぞけば、腰元の美しきが白き手をさしのべたるをじつとしめれば、のふ徒の坊主や、久三のやらぬかといふ音に、棒ひつさげはしり出る、撞木と鉦を片手にかゝへ、其所を逃のびゆけば、夜も漸う更て、番太が駈、猫の喧嘩、あはう鳥が月を忘れて、かあく、心凄く、向よりあやしの姿歩み來る、人の軒にうづくまり、見れば美しき女姿、髪をさばきて白き浴衣高足駄、頭に點す火かげいふ計なくおそろしさ、是なん聞及びたる牛の時參りならんとさし覗けば、女男を見て悲しやといふをきけば、我願ひ成就すまじ、いかにもして夢許の情をかはしてと祈りし、神はうけずもなりやしぬらんと、さめんと歎くを見て、此坊主、して御方はいかなる事にかゝる姿はと問はれて、恥かしながらかうかうの御方様に、又なく思ひそめいろのいとおしさやらん方なく、いかならんえにししてもとおもへど、彼方へ傳へんと言ひし人、過し頃ははなくなりて、誰をか頼みよる彼の船流したる心ちしけるに、去人の申せし、かゝる姿して七日北野の天神様へ詣てよ、此戀易く目出度未迄の情あるべしと、此嬉しさも、其夜半の夢もむすばず、是より詣て

初て、今宵七日にみつる夜、法師さまにまみえまらせて此願は空しくも、猶かたらんとするを中て止め、其先様は如何なる人、これくの御方、是はと横手打て、それこそ此僧の又なく申しかはす方、これぞ神の御引合せ、此心ざしのふかさ、いかでかよそになし申さんと、女のゆかりを問へば、西のとうるんの黄昏藤の暖簾ある、是もかくれなきかた、何かくるしからんと請合ひ、この法師の取持互にまみえそめて、淺からぬあさか水の、互に心の底を汲みて、深き戀のやつことなれば、兩かたの父母に申して、おもひのままの祝言、浮世はうしとの御縁日を恨みしも、逢ひにきたのゝ庵こそ、久しき戀の初めなりけりと、後に語りて笑ひ草

好色三代男卷五

目録

- 一 夢かと怪し村雨女郎
付りふしぎ残りて定紋の三味
- 二 戀は連理の菊賣が袖
付り祈の印うかれ法印
- 三 妻戀ふ音の鹿子ゆふかと
付り情残して思ひ死する
- 四 肌は雪の綿にひかるゝ
付り戀の始が歌舞伎評判
- 五 其執心の夜半の水牛
付り化生に濡る枕 驚く
- 六 色道積て千石の餅
付り好色世繼物語り

一 夢かと怪し村雨女郎

花は名残なく散りて青葉淋しく、若あらば櫻拾はんと、小篠原分て、我戀は松を時雨のとよみし眞葛原に借菫敷、五盃機嫌に好女、房好若衆、杯敷へ盡せば、覺えず夕陽家に隠れ、遠からぬ入相に驚き行けば、小雨しきりて袖しぼる計、編笠ならて頼方なければ、知恩院の前を走り過て、或町のさる軒にやすらへば、猶暮かゝりて人顔も見えぬ、向ひの格子にねじめいはれず高からぬ調子にて、鳥も泣々しのめめにと唄ふ、たしか聞く所ある聲、歌も大坂やの仕出し、是はならずと格子の間より覗けば、思ひしに違はぬ禿連し女郎の其壹人、是は過し比此世を去て名計と美しかりしといひしも今は昔語、若化されはせぬかと眉に唾ぬれど狐にもあらず、さる折しも六十計の姥頭に雪の置手拭、腰に小豆縞の頭巾、彼里にて見し遣手、いその上古の杉といひし萬ほしがり帳を控へて、物くれる男には人も尋ね、ついしやう言葉、杉といへばあい／＼と十四五度も返事をして、とれぬ男には、仁玉の甘茶に噎たやうな顔、居眠る禿を叱り、物目をぬりつけ、一生人の誹にくつまめ三萬六千の惣回向したる、是も過し比身まかりしと聞し、猶いぶかしく覗き居れば、女郎の聲して偕も此身計拙き者はあらず、人多く逢ひし内に、人に金貸して世に名を廣ふさんした方に身請せられ、新興様とさかえ、手代腰元いまはすわにかしづかれぬべきを、まゝならぬ世の習ひ今更の事にはあらねど、思ふに別れ、思はぬ寢耳に水、一門の人々にさへられ、其望みも遂には仇になら柴の、柴のとぼそ竹の垣に昔の罪恐ろしく、ありし下屋敷の結構も、思へば安き今の身、浮世の煙思ひ絶しに、又立賣の去大盡より人の心の水上汲みて、稻舟のいやといはれぬ詰開きに、又身を任せて、銀杏の木ある森の下屋敷に、春の間には前栽の春草並木の櫻、夏の間には障子を絹の戻にはらせ、蚊遣ふすぶる賤の業も忘れ、盆山の螢、木ずゑの蟬、何時が夏やら汗もなく、秋の月の泉水に寫り、冬の朝の風繪屏風火燵に暮て雪をしらず、かく情を盡し戀を揃へて替らぬ中も昨日の夢

になりて、來世の儂が根引にして行けば力もなし、瀧文の山高く、無理酒の海深うして苦みの止む時なし、此身の爲とて、甲の其わけのわるさ、寺々へやる金を集めて女郎の物日をしてやり、鐘たたく代に三味線を調べ、念佛の替りに投節、抹香の匂ひよりとめ伽羅、水向る代に酒を手向て給れかし、中にも氣の毒のつよさ、打敷の模様古風に、此いやらしさどふもいはれず、され共施餓鬼のめしと蠟燭とは又なく是計はよふて、いふかと思へば、二階より禿とおぼしき女の童、銀の銚子に金繪の砂鉢持て、女郎も姥も引請くのみしが、後には一膳のみになりて、さより汁椀折敷になる時一度に聲をあげて、あつといへばせん／＼と消えて跡もなく、門前と思ひし家居も草村の露深さに、定紋の三味線計残りけり

二 戀は連理の菊賣が袖

人の親の目に見えぬにはあらねども、子がだます道にぬかれぬるかなとは、いかなる粹がよみけん、こちらの娘は夫婦の中寝させて、世間しらすの正身の懐子じやと娘自慢の親仁、其忍びぢ手管のよすがをしらねばなれ、江戸の娘と御乳の人に何やらはなしと、昔人はいひけん、今は都もなしと腹の痛き程笑ひ盡して、やよひの十七日三十三所をめぐる、いつの頃よりか此事起りて、年寄は後の世、中老は商繁昌、若い金拾はして無理ながら願ふも慾の世なれば斷り、若娘や息子杯は何祈るらん心つくしの程弓矢八幡もしらせ給はぬ事ぞかし、善男子善女人といふ觀音のかんどくを聞て、女はよい男にそはして、男は又よい女にあはしてと、結ぶの神より、生の媒人より頼母しく、南無大悲觀世音二世安樂の爲といふに、書て打たる札をはなして其裏を見れば、何やの誰様に心をかけて居ますれど、叶はぬ戀の闇路、暗より猶くらきに迷ふ思ひはるかにてらせ、やまと屋のやつとしたる是はわけらしき名、たしか祇園邊の女、あの譯たつるさへかゝる戀のあればこそといへば、皆札の裏はあの如くじや、是はならずと晝食のいきほひ

に、長樂寺過て野ごえに七瀬音へ行、傍に貨座敷としたる家の隣より、遙の奥にむすび捨し庵あり、前裁にとちさ、たんぼ、むはら、きこくの枝をあらそひ、物淋しく人はなきかと思れば、五十計の尼姿妙安といふ、是は若木の昔戀の里に居て、始め天神よりかこひ端迄になりさがりて、世の衰へのかなしさ、ひがしの勤迄をして、色と呼ぶ情をもたてし、何時の頃よりか佛道にもあらず賢にもあらず、只世をわたるよすがに心の外を墨染の袖、かたへの窓よりさしのぞけば、歳のほど十七計の娘と二十とせ計の男とさしむかひ涙を袖にして、近き内にいとこの何某と縁結ぶの取沙汰、いかゞはと小聲にて、是より何方へもまぎれ行きて、此身の戀の奴にやすべき、よしや憂きも辛きも命あればこそなれ、露と消えなん玉の緒の、絶ての後は笑ひ草、誹り草ともならばなれと、白刃をぬいて此危さ、妙安是に肝つぶれせしが、かいとつてそれこそ安き御事、此隣の祈禱師かゝる事にふしきありと、只管にいひなだめて、娘の表着金壹歩と大豆三合米壹升蠟燭五丁佛壇の飾おこがましく、底なきかみのおしきははなるといふ事、きりくすの作り物は中をきるとの呪咀、花なき櫻の作り枝はならずと、あるは一はな心杯ことぶきし珠敷おしもんで祈るを聞けば、上に焚天高はし、下に次第の天神多ちこにはれて悟道の男もそる、下かひのかこひはし女郎にはいつみはしんざう、天神のかぶるなりし、こなたの太鼓か四十末社内の太鼓か八十末社と、此外のとなへ事はわけもきこえず、額に汗を流してきん上再拜といふ時、神の折敷忽ちにさけ、きりくす聲をあげ、櫻も其まゝに枯れ行くは、誠に諸願成就と見えし、此娘の好色聞付、先の男より此事いひ立にして變改しければ、心のまゝの契いつとなくひろうつて、家を忘れ親を背き、都の西の片鄙に戀草の花賣して、情の煙たえくの世を渡りけるも戀なれや戀

三 妻戀ふ音の鹿子結かと

玉はこの道草鞋より竹の杖に乗りかたをぬふりて、越の國の去商人、荷物は何時もさきにつけて、國むきの買物それそれに、朝から晩まで何處にても身過ほど世に悲き物はなし、金銀親より貴く、主君より猶大切にすべしと新分限者經に書たる、去事に合點はすれど、老たるも若きも好色の道計甚しきまといは、今も昔も末の世も同じ事ぞと、うたゝねの二階座敷に古郷の女房思ひて、暫し枕すれば、折から初雁の聲最懐かしく、便あらばと五文字ひねりまはし、打つぶやく頃、御淋しうござんすかと、菓子盆持て来るを見れば、召使のさつといふ、昔ひやうこのつと多き、何うやら打物いひたるにくからず、黒ぬめの二ツわりふとり過たる腰に巻たて、いつも床とる女とこなつの暉足、是さへ事欠と思へば可愛らしく、旅枕の夢を慰め、雨の夜のつれづれを語りて、或時は昇階子をぎしめかし、又の夜半には襖のかけがねを心して、人目をば忍ぶ山しのびて通ふ事かと思へば、左はなくて是を二階女とかや、田舎客の御爲ものと聞くに、心をつくせし今更の其悔しさ、夫迄切に情を捨て、猶戀の淵瀬をおよげば、川より西の去通りに、優しき女聲して何やらんしかいといふ、あれはと連の男に問へば、是は鹿子いふ音なり、此方へと彼の者案内して奥の一間に行けば、向ふになすびその五加木枸杞垣のあばらに、昔見し妹が、垣根とよみ顔、扇手まざくれば二十とせ計の女茶はこぶ、あれはと問へば此家の娘、姿計かは心さまやさしく、去情のすき人にて、かくつたなき内にも大和歌の道心かけ、琴三味もつたなからず、小歌はかわちといひし女郎にも劣るべからずといふに、聞ほど戀の増り草、いな心になりしをしづめて、染物の鹿子ども注文に添へて誂ふれば、始ての御出と盃もちて出で、銚子は自ら取て打笑みたるに、現ぬかれて、魂も君が袖にや、覺えず更くる月に驚き、歸んなんいざ、菓子盆まさにあれなんとすと戯れ、又重ねてと計名残り歸る、此後此事に思ひ亂れて算盤も手にうとく、萬身にそまねば便もとめて文の數指を折る頃、女の方より何の言葉もなき白紙に

草枕結び定めんかたぞなきならはぬ野邊の露のなさに
とよみて心とくべきとも見えねば

ざりとともにたのみし野邊の草枕むすぶともなき露の情を
 と書て又返し送れば、女も限なく哀に是より靡き初て、石より堅くと結び置し下紐も、君ならずして誰かとくべきと、
 此女の優しく利發世に越え、男を思ふ事類ふべき物もなければ、其道ならぬ入ぼくろ、きせるやきおそろしき營事、
 風を敷き雨の夜を恨みて、通ひし日を過ぎ、月を重ねて、越の國元へ下る、此女のなげきいふも更に哀にもたゆれ
 ど、又の歳の彌生には必ずと契り、白きふくさの千鳥かきたるに。

たび衣立行く波の友千鳥鳴音もよはる今日の暮かな
 かたみの品とりかはし、血の涙を流しながら別れ下る、此後十日計して娘風の心地といひし只假初のやうなりしが、
 床しさの身や苦しめけむ、只うつ／＼とふするの床に涙計枕恨みて、
 逢ふ事をいづくにてとか契るべきうき身のゆかんかたをしらねば
 と書捨て、此世を早うし、黄泉の道へ行きぬ、偕もかの男のかくと聞きなば、如何計やるかたなく悲しかるらんと、
 よその袖さへしぼりかねける

四 肌は雪の綿にひかる、

若い時はぞめき、中老に静まり老いて後樂をせば、何か此世に思ひ残す事あらんと書たる古き巻を見て、紀陽の去
 男、表屋は總領に隣は弟、下の町は聲に譲りの其身は日比の下男計つれて、見ぬ所もなく拜まぬ社もなく、花を名残
 り時鳥をうたゝね、片耳や枕うらみんといひし昔を思ひ、片田舎の森の雲に袖のぬるゝもいとほはて、秋風の身にしみ、
 酒の爛も稍可笑き頃は、都の去邊に、貨座敷住なして當流の伊諸をかせぎ、五歌仙位を板行せばやなど、東西の色も
 見盡し、辰巳の茶摘乾の月見、此外遊山靴水残る所なく、又國元へ歸る波、柳やが下緒、友禪扇、音羽輕籠の干菓菓子、

今の世のはやりもの雀小弓、竹の伽羅入當風いろ繪、此物ずき猶小間物の品酒落たる類、夕にいひ出て朝に誦ふ、誠
 に自由の事ぞかしと、其いろ／＼も紅のある夕ざれ頃に、扇やのをなご、わたぼうしやのよねとやらん、姿世の常
 の下女はしたにやうすぐれたる、金巾木綿柳すゝたけの色深く、三つ紋の思はくらしく、鼻紙袋差櫛計は物ずきす
 ぐれたる、何も御用は御さんせぬかと、一間に呼びて萬珍らし咄を聞けば、下京の心中娘あるかたの間男、野風は請け
 出され、白晝のろくろ首芝居にて見すれば、大原の柴女が鼠を三足送り、竹生島が開帳で西山の萬日を申せば、東
 寺畑の觀進能の、男よりは増に歌舞妓の仕組狂言の次第、今吉彌が科せ藝、扇いふところなけれど、何處やらが鼻へ
 入て、みつせが歳の更、月の山の端頃の名残、左馬の介が女めきてどうもいはれぬに、餘りしやんとしすぎると、彌五
 七が古風道化皆苦笑、天上計はをかし、此跡のばばらより其名は高く、よふすれど拍子のなきこそ、其外三郎四が
 男自慢、藤十郎は藝過て我顔、内記がそゝり、物いひの舌つきなる、四郎次が思ひ入もたけがひくい人々の評判見
 る計にかたるに、酒出してひとつといへば、一座物々しく挨拶して、始の程はかつて下されませぬといひしが、いつ
 の程やらにかたさもつけて、右の指を折る程、盃もかさぬ、縮みたる髪にはれぬよい處あれば、人なき所へよびて
 露計の情をといへど、一度二度は御ゆるしと計顔頼めけるを、兎や角いひつゞけて、否とも應ともいはれぬ首尾に
 なれば、可笑き事仕舞ひて別れ行きしが、此後滞留のほど日とひふたひありて音づれ、見舞ては歸り杯せしが、何時
 となく打解て懺悔語りの雨の日、其身の昔在こし事を聞けば、おなじ國にてさるものゝ娘、其古は人にもしられ、
 杉の葉白さあふさかの關口やといひし、酒造りて上下絹の着物をきて、彼の娘にも乳母おてゝと手に抱き懐にせし
 身の衰へは、誰が上も今日に變る飛鳥川、かゝる年切の淵に陥りし哀さ、親方に申ゆるし好い物少し入て、或商賣人
 にめあはせ、さもしからぬ所作、竹格子に年を経けるも、淺からぬ人の情からなれや

五 其執心の夜半の水牛

難彼瀉みじかき蘆のふしの間より、猶あだなる一寸先さへ見えぬに、後の世迄たすかりてと其愆の深さ、佛のおもはくも恥かしうはなうて、よい事うまい事おもしろい事もしらぬ、一代世知辨男といはれし、江戸のさる邊に古書店出して、算盤に寢覺天秤に暮し、十兩壹歩の利銀さへとりて、四方に四間の穴藏新分限者の名はそれながら豆腐の半丁買ひ、平い草履を見合せ、鼻紙も濡たるを干して、惜や誰が爲にか、一生色里をも知らず、おも白き目にもあはず、子さへなくて獨の養ひ娘、二八の頃折節の小紫をもそねみ、都の和國唐土とても恥かしからず、一ひき情ありて、手蹟はおつうの跡を慕ひ、和歌は小町のさまを學びて強からず、琴三味小歌は須摩といふ御せが教へて秘曲のこらず、淋しき夜半をなくさめ、あるは手鞠衣裳人形に心をうつし、折ふしはひとり笑ひ見せて、腰元にをかしがらせ、枕繪に乳母をなぶり顔赧めさせなど、萬氣のとほりたることぞかし、時は五月の末の夕暮隅田川原の舟遊山、酒機嫌に源介といふ手代の、

するならばいざことゝはん都鳥我思ふ君は氣のとほるやと

のみたゞれて此歸途、紙にあつめ包みたる螢を娘の方へまゐらすとて、戀のほむらはかくこそ燃と申せば、莞爾としたりる面ざし、白き手をのべ取て見玉へば、五文字の幽にみゆるに、螢はなちやりて帟計懐にし、一間に入て見れば、

池水のいひ出かたきおもひとや身をのみこがす螢なるらん

とかきたる此心さまのやさしさ、錦木の千束にも及ばず、腰元に心して、あふさかの關の中戸をゆるさせ、しきるに油ぬりて音なし川のおちあふわけを包む、それさへ夜ざととき親仁なれば、日頃の駢胸に氣疎く、自然の時のぬけ道をおもひ、隠れ義ほしやと思へど、蓬萊も遠しと聞けば、時の役にもたゞず、只かづらきの神に力を添てと計祈りて、

夜の通路悉なくかよひける程に、よしや命は武藏野の草の露迄とあれば、かたじけある事身にあまれり、下女が囁きおいまに通ひ、乳母が聞つけ此沙汰ばつとしければ、源介を元の都へつけのぼして、其後誠の入聲淺草よりとのほり、其儀式も更て、御寝間の蒲團、夜の物乳母去腰元出で、只二人ぬれ姿にもありし源介が事のみ思ひ出れば、天井しきりに震動し、源介が面影二つの角生ておそろしさ、まがう所もなき彼の者の執心と、其夜の周章さ、夜も明て好色修行の僧に此譚を語れば、有難き御方便娘の姿にはならず人形を造らせ、定紋の小袖みだれ髪に帯といて、寢顔なるさまあづまかたをしかけて、入聲ならびて戯れ姿に、又天井響きて例の怪物とびをりし、あはやと見れば忽ち形をかへて、一つの水牛あづまがたへ飛入て、此後何の怪もなく、目出度江戸の好色女と呼ばれけり

六 色事つんで千石の餅

神無月ふりみならずみ定めなき時雨ぞぬれしよい娘、年は十といひて六ツ計、取あげ島田ばしやれ菅笠、紋郡内の玉子茶に、山道の紅裏奥ゆかしく、よい風に伊達をそろへし、袖しの浦や紅のちどりしたる手覆、とにもかくにも濡るゝ君かなといはまほしく、召連れの下女さもしからず、木綿篠田のぬのこ、若比丘尼の美しきがあじろ笠きて物々しく、聲ひそかに物語りゆく、其跡についてある町を東へ行けば、ある家のうちより鼠鳴して手敲けば、三人とも走り寄るさま、跡さき見つくるひ、物忍ぶ顔なる、怪しく立聞けど、何のわけもきこえず、婦が聲して二階にござりますすと計いと心地よく聞捨て行、其隣に子守坊主の白くぼ頭が、紙人形に獅子舞にぎりて、泣く子をすかすあはう口、おさんがみこの口よせ、元より其の身の畜生の、とかく太夫がぬけぶしを、わけもなくいふに近づき、ここの美し娘は何人にやと問へば、それは木薬うる去ほとり、なら山や此手柏の紋ある方、母は去年の春此世をはやうし、父親ばかり、出入比丘尼を目つけにして、神參り佛詣で、是ぞ戀慕のよすが、中にも二條京極のほとりの去す

みまへがみにほれて、互にふかき妹背川の浅からず、後には御腹も大きに世間の沙汰もいな物なりしを、賢き親の了簡にて目出度祝言の式をととのへ、金銀の島臺かはらけ酒と妹とは宵の程にとれて、武藏野の大きなといふはよいが、廣いとは祝言に思む言葉と、戯れ酒も醒て月日かさなり、初産の餅つく音が千石萬石めでたし、此三十二帖の物語寫し終れば、障子外にかみし有様自ら消えて一物もなし、此不思議さ、ありし僧に向ひ、北の方の障子も開き、見せしめ玉へといふに、好色至極悟道の者ならで見るべき所に非ず、今暫し修行して來たれ此所を見すべしと相伴に枕して眠ると思ひし目を開けば、ありし庵も僧もなく、元の夢をばみたらしの草枕 露ふかく茂りたる森の中に松風計ぞ残りける

書林 壽 詞 堂

皇都三條通

貞享三曆

西村市郎右衛門

孟陽上澣日

同八幡町通

坂上勝兵衛

刊行

色里三所世帯

色里三所世帶

總 目 録

京の巻

- 一 戀に關あり女相撲
榮耀えいぎょうが餘つて獨轉びの男
見えたり智惠のない所が
- 二 戀に風あり女涼み
都ながら男の無い島に住む心
此夕暮の氣のどくやさて
- 三 戀に焼く火あり女行水
煩惱の垢溜つた事ではない
今は瘦やせて骨が立つ名の
- 四 戀に種あり女帯の色
隠し紋あらはれたる四條河原
見せまじきもの男盛りの野郎
- 五 戀に違あり女形氣

今程人のくれぬ物は銀の世の中
哀れや男泣きの別れ

大坂の巻

- 一 戀に勢あり女かけろく
錢掛け松をして見せる男
ゆるしを受ける紫の下帯
- 二 戀に座敷あり女髪切
若死の男は伽羅の灰も残し
後家何國もあれ世の風俗
- 三 戀に網あり女川狩
世上恐れぬ男の浪枕
龍宮からの後妻うち
- 四 戀に松蔭あり女執行
住吉の蛤からくの命
自慢の鼻息次第弱りの男
- 五 戀に數あり女牀
毎日色更へての顔付き

然も男をふる流石これや

江戸の巻

- 一 戀に堪忍あり女持たず
鶏が鳴く東へ旅はじめの男
馬より下りて濡をしたがる
- 二 戀に隙あり女奉公
釣の糸男のふんどし
かゝつた事情の淵
- 三 戀に違あり女の肌
色町の男間はず物語
逢はぬさきからひやうきん玉
- 四 戀に焼附あり女の鍋尻
物ずきに金捨男のかり宿
太夫請け出してそのまゝ眺
- 五 戀に果てあり女ぎらひ
望みの通武藏野の土となる男
是もましかといふとても死ぬる女

色里三所世帯京の巻

一 戀に關あり女ずまひ

年中世の萬に氣をつけて、何がなと思ふ人のいへり、花紅葉月雪も朝から暮るゝ迄は、ながめに飽きて首の骨痛めり、常住見ても美女は名木、雨に傷まず嵐に散らず、然かも夜晝の盛とて、都の東山岡崎といふ所に、いまだ二十五にとせたらぬ男の若隠居構へ、黒谷近けれども佛の道を嫌ひ、親の精進日にさへさりりとあけて、歌のさま鞠にも心をよせず、たゞ人の弄びは女道と思ひ入り、金銀あるに任せて酒姪美色に身を固め、浮世の外右衛門と申し慣はせり。人の交り止めて、益も正月も知らず、表門に男の出入堅く關を据えて、此番屋に譜代の其内、勘六二人の外、男といふものなくて、諸事役人も女の捌きにして、二十四人色づくりの女に戯れ我儘なる遊樂、王城の思出には、誰咎むる事なく、又上もなき奢ぞかし。されば○○に后十二人、諸侯に七人の艶女、太夫に三人の愛女、諸士に二人の戲妾あるに極まれり。此外凡人は一人の妻を定めて、子孫の絶えぬ樂みをなす事也。何ぞ仕合せに本づき、物事自由なればとて、色替へ品替へ心を替へて、京と武藏と難波に、民の籠の三所世帯を構へ、さまざま情をかけ持、かねの草鞋にても、追附て足の續くまじき事を、外より見て徒に嘆きぬ。京は山水の澤山なる所なれども、此水減りては取返しなかりき。無分別に意見の言ひ手もなく、日毎に慰かへて、折節秋の初めなるに、女相撲を催しけるに、廣庭に四本柱紅の絹を巻立て、土俵に小蒲團の敷を並べ、加茂川のしゃれ砂を篩はせて撒かせ、美女に男のすなる緞子二重まはりの下帯をさせ、いやながら○○○○、西東の方屋にならべ置きぬ。總じて人の肌は障りありて、晝中には見苦かりしに、此女中いづれか一人身の内に、蚤の食所もなく、腰つき弱からずして肉のりて、強い盛の面影、さてもたふ

と過ぎて、是ぞ戀の力草、根掘ぎ男も遂には投げ殺されむとぞ思ふ。先東の方大關にちよみ髪のおげん、今年廿一歳、如何なる人にて、○○○○として○○○の取物なり。關脇に素顔の小雪、是は少し首筋自慢、それから續きて大津の十七小さん・二皮目のおつや、ものごしよしのお舟・櫻色の音羽・後帯のお龜・歩み上手のお半・殿中の宇治・琴好のお松・我劣らじと力足踏めば、又西の方より大關に比丘尼落のりり、其年三十一なれども見た所二十三、隠れもなき手取者、恥かしげ去つて躍出づれば、關脇に指切りの白玉、是は諸分知りの女なり。是に押し並びて誓紙破りのお澤・男憎みのお嵯峨・後家姿のお島・鶉のお秋・飛上りのおりん・暇の状のお國・何れも○○○○外好い手を知りたる女、力も入れずして男を投る事を得たり。されども今日は互に女中立合の本のお相撲、行司は旦那殿、微塵勝負の最負なしに分られ、房附團扇に戀風を含ませ、立烏帽子にくゝり袴、既に脇明の前相撲を始め、三番勝の方へ長枕、釣夜著を褒美に賜はり、其夜は旦那のお成とあれば、如才なく○○○○らし、○○○○程は○○○○、○○○○、○○○○○。こゝが大事の所、惜しやわれになつてぞしまひける。是が今日の御遊山の芝居やぶり。

二 戀に風あり女涼み

時雨して常よりはしめやかなる夕暮、手あきの女中、櫻戸の奥に押入れられ、外よりおろさるゝ錠の音耳に響き、胸を傷ませ、今宵も亦旦那のお寢間に、おつや殿一人えり取の、跡は十九人ながら同じ枕に、宵から寢られもせず、謎も火渡もどかしく、興を覺まして、是ほどの中へ、せめて面疱の吹出し男、頭役に一人づつ持たざる事の口惜しさ、結ぶの神は大方にたわけをつくされたが好い、あまたのいたづらに身をなす女もあるに、我に相見らる夫さへなくて、血氣盛の頃を何の事もなく、悲しや女の樂かけて、無理に堪忍せねばならぬ、何れもよく／＼前世あしき業とは思ひながら、出雲の大社にして夫婦定めの時、帳はづれの我々、是は諸神に恨あり。庚申・甲子・雨の夜・地震・神

鳴、そんな事など忌むの用捨の養生のといふ事を、曾て構はぬ女中間二十人ありて、やう／＼甘目目にめぐりて来る樂み、仕合と旦那は親御様の命日、神精進をも構はぬ人なればこそまだしもなれ、若し餘人並に差合を繰り給ひ、其夜泊り番に當り合せる女は、いかに喜びもあるべきか、思へばひとりの旦那を霜先の藥喰、是程利くことなどかあるべきと、身を〇〇〇〇〇〇として、番繰を忘れず、其日の暮を急ぎ、銀河の七夕、思へばそれより樂深し。月に一度は逢ふ事もと、稀の契を悦ぶ、宵から言ふ程の事此一つより外なく、若盛の氣を動かさざわ付く中に、こざかしき女の言ひ出して、こゝもさながら女護の島、男の姿は見えずとも、せめてや其袖風もなつかしく、西受けの樽縁に立並び、結び目ときて帯の捨所、我を忘れしどけなく、皆紅の内著の裙風に翻して、〇〇ばかりあらけなく、父なし子生める種にもならむかしと、扱もきみのよき有様、あたらし花を見る人なくて散しぬ。とをき山々の唐錦、萩の葉分の末に、遠音は物哀れ氣に、男鹿の妻を尋ねてし、知らずやこゝへ來よかし、角こそなけれ男焦るゝもの、有明の月牙渡りて、桂男の影さへ我見付初めにし、人の物にはなさじと、是ぞ雲に棧、逆も及ばぬ上の空になりて、是をさへ格氣して争ひぬれば、外右衛門掴み殺さぬは、主といふ遠慮なるべし。何れ同じ奉公ながら、かゝる堪へ難き男に大勢勤めるは、女の身の因果、此の憂目に逢ふも、銀が敵の世の中にぞありける。

三 戀に焼く火あり女行水

白川の流、西の岸根分け立つて油ぎり、玉に光うつりてしかも匂ふかし。有明夕立ざつとあがりて、俄水の濁り面白やと、繩手の茶屋、折節客の隙を一慰みに、又手網持たせ、淺瀬を水上へ、おもだか・澤楮梗の花脆く踏折りて、はぜ・鰻・小鮒をすくひ行くに、岡崎のほとり迄上りて、枝川の細き落水、暖かにして心よく、得も云ひ難き香、是を慕ひ行けば、竹の茂みなる高塚の下より流れ出る、是ぞ如何なる人の御下屋敷ぞと、蕨垣のきびしき中ゆかしく、思ひもよらぬ木の間より覗き見れば、遙かなる廣庭に、夕涼みの牀を並べ置き、一牀に美しき姿の人、二人三人づゝ、白き絹帷子にすぎき帯、黒髪を亂れしをそこ／＼に解きすて、金の丸團扇を手につれ、螢を待つ様して其美形是はと氣を留めて見しに、二間に餘る湯船に掛樋瀧を落し、杉葉の假天井青々として、高欄付きし橋がよりを轟かし此家の旦那らしき人を、あまた女取付き抱へ出て、裸身湯船に移し、廿人餘の美女一度に身のまはり〇〇〇〇〇〇、群鳥の浪に入る風情して、男一人眞中に取巻き、左右の手先採めば、お足の裏を搔く女もあり、脇腹いたくばさすらず、又は腰を打ち、或は頭をひねり、耳を洗へる役もあり、肩癬所さするもあれば、お胸の邊撫て下す女もあり、膝枕にせらるゝ女もあり、扱も思の儘なる遊樂、不斷かくあればこそ、互に女〇〇〇〇〇〇ふ氣色もなく、立騒ぎて水掛け合ひ、しなだれて取付きこそぐるなど、可笑しき事ども、暫し見るにさへ立すくみて、目ぶたも張弓の如くなりて、若盛二人の男、綱も手桶も其處に捨て、たとひ責殺さるゝともあの中へはまりて、浮世の思出に、夜晝三日物として、死すとも何か思残すべき、あの男は前の世如何なる戀の種蒔きて、今生えざかりの美しき顔ばせを自由する事、世に生佛と云ふはあの人様の身なりと、少しはあやかり物、手を合はせて其佛を拜みけるに、上り湯に竹筵敷きて、描金の枕を直し、伏せ香の薫、いやと言はれぬ袖風の通ひ、お浴衣を着せ參らす迄もなし、大勢の女の手して、罕も露も乾かせ、御濡髪を梳きにかゝれる女に、つひ出來心にて、何の遠慮もなく分もなく、〇〇〇〇〇〇、あまたの女顔振るもあり、うつぶくもあり、お側を立ちても退きかね、恨しさうなる身の程、あれを／＼と、二人の男齒切をしても是非なく、最後の湯が水になる迄眺めつくし、元の川筋に歸り、是を語りて見ぬ人に心動かさせける。穴のはた覗き掛れる人も、後世話聞きし様にはなしとぞ。

四 戀に種あり女帯の色

曆明け初むるより、姫始め人の心も春めきて、不斷見し内儀の顔付き珍しく、呼び入れて〇〇の思をなしける、しかも今年には正月に聞ありて、干鮭も杓子も孕めると、昔人の言ひ習はせるが、いづれさもあればこそ、清水寺の子安塔に十二燈の絶ゆる間もなく、當年の包錢十三文づゝ、目に見えて一文づゝの得、地藏も仕合せ、とりあげ婆も質請くる年とて、新玉の玉釋頼みをかけ、手くすみしてぞ待ちにける。室町の小さき吳服屋には、いつより産衣の仕込、五條の薬屋には五香の合せ置き、陰陽師も懐胎の心に合ふ事を作り、辻談義も釋迦の御誕生の所ばかり有難く説きぬ。丹波の山里にも考へて、青梅早く都に出だし、其道に賢き世渡のあることぞかし。

外右衛門は商賈に、明暮戀慕のたゞ中にそまり、數多に亂し内に、一人の女お中のむづかしき事を、女房預りの岩倉殿を以て申上げしに、御機嫌宜しく、我今に子と云ふものを持たず、何れにても男儲けて、某に形の似たるに我家を譲り、其母は直に奥様にするとあれば、各々懷妊を願ふ驗ありて、二十人の美女十七〇〇〇、姿次第に可笑しげになり、帶祝もやかましく、生れぬ先より餅米の拵へ饜節の山をなし、今や〇〇と待つ程に、其月に廻合はせ、この部屋に氣づきて婆を呼ぶ、そこには腰を抱くとて忙しく、二月餘りに残らず平産して、其子を見るに、一人も顔ばせの我に似たるものあらず、皆顔付こまさくれて十八九より三十ばかりに見えければ、これ不思議に思ひ、殊更是程の中に女子の一人もなきをいよ〇〇合點ゆかず、さりとして稻妻より外に通ふ移りもなし、兎角疑はれて、我子ならば藤菱の定紋胞衣に据わるべしと、一つ〇〇桶を明けて改めけるに、紋所或は蝶に唐花、矢車に鳥居、又は七ツ櫻に木の字のやつし書き、結び文を鼠の引く所、繋ぎ船に飾り松、丸の内に鬼の打違へ、重ね竹中に珠數持たせたる大黒・釣鐘・達磨の並べ紋所・林に蛇のまとひたるもあり、是皆色河原の太夫子供の隠し衣裳の替紋に極まれり。一人々々是を穿鑿するに、其身誠の契もなく、偶々狂言盡しを見にまかりし縁にひかれ、それ〇〇の思入、男とぼしくて忘れもやらず、一念それに通ひ、且那の〇〇折節も心當てにはそれよそれよと思ふより、戀のかたまつてかくこそなりけれ。猶々氣をつけて見るに、生れ子の顔付、それよこれよ野郎にまざまざと生寫し、いかいこと興さめて、今迄の面白さを皆になして、自らうるさくなりて、心變りかゝるに、尙しも赤子泣立て、むつきのかかり留伽羅の烟まけて鼻つきてうたてかりき。此子供に抱姥とれども、中々かぶりして、それに乳は吞まず、めい〇〇の母親を離さず、抱かれて寝さゝる事、いよ〇〇思ふに可笑く、地女房の執著の深きをいやになりて、皆々片付けて、さらりとこゝが分別所。

五 戀に違あり女形氣

物によい加減のなきものなり。御所めきたる女は情深く花車なれども、世の走りまわれる事を知らねば、かつて中位の人慰にならず。形美しき迎、小家育ちの娘を上げぬれば、味噌鹽の事、粉練よりこごめ取るなど、西瓜の皮のすたれるを香のものに漬置く事、茶の煎じ殻を枕の中込に入れけるとや、世智賢き事ばかり何程か覚えて、悪う賤しき形氣自らに現れ、中々淋しき時の話相手にもなるものにあらず。是を思ふに昔はともあれ、それに拵へ置きて、たしなみの深きものにして、いかなる人の氣にも夫々になして、遊興のうはもり、鳥原の女郎にまして又なしと、上分別を出しける。今此世界につかひ手の切れ目な時分に、ぼつとしてわけよく出れば、東山の大臣と二度名に立ち、太夫天職かりそめにも十四五人の一座、さながら人間業とは思はれず。銀の神の威光と、百三十末社も玆に集り、此神酒をすゝめ奉り、其上にての願ひ事、何にても叶はぬと言ふ事なし。或時の御託宣に、總じて女郎買、金銀手にある時は、此里の諸分前方にて、氣の付かぬ事多し、萬事人の差圖を受けず、賢くなる時は内證埒あきて、心ばかり至りて一つも物にならず、此二つの違ひ、汝等無悲しかるべし、此大臣は銀のある時屢なれば、節句前一度の大節季、氣骨折らずに嬉しがらす事、我より外に又ありや、言うても見よといへば、いかな〇〇昔に變り、丸まこき金子くれるはなし、やうやう四角に碎きたるもの一角二角づつ賜りても、これて拵る事にはあらず、羽織も世を恐れ、これを次手

ならぬ目に逢はせし事、各々の目前にての手柄、その外○○○○○○、一度も不覺を取らず、女色の達者、此御褒美に紫の下帯を御許しあれと願ひければ、色道大和尚外右衛門大笑ひして、汝が身の程をいかめしく、世間の姪亂をしらずや、夫なる末社願禮の善吉、二十一歳より世帯を持ち始め、十年餘りに女房三十三人を去りける、是皆女の方より、○○○○○寶れ、暇乞捨てにして出て行き、其後は相手もなくて、出家の持ちし○○○といへるものを、ことかけに○○○、是でも○○○餘りて身のふくれれば、養生の爲め夏斷ちして、一日に○○○○○、其外は堪忍しける。強いの例には、先年參宮せし時、中の地藏の色茶屋にて、神も許し給へ、末社共が無禮御所望に任すと、○○○○○、六十薬ぎの伊勢錢を、抑一貫二百より三貫五百迄○○○、少しも○○○○○、同じ同行是を見て、新銭掛松の善吉と名を改め、迎もの事に○○○○○と望めば、畏まつてまかり立ち、杉骨の間々々七間があひだ○○○き、其上に太神樂の太鼓打たせけるに、いまだ獅子も舞ひ納めぬ内に、罰當りてや、○○○○○くなりて、天の岩戸のくらものと、今そつとの所を歎きぬ。是にさへ、六尺の犢鼻褌二尺を紫に許しぬ。向後汝には一尺二寸程下ばかりを紫に許すなり。之を言立にして、いかなる後家の方へも住むべし。これなる常燈の甚平出生して此かた、晝夜ともにつひに○○○○○事もなく、○○○なれば、千貫目の分限にまさり、不斷○○○○○くなれば、異名を常燈の甚平と改め、總紫の下帯を許しける。たまたまの夜見世に出合ひ、○○○うちなどのみけん、その男には犢鼻褌の結び目ばかり、紫を許し給へり。我紫の二重廻りをする事、弓削の道鏡より相承し傳はり、千日千夜も是にあかずと、鰻鱺鶏卵山芋を毒斷ちして、お次の間に金の鍋をしかけ、銀の天目に水を測り、○○○○○ふる薬を飲み給ふ、隨分今の新町にて、好と云はれし女郎も、牀より前に身をふるはし、○○○かしかける、氣味よき大臣あやかりものは是。

二 戀に座敷あり女髮切

思川にかけて四つ橋と言ふは大坂の名所、此邊りを蟻のとわたりと人は言ふなり。前は新町を眺め、後は道頓堀近し。此二つの境なれば、其の名可笑し、此所に借座敷して、色男寄合世帯も珍らし、京より薪やすし米自由にして酒取りくらし、延紙は吉野より手廻しよく、伽羅は堺より取寄せ、南請けに犢鼻褌の干場もよし、茲ぞ住む可き所と戀の入江に錨を下ろしぬ。此宿も今迄如何なる奢人かありける。眞綿を入れし錦縁の疊、寢間に名女揃の○○、さながら思を裸になし、是皆○○○○○晝中をも構はず、靜御前を細目に描きて、辨慶が○○○○○○○○○○、小野小町花の色深く、後つきよわくとして○○○○○○○○○○、齒の抜けたる鬼奴が、鐵の棒を○にさせて、筋骨あらけなき手を○○○○○○、地獄極樂の境目を見せける。和泉式部若盛りを、釋迦如來袈裟かけながら、○○○○○○には○○ぬ顔つき、又井筒の女はかくれなき業平の夫妻なりしに、河内通ひの留守の間は○○○孔子のぬすまる、所、朝に道を聞き夕に首を切られよとまよ、擬子孫はこれこそ出来もすれ。見臺に眼をさらし、諸分を穿鑿するに、此事より○○○と思入の○○○○○、此外かやうに思ひもよらぬ取合せ可笑しき中にも、氣をうつし○○○のならぬ様に拵へたる座敷なり。中二階には舞臺子の○○○、いづれか思ひく、好きくの有様、是を戀の種として、○○○○○止む時なし。人の家居はこれこそあれ。昔住まれしゆかしやと言へば、此座敷預る人の語りけるは、此家の普請のそもそも、地祭り家固のおろかもなく、鬼門を避け逆木を改め、萬事を氣を附けられしに、此あるじ死去の後、番人が若死せられし二三年前に、相果てられし人の後家黒髪を切りすて、時めく姿をより、折節の風情を見し人こがれ、後家御に相馴れしに我が氣に入るならば筋目には構ひなし、此屋敷は言ふ迄もなし、臍くり金の千兩も、其人に進むと、廣い口から沙汰あれば、慾と戀との二つにて、之を望み來る人数を知らず、されども五日七日に○○○又は十日十二日に○○○かし、○○○○○歸る者一人もなし、なんぼう恐ろしき物語、殊にそれなる内蔵作り一間は、用心の爲めにはあらず、厚壁にして戸前幾重も念を入れられしが、是は○○○○○○○○○○、近所に知れぬ爲めなり。

此内こそ男の命を取る所、見るもこはしと云へば、外右衛門各々是を聞きて、其女一人何程の事かあるべき、我等に出逢ふ者ならば、浮世の思出に、最後四十九日迄は〇〇〇じ、其〇〇いづれも望む所なりと、〇〇男めば、面々〇〇の望みならば、好き事こそあれ、道頓堀の濱川に、いまだ色残れる大坂中の〇〇、毎日集れる小宿あり、これはと言へばそれよと、此宿を頼み、忍びくにとり寄せけるに、後家と云ふ姿の面白や、此處にても髪を切りて、中幅帯珠數人の目玉をぬき、偽りの談義參りをにあひどりに悪事負の比丘尼を連れ、前巾著の芥子銀は、男の餌に飼ひて、是程各別なるものはなしと言ふにぞ、心浮き立ち、尙名の高さを招きける。是は中の島の二度咲きの花様、それは横堀の寺さがし様、又は天満の月夜鳥様、さては上町の焼杭様、伏見堀の取付蟲様、堺筋の出尻様、其外異名の覺え二百三十四人あり、皆一仔細づゝありて、盛過ぎたる櫻は徒らに現はれ、一日四五人づゝ〇〇〇て、外右衛門を始め末社、大坂にておくれを取るなど、命を鼻息より軽く、〇〇〇〇の〇〇〇〇を盡しけるに、随分〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、唯〇〇〇〇〇〇、重ねて訪ぬる方もなきは、よくくの事なり。此歸り姿を見るに、腰元が肩にすぎり、又駕籠に昇き乗せられ、或は氣を失ひ、正氣にて歸るは一人もなし、好い氣味の外右衛門、是より思付き、髪切面白ければ、振袖の〇〇〇せとある心中は格別、脇あけの髪切世に稀なれば、太鼓持共才覺にて、色好き娘數多取寄せ、大臣御物好を語り、親ども其身相對にて、十五六より十八九迄の女を十二人、一年限に定め、前金十兩づゝにて、惜しや黒髪を切らせて、後家分にして、大臣の〇〇〇〇取りける。世に身過程悲しきものはなし、肝煎の千松が嬢。

三 戀に網あり女川狩

夏海靜かに蘆の青葉に風通ひ、三軒屋川口の舟涼み、こゝも天下の町人なればこそ、世間を恐れず、思ひ／＼の色騒ぎ、遠國にてなるべき事か、是につけても銀のないこそ口惜けれ、こゝに外右衛門と云ふ大臣、御座都に恥ぢぬ樂の

晉、あまたの下髪姿、さながら諸菩薩來迎の心地、佛様の國へお迎船かと、これに命をとられける。此所日本並びなき津なれば、大方の事に目を驚かすべき事にあらねど、かゝる遊山船見え渡る例なし、供船にさへ、是はと手打つ程なる面影、まして幕の下風よりほの見えし揃の帷子、白き紋羅に紅裏、何れも紫に大房付きの組帯、わけ前髪金水引にて結び、姫百合の赤に咲きしを二もと三もとかさしに、思ふまゝ色作りて、常の女とは存じの外なる仕出なり、其船行く水につれてさし下し、上人川の鹽ざかひ、岸は青柳の茂りより、汀僅かに足首丈膝頭の立つ所に、長さ五丈横二尺ばかりもありし紅の横引網を下して、南の方は通ひ船・臺所船・のりかへの御座、又は湯風呂船・蚊帳つりたる船もあり、數々の船にて、少しは人の見るを忍び、水心知るも知らぬも、此戀の海へ〇〇にて飛入れば、女も同じ心の大膽にて、緋縮緬の湯ぐばかりになつて、八人ながら漣に入りしに、これぞ戀の流れありき、いづれを見ても、膚雪を碎きて、胴合長く、腰しまりて尻形圓く、首筋立ち伸び胸沈みて腹むつくりと肉乗りて、目の内青くして口元小さく、手足の指のそるものに、仇なるはなし、都に負けず難波の人置も、よくは見たて、是程までは揃へける、浪枕と名付けて、組籠を練絹にて張りて、これかや寶船の夢の如く、是皆外右衛門小判の光なり、やう／＼西日川瀬に影映りて、女中と色を争ひ、太鼓の各々、太く逞ましき赤松の様なる裸身、足には毛を並べ、腕には力瘤ふくれて、にくさげなる男共、何の用捨もなく、大臣様の御蔭の〇〇と思ひ／＼に、美はしき女禰に、〇を構はず、酒機嫌にて〇〇〇〇、糸櫻に鳶の止まりたる風情なり、脇より見ての好もしさ、一日雇の船頭も異な所に〇〇〇〇〇〇、あんな目に只一度逢ひて、首なりとも切られたしと、言ふて叶はぬ無情を觀じけり、料理人は身も口惜しく、あたりに人なげなる榮耀、あの男共の面を、この如くに打ち割れと、狙たゝきて格氣する、外の遊び船遠眼鏡を遣ひ、あれを見てからは、三味線の鼓の一節切のといふ物にては、いかな／＼酒は飲めぬと、無理なる心腹立て、舟さし戻して新町の濱へ著けよと、歴々の若い者聲々に、己れが銀にて、したい事をしをれと言捨て、歸りぬ、人界の執著尤もなり、龍宮の乙姫水底より見て、

何れも日比の達者、難なく血を吐きて目をまはし、いかなく命續かず、かゝる女中に出逢ひし事、色道天命の盡なりと、別れに物をも言はず、取亂し打伏しける、供の男指さして打笑ひ、我生を受けて五十餘歳迄、遂に女に肌觸れたる事一度もなし、其〇〇〇を出して勤めけるさへ、この如くなるものを、まして人々年々の〇〇にて、〇執行に出でし程の女に、何として續くべきと無常を觀じける、それ六人の女は、是は思ふたより弱き男どもかなと寢顔を笑ひ、鼻に手を當て、死にはしられぬよと言捨て、歸りぬ。

五 戀に數あり女牀

古代から止めがたきは色の道といへり、今思案して見ても、愈々その通りなり、世の中に氣の毒なるものは分限にて、腎虚のきたると、目に埃の入りたると、内井戸の水の悪いと、年寄りてから貧になつて、埒のあかぬものぞかし、外右衛門も未だ分別所へ行かぬ年なれば、大坂に世帯持つと言ふは、太鼓を名代にして、内證は我儘しての樂み、又上もなき願ひ、近所の夫婦いさかひのあつかひに出合ふ寵役とて、七日の仕あげの齋にも、袴肩衣著て參らねばならず、こんなむづかしき事は人にさせて、其身は新町を家にして、元日の雑煮の箸を下に置いて、宿にて薪のもゆるを見た事なし、兎角する内に、名の女郎十五まで逢ひ盡して、此上の物好、端局の位三匁・二匁・一匁五分・三分・二分五厘迄を、女郎と名の附いたるを一人も残さず、毎日一人宛揚げて〇〇〇〇と言ふ事なし、末々の女郎とても、心ざしはやさし、吉原の戀塚と云ふ三分藏、外右衛門を改め出して、いかにしても御心入れも知れず、是非御執心ならば、日を指して何時なりとも御心任せにと言ひかけ、遂に揚屋の疊ふまぬわろが、少しもおめずしてかねぎぬに色繪、中々とく風情はなし、大願ありてかくすると、いろく口説けども合點をせねば、重ねて逢ふ事も算用むづかしければ、此女郎歸りし後にて、宿の上ずり女の割雞卵の吸物すへるを、それははづれ次第に〇〇〇〇〇〇、赤前だれの〇〇〇

〇になるも可笑しく、是で其日の勘定を合せ、色里一人もなく勤めて、夫より〇〇〇〇〇〇、〇〇〇づゝありて、金銀にてなる程の者を、毎日一人づゝ手分けをして探させけるに、さても大坂の廣き、思ひ知られたり、もはや此思ひ立三年になりぬ、日に一人同じ顔はなかりき、此間の可笑しさ、大方姿の變らねば、千體佛と思はれる、後には少しづゝ見覚えして、晝を恥づる女になれば、〇〇〇〇〇〇につくして、そもくより此方、美女と思ふ女を遊女にて四人、〇〇〇〇〇〇十一人を〇〇にして、みよき所の裏座敷に置きぬ、是に似たる女は、何程探しても御座らぬと申す、よきは人の嫁御又は内儀にはありもすれども、迎もこれはならず、大坂も是迄と、江戸飛脚に金荷を渡しけるに、小判入五箱の内、丸に外の字のしるし、いまだ内證めてたく、儲けに行く金をつかひに下りぬ。

り、○○枯らすものと言ふにより、見る事はさて置き、毎日せんじて飲めども、却つて其一つ○○○○、暫時もやむ事なし、汝本來馬の物にもあらずと、打つてもひしやいでも○○○○ば、我身ながらあきれて、如何なる女にても爰にむかへ、第十八番の願文をすゝめ授けむと、皆やもめずみのなげきに、江戸は女の少き所と今覺えて、尤も此數百萬人の男に、其相手は足らぬ筈なり、されども金の光銀のうつりにて、何時なりとも遊びよね、人の堪忍を見て堪忍せぬ事やあると百三十里下つたる印に、無分別止みて其夜は止めたる分別、又夜明けては此分別の外なり。

二 戀に隙あり女奉公

東も面白く、今は忘れたる都鳥、業平の下られし時も釣ものはありやなしや、今日は十八日、淺草の觀音に屋敷下りのまれ女、上方にないもの、なまり言葉可笑しかるべしと、朝とく宿を立ち出て茶屋町を見渡し、源次が所知り顔に才覺して、随分廣き座敷を一日借りきりて、かうした分ぢや、亭主合點か小判の顔いかにも面白い、今迄女を釣りて迷惑したる例なし、自然の事に、私の首一つ御慰みの爲めになると、無性なる大騒ぎに、座敷一間づゝにこしらへ、枕二つの寢道具、相手も山も見えぬ武藏野に、いかなる風の袖伽羅聞き付次第に、無理留めしてたまゝ逢ふは、思出の戀川、○○高浪打たせて、随分たしなみ深き女にも○○○○、○○○○○○○○○○、其跡は我ばかりの男島となし、屋形女を思ふまゝに、作取りにする事ぞと、廣きあづま女房を、ひとりして莊屋顔の願ひ、茶屋亭主も此欲を聞きて大笑ひいたせり、我は此家に入聲して、あの女房一人さへ迷惑するに、人の生れ付きも達者、おもひの外に違ひあるものぞ、何れ世間に、つかふ／＼と云うてから、つかはぬものは銀、せぬ／＼と云うてからするものは○なり、追附よきものにしかけ、其御手柄を見ましよと言ふうちに、年の程三十二三の頬さき少し赤く、氣味あしけれども、如何にしても腰の太くたくまじきに思ひ付き、あれはと問へば、成程なるものと、亭主あとより走りより、御近附の方のあれに御入りと言へば、どなたかと立歸り、はや嬉しさうなる目附して、共に連れたる親仁に、一步一つ取らせて貴さまは觀音堂へ參り、それからいづ方へも行きて氣を延し、夕飯前に爰へと言へば、佛になるべき親仁にて、何心もなく出行ける、此女の○○○○○○○○○○、中間にて論じぬる中に、亭主・内儀が才覺にて、扱も美しきをのみ釣込み、銘々木々の花は見取り、酒大方にして面々○○引込み、何の挨拶もなく、是は不思議の御縁々々といへる言葉より外はなく、何思ひ出してや、○○○○○○○○○○、○○○○りて、人の聞くをも我を忘れて、此思出申す事、今生後生忘れませぬ、拙もの事に○○○○○○○○○○、○○○○男、あかすも好きなる女、それを願ひの○○○○○○○○○○、○○○○、觀音の縁日に合はせて、扱も○○男、あかすも好きなる女、別れを惜む夕暮の鐘、恨みを含みて最前の頬の赤き女、そも／＼には釣られながら、後に若き女に目くれて、今朝から○○○○○○○○淋しさ、いやながら餘人稼ぐに、今となりて七つにさがれば、何をいうても一時の勝負、此儘に歸るは、さりとて殘念、私心底はかくの如しと、一間なる座敷を見せけるに肌膚の白小袖一つ、りんずの湯具一つ、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○、たゞ歸るは恨る筈なり、いづれも戀次第に奉加の○○○○返せと、夕日の限あるうちを急ぎ、是も總なみに、○○○○○○○○、○○○○數を合せける。此女思ひ残すこともなく、十一人の中にも、我氣に入りたる男を招き、鏡袋をあげて金子五兩、是は伽羅代とて、袖より袖に投げ入れて、嬉しさうに別れ行く、皆々女は立ちて、男ばかり後に残り、ひとり／＼の懺悔物語、女の方から金子その外形見質はざるは一人もなし、上方に違つた事一つもないが、女の方から大方の賃を取つて、しかも見事な女に逢ひて、かゝる事餘の國には無い事なり、京大坂こそ金銀遣うてさへまだ欲しがるに、こんな目出たい事のありとは、所の人は知らずや、總じての商人、相場の知れぬ荷物廻して、仕切狀見る迄無用の氣づかひせうより、若盛りの強き百人ばかり、岡附にしてこゝに送り、下谷の天神、目黒不動、又は芝の神明・堺町の新道或は黒門さき・無縁寺の前・深川の八幡・木挽町の